加 賀 塚 遺 跡 1

（第１～３次調査）

－横野平工業団地分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集－

２００７

群馬県安中市教育委員会

加 賀 塚 遺 跡 1

（第１～３次調査）

－横野平工業団地分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集－

２００７

群馬県安中市教育委員会

口絵１

加賀塚遺跡全景

Ｈ－18号住居址竈

Ｈ－45号住居址（工房址）

ＥＭ－３号円形周溝状遺跡

Ｋ－１号古墳

口絵２

上：Ｈ－19号住居址
中：Ｈ－50号住居址
下：ミニチュア土器
　　小形土器

序

加賀塚遺跡のある中野谷地区は碓氷川の南側、妙義山の麓に広がる平坦地が続く横野台地にあります。この横野台地はこんにゃくを中心とした畑作地帯であり、緑豊かな自然との共存した地域であります。そして、最近では、県営畑地帯総合整備事業、工業団地造成、道路建設等の開発によって整備され、県内でも有数の工業をはじめとする農業地帯として生まれ変わりつつあります。こうした開発に伴い多くの遺跡が発見され、発掘調査を実施してきたところ、旧石器時代からこの地に人々の営みが続けられてきたことが明らかとなりました。

今回報告する加賀塚遺跡は、安中市土地開発公社が計画する横野平工業団地（Ａ団地）分譲事業に伴い発掘調査されました。発掘調査によって古墳時代のムラが発見されました。発見されたムラは水場とされる溜池、祭祀や埋葬に使用される石製品・石製模造品を製作する工房址も確認され、多数の遺物が出土しました。

本報告が、学術分野に寄与するだけではなく、地域を学ぶ郷土資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、過酷な気象条件の下で発掘調査に従事していただいた方々、調査にご協力いただいた各関係機関をはじめとする皆様には感謝申し上げる次第です。

平成19年３月

安中市教育委員会
教育長　中澤　四郎

例　　言

１　本書は安中市土地開発公社が計画した横野平工業団地（Ａ団地）分譲事業に伴う加賀塚遺跡（遺跡略称Ｇ－46Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ）第１～３次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、本報告では遺物観察表、写真図版等についてはデータ化し、ＣＤ－ＲＯＭとして添付した。

２　加賀塚遺跡は安中市中野谷字加賀塚・北原地内に所在する。

３　確認調査については国庫補助金・県費補助金により、平成16年度に安中市教育委員会が実施し、本調査及び遺物整理は原因者負担により、平成17・18年度に安中市教育委員会が直営で実施した。

４　確認調査及び発掘調査、遺物整理は安中市教育委員会学習の森文化財係主任・文化財保護主事（発掘調査当時　文化振興課文化財係主事）井上慎也が担当した。

５　確認調査は平成17年３月１日より３月11日まで実施した。発掘調査は平成17年４月１日より平成18年３月22日までの間、３次にわたり実施した。遺物整理は調査終了後より平成19年３月30日まで断続的に実施した。報告書作成は平成18年４月１日より平成19年３月30日まで実施した。

６　本書の編集･執筆は井上が行った。なお､縄文土器の執筆については松澤浩一氏(本庄市教育委員会)、古墳時代の土器の執筆については三浦京子氏（㈲前橋文化財研究所）が行った。また、古墳時代の土器の実測については一部を㈲前橋文化財研究所に委託した。遺構図作成については鬼形敦子氏、広上良枝氏、駒口徹也氏の協力を得た。主な作業分担は以下のとおりである。

遺構図の作成・トレース及び各種挿図の作成・デジタル編集：井上、吉澤栄子、大月圭子、菅生陽子

土器の分類・台帳作成・復元：戸塚里子、萩原治枝、中島けさよ、金子綾子、小野　毅、宇佐見璋一、長井三芳

石器及び石製品の分類と観察表の作成：井上、菅生

遺物実測：井上（縄文土器、石器、石製品、土器以外の遺物、古墳土器の一部)、㈲前橋文化財研究所（古墳土器)、金子、小野、大月（古墳土器の一部）

遺物観察表作成：㈲前橋文化財研究所（古墳土器)、井上（古墳土器の一部、その他の遺物）

各種データの入力・作成：吉澤、大月、菅生

遺構・遺物写真データの作成・編集：菅生、大月

７　遺構の写真撮影は井上が行った。航空写真撮影及び遺構実測用ビデオ（デジタル）撮影は１次と２次を㈱フジテクノ、３次をスナガ環境測設㈱に委託した。また、現場で原寸大に転写したビニール図面の遺構実測用写真はスナガ環境測設㈱に委託した。遺物の写真撮影は、一部を㈲前橋文化財研究所に委託した。

８　基準杭測量、グリッドの設定は㈱大成測量に委託した。

９　遺跡の自然科学分析は㈱古環境研究所に委託した。

10　発掘調査の記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。

11　発掘調査及び遺物整理の期間中次の方々にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表します（敬称略・順不同)。

三浦京子　松澤浩一　折舘伸二　外山政子　大工原　豊　山口逸弘　松村和男　早田　勉　長井正欣
日沖剛史　深澤敦仁　金子正人　板垣　宏　稲田健一　飯島義雄　田辺芳昭　磯部建設㈱

12　調査組織（平成17・18年度）

教育長　高橋重治（平成18年５月退任）

　　中澤四郎

教育部長　佐藤伸太郎

学習の森所長（平成17年度文化振興課長）（参事）　大野孝一

文化財係長　藤巻正勝（事務総括）

主査　古立美代子（平成17年度・経理担当）

主査　蜂須賀まゆみ（経理担当）

主査（文化財保護主事）千田茂雄

主査（文化財保護主事）壁　伸明

主任（文化財保護主事）深町　真

主任（文化財保護主事）井上慎也（発掘調査・遺物整理担当）

調査参加者

赤見　譲　今井保美　岩井英雄　宇佐見璋一　大月圭子　小川敬一　小野　毅　柏木けい子
金子綾子　清水洋一　菅生陽子　反町良一　多胡　静　田島せい子　田村信子　遠間宰吉　戸塚里子
中島けさよ　長井三芳　野口義則　萩原静夫　萩原治枝　半田あい　丸岡民子　柳沢真由美
横尾千恵子　吉澤栄子　吉田和雄　吉村ノリ子

凡　　例

1　遺構の実測図は１/80を基本としたが、遺構の大きさにより１/40、１/200とした。

2　遺構図中の北マークは磁北である。なお、座標は2002年４月改正以前の日本測地系を使用した。
本文中で使用した地区は国土地理院発行の２万５千分の１地形図「富岡」、安中市都市計画地図（１/2500）である。

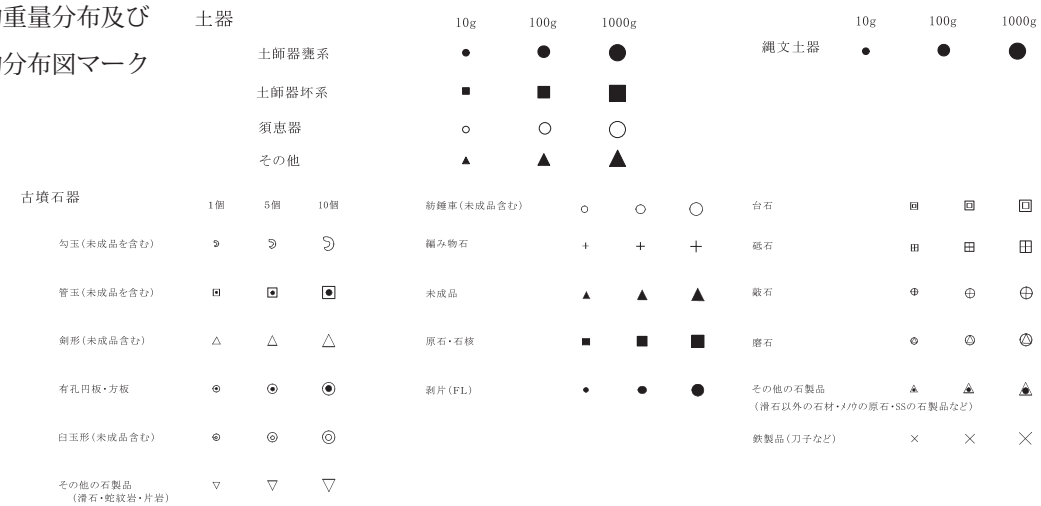
3　遺物実測図の縮尺は次のとおりである。
縄文土器：１／４　土師器・須恵器：１／４（実測図脇の●は須恵器を示す）
縄文石器：２／３（小形）　１／２（石製品）　１／４（中・大形）
石製模造品：１／２　　古墳時代の石器：１／２（石製品）　１／４（大形）
鉄製品・土製品：１／２

4　遺物実測図のスクリーントーンは土器内外面は黒色処理（煤）の範囲を示す。

5　土層説明中での記号、略称は次のとおりである。
土層名称及び量の基準：「新版標土色帖」による。
色調〈：より明るい方向を示す（暗〈明）
しまり、粘性　◎：あり　○：ややあり　△：あまりない　×：なし
混入物の量　◎：大量（30～50％）　○：多量（15～25％）　△：少量（５～10％）
※：若干（１～３％）
混入物　ＲＰ：ローム粒子（溶け込んだ状態）　ＲＢ：ロームブロック（固まりの状態）
ＹＰ：板鼻黄色軽石

6　ピットの深さ　○ 0～19cm　20～39cm　40～59cm　60cm以上

7　遺物重量分布及び遺物分布図マーク



8　遺物写真図版の大きさ　　ファイル名の後の番号は、個体番号（台帳）、（　）内の数値は拡大率。
集合写真の大きさは任意。

9　石器名、石材名は安中市の基準による。

目　次

口絵
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
1 調査に至る経過 …… 1
2 調査の経過 …… 3

Ⅱ　調査の方法 …… 4
1 発掘調査の手順 …… 4
2 遺構調査の方法 …… 4
3 資料整理の方法 …… 6

Ⅲ　遺跡の地理的環境・歴史的環境 …… 8
1 地理的環境 …… 8
2 歴史的環境 …… 8
3 層序 …… 14

Ⅳ　検出された遺構と遺物 …… 15
1 遺跡の概要 …… 15
2 縄文時代の遺構と遺物 …… 17
（1）遺構 …… 17
（2）遺物 …… 22
3 弥生時代の遺物 …… 26
4 古墳時代の遺構と遺物 …… 31
（1）遺構 …… 31
（2）遺物 …… 102
5 古代以降の遺構 …… 162

Ⅴ　成果と問題点 …… 164
1 古墳時代の土器編年 …… 164
2 石製品・石製模造品について …… 170
3 古墳時代の集落について …… 172

Ⅵ　自然科学分析 …… 176
1 土層とテフラ …… 176
2 植物珪酸体分析 …… 177
3 花粉分析 …… 180
4 樹種同定 …… 182

遺構観察表 …… 185
報告書抄録

ＣＤ－ＲＯＭ収録データ
1 遺構写真
2 遺物写真
3 縄文時代土器観察表
4 古墳時代土器観察表
5 縄文時代石器観察表（弥生時代を含む）
6 古墳時代石製品・石製模造品観察表
7 古墳時代石器観察表
8 古墳時代鉄製品観察表
9 加賀塚遺跡全体図
10自然科学分析写真
11縄文石器分類表
12報告書ＰＤＦデータ

挿図目次

第 1 図　調査区設定図 …… 2
第 2 図　遺跡位置図 …… 9
第 3 図　遺跡と周辺遺跡分布図 …… 10
第 4 図　調査区域図 …… 13
第 5 図　土層断面模式図・土層説明 …… 14
第 6 図　遺構配置図 …… 16
第 7 図　Ｊ－１・２号住居址実測図 …… 18
第 8 図　Ｊ－３号住居址実測図 …… 19
第 9 図　Ｊ－４号住居址・土坑実測図 …… 20
第 10 図　土坑・集石実測図 …… 21
第 11 図　縄文土器実測図（１） …… 23
第 12 図　縄文土器実測図（２） …… 24
第 13 図　縄文石器組成 …… 27
第 14 図　石器実測図（１） …… 28
第 15 図　石器実測図（２） …… 29
第 16 図　石器実測図（３） …… 30
第 17 図　Ｈ－１号・Ｈ－３号住居址実測図 …… 35
第 18 図　Ｈ－２号住居址実測図 …… 36
第 19 図　Ｈ－４号住居址実測図 …… 37
第 20 図　Ｈ－５号住居址実測図 …… 38
第 21 図　Ｈ－６号・Ｈ－７号・Ｈ－27号住居址実測図（１） …… 39
第 22 図　Ｈ－６号・Ｈ－７号・Ｈ－27号住居址実測図（２） …… 40
第 23 図　Ｈ－８号・Ｈ－９号住居址実測図（１） …… 41
第 24 図　Ｈ－８号・Ｈ－９号住居址実測図（２） …… 42
第 25 図　Ｈ－10号・Ｈ－13号住居址実測図（１） …… 43
第 26 図　Ｈ－10号・Ｈ－13号住居址実測図（２） …… 44
第 27 図　Ｈ－11号住居址実測図 …… 45
第 28 図　Ｈ－12号住居址実測図 …… 46
第 29 図　Ｈ－14号住居址実測図（１） …… 47
第 30 図　Ｈ－14号住居址実測図（２） …… 48
第 31 図　Ｈ－14号住居址実測図（３） …… 49
第 32 図　Ｈ－15号住居址実測図 …… 50
第 33 図　Ｈ－16号住居址実測図（１） …… 51
第 34 図　Ｈ－16号住居址実測図（２） …… 52
第 35 図　Ｈ－17号・Ｈ－18号住居址実測図（１） …… 53
第 36 図　Ｈ－17号・Ｈ－18号住居址実測図（２） …… 54
第 37 図　Ｈ－19号住居址実測図 …… 55
第 38 図　Ｈ－20号住居址実測図 …… 56
第 39 図　Ｈ－21号住居址実測図 …… 57
第 40 図　Ｈ－22号住居址実測図（１） …… 58
第 41 図　Ｈ－22号住居址実測図（２） …… 59
第 42 図　Ｈ－23号住居址実測図 …… 60
第 43 図　Ｈ－24号・Ｈ－25号住居址実測図（１） …… 61
第 44 図　Ｈ－24号・Ｈ－25号住居址実測図（２） …… 62
第 45 図　Ｈ－26号・Ｈ－27号住居址実測図 …… 63
第 46 図　Ｈ－28号住居址実測図（１） …… 64
第 47 図　Ｈ－28号住居址実測図（２） …… 65
第 48 図　Ｈ－29号住居址実測図 …… 66
第 49 図　Ｈ－30号住居址実測図 …… 67
第 50 図　Ｈ－29号・Ｈ－30号住居址実測図 …… 68
第 51 図　Ｈ－31号住居址実測図 …… 69
第 52 図　Ｈ－32号住居址実測図 …… 70
第 53 図　Ｈ－33号住居址実測図 …… 71
第 54 図　Ｈ－34号住居址実測図 …… 72
第 55 図　Ｈ－35号・Ｈ－36号住居址実測図 …… 73
第 56 図　Ｈ－37号・Ｈ－38号住居址実測図 …… 74
第 57 図　Ｈ－39号住居址実測図 …… 75
第 58 図　Ｈ－40号住居址実測図 …… 76
第 59 図　Ｈ－41号住居址実測図 …… 77
第 60 図　Ｈ－42号住居址実測図（１） …… 78
第 61 図　Ｈ－42号住居址実測図（２） …… 79
第 62 図　Ｈ－42号住居址実測図（３） …… 80
第 63 図　Ｈ－43号住居址実測図（１） …… 81
第 64 図　Ｈ－43号住居址実測図（１） …… 82
第 65 図　Ｈ－44号住居址実測図 …… 83
第 66 図　Ｈ－45号住居址実測図 …… 84
第 67 図　Ｈ－46号住居址実測図 …… 85
第 68 図　Ｈ－47号住居址実測図 …… 86
第 69 図　Ｈ－48号住居址実測図 …… 87
第 70 図　Ｈ－49号住居址実測図 …… 88
第 71 図　Ｈ－50号住居址実測図 …… 89
第 72 図　Ｈ－51号住居址実測図 …… 90
第 73 図　ＥＭ－１号・ＥＭ－２号円形周溝状遺構実測図 …… 91
第 74 図　ＥＭ－３号円形周溝状遺構実測図 …… 92
第 75 図　Ｔ－１号・Ｔ－２号竪穴状遺構実測図 …… 93
第 76 図　土坑実測図 …… 94
第 77 図　ＵＳ－１号溜池実測図（１） …… 95
第 78 図　ＵＳ－１号溜池実測図（２） …… 96
第 79 図　Ｋ－１号古墳全体図 …… 97
第 80 図　Ｋ－１号古墳石室実測図 …… 100
第 81 図　Ｋ－１号古墳遺物出土状況 …… 101
第 82 図　土師器坏・甕の高さと幅集計グラフ …… 104
第 83 図　Ｈ－１号・Ｈ－４号・Ｈ－５号住居址出土土器実測図 …… 105
第 84 図　Ｈ－５号・Ｈ－６号住居址出土土器実測図 …… 106
第 85 図　Ｈ－７号・Ｈ－８号・Ｈ－９号・Ｈ－10号住居址出土土器実測図 …… 107
第 86 図　Ｈ－10号・Ｈ－11号・Ｈ－12号住居址出土土器実測図 …… 108
第 87 図　Ｈ－12号・Ｈ－14号住居址出土土器実測図 …… 109
第 88 図　Ｈ－14号住居址出土土器実測図 …… 110
第 89 図　Ｈ－15号・Ｈ－16号・Ｈ－17号住居址出土土器実測図 …… 111
第 90 図　Ｈ－17号・Ｈ－18号住居址出土土器実測図 …… 112
第 91 図　Ｈ－19号・Ｈ－20号・Ｈ－21号住居址出土土器実測図 …… 113
第 92 図　Ｈ－21号住居址出土土器実測図 …… 114
第 93 図　Ｈ－22号・Ｈ－23号・Ｈ－24号住居址出土土器実測図 …… 115
第 94 図　Ｈ－24号・Ｈ－25号住居址出土土器実測図 …… 116
第 95 図　Ｈ－25号・Ｈ－26号・Ｈ－28号住居址出土土器実測図 …… 117

第 96 図　Ｈ－28号・Ｈ－29号住居址出土土器実測図 …… 118
第 97 図　Ｈ－29号・Ｈ－30号住居址出土土器実測図 …… 119
第 98 図　Ｈ－30号住居址出土土器実測図 …… 120
第 99 図　Ｈ－31号・Ｈ－32号住居址出土土器実測図 …… 121
第 100 図　Ｈ－32号住居址出土土器実測図 …… 122
第 101 図　Ｈ－34号・Ｈ－35号・Ｈ－36号住居址出土土器実測図 …… 123
第 102 図　Ｈ－36号・Ｈ－37号住居址出土土器実測図 …… 124
第 103 図　Ｈ－38号・Ｈ－39号・Ｈ－40号・Ｈ－41号住居址出土土器実測図 …… 125
第 104 図　Ｈ－42号住居址出土土器実測図 …… 126
第 105 図　Ｈ－42号・Ｈ－43号住居址出土土器実測図 …… 127
第 106 図　Ｈ－45号・Ｈ－46号・Ｈ－47号・Ｈ－48号住居址出土土器実測図 …… 128
第 107 図　Ｈ－49号・Ｈ－50号住居址出土土器実測図 …… 129
第 108 図　Ｈ－50号住居址出土土器実測図（１） …… 130
第 109 図　Ｈ－50号住居址出土土器実測図（２） …… 131
第 110 図　Ｈ－51号住居址出土土器実測図 …… 132
第 111 図　Ｋ－１号古墳出土土器実測図 …… 133
第 112 図　石製品・石製模造品計測グラフ（１） …… 143
第 113 図　石製品・石製模造品計測グラフ（２） …… 144
第 114 図　石製品・石製模造品計測グラフ（３） …… 145
第 115 図　石製品・石製模造品計測グラフ（４） …… 146
第 116 図　石器計測グラフ（１） …… 147
第 117 図　石器計測グラフ（２） …… 148
第 118 図　石製品・石製模造品実測図（１） …… 149
第 119 図　石製品・石製模造品実測図（２） …… 150
第 120 図　石製品・石製模造品実測図（３） …… 151
第 121 図　石製品・石製模造品実測図（４） …… 152
第 122 図　石製品・石製模造品実測図（５） …… 153
第 123 図　石製品・石製模造品実測図（６） …… 154
第 124 図　Ｈ－42号・Ｈ－45号住居址製作関連遺物実測図 …… 155
第 125 図　Ｈ－50号住居址製作関連遺物実測図（１） …… 156
第 126 図　Ｈ－50号住居址製作関連遺物実測図（２） …… 157
第 127 図　Ｈ－50号住居址製作関連遺物実測図（３） …… 158
第 128 図　石器実測図（１） …… 159
第 129 図　石器実測図（２） …… 160
第 130 図　石器・鉄製品・土製品実測図 …… 161
第 131 図　溝・炭焼窯・土坑実測図 …… 163
第 132 図　加賀塚遺跡出土の古墳時代土器編年図 …… 167
第 133 図　加賀塚遺跡出土の時期別石製品・石製模造品集成図 …… 171
第 134 図　加賀塚遺跡時期別遺構分布図（１） …… 174
第 135 図　加賀塚遺跡時期別遺構分布図（２） …… 175

表目次

第 1 表　遺跡一覧表 …… 11
第 2 表　古墳時代土器個体別集計表 …… 103
第 3 表　石器・鉄製品遺構別組成表 …… 141
第 4 表　石製品・石製模造品石材組成表 …… 142
第 5 表　遺構観察表（１） …… 185
第 6 表　遺構観察表（２） …… 186
第 7 表　遺構観察表（３） …… 187
第 8 表　遺構観察表（４） …… 188
第 9 表　遺構観察表（５） …… 189
第 10 表　遺構観察表（６） …… 190

Ⅰ　調査の経緯

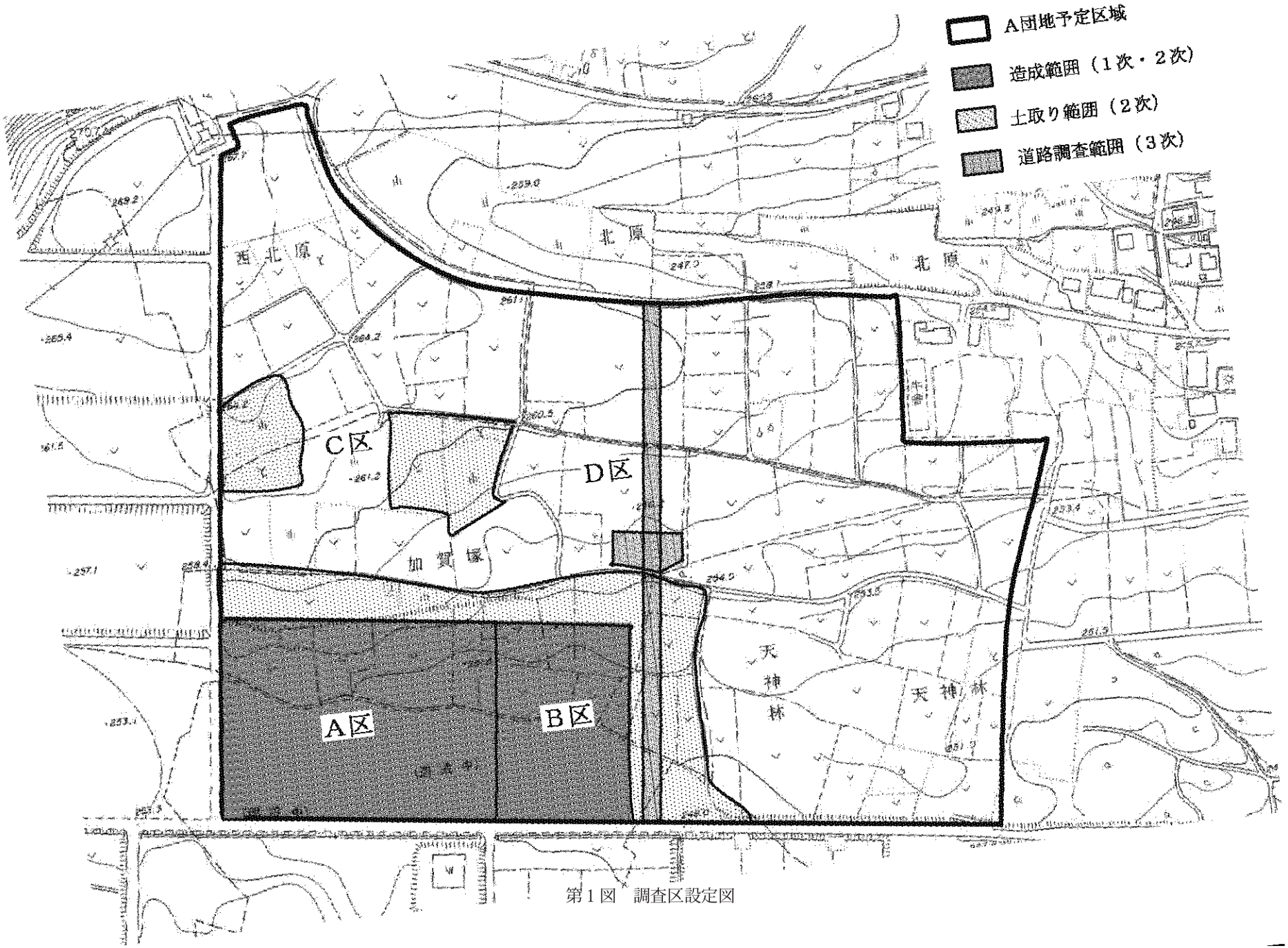
1　調査に至る経過

平成16年12月８日、安中市土地開発公社から横野平工業団地（Ａ団地）分譲予定地の埋蔵文化財の状況について照会があった。該当場所は周知の埋蔵文化財包蔵地（市№405）内にあるため、同年12月15日、市土地開発公社へ事業地内の土木工事等に係る意見書を提出し、事業計画地における埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、工事に先立ち確認調査を実施することになった。平成17年２月１日、市土地開発公社から市教育委員会へ確認調査の依頼があり、同年３月１日～11日に市教育委員会で確認調査を実施した。調査の結果、古墳時代の住居址が多数確認され、集落跡が存在することが判明し、調査結果を、公社へ伝え、再度、埋蔵文化財の取り扱いについて協議することを伝えた。協議の結果、保存措置及び計画の変更は困難であることから、工事によって遺跡が影響を被る部分を対象に発掘調査による記録保存の措置を講ずることになり、同年３月１日付で必要書類（旧文化財保護法57条３）が出された。同年４月１日、市土地開発公社と市教育委員会との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、市教育委員会が主体となって同年４月１日～５月20日までの間発掘調査を実施した（第１次調査）。

発掘調査着手後、市土地開発公社が調査地隣接部分の東を追加分譲する計画となり、平成17年４月22日、市土地開発公社から市教育委員会へ追加部分についての文化財の状況について照会があった。該当場所は前回発掘調査を実施した遺跡に隣接することから、開発については当教育委員会と協議が必要であることを伝えた。追加分譲計画では造成工事の他に分譲地内を埋め立てに必要な土取り部分も予定地内で必要となったため、この部分についても調査を実施する必要となった。同年４月27日　安中市土地開発公社へ事業地内の土木工事等に係る意見書を提出し、追加部分及び土取り部分についても前回と同様、工事に先立ち発掘調査を実施し記録保存の措置を講ずることになり、同年７月29日付で必要書類（文化財保護法94条第１項）が出された。追加部分については、同年６月20日、市土地開発公社と市教育委員会の間で締結した埋蔵文化財発掘調査委託契約を変更し、同年７月６日～10月20日までの間発掘調査を実施した（第２次調査）。なお、土取り部分については、遺構面までの深さまで掘削が及ばないとされる場所は、今回の本調査から除外し、今後、開発される場合に調査を実施することにした。

平成17年11月18日、市土地開発公社から横野平工業団地（Ａ団地）内に計画されている新設道路について文化財の状況の照会があった。該当場所は、周知の埋蔵包蔵地外であったが、隣接する部分で発掘調査を実施し、古墳時代の集落を確認しており、該当地へと集落が広がることが予想されたため、開発については、当教育委員会と協議が必要であることを伝えた。平成17年11月24日、市土地開発公社へ事業地内の土木工事等に係る意見書を提出し、工事に先立ち該当地の埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施し、工事によって遺跡が影響を被る部分を対象に発掘調査による記録保存の措置を講ずることになり、同年２月27日付で必要書類（法94条第１項）が出された。なお、工事は平成18年度以降の予定であったが、発掘調査は平成17年度中に対応することになり、平成18年２月３日、市土地開発公社と当教育委員会の間で締結した埋蔵文化財発掘調査委託を再度変更し、同年２月17日～３月22日までの間発掘調査を実施した（第３次調査）。

（井上慎也）


A団地予定区域
造成範囲（1次・2次）
土取り範囲（2次）
道路調査範囲（3次）
西北原
北原
北原
C区
D区
加賀塚
A区
B区
天神林
天神林

第1図　調査区設定図

２　調査の経過

（１）発掘調査の経過

横野平工業団地（Ａ団地）の分譲事業に先立つ発掘調査は、平成17年度では加賀塚遺跡が対象となった。発掘調査は、事業計画の都合上、３回に分けて実施した。確認調査は平成17年３月１日から３月11日までの間実施し、古墳時代中期～後期の集落跡の存在を確認した。

第１次調査は当初分譲予定地であったＡ区の北半分を対象に平成17年４月１日から５月20日までの間面的調査を実施した。確認調査によって古墳時代の集落が予想されていたが、調査の結果、住居址27軒等の遺構が多数検出された。

第２次調査は、分譲範囲の拡大に伴いＢ区（Ａ区の東と北部分）とＣ区を対象とし、平成17年７月６日から10月20日までの間実施した。すでにＡ区の調査によって集落の広がり及び遺構の存在は予想されたいたため踏査対象範囲にトレンチを設定し、調査区の範囲を決定する方法を採用した。発掘調査については、追加された分譲地は、可能な限り面的調査を行い、土取り部分は遺構が発見された部分を中心に調査区を拡大した。また、調査の途中、土取り部分に道路を建設することになったため、調査範囲を拡張し、その部分の発掘調査も実施した。なお、Ｃ区については、土取り部分であったため、遺構面まで影響を及ばない程度の掘削であったため、今回、本調査の対象とはせず、遺跡を把握するために調査した住居址１軒を除き、他は今後本調査を実施することにした。Ｂ区では古墳時代の住居址24軒等の遺構が多数検出された。

第３次調査は、工業団地内に新設される道路部分を対象に平成18年２月17日から３月22日までの間実施した。道路の南半分は第２次調査で実施していたため、北側部分が本調査の対象となった。調査区の設定は、道路路線内でトレンチ調査を実施し範囲を決定する方法を採用した。トレンチ調査では、北側部分では遺構及び遺物の密度は低いことが判明し、南側では周知されていなかった古墳が１基確認された。本調査は古墳を対象としたが、古墳の範囲が当初設定した範囲よりも広がることから、開発側と協議し、今回の調査で全面発掘することで合意し、調査区を拡大して調査を実施した。

（２）遺物整理の経過

平成17年度

遺物整理は発掘調査終了後、平成18年３月31日までの間断続的に実施した。本年度は、基礎整理を中心とし、遺物の洗浄・注記・接合・分類及び遺物台帳作成等の遺物整理、図面の修正・整理・遺構実測用写真撮影、各種台帳の整理、写真整理を中心に行った。

平成18年度

遺物整理及び報告書作成は平成18年４月１日から平成19年３月30日までの間実施した。本年度は図面トレース・編集、データ集計・編集、遺物実測・トレース等、遺物写真撮影、写真図版作成等の資料整理を実施し、並行して報告書作成をデジタル編集により行った。

（井上慎也）

Ⅱ　調査の方法

1　発掘調査の手順

発掘調査の方法及び手順は安中市中野谷地区遺跡群等の調査で採用している独自の方法を基本としている。詳細については、『大下原遺跡・吉田原遺跡』（1993）、『中野谷松原遺跡遺構編』（1996）を参照されたい。

発掘調査は調査区の設定後、バックホー（0.7m³）で遺構確認面（Ⅲ層下部からⅣ層上面）まで掘削し、人力でジョレンを用いて遺構確認を行った。表土掘削後、基準杭測量及びグリッド設定を行った。

検出された遺構については、遺構毎に遺構略称と番号を付け、遺構の内容に応じた精査を行い、土層断面状況及び完掘した遺構をリバーサル及び白黒フィルム（35mm）で写真撮影を行った。遺構精査終了後、ラジコンヘリコプターで遺跡の全景写真と遺構測量用のデジタルビデオ撮影を行い、遺構実測用に出力した画像もとに現地で遺構図を作成し、遺構の高さを記録した。

2　遺構調査の方法

（1）竪穴住居址の調査方法

竪穴住居址の調査は、「分層16分割法」で行った。遺構の範囲を確定後、住居址の中心を東西南北に直交する２本のベルトを設定する（ポイントは赤）。さらに、その間を16分割するための補助点を設定し、16分割区をつくる（ポイントは黄）。南北方向のベルトに平行してサブトレンチを設定し、土層を分層しながら床面まで人力で掘削する。住居址深さと大きさが決まった後、分層毎に掘り下げを行う。遺物の取り上げは16分割を基本とし、上層の遺物は取り上げ、床直及び下層の遺物はそのまま残し遺構を掘り下げる。竈、土坑、ピット等の関連遺構の遺物は遺構毎に取り上げる。ベルトを残しながら床面まで精査が終了した後、土層断面写真を撮影し、土層説明を記録する。土層断面図は「ビニール転写法」を用いて原寸大に転写する。土層の記録が完了した後、ベルトを崩す。床面を精査し柱穴（ピット）、貯蔵穴（土坑）を確認し精査する。平行して竈の精査も実施する。竈は半分を精査し、土層堆積状況を記録した後、完掘する。竈平面図の一部については、デジタルカメラで垂直撮影し、微細図を作成した。

（2）円形周溝状遺構の調査方法

溝の範囲確認後、溝部分を土層堆積観察用のベルトを十字に設定し、間をさらに分割して分割区を設定した。古墳の可能性も考えられたが、円形内を精査した結果、主体部等の明確な遺構は確認されなかった点と同時期に類似する遺構が存在する例があることから、周溝状遺構とした。溝内の遺物は区毎に取り上げた。

（3）竪穴状遺構、土坑、集石、溝の調査方法

竪穴状遺構は範囲を確認後、４分割し土層観察用に十字のベルトを残しながら掘り下げを行った。

土坑は範囲を確認後半裁し、土層断面図を作成後、残りを精査し完掘した。

集石は範囲を確認後、礫を検出し、掘り方などを確認した。

溝は任意に土層観察用のベルトを設定し、掘り下げを行った。

（４）溜池の調査方法

溜池は平面範囲を確認した後、幅１ｍのサブトレンチを任意に設定し、土層の堆積と断面の状況を調査した。その後、土層観察用の十字のベルトと16分割を設定し、層位毎に掘り下げを行った。しかし、当初予想していた範囲より大きくなったため、分割区が足りなくなり大きさに合わせて区を追加した。掘り下げによって底面に近づくうちに、湧水によって冠水したため、水中ポンプによって水をくみ上げながらの調査となったが、水量の多さから底面までの確認はできなかった。また、調査区の都合上、南半分は未調査となってしまった。

（５）古墳の調査方法

古墳は道路幅で中心部分が確認された。そこで、調査区外の部分も含めて調査を行うのが効率的と考えられたため、急遽、可能な限り調査区を拡張して古墳の全面発掘調査を実施することにした。古墳の調査は、確認できた石室部分の主軸方向を基準に十字のサブトレンチと設定し、土層を観察しながら基盤までの掘り下げを行った。また、平行して石室部分の覆土中の礫を除去しながら精査したが、前庭部及び羨道部分の一部を除き、予想以上の盗掘（特に北東方向から）による破壊が及び遺存状態が悪いことが判明した。石室の調査は、本来の石積み部分のみ残す方法で精査したが、結果的には羨道部分及び左右の壁の一部のみが確認できただけであった。羨道部分には閉塞石が確認されたため、その状況を図面に記録した。また、石室正面についてはデジタルカメラで撮影し、図面を作成した。遺物の記録では、石室部分は４分割、前庭部では平板測量による遺物分布図を作成した。

（６）遺構測量、遺物の記録の方法

遺構の平面図：全ての遺構の平面図は、遺構完掘後、ラジコンヘリコプターでデジタルビデオカメラによる空撮をし、撮影した画像をパソコンに入力して画像の歪み補正等を行い１/40で出力したものを現地で遺構の細部を確認しながらマイラーにトレースする方法で作成。平面図にはレベル値を記録し、ベンチマークとレベルの眼高から遺構の標高を算出できるようにした。また、遺構の断面図を作成するために必要に応じてレベルを記録し、数値から断面図が復元できるようにした。なお、作業の進行状況に応じて、空撮に間に合わない遺構の測量については一部で平板測量も併用した。

土層断面図・遺構微細図：幅２ｍの農業用ビニールを使用して、遺構及びその断面にあて原寸大でマジックで転写する方法（「ビニール転写法」）で作成した。

遺物の出土記録：遺構出土の遺物は、分割区毎、層別に取り上げ、遺物出土量を袋の大きさで相対的量（大量・多量・少量・微量）に置き換え、カードに記録し分布図を作成した。なお、土坑、小規模な遺構の覆土中のものは「覆土一括」で取り上げ、出土量を記録した。

（井上慎也）

３　資料整理の方法

（１）整理の方針

加賀塚遺跡の特徴は、古墳時代中期から後期にかけての大規模な集落遺跡であり、集落景観を復元を主眼におくことできる遺構、遺物の整理を行うことにした。しかし、今回の発掘調査では、古墳時代の集落の一部を確認したのみであったため、今後の隣接地の発掘調査によって集落及び遺構、遺物の全体が明らかになると考えられる。そこで、本報告では、遺構、遺物の事実記載及びデータを中心に掲載し、遺跡の総括的なことは今後の報告で検討することにした。

なお、作業の効率化を図るためデジタル機器を使用して挿図の作成、報告書の編集、写真・データの編集等の作業を行った。

（２）遺構図整理の方法

住居址：住居址の時期は下層及び竈の遺物によって時期を決定した。重複のある場合は土層堆積状況と遺物出土状況により新旧の判断をした。報告書には各住居址の平面図、土層断面図、遺構断面図、遺物分布図、竈・土坑等の平面・断面図、土層説明表、住居址観察表を掲載した。平面図には柱穴（ピット）の深さを示し、配列が分かるようにした。

円形周溝状遺構：円形周溝状遺構は、掘り込みが無く全周する溝のみの検出であったため、溝出土の遺物から時期を判断した。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、遺物分布図、土層説明表、観察表を掲載した。

土坑：全ての土坑については、特定の機能を示さないで用いる「土坑」の用語で統一した。土坑の中には「墓」、「貯蔵用」、「陥穴」と考えられるものもふくまれるが、明確に機能を区別できるものは少ない。時期及び機能については特定するのが難しいため、本報告では形態と出土遺物の性格から判断することにした。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、土層説明表、観察表を掲載した。

集石、溝、溜池：遺構の時期については、確認面及び覆土中の遺物から判断した。集石については礫の石材、状況を検討した。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、土層説明表、観察表を掲載した。

竪穴状遺構：住居址と平面的な共通性をもつが、土坑との区別が難しい。時期については覆土中の遺物から判断した。報告書には平面図、土層（遺構）断面図、土層説明表、観察表を掲載した。必要に応じて遺物分布図も掲載した。

（３）遺物整理の方法

土器の整理：土器は縄文土器と古墳時代の土器（土師器、須恵器）に大別し、器種毎に分類した。土器は「量」を把握するために重量を区、層毎に記録し、16分割を基本とした分布図を作成した。縄文土器は出土遺構毎にまとめ、覆土中の遺物を「群」として捉え土器群を検討した。古墳時代の土器は、廃棄により覆土中（１、２層出土遺物）から出土したものと床面直上及び住居に伴う遺棄（３層及び竈等の遺構出土）されたものとに区別し、後者を一括性をもつ土器群として捉えて検討した。

土器の分類は、破片と復元できる個体に分け、破片については器種毎に重量を記録した。復元できる個体については重量を記録した後、復元率によってランク付け（Ａ～Ｄ）を行い、個体台帳を作成し、器種、接合状態、重量を記録した。土器の実測については、住居別、器種組成を優先し、完形もしくは

完形に近いものについては極力図示に努めたが、器種内で同形態の土器が多数ある住居では、代表的な土器を図示し、その他は割愛した。遺物の出土量を記録することで破片についての情報も活用でき、遺構全体での遺物の出土傾向が把握できる点で有効性をもつと判断した。報告書には遺構毎に土器群の特徴が検討できるものを優先して掲載した。実測した土器については、個別に観察表を作成した。また、土器群の特徴及び編年的位置付けについての所見を掲載した。

石器の整理：石器は各時代毎に大別し、石器台帳を作成した。縄文時代と弥生時代の石器は、安中市の分類基準（大工原氏分類）に準じ、石器系列、器種系列、石材系列に分けて分類した。古墳時代の石器については、形態と製作方法で器種を分類し、製作にかかわる遺物（素材剥片、破片等）についても全点観察表を作成した。石製模造品については学史的に「滑石製模造品」、「（広義）石製品」等呼称については定まっていないが、本報告では本来の機能性をもたない二次的（祭祀的）機能をもつ石製品を本来の製作工程を経ないで製作される「模造」によるものとして「石製模造品」の用語を用いることにした。したがって狭義の「石製品」も一部含まれる。石器は遺構毎に器種別「点数」で分布図を作成した。報告書には器種別、製作工程に係わる遺物の一部を掲載した。また、石製模造品等の器種組成、石材組成、器種別各種計測グラフを掲載した。編物石とその他の石器（台石等）については、集計表と各種計測グラフを掲載した。

その他の遺物：鉄製品は、ほとんどが錆による腐食によってクリーニングしても形態が判別できるものが少なく、無理な分類は行わなかった。

（４）写真整理の方法

現地で撮影した写真については、リバーサル（カラー）、白黒、ネガ（カラー）別にファイルし、アルバムを作成した。また、カラー写真はフォトＣＤに記録し、その後の保管（保存）・活用を考慮し、デジタル化した。

遺構写真図版は、画像を全てデジタル化し、遺構毎のフォルダを作成した。使用カットは遺構全景、遺構土層堆積状況（セクション）、遺物出土状況を基本とし、必要に応じてカットを追加した。デジタル画像は全てカラーとした。

遺物写真は、全てデジタルカメラによって撮影（委託）し、遺構写真と同様、画像をデジタル化した。

遺物写真図版は、単体及び集合写真とし、土器については実測した個体は全て単体で撮影し、一括遺物は集合写真とした。石器については器種別の集合写真とした。

（５）デジタル編集の方法

遺構図及び遺物実測図については、出来るだけデジタル機器を使用して編集した。遺構図については、原図を修正した後、スキャナーで図面を取り込み、デジタルトレースで挿図を作成した。

手書きのトレースや地図については、スキャナーで取り込み、画像を編集し、挿図を作成した。

遺物観察表は表計算ソフトを使用して作成した。写真図版はリバーサルフィルムをデータ化（コダックフォトＣＤ）して、必要な写真を選別し、画像を編集した。

（井上慎也）

Ⅲ　遺跡の地理的・歴史的環境

1　地理的環境

安中市は関東平野の周縁部である群馬県西部（西毛地域）に位置する。市の西部から北部にかけては山地が広がる。碓氷峠付近を水源とする碓氷川が西から東へ流れ、市域を南北に分断する。また、碓氷川の北側には並行して九十九川が流れ、安中市東部で碓氷川に合流する。これらの河川流域には、河岸段丘が発達し、下位段丘（磯部、人見地区）、中位段丘（安中・原市地区）、上位段丘（横野地区）が存在する。

加賀塚遺跡は安中市中野谷字加賀塚地内に所在する。本遺跡が存在する中野谷地区は、安中市南部、碓氷川河岸段丘の上位段丘面に存在する。この台地は「横野台地」とも呼ばれ、幾筋もの細長い台地が形成され、その低地部分には湧水点も存在し、小河川が流れる。現状では起伏は緩く、平坦地が続いた地形である。加賀塚遺跡は、低地に接する南斜面に存在する。遺跡の標高は250～260mである。

（井上慎也）

2　歴史的環境

中野谷地区には大規模土地改良事業、工業団地、道路建設等の開発に伴う発掘調査で、地区のほぼ全域が調査されている。調査の結果、中野谷地区には縄文時代の大規模な集落遺跡と古代の牧関連遺構群が存在する地域として特徴づけられる。古墳時代の遺跡は少なく、今回の発掘調査によって、狭い地域に大規模な遺跡群が存在することが明らかとなった。ここでは、各時代について概観する。

旧石器時代

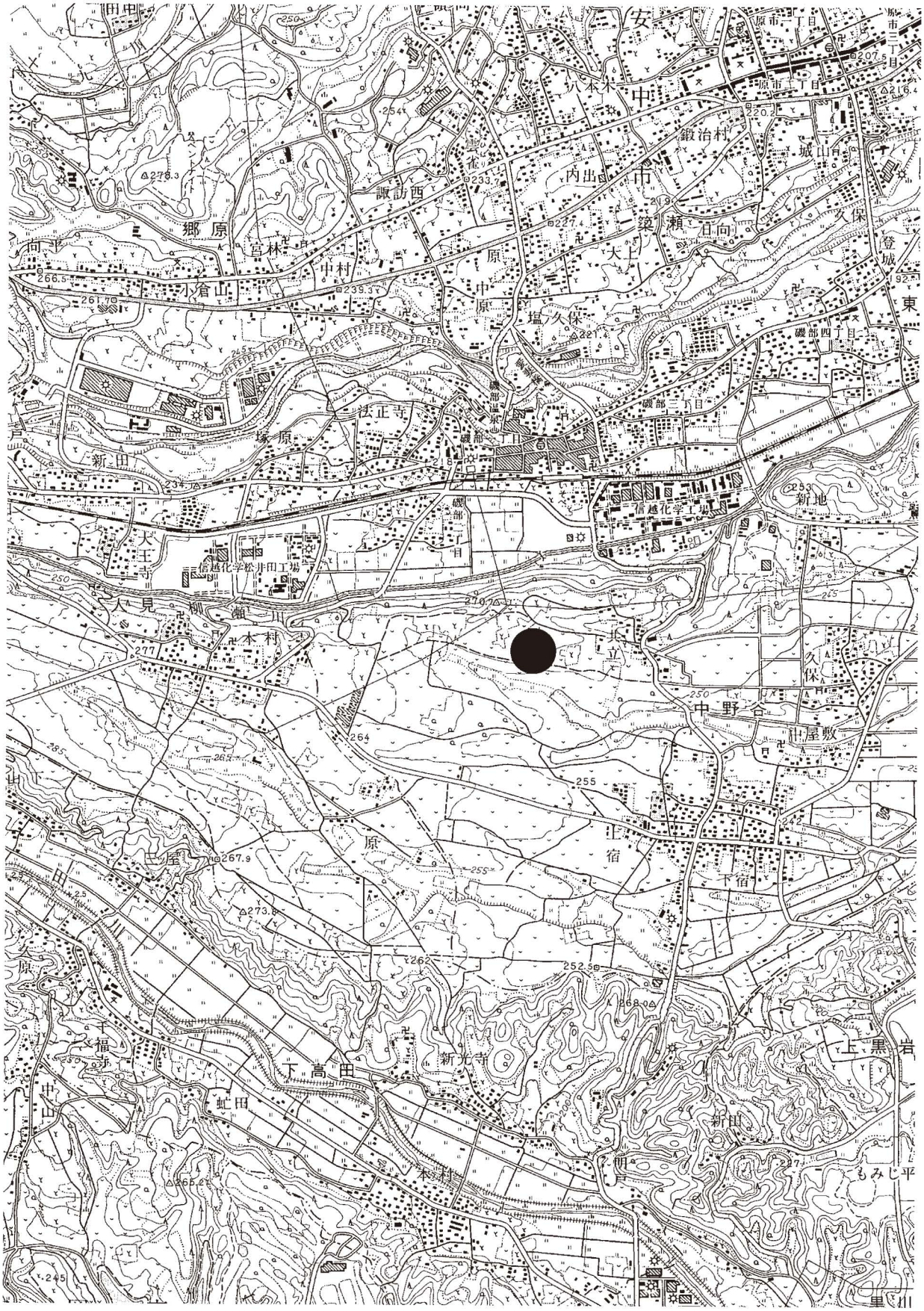
中野谷松原遺跡でＡＴ下位（暗色帯）の石器が出土している。注連引原Ⅱ遺跡では黒曜石製の尖頭器が出土している。ローム層の堆積状況からこの時代の遺跡は少ない。

縄文時代

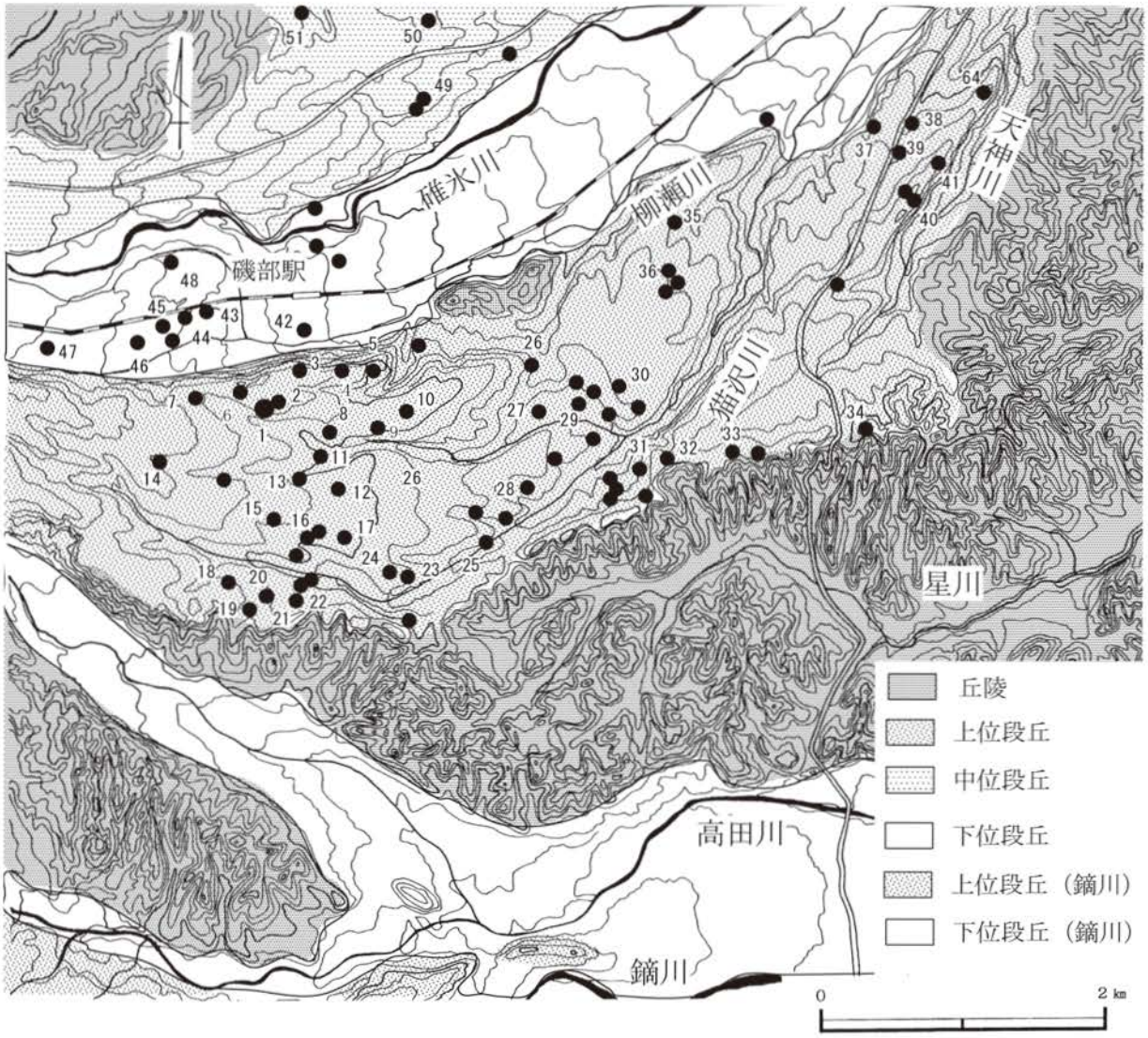
草創期の遺跡は、遺物のみを出土するものがほとんどで少ない。金井谷戸遺跡では押型文土器群が検出されている。前期前葉以降、遺跡が増加し、住居址が列状に並ぶ中原遺跡、有尾・黒浜式期から諸磯ｂ式期にかけての拠点的集落である中野谷松原遺跡、中期前葉から中葉の大規模環状集落である砂押遺跡、中期終末から後期初頭にかけての柄鏡形敷石住居址群を主体とする集落の中島Ⅰ・Ⅱ遺跡、後期後半の配石遺構である大道南遺跡、後期後半から晩期まで継続する祭祀遺構の天神原遺跡等がある。縄文時代の遺跡は、低地を望む斜面部あるいは台地平坦部に存在する。天神林遺跡では、前期中葉の焼失住居址が確認されている。

弥生時代

集落遺跡は、前期末以降で注連引原遺跡、中期前半の注連引原Ⅱ遺跡、大上遺跡、原遺跡で確認されている。当該期の遺構は少なく、一地域で集中して集落が発見される例は珍しい。この時期は、在地の土器群に条痕文系土器が共伴する。また、縄文的な石器群が主体であり、大陸系磨製石器は少ない。中期後半以降でも遺跡は少なく、後期初頭になると上北原遺跡で櫛描文系土器群と共伴して、磨製石鏃の


安
中
市
鍛治村
内出
諏訪西
郷原
宮林
中村
小倉山
大上
日向
久保
登城
塩久保
法正寺
塚原
新田
信越化学工場
信越化学松井田工場
新地
大王寺
人見
柳瀬川
中野谷
中屋敷
上宿
下宿
下高田
新光寺
虻田
上黒岩
新田
もみじ平

第２図　遺跡位置図



第３図　遺跡と周辺遺跡分布図

	遺跡名	旧	縄文						弥生		古墳				奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後	晩	中	後	前	中	後	終					
1	加賀塚				◎	○	＊		＊			◎	◎	◎					古墳集落、円墳
2	加賀塚古墳																		東横野６号墳、時期不明
3	磯部２号墳											◎							円墳、竪穴系
4	磯部３号墳											◎							前方後円墳か、竪穴系
5	向山														○	○			古代牧
6	中野谷原									○		○	○		○	○			弥生中期集落、古墳集落、古代牧
7	上北原									○		○			○	○			古墳・弥生集落、古代牧
8	天神林				○	△										△			
9	天神原				◎	◎	◎	◎				○			◎				縄文後晩期配石、古代鍛治
10	中野谷松原	△	＊		◎	◎	○						◎			○			縄文前期集落
11	中島Ⅰ・Ⅱ				○	○	◎				○		◎						縄文・古墳集落
12	砂押Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ					◎	○								○	○			縄文中期環状集落、古代牧
13	砂押原					◎							○						縄文配石、古墳集落
14	人見東原										◎								吉ヶ谷系土器群
15	上原															○			古代牧
16	大道南・大道南Ⅱ					◎	◎												縄文中・後期集落、配石
17	上宿南					△									○	○			古代牧
18	人見大谷津				◎	△					◎				○	○			古墳前期集落、古代牧
19	下高田原遺跡群				◎	○							◎		○	○			古代牧関連遺構群
20	西向原				◎										○	○			縄文前期集落、古代牧
21	真光寺原				△										○	○			古代牧
22	向原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ				○							○	○	○	○	○			古代牧関連遺構
23	細田				◎	△						△	○		○	○			縄文前期集落、古代牧
24	和久田				＊	＊						△			○	○			古代牧
25	下宿東	＊			◎	△	○				◎				○	○			古墳前期集落、古代牧
26	北東・堤下				◎	△							◎		○				古墳後期集落
27	下塚田				△	＊							△		△	△			古墳～古代鍛治
28	中原			△	◎				＊		△				○	◎			縄文前期集落、古代牧
29	落合・落合Ⅱ	＊			＊	＊			＊	＊			△		◎	○			古代牧
30	平塚				＊									◎	○			○	古墳群（円墳）
31	注連引原				◎			△	◎										弥生前～中期集落
32	注連引原Ⅱ	＊			◎	＊	△	△	◎	△	◎				○	○	△		弥生前～中期集落、古代牧
33	大上					○			◎							△			弥生中期集落
34	経塚古墳											◎							円墳、竪穴系、石製模造品
35	荒神平・吹上				△	◎	○			◎	◎	○	◎		◎	◎			古墳～古代集落
36	上ノ久保					◎	○			◎			◎		◎	◎	○		古墳～古代集落
37	諏訪ノ木									◎		○	◎						弥生・古墳集落
38	下原・賽神									◎	○	○	◎						弥生～古代集落
39	蔵畑											◎	◎						古墳集落、石製模造品
40	日向後原										◎					○			古墳前期古墳周堀
41	野毛良										＊		○	○	○	○			古墳集落
42	田中田・久保田											○							方形周溝墓
43	諏訪辺															◎			古代集落（磯部郷）
44	西裏・西新井				△	○			＊				◎	○	◎	◎			古墳～古代集落(磯部郷)
45	人見北原												○			○		△	古墳～古代集落(磯部郷)
46	松井田工業団地					＊			○				◎		◎	◎	○		古墳～古代集落(磯部郷)
47	人見大王寺														○	○	△	△	古墳～古代集落(磯部郷)
48	塚原古墳群												◎						十数基の小円墳群
49	簗瀬二子塚古墳												◎						前方後円墳、横穴系、石製模造品
50	清水Ⅰ～Ⅵ				◎	△							◎	◎	◎	○	◎	△	古墳～古代集落、中世土器焼成窯
51	榎木畑				◎	○								○	◎	◎			古墳～古代集落

◎：大規模な遺跡（集落跡・古墳等）　○：中規模な遺跡（住居址・牧関連等）

△：小規模な遺跡（土坑・溝等）　＊：遺物が出土した遺跡

第１表　遺跡一覧表

製作が確認されている。後期後半では大下原遺跡、原遺跡で住居址が確認されている。弥生時代中期以前の遺跡は縄文時代の遺跡と立地が類似するが、集落の占地が台地あるいは崖端部に存在する特徴が認められる。一方、中期後半以降では、積極的に集落が形成されない傾向が認められる。

古墳時代

前期～中期初頭にかけての集落遺跡が点在し、下宿東遺跡、天神原遺跡等で住居址が確認されている。中期以降の集落遺跡は、今までは少ない地域とされてきたが、今回の加賀塚遺跡をはじめ北堤・堤下遺跡、中島Ⅰ遺跡、原遺跡、上北原遺跡等で確認されている。集落の占地は北堤・堤下遺跡を除き、加賀塚遺跡周辺部に存在する。古墳時代の集落は継続性が認められず、短期間に形成、廃絶する傾向がある。加賀塚遺跡には、隣接して加賀塚古墳が存在する。また、北側には中期の磯部２号墳、磯部３号墳が存在する。磯部３号墳では石製模造品が出土している。

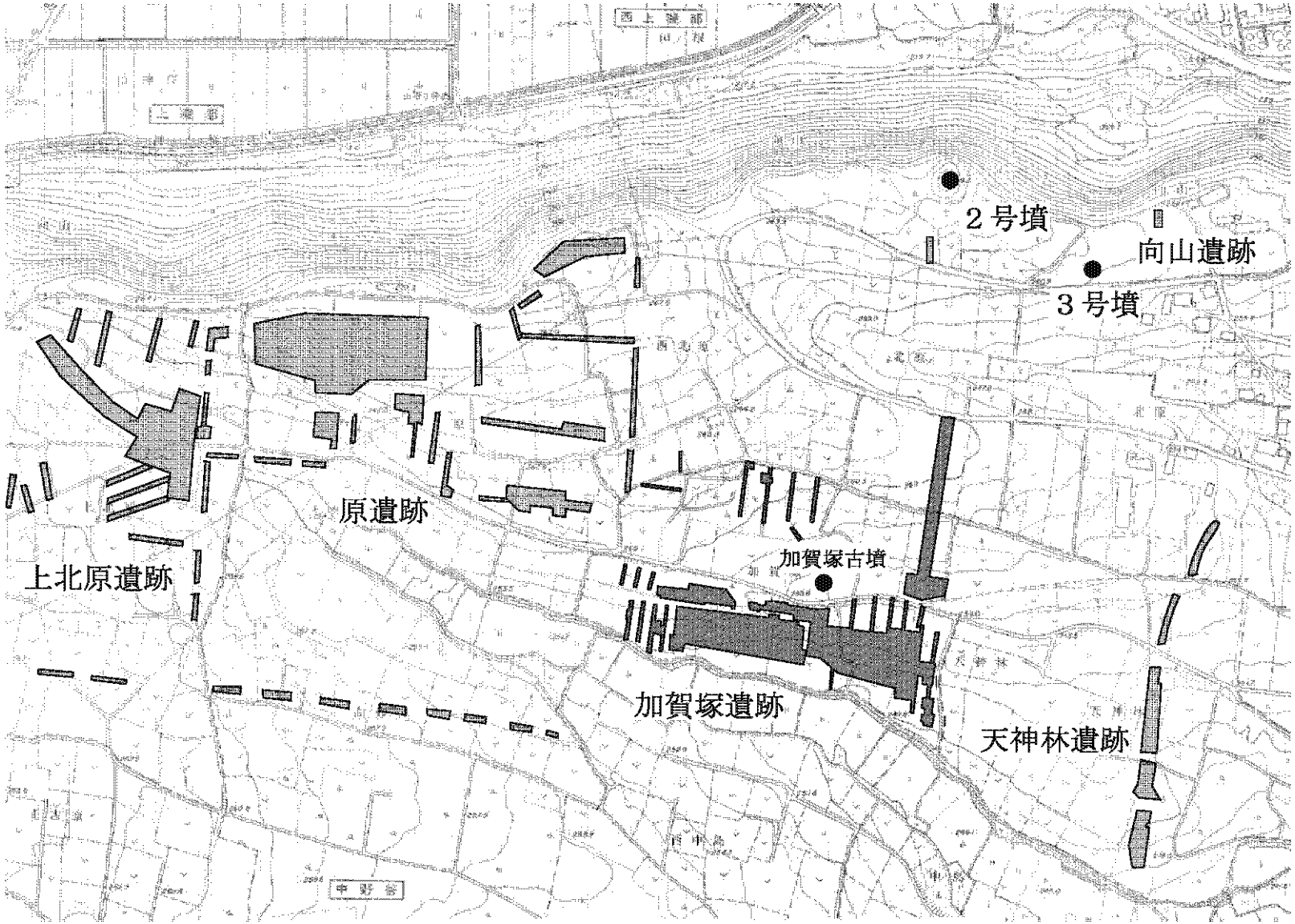
奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構として特徴的なのが、牧に関連する遺構群である。この牧は古代上野国に置かれた官牧ではなく、記録にはない私牧であると考えられる。主な遺構は中野谷地区全域を区画する大溝であり、地形によって幾つかの単位で検出され、中原遺跡、下宿東遺跡、上宿南遺跡、原遺跡、上北原遺跡、天神原遺跡等で確認されている。また、関連して鍛治工房跡が天神原遺跡、下塚田遺跡で確認されている。中原遺跡では区画溝と併設する溜井が確認されている。台地下の下位段丘面には大王寺地区遺跡群（松井田工業団遺跡、西裏・下新井遺跡等）では、古墳時代以降から継続する古代「磯部郷」に関係する伝統的集落が存在する。この遺跡群では鍛治関連遺構や官衙的色彩の強い掘立柱建物群等が確認されており、牧の経営に関与した遺跡群と推定されてる。原遺跡では、炭焼土坑が多数検出されている。

中世以降

中世以降の遺跡は少なく、遺構としては溝及び土坑等が検出される例が多い。これらの遺構は覆土中に浅間Ｂ軽石を含むことから、12世紀以降の所産と思われる。確認できる遺構としては中野谷陣屋（荒屋敷地区）がある。本遺跡名である「加賀塚」の字名は、近世七日市藩の「前田氏」に関連したものと推定され、調査地には「前田神社」と祀られた石塔が建立している。

（井上慎也）

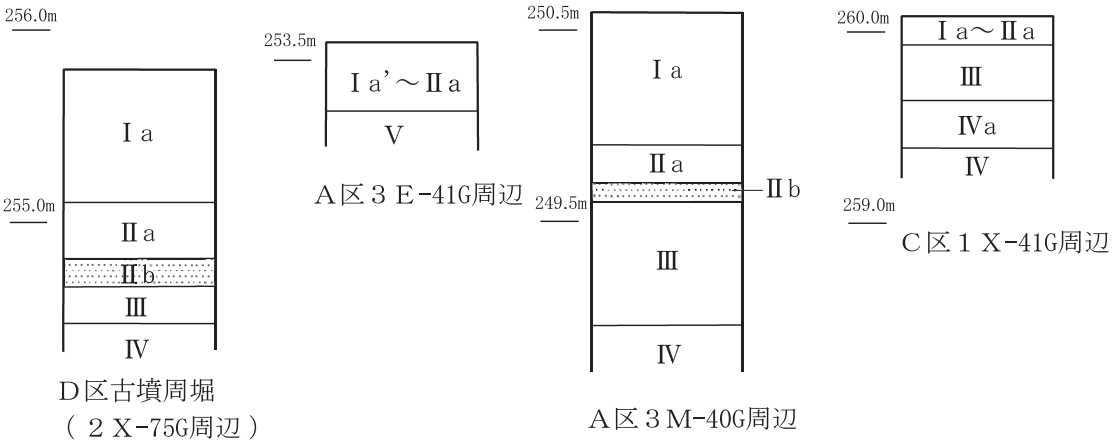


第4図　調査区域図

3　層序

加賀塚遺跡は碓氷川右岸の上位段丘（横野台地）に位置する。遺跡が存在する中野谷地区の土層堆積状況は、台地上であることから概ね安中市の基本層序どおりで、安定した土層堆積状況がみられる。しかし、加賀塚遺跡のＡ区とＢ区では、斜面部であることと耕作によって表土がⅣ層中部あるいはⅤ層に至るまで大幅に削平されていることにより、遺構確認面及び遺物包含層の遺存状態は良好ではなかった。ほとんどの場所で、遺構のみの確認であった。また、一部で耕作の影響等によって地面が短冊状に掘削されている場所も確認され、完全に遺物包含層が検出できない状態の場所も認められた。表土（耕作土）が薄いところでは、浅間Ａ軽石（As－A：1783年）と浅間Ｂ軽石（As－B：1108年）が混在していた。

（井上慎也）



層名	色調	しまり	粘性	混合物					備考
				ＲＰ	ＲＢ	ＹＰ	As-A	As-B	
Ⅰa　黒褐色土層		△	△				○		耕作土
Ⅰb　灰白色軽石層	Ⅰa＜Ⅰb	×	×				◎		Ａ純層
Ⅱa　黒色土層	Ⅰb＞Ⅱa	△	○					○	
Ⅱb　灰褐色軽石層	Ⅱa＜Ⅱb	×	×					◎	Ｂ純層
Ⅲ　黒色土層	Ⅱb＞Ⅲ	△	○						
Ⅳ　暗褐色土層	Ⅳa＞Ⅳ	○	○	※					上部にⅣa
Ⅴ　暗黄褐色土層	Ⅳ＜Ⅴ	◎	◎	◎	◎				上部にｽﾘｯｺ
Ⅵ　黄色軽石層	Ⅴ＜Ⅵ	×	×			◎			ＹＰ純層

第５図　土層断面模式図・土層説明

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1　遺跡の概要

加賀塚遺跡では３回の調査によって、縄文時代前期前半及び中期初頭の遺構群、古墳時代中期末～後期初頭の集落跡、古墳時代終末期の古墳等が確認された。

主な遺構は縄文時代では住居址４軒、土坑、集石、古墳時代住居址51軒、円形周溝状遺構３基、竪穴状遺構２基、土坑、溜池１カ所、古墳１基である。

Ａ区・Ｂ区

Ａ区とＢ区は調査時期が異なったため、調査上、区分けしたが、本来は同一調査区である。低地に面する南斜面に位置する。

縄文時代前期前葉（有尾･黒浜式期）の住居址、中期後半の住居址、集石、前期前半及び中期初頭（五領ヶ台式期）の土坑等が検出された。遺構はＢ区を中心に分布しているが、密度は低く、広範囲に住居址及び土坑等が分散していることが判明した。

弥生時代の石鏃のみが出土した。土器片は出土しなかった。

中期後半から後期初頭にかけての住居址51軒、竪穴状遺構、円形周溝状遺構、溜池（湧水地点）、土坑等が検出された。集落は東西２つの集落に分けられるものと考えられ、集落はさらに広範囲になると予想される。また、石製模造品の工房址も検出された。集落の中心部では溜池が確認された。

古代以降では、中野谷地区で多数確認されている牧に関連する遺構は検出されなかった。、浅間Ｂ軽石を含む覆土の土坑及び溝等が少数検出されたが、性格は不明である。

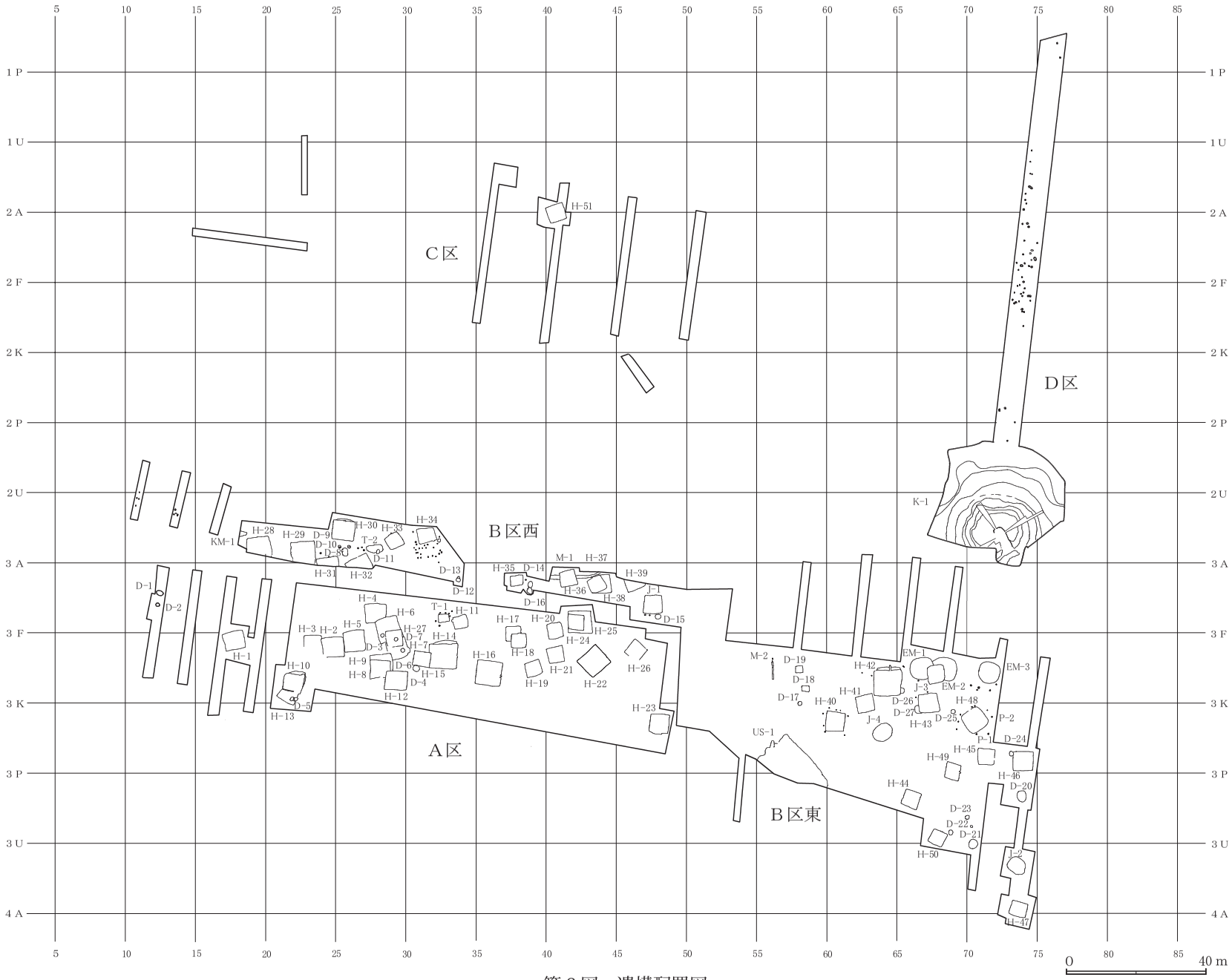
Ｃ区

Ｃ区はＡ区とＢ区の一段高い部分に存在する。比較的平坦地である。確認調査によって、住居址が数カ所検出され、一部の調査のみであって全体を把握することはできなかったが、集落が北側へと広がることが明らかとなった。今回の調査では、古墳時代の住居址１軒（Ｈ－51号）を調査し、他については現状保存の措置とし、今後調査することになった。

Ｄ区

Ｄ区はＣ区の西側、道路予定地内に存在する。緩やかな南斜面であるが、縄文中期の土器及び石器が少数出土したのみで、性格不明のピット以外は検出されなかった。発掘調査によって古墳を１基確認した。東には周知の古墳である加賀塚古墳が存在するが､この古墳は未登録である。古墳は終末期段階で、周堀をもつ円墳、主体部が横穴式石室である。埴輪は無い。盗掘及び耕作によって遺存状態は良好ではなかった。特に石室部分の破壊は著しく、副葬品等は鉄製品が少数出土したのみであった。

（井上慎也）


C区
B区西
A区
B区東
D区
H-51
KM-1
H-28
H-29
D-9
D-10
D-8
H-30
H-33
T-2
D-11
H-34
H-31
H-32
D-13
D-12
H-35
D-14
M-1
H-37
H-36
H-38
H-39
J-1
D-15
D-16
D-1
D-2
H-1
H-4
H-6
T-1
H-11
H-3
H-2
H-5
H-27
D-7
H-7
H-14
D-3
H-9
H-8
D-6
D-4
H-15
H-12
H-10
H-13
D-5
H-17
H-20
H-25
H-24
H-18
H-16
H-21
H-19
H-22
H-26
H-23
M-2
D-19
D-18
D-17
H-40
H-41
H-42
EM-1
EM-2
EM-3
J-3
D-26
D-27
H-43
J-4
H-48
D-25
P-2
P-1
D-24
H-45
H-49
H-46
D-20
H-44
D-23
D-22
D-21
H-50
J-2
H-47
US-1
K-1
0
40 m

第６図　遺構配置図

２　縄文時代の遺構と遺物

（１）遺構（第７図～第10図・第５表・第10表）

住居址（第７図～第９図）

前期２軒（Ｊ－３・４住）、中期１軒（Ｊ－２住）、時期不明１軒（Ｊ－１住）である。明確なプランをもち、掘り込みが深いのはＪ－３号住居址のみである。Ｊ－１号住居址はⅣ層中で確認できた。掘り込みは皿状であり、ピットも不規則に並ぶことから住居址ではない可能性もある。覆土中から前期の土器片が少数出土した。Ｊ－２号住居址は平面円形で、中央に炉址が確認できた。柱穴は壁際に並ぶがやや不規則である。覆土中から中期の土器片が少数出土した。Ｊ－３号住居址は平面隅丸方形で、炉址が２カ所確認できた。柱穴は４本柱と推定され、壁溝数及び柱穴の配置から３回以上の拡張が認められる。遺物は覆土中から大形破片が出土し、複数個体が廃棄されたものと思われる。また、土器と共伴して石器も多数出土した。石器はスクレイパーＢ類を主体とする。遺物の時期から前期中葉の有尾・黒浜式期の新段階と思われる。Ｊ－４号住居址はプラン及び掘り込みがが明確ではないが、覆土中から前期の土器片が少数出土したため住居址として認識した。床面の精査で、柱穴が確認できたが配置は不規則である。炉址は確認できなかった。

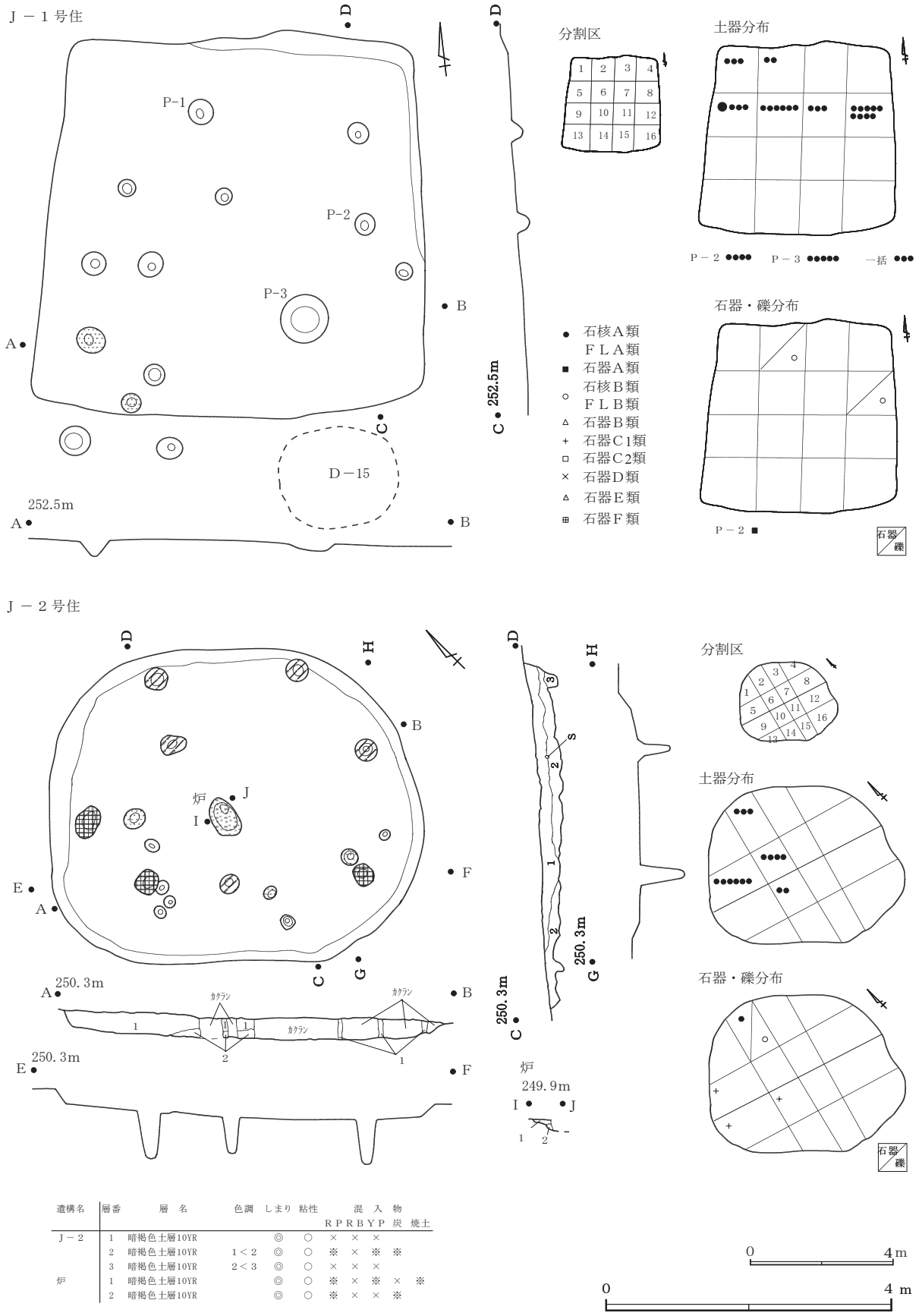
土坑（第９図・第10図）

土坑は９基検出された。Ｄ－13号土坑からは、中期の土器片と磨石、台石が出土した。Ｄ－23号土坑の底面から深鉢半分と凹石が出土した。両土坑とも掘り込みが深い袋状で、覆土は人為的埋め戻しが確認できた。両土坑とも出土遺物から「墓坑」の可能性が高い。Ｄ－14・16・22号土坑は、陥穴と考えられ、逆茂木跡をもつものも認められた。その他の土坑は覆土の状態から縄文時代の遺構と判断したが、時期、機能とも不明である。

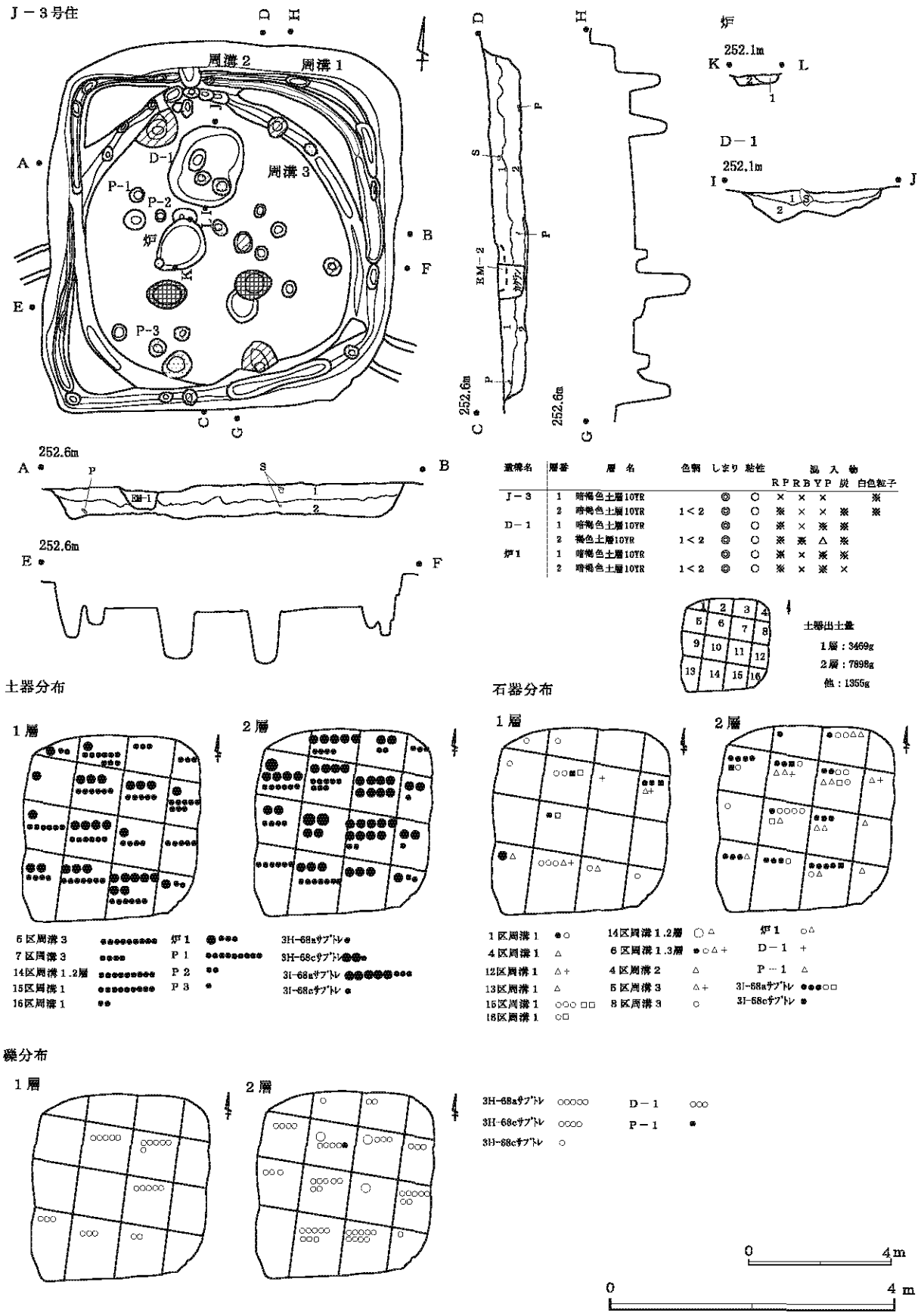
集石（第10図）

Ⅳ層上部を確認面として検出された。掘り込みは無く、地面に礫が置かれた状態であった。遺物は出土しなかったが、遺構の検出状況（Ⅳ層上部）から中期の所産と考えられる。礫９点は全て安山岩の亜角礫で、100～300ｇが６点、500～700ｇが３点である。被熱した痕跡は観察できなかった。

（井上慎也）



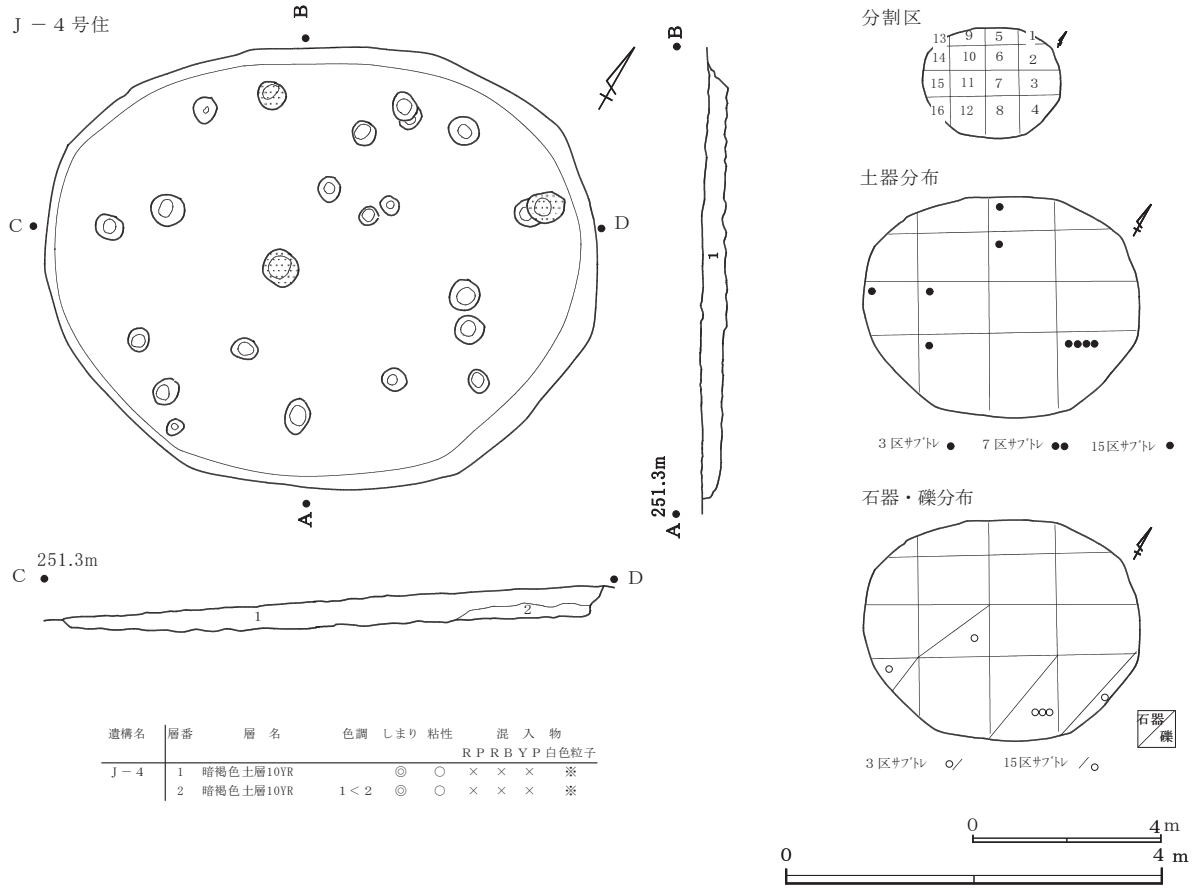
第7図　J－1・2号住居址実測図



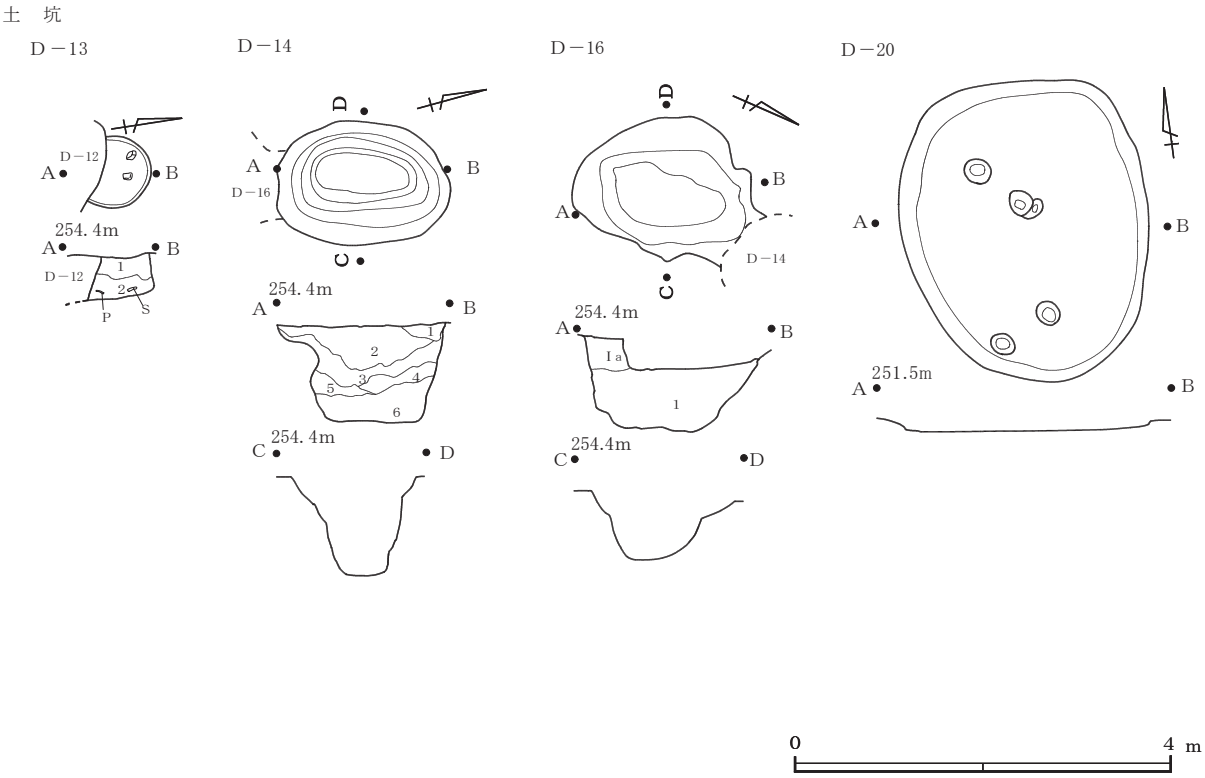
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	白色粒子
J－3	1	暗褐色土層10YR		◎	○	×	×	×		※
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	◎	○	※	×	×	※	※
D－1	1	暗褐色土層10YR		◎	○	※	×	※	※	
	2	褐色土層10YR	1＜2	◎	○	※	※	△	※	
炉1	1	暗褐色土層10YR		◎	○	※	×	※	※	
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	◎	○	※	×	※	×	

土器出土量
1層：3469g
2層：7898g
他：1355g

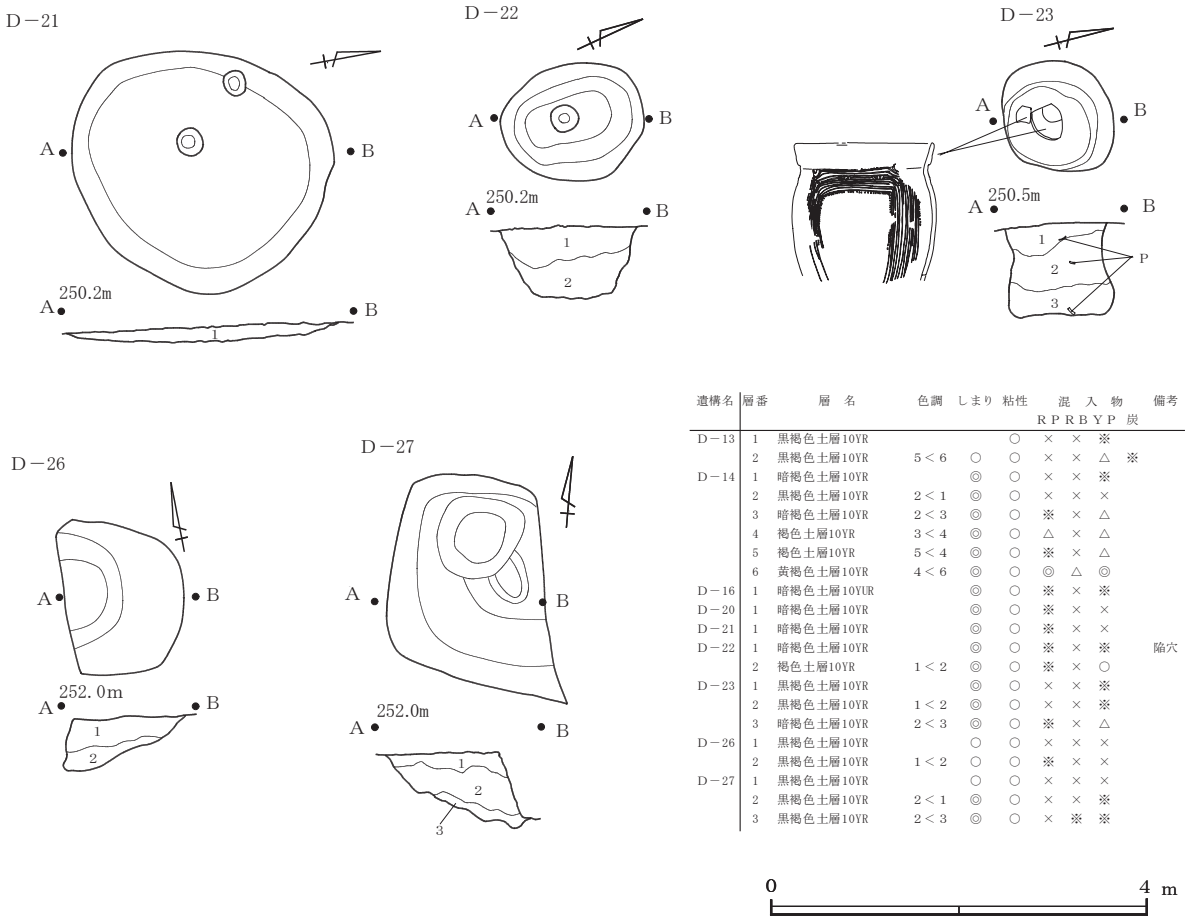
第8図　J－3号住居址実測図



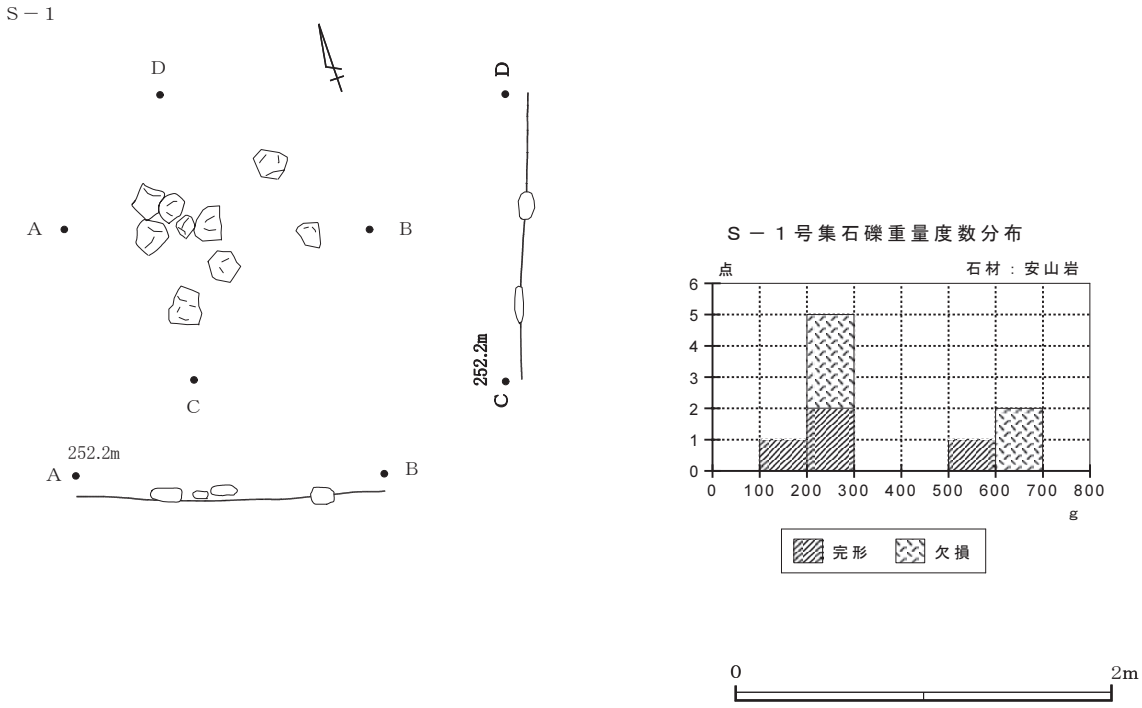
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	白色粒子
J－4	1	暗褐色土層10YR		◎	○	×	×	×	※
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	◎	○	×	×	×	※



第９図　Ｊ－４号住居址・土坑実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R	P	R	B	Y	P	炭	備考
D－13	1	黒褐色土層10YR			○	×		×		※			
	2	黒褐色土層10YR	5＜6	○	○	×		×		△		※	
D－14	1	暗褐色土層10YR		◎	○	×		×		※			
	2	黒褐色土層10YR	2＜1	◎	○	×		×		×			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	◎	○	※		×		△			
	4	褐色土層10YR	3＜4	◎	○	△		×		△			
	5	褐色土層10YR	5＜4	◎	○	※		×		△			
	6	黄褐色土層10YR	4＜6	◎	○	◎		△		◎			
D－16	1	暗褐色土層10YUR		◎	○	※		×		※			
D－20	1	暗褐色土層10YR		◎	○	※		×		×			
D－21	1	暗褐色土層10YR		◎	○	※		×		×			
D－22	1	暗褐色土層10YR		◎	○	※		×		※			陥穴
	2	褐色土層10YR	1＜2	◎	○	※		×		○			
D－23	1	黒褐色土層10YR		◎	○	×		×		※			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	◎	○	×		×		※			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	◎	○	※		×		△			
D－26	1	黒褐色土層10YR		○	○	×		×		×			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※		×		×			
D－27	1	黒褐色土層10YR		○	○	×		×		×			
	2	黒褐色土層10YR	2＜1	◎	○	×		×		※			
	3	黒褐色土層10YR	2＜3	◎	○	×		※		※			



第10図　土坑・集石実測図

（２）遺物

１．縄文土器（第11・12図）

Ｊ－２住居址出土土器（第11図１～３）

出土土器は、少量であるが、図示した土器は深鉢である。１は、口縁部で沈線の周囲に刺突が施されている。２は、口縁部で、縄文が施されている。３は、胴部の破片で、縄文が施されている。１、３は縄文時代中期の加曽利Ｅ式と考えられる。

Ｊ－３住出土土器（第11図・第12図４～17）

出土遺物は、縄文時代前期中葉の有尾･黒浜式が主体である。図示した土器は全て深鉢である。４は、波状口縁を呈し、頸部で括れて胴部は丸みもつ器形を呈すると思われる。口縁部と頸部には半裁竹菅による平行沈線文を施文後に、半裁竹菅状工具による４条の連続爪形文により菱形や三角形の文様が施されて、胴部には羽状縄文が施されている。５は、波状口縁を呈し、頸部で括れて胴部は丸みもつ器形を呈すると思われる。口縁に沿って半裁竹菅による平行沈線文を施文後に、半裁竹菅状工具による２条の爪型文により文様が施されている。６、８も、口縁部の破片で、半裁竹菅状工具による２条の爪型文により文様が施されている。

７、11、12は、平縁の口縁部である。７、12は、縄文が施されている。11は、沈線文が１条巡り、その下に縄文が施されている。10は、緩い波状口縁を呈し、頸部で括れて胴部は丸みもつ器形を呈すると思われる。羽状縄文を施されている。

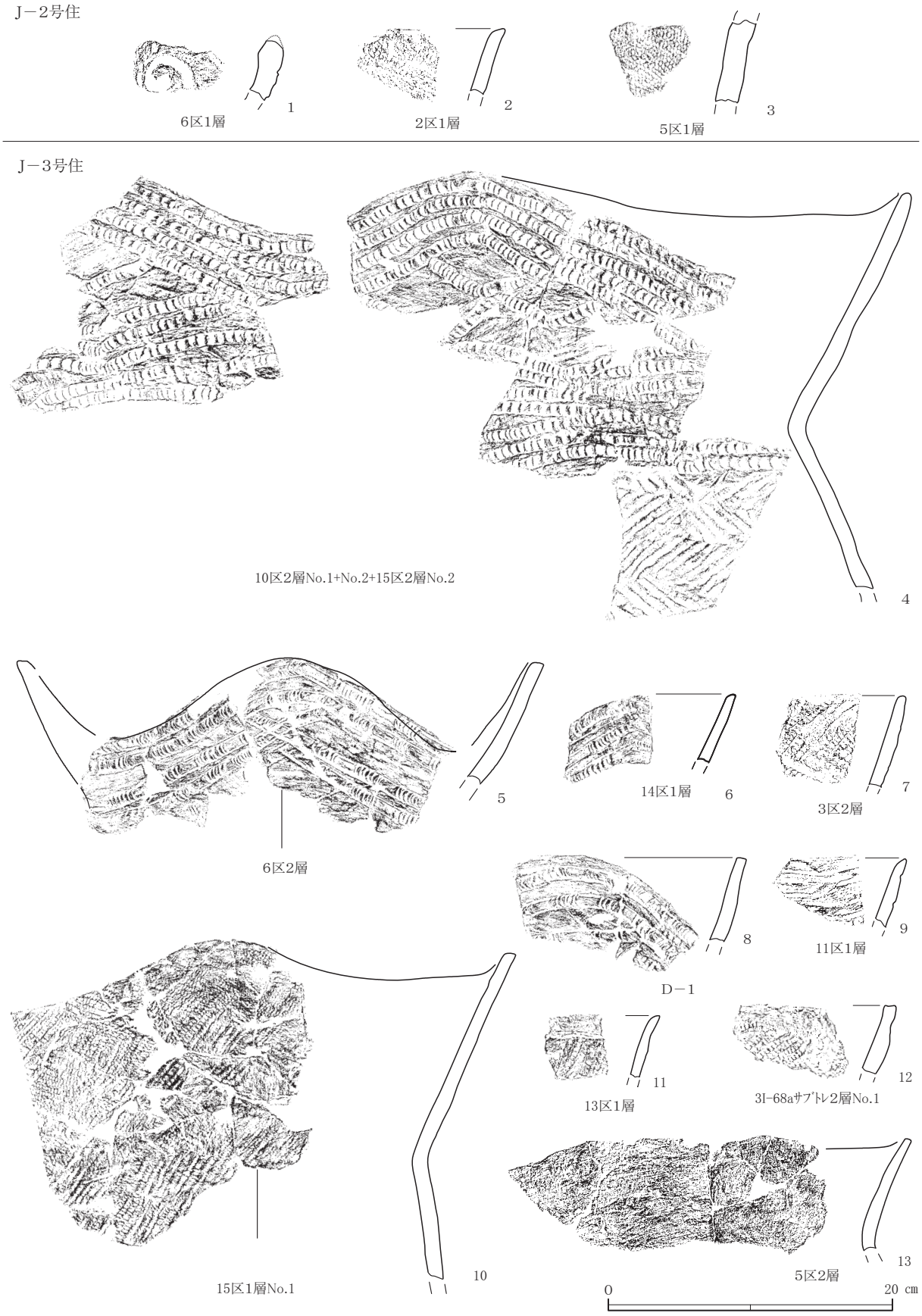
９、13、14は、平行沈線が施されている。平行沈線文を施文。13は、口縁が緩い波状口縁になり、頸部で括れている器形を呈するようである。櫛歯状工具による条線を施している。14は、口縁部が欠損しているが、頸部で括れて胴部は丸みもつ器形を呈すると思われる。櫛歯状工具による条線を施文後に、胴部には羽状縄文を施している。器形及び文様に大木系の影響が認められる。

15は、胴部の破片で縄文を施文している。16、17は、胴下半から底部付近である。16は、縄文を施文し、17は条線が施されている。

Ｄ－23号土坑出土土器（第12図18）

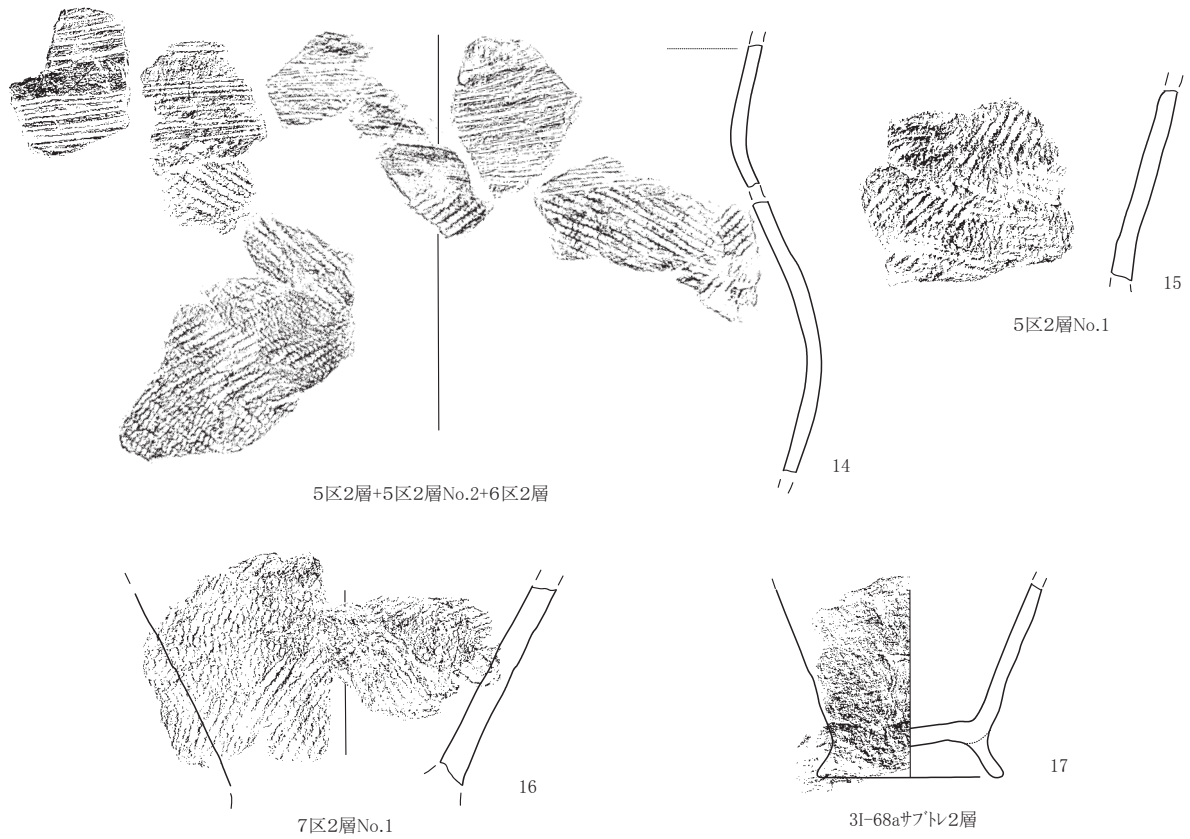
口縁部と底部付近が欠損している。最大径が37㎝、残存高36㎝をはかり、頸部の括れ１条の隆帯が巡り、胴部は丸みをもつ器形を呈する。この隆帯に接続させるように縦位に沈線を施文し、縦位の最内側と最外の沈線に沿って刺突している。五領ヶ台Ⅱ式である。

（松澤浩一）

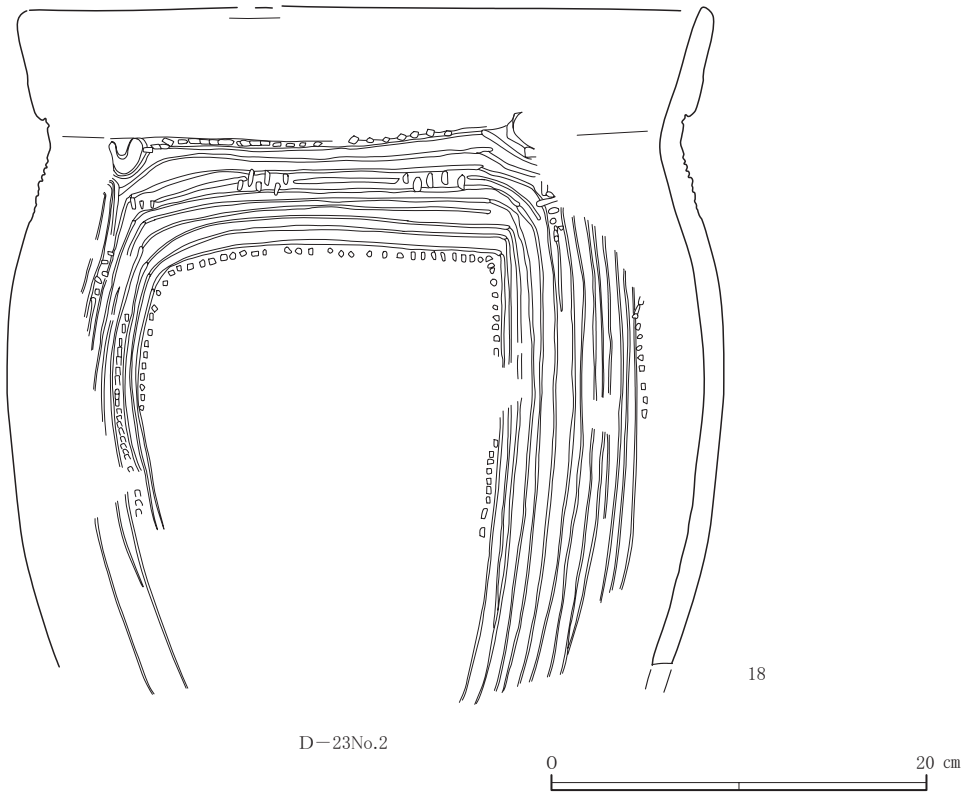


第11図　縄文土器実測図（1）

J－3号住



D－23号土坑



第12図　縄文土器実測図（2）

２．石器（第13図～第16図）

器種・系列組成（第13図）

Ｊ－３号住居址の石器系列組成では石器製作は低調であり、二次加工及び消費が活発であることが分かる。主な器種ではスクレイパーＢ類、打製石斧、石匙Ｂ等のＢ類石器が主体を占め、Ａ類石器は少ない。Ｃ類石器は安定して組成する。Ｄ類石器は無く、Ｅ類石器も磨製石斧欠損品が組成する。本住居址の石器群は前期中葉に帰属するものと思われる。概ね同時期の石器群の傾向と一致する。

土坑ではＤ－13号で磨石と石皿が、遺構外ではスクレイパーＢ類、石鏃、打製石斧、凹石が多数を占める。特にＡ類石器が目立つ点に特徴がある。

石材組成（第13図）

石器石材への利用率が高いのは黒色頁岩と黒曜石である。石材の種類も限られ、この２石材に限定される。重量でみても黒色頁岩が多いが、大形石器に利用される安山岩も多いのが分かる。黒曜石は点数に比べて重量は少なく、小破片であることが分かる。在地石材と非在地石材を利用する傾向は同時期の石器群と傾向は類似する。

石器各説（第14図～第16図）

石鏃（１、２、22～27）　13点が出土した。Ⅰ形態（Ｊ－１住1点、Ｊ－３住２点、遺構外４点）、Ⅲ形態（遺構外２点、未成品（遺構外２点）、不明（遺構外２点）である。Ⅰ形態は前期以降、Ⅲ形態は後期以降である。石材は黒曜石11点、チャートが２点である。

石錐（29、30）　Ｄ－21号土坑１点、遺構外１点が出土した。２点とも黒曜石製のⅠａ形態である。30の先端部に磨滅痕が観察される。

楔形石器（３）　Ｊ－３住１点、遺構外２点が出土した（黒曜石１点、硬質頁岩１点、頁岩１点）。３は両端に潰れ状の微細剥離痕が観察される。

スクレイパーＡ（４、５）　Ｊ－３住から２点出土した。Ⅰｂ形態（黒色安山岩）とⅢ形態（チャート）である。黒曜石製は認められなかった。

石匙Ａ（34）　遺構外から２点出土した。２点とも硬質頁岩製のⅡａ形態である。

原石・石核Ａ（31～33）遺構外から原石１点、石核３点が出土した。全て黒色透明で不純物は少ない黒曜石である。肉眼観察により原産地は信州星ヶ塔系のものと推定される。前期の所産と考えられる。

打製石斧（35）　Ｊ－３住未成品１点、遺構外６点（Ⅱ形態５点、Ⅲ形態１点）が出土した。石材は頁岩と安山岩である。35は抉部が深く、磨滅痕が観察される。形態的特徴から後期以降の所産と考えられる。

三角錐形石器（12）　Ｊ－３住で１点出土した。角柱状の素材を用いて直接打撃によって断面四角形に整形している。先端部は尖頭状に整形し、やや剥離面の磨滅痕が観察される。石材は頁岩である。この種の石器は早期あるいは中期に組成し、前期では類例が少ない。形態的には三角錘形石器に類似するが、別の器種の可能性も考えられる。

石匙Ｂ（６～11）　Ｊ－３住から６点（Ⅰａ形態２点、Ⅰｂ形態１点、Ⅱａ形態１点、Ⅱｂ形態２点）が出土した。片面及び両面加工が認められる。９は抉入のあるスクレイパーの可能性もある。

スクレイパーＢ（13～15）　Ｊ－３住17点（Ⅱ形態７点、Ⅲ形態10点）、遺構外15点（Ⅰｂ形態２点、Ⅱ形態８点、Ⅲ形態５点）が出土した。直接打撃によるⅡ形態と縁辺部に微細剥離痕をもつⅢ形態が多い。石材は頁岩27点、安山岩６点である。Ｊ－３住の素材剥片は、打点が主軸から斜めにずれること

から前期中葉に特徴的な「角打ち技法」による剥離と思われる。

磨石（16・37）　Ｊ－３住3点（Ⅱ形態２点、不明１点）、Ｄ－13号土坑１点（Ⅰ形態）が出土した。石材は全て安山岩である。

凹石（17・18・38・39）　Ｊ－２住３点（Ⅱｂ形態）Ｊ－３住５点（Ⅱｂ形態４点、Ⅳｂ形態１点）、Ｄ－23号土坑１点（Ⅱｂ形態）、遺構外５点（Ⅱｂ形態３点、不明２点）が出土した。16は磨石（Ⅱ形態）である。17と18は凹石（Ⅱｂ形態）である。石材は全て安山岩である。

石皿（40）Ｊ－３住から欠損したものが１点、Ｄ－13号土坑から１点出土した。作業面（片面）には多数の敲打痕が観察される。石材は全て安山岩である。

敲石（19・20）　Ｊ－３住から２点（Ⅲ形態）出土した。先端及び両端に敲打痕がある。19は全面に磨面が観察されることからミガキ石の可能性もある。石材は頁岩と安山岩である。

砥石（21）Ｊ－３住から５点（Ⅰ形態）出土した。石材は全て牛伏砂岩である。

石棒（41）　遺構外から１点出土した。小形有頭型である。研磨により整形され、有頭部分に幾何学的な刻みが認められる。石材は青色の結晶片岩である。

磨製石斧　Ｊ－３住で欠損品１点と敲石への転用品１点、遺構外から欠損品１点が出土した。全て形態は不明である。石材は緑色岩類である。

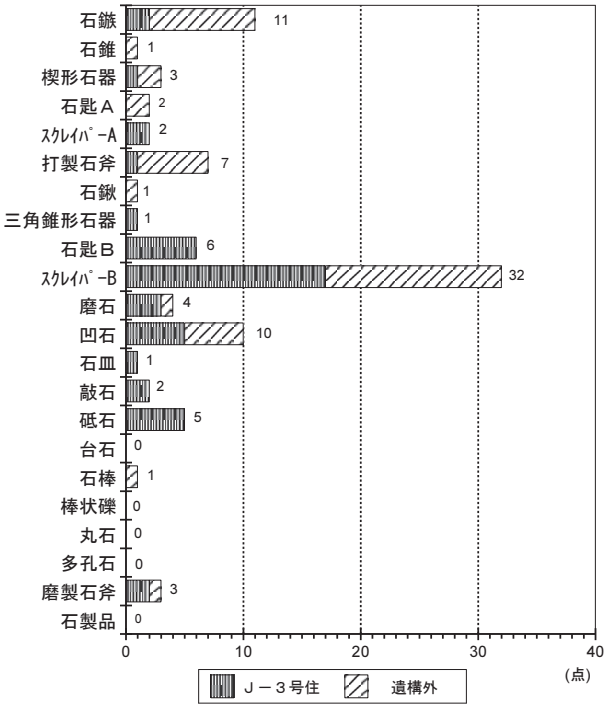
（井上慎也）

３　弥生時代の遺物

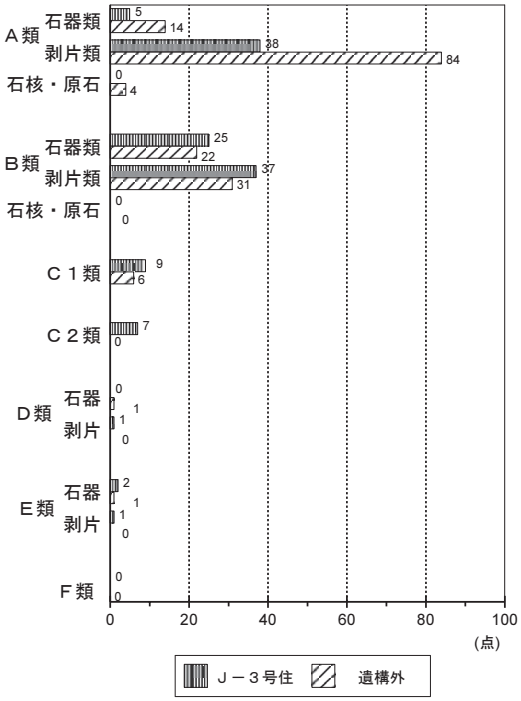
遺構外から石鏃と石鍬が各１点出土した。石鏃（第16図28）は、Ⅲ形態（凹基有茎鏃）で先端部とカエリ部が細く尖る。重量は1.3ｇであり、縄文時代の石鏃に比べやや大形である。石鍬（第16図36）は回転交互剥離調整で製作され、平面がうちわ状である。石材は頁岩である。石鏃と石鍬の形態的特徴により、中期前半の所産と考えられる。加賀塚遺跡の西には中期前半の石器群が確認された中野谷原遺跡が存在することから、両遺跡との関連性が認められる。

（井上慎也）

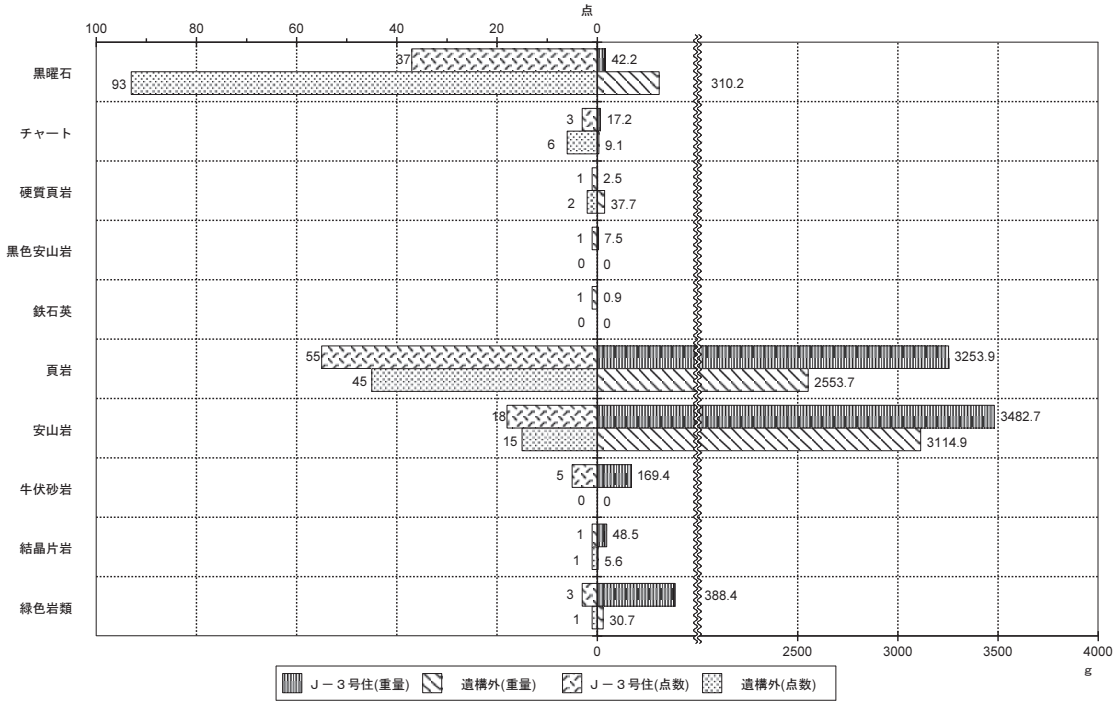
器種組成



石器系列組成

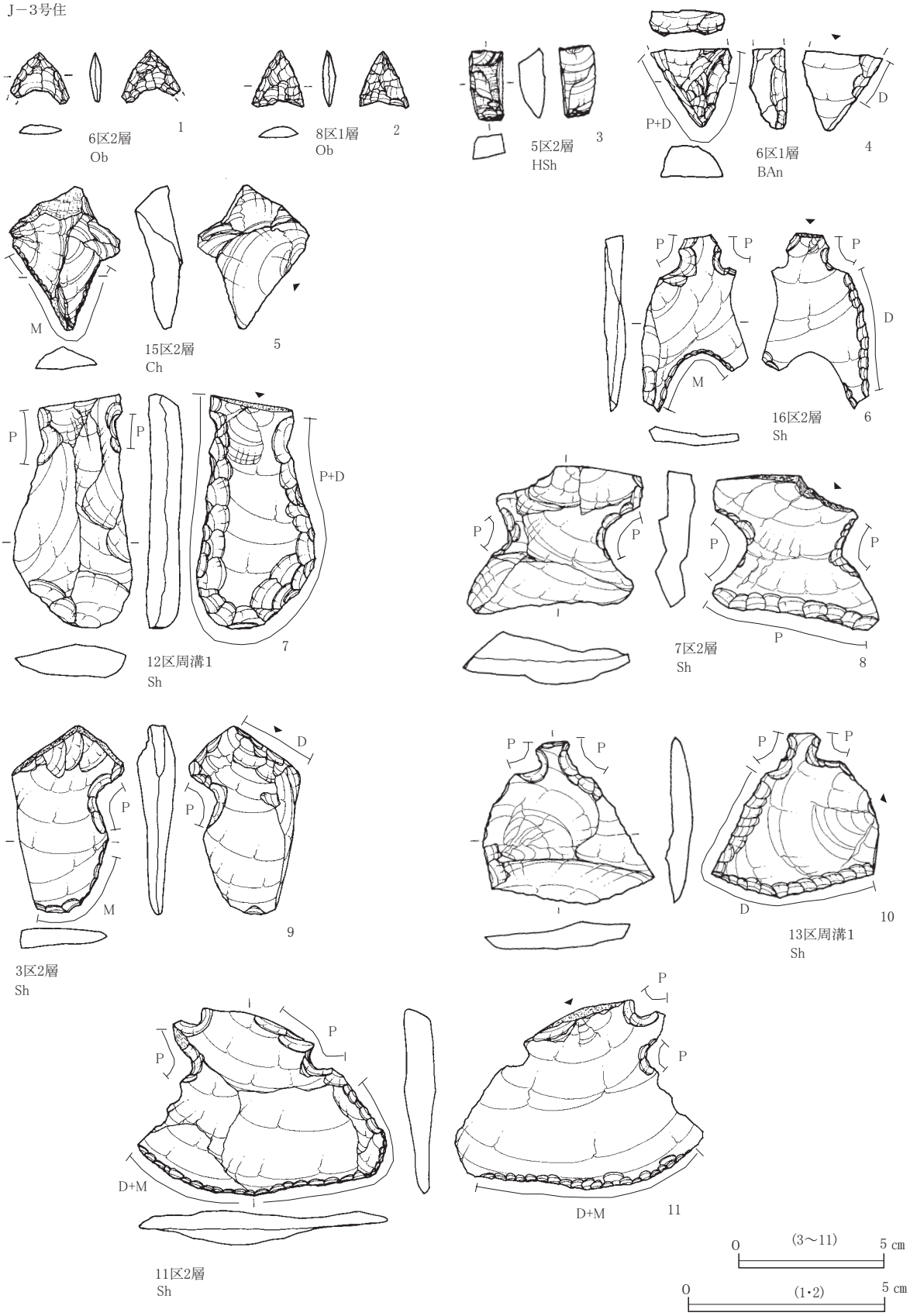


石材組成



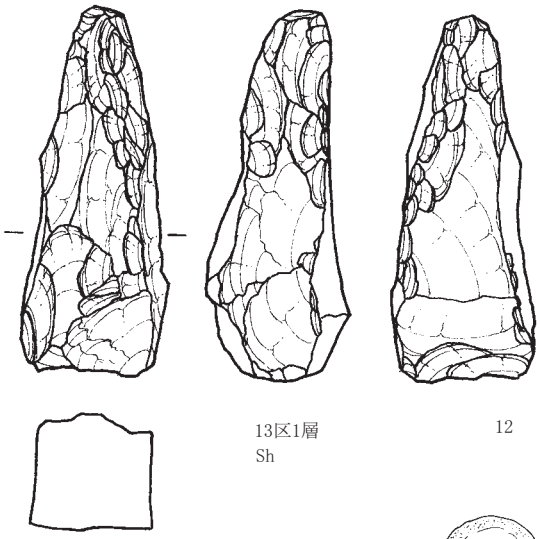
※集計はJ-3号住以外の住居、土坑を除く

第13図　縄文石器組成


J－3号住
6区2層
Ob
1
8区1層
Ob
2
5区2層
HSh
3
P+D
D
6区1層
BAn
4
M
15区2層
Ch
5
P
P
P+D
12区周溝1
Sh
7
P
P
P
D
16区2層
Sh
6
P
P
P
P
P
7区2層
Sh
8
D
P
P
M
3区2層
Sh
9
P
P
P
P
D
13区周溝1
Sh
10
P
P
P
P
D+M
D+M
11区2層
Sh
11
0
(3～11)
5 cm
0
(1･2)
5 cm

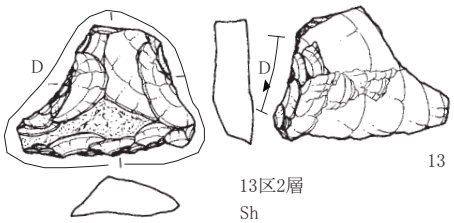
第14図　石器実測図（1）

J－3号住



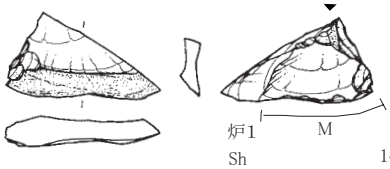
13区1層
Sh

12



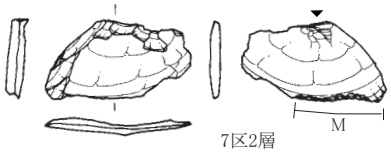
13

13区2層
Sh



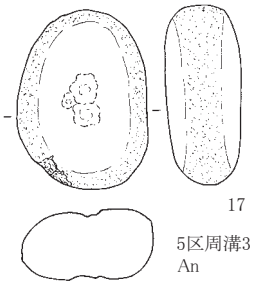
炉1
Sh

14



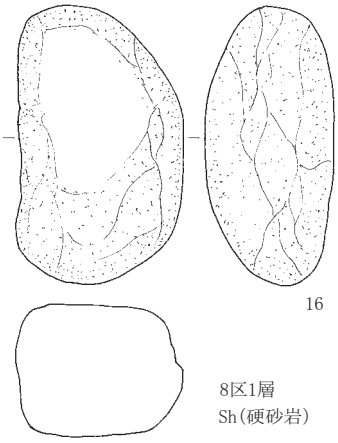
7区2層
Sh

15



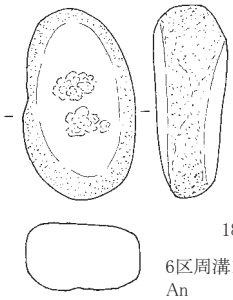
17

5区周溝3
An



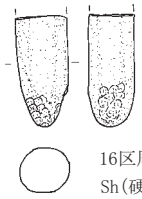
16

8区1層
Sh(硬砂岩)



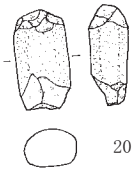
18

6区周溝1・3
An



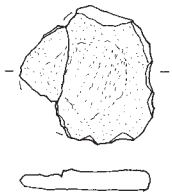
19

16区周溝1
Sh(硬砂岩)



20

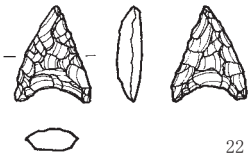
7区2層
An



21

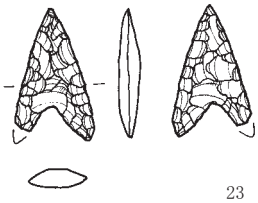
15区周溝1
SS

土坑・遺構外



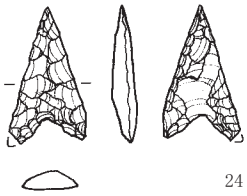
22

H-41住覆土
Ob



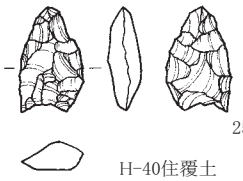
23

H-6住覆土
Ob



24

H-42住覆土
Ob



25

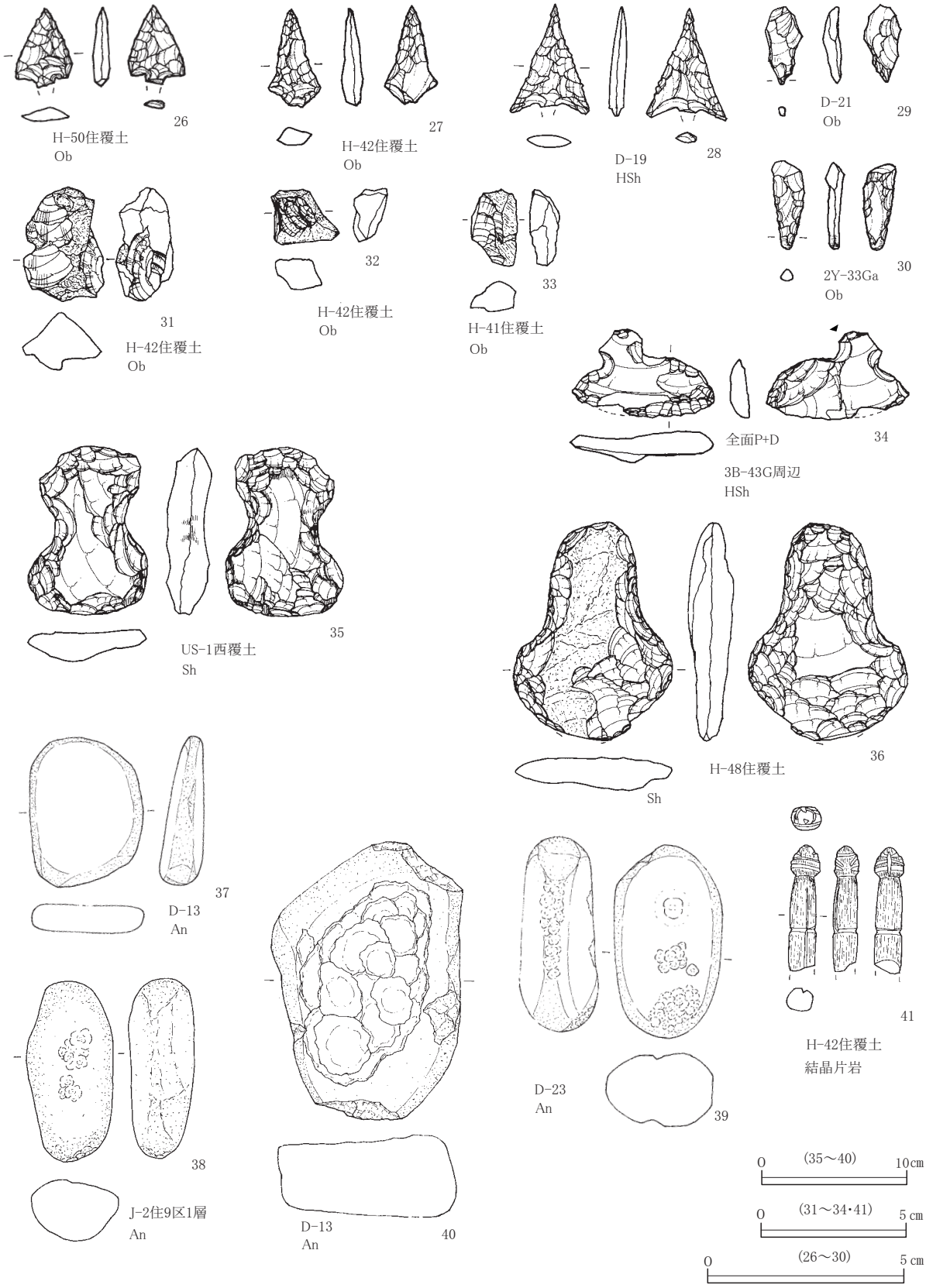
H-40住覆土
Ch

0 (12) 5㎝

0 (13～21) 10㎝

0 (22～25) 5㎝

第15図　石器実測図（２）


26
H-50住覆土
Ob
27
H-42住覆土
Ob
28
D-19
HSh
29
D-21
Ob
30
2Y-33Ga
Ob
31
H-42住覆土
Ob
32
H-42住覆土
Ob
33
H-41住覆土
Ob
34
全面P+D
3B-43G周辺
HSh
35
US-1西覆土
Sh
36
H-48住覆土
Sh
37
D-13
An
38
J-2住9区1層
An
39
D-23
An
40
D-13
An
41
H-42住覆土
結晶片岩
0 (35～40) 10cm
0 (31～34・41) 5cm
0 (26～30) 5cm

第16図　石器実測図（3）

4　古墳時代の遺構と遺物

（１）遺構（第17図～第81図・第５表～第10表）

１．住居址（第17図～第72図）

時期

５世紀後半から６世紀前半の住居址51軒について、出土遺物の検討によりを５時期に区分した。

Ⅰ期：６軒

Ⅱ期：14軒（可能性のある住居址７軒を含む）

Ⅲ期：18軒（可能性のある住居址６軒を含む）

Ⅳ期：２軒

Ⅴ期：１軒

５世紀後半：４軒

時期不明：６軒（５世紀代）

規模

住居址は全て竪穴住居址に分類される。大きさでは大形６m以上、中形４～６m、小形４m以下に分類される。平面形態による分類は、小形長方形１軒（１軒）、中形正方形21軒（Ⅰ期５軒、Ⅱ期５軒、Ⅲ期２軒、Ⅳ期２軒、不明７軒）、中形長方形10軒（Ⅰ期１軒、Ⅱ期６軒、Ⅲ期２軒、不明１軒）、大形正方形５軒（Ⅱ期１軒、Ⅲ期４軒）、大形長方形８軒（Ⅱ期２軒、Ⅲ期５軒、不明１軒）、大形隅丸方形１軒（Ⅲ期）、形態が不明な中形３軒（Ⅲ期１軒、不明２軒）及び大形２軒である。竈方向を長軸とし、それに直交する方向を短軸とした場合、棚状遺構の部分を除く竪穴部分の大きさの平均は、長軸約5.1m、短軸約5.2m、深さ0.6mである。中形正方形に近い形態が主体で、時期が新しくなると大形化する傾向が認められた。本遺跡で大きさが最大な住居址は棚状遺構をもつＨ－42号住居址（Ⅱ期）で長軸8.1m、短軸7.4mである。住居址４軒（Ⅱ期２軒、Ⅲ期２軒）で竪穴部分に付帯する棚状遺構を確認した。Ｈ－５号住居址では、壁と柱穴の間に間仕切りのための浅い溝が検出された。

住居址の掘り込みは、確認面からの深さで約0.1～1.2mまでの幅があり、深さの平均は0.6mであった。住居址は斜面部に構築されているため、床面を平にするため斜面奥側が深く、手前が浅い構造となっている。

壁溝

住居址の壁際に回る壁溝は、12軒で確認された。全周するもの７軒（Ⅰ期１軒、Ⅱ期１軒、Ⅲ期４軒、不明１軒）、部分的なもの５軒（Ⅱ期１軒、Ⅲ期３軒、不明１軒）である。壁溝はⅢ期に多く認められたが、全体的には24％程度と少ない。溝は断面箱状で掘り込みは浅い。

主軸方向

主軸は、竈の位置方向及び長軸方向を基準とした。主軸方向は北方向（西及び東10°以内）16軒、北東方向（11～79°）22軒、東方向（80～100°）、北西方向（11～30°）３軒、南方向２軒である。全体的には北及び北寄りの東方向が一番多く、次に東方向となる傾向が認められたが、主軸の方向による時期差は顕著には認められなかった。主軸の方向に一定の方向性があるのは、住居址が斜面部にあるといった地形による規制、竈の位置等が要因と考えられる。

住居内土坑

土坑は全ての住居址で確認された。土坑には貯蔵穴（床下土坑を含む）、工房址の「工作ピット」に分けられる。竈をもつ住居址では、竈右18軒、竈左３軒、竈両脇２軒、その他南東隅15軒と南西隅２軒で、竈脇からの検出が多かったく、特に竈右に存在する傾向が高い。全体的には一住居址につき、１基あるいは２基の土坑が基本であったが、なかには床面中央にも複数の土坑が存在するものも認められた。これらの土坑は貯蔵用と推定される。土坑内からは坏、甕等の完形を含め土器を出土するものもあるが、ほとんどが破棄された遺物であった。土坑の位置には、Ⅱ期で竈脇、Ⅲ期で竈の反対側に構築される傾向が認められた。段をもつ枠のあるものと地面を直接掘り込むものが認められ、平面円形、方形が主体である。一部で掘り込みが浅いものも認められた。床面中央あるいはその周辺に存在する床下土坑は10軒で確認された。前述した貯蔵用の土坑とは区別され、主に床面に掘り方をもつ住居址で多数検出された。形態は平面大形円形で深いものが主体である。遺物の出土は土器片が少数であった。工房址の「工作ピット」はＨ－45・49号住居址で認められた。また、Ｈ－15号住居址の貯蔵穴では底面近くで滑石が粘土化した白色粘土塊が出土した。

柱穴

床面に柱穴をもつ住居址は、45軒で確認された。柱穴が無いのは３軒、不明３軒であった。時期に関係なく４本柱が基本で、配列は正方形になる傾向が認められた。２本柱となる住居址も１軒存在した。３軒の住居址で柱の差し替えが１回、１軒の住居址で片側２カ所のみの差し替えが認められた。なお、Ｈ－28号住居址では１カ所で炭化した柱の一部が検出された。樹種同定分析の結果、エゴノキ属であることが判明した。柱穴の深さは斜面に向かった低い２本（南側）が深いのが特徴である。

覆土状況

覆土状態を観察した結果、以下に分類した。

Ａ：人為的に埋め戻された後に自然堆積（Ⅲ層＋As－B）

　Ａ１：ローム混じりの埋め戻しは23軒

　Ａ２：焼土と炭化材（物）が混入（焼失）は４軒

Ｂ：人為的な埋め戻し（完全）

　Ｂ１：ローム混じりの埋め戻しは10軒

　Ｂ２：焼土と炭化材（物）が混入（焼失）は８軒

Ｃ：自然堆積が主体（レンズ状堆積）は３軒

他に不明２軒が認められた。全ての住居址が同じ状態で埋没していないことが判明した。廃絶された住居址は、集落が継続していても完全には埋没しておらず、自然堆積によって徐々に埋没していった過程が覆土状態で確認できた。

遺物出土状況

各住居址で、土師器、須恵器、石製品・石製模造品、石器、鉄製品、土製品等が出土した。遺物は床面直上または竈及び貯蔵穴等の住居施設から出土するもの（「遺棄」）と覆土中に混入、廃棄されたもの（「廃棄」）に分けられる。また、出土量から判断して「遺棄」された状態から出土する遺物が多く、覆土中からの出土は少ない傾向が認められた。土師器の出土量では、１kg以下（※）５軒、１～５kg（△）11軒、５～10kg（○）17軒、10kg以上（◎）18軒である。須恵器の出土量は、１～５kg（△）１軒、１kg以下（※）14軒であるが、Ｈ－42号住居址以外では複数個体の破片のみで、全体的に須恵器の組

成は少ない。石製品は10点以下（※）が26軒、10～50点（△）が４軒、51～100点（○）が１軒、101点以上が４軒であった。石器では、10点以下（※）が33軒、11～20点（△）が４軒、21～30点（○）が１軒、31点以上が３軒である。土器（土師器・須恵器）、石製品・石製模造品、石器の全てが出土した住居址も10軒認められた。

炭化材検出状況

覆土及び床面の炭化材の検出状況から、焼失住居が認められた。床面に炭化材が良好な形で検出できたのはＨ－12、14、16、19、28、40、41、45号住居址である。これらの炭化材は住居の構築材と推定され、内側に倒れている検出状況から垂木の可能性が高い。炭化材の一部を樹種同定分析をした結果、Ｈ－12号住居址でサクラ属、Ｈ－14号住居址でコナラ属クヌギ節、Ｈ－28号住居址でヤブツバキ、Ｈ－45号住居址でコナラ属アカガシ亜属であった。これらの樹種は、当時の植生から遺跡周辺に広く分布し、容易に採取可能であったと推定される。

竈・炉構造

竈のある住居址は36軒、炉のある住居址は８軒、不明７軒である。竈構造別ではＡ形態（ローム＋黒色土）３軒、Ｂ形態（ローム＋黒色土＋袖芯河川礫）26軒、Ｄ形態（地山削り出し＋ローム＋袖芯河川礫）１軒、不明11軒であった。竈の位置は、住居の主軸方向と一致し、北竈と東竈に分けられる。南竈も２軒確認された。竈の遺存状態は悪いものが多く、ほとんどの住居址で破壊（潰れた状態）して廃棄されていた。しかし、Ｈ－15、18、50号住居址では、竈に土器が掛けてある状態で検出されるものもあった。甕が１カ所あるものと甕が並列して並び、片方が小さいものが存在する。また、支脚も右側で認められた。支脚には棒状の安山岩や高坏等を二次転用したものがあった。また、支脚と竈の甕の高さや甕との隙間に坏や土師器片で調節したものも認められた。特にＨ－18号住居址では大中小の３連の甕が掛けられていた。小形甕には坏で蓋をした状態で出土した。Ｈ－42号住居址の竈は新旧２カ所設置されており、北側竈は住居外へ延びる煙道が確認された。

炉は、浅く皿状の掘り込みで確認された。地床炉に分類でき、枕石は検出されなかった。底面には赤く被熱した痕が観察された。

Ⅰ期は全て炉であり、Ⅱ期以降、竈にとなる時期差が認められた。本遺跡では、Ⅰ期とⅡ期が竈出現の画期と想定される。

石製品・石製模造品製作工房址

本遺跡の住居址には、一般的な住居址の他、石製品・石製模造品の製作工房址を兼ねた住居址６軒が確認された。工房址とされる住居址には、製作に伴う滑石片が集中する範囲や台石、工作用のピット（土坑）、床面に窪みや高まりをもつものも認められた。Ｈ－42、45、46号住居址では、床面で滑石が粘土化したものと思われる白色粘土塊が出土した。

２．円形周溝状遺構（第73図・第74図）

Ｂ区東側で３基確認された。２基は重複し、１基は単独である。

この遺構は、円形に溝が周り、底面には浅いピットが確認された（ＥＭ－３号）。内側には浅いピットが確認されたものもあるが、柱穴と言えるほどのものではない。溝内から土師器の坏片及び甕破片が小数出土したのみである。住居址との関連性がある遺構と考えられる。３基ともⅡ期あるいはⅢ期の所産と推定される。類例では中筋遺跡（渋川市）、海行Ｂ遺跡（旧箕郷町）、西国分Ⅱ遺跡（旧群馬町）等

で認められる。

３．竪穴状遺構（第75図）

Ｔ－１号は平面長方形、Ｔ－２号は隅丸方形で、やや不整形である。Ｔ－１号は掘り込みが深く床面中央で土師器の大型甕が２点出土した。遺構は人為的に埋め戻されていた。

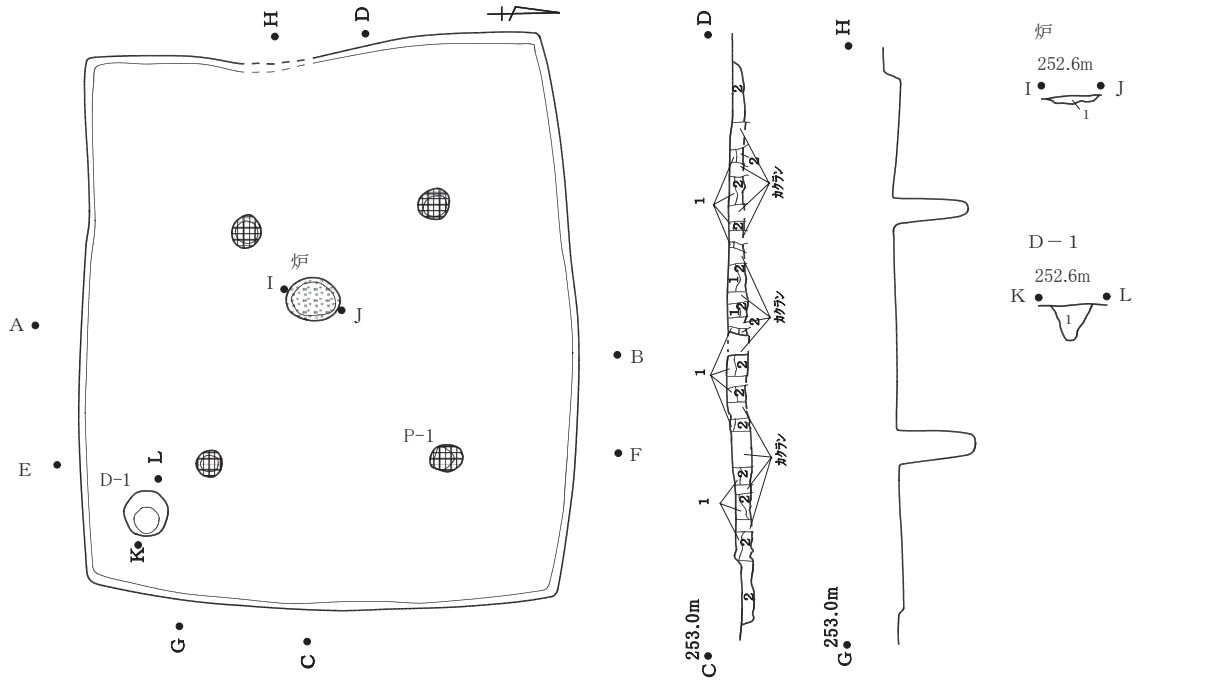
４．土坑（第76図）

土坑は16基確認された。覆土の状態から浅間Ｂ軽石を含まないものを一括して古墳時代の所産としたが、他時期のものも含まれる可能性がある。平面円形が主体で、断面は浅い皿状と箱状が多い傾向であった。Ｄ－19号土坑は平面方形で竪穴状遺構の可能性もあり、覆土から土師器鉢と台石が出土しており特殊である。また、Ｄ－18号土坑も平面方形である。Ｄ－12号土坑は、完形の土師器坏２点と台石が出土した。Ｄ－６号土坑はＬ字状で北西方向に横穴が確認された。時期を特定できる土坑は、Ｄ－４、12、17、18、19である。それ以外は機能、時期共に不明である。

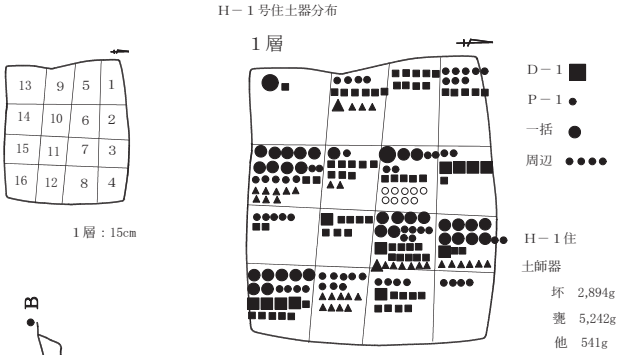
５．溜池（第77図・第78図）

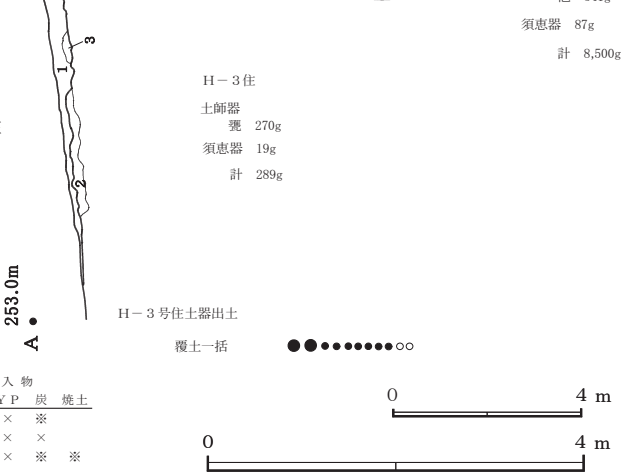
溜池は北側半分を調査した。南斜面の低地に差し掛かる部分で、湿った範囲を確認し、トレンチを入れた結果、湧水が確認された。調査範囲を拡大したところ、地山を湧水点まで掘削した溜池であることが判明した。掘削は一度、掘り下げた後、ロームを埋め戻して階段状の足場が造られていた。北東には水面までの通路状の溝が確認できた。北隅には湧水点があり、その部分がオーバーハングしていた。またその上でピットも２カ所確認された。水面下の底面については、湧水が多いため確認することはできなかった。覆土は浅間Ｂ軽石がレンズ状に堆積した自然埋没である。遺物は水中からは土師器、石製模造品、メノウの原石等の遺物が出土した。

H－１号住



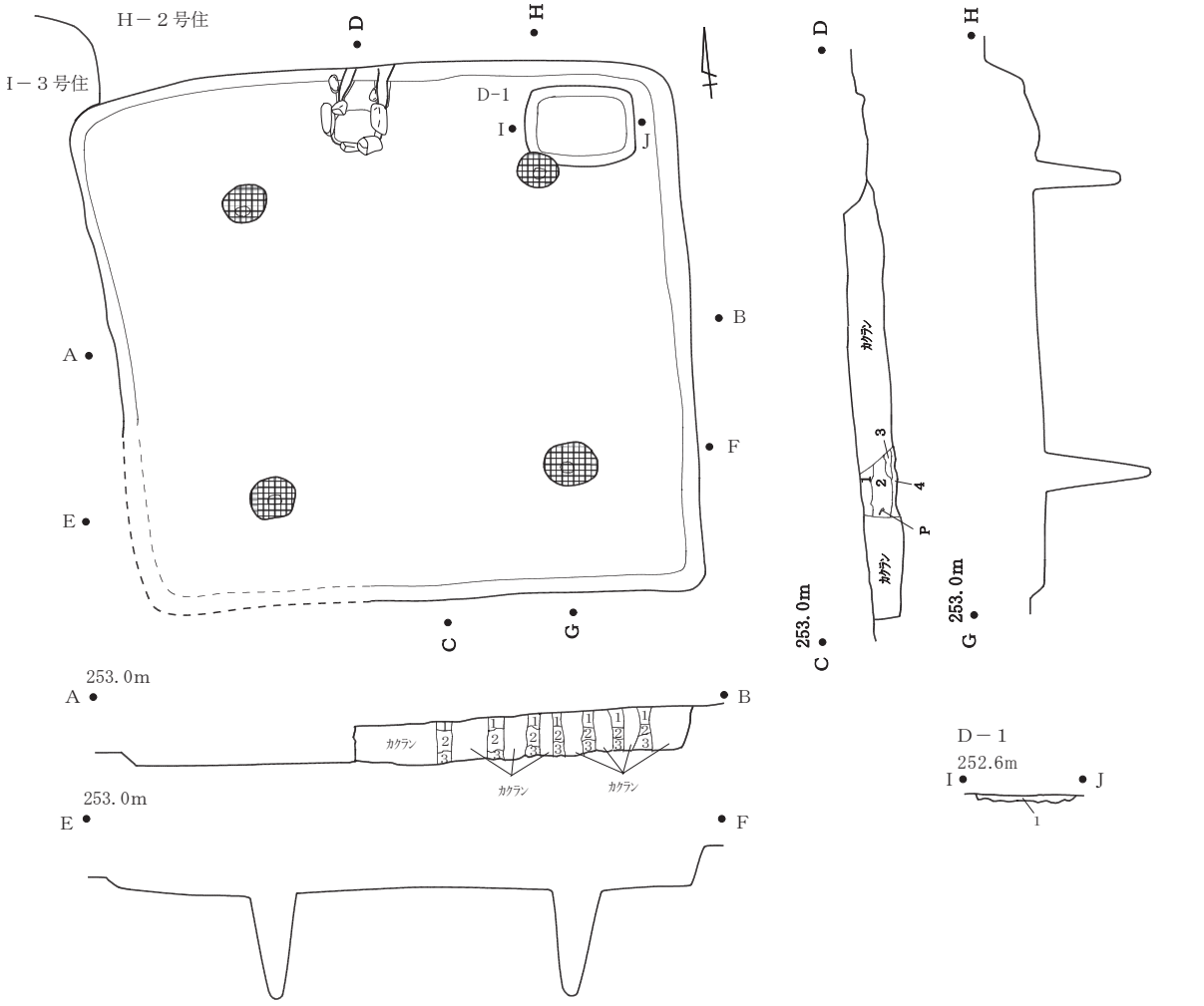
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	×	※	
	3	黒褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	×		
D－1	1	黒色土層10YR		○	○	×	×	×		
炉	1	黒色土層10YR		△	○	×	×	×	※	

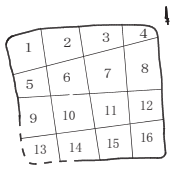




遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－3	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	×	×	※	
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	△	×	×	
	3	暗褐色土層10YR	1＜3	○	○	※	×	×	※	※

第17図　H－１号・H－３号住居址実測図



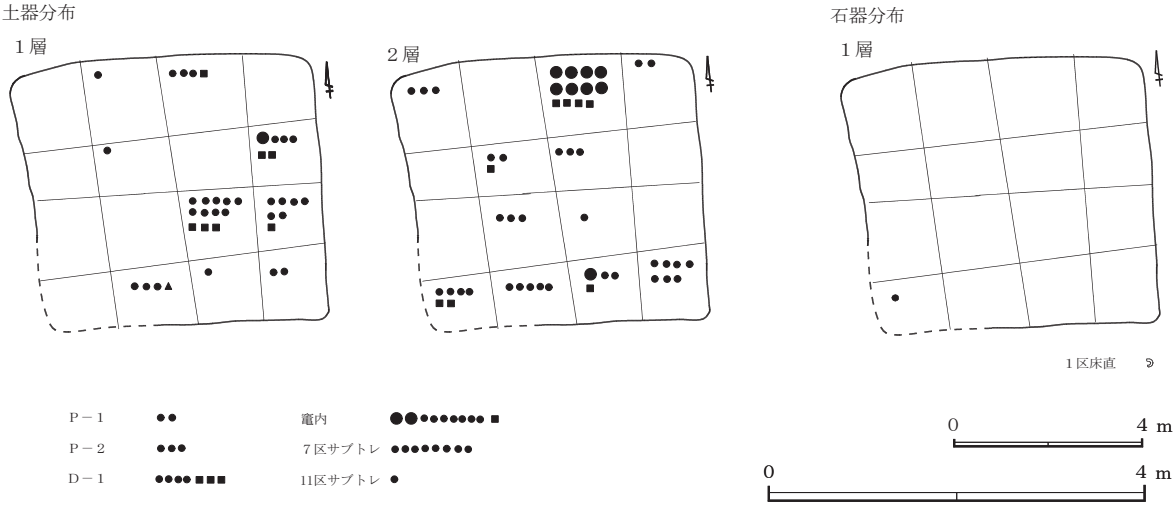


土師器

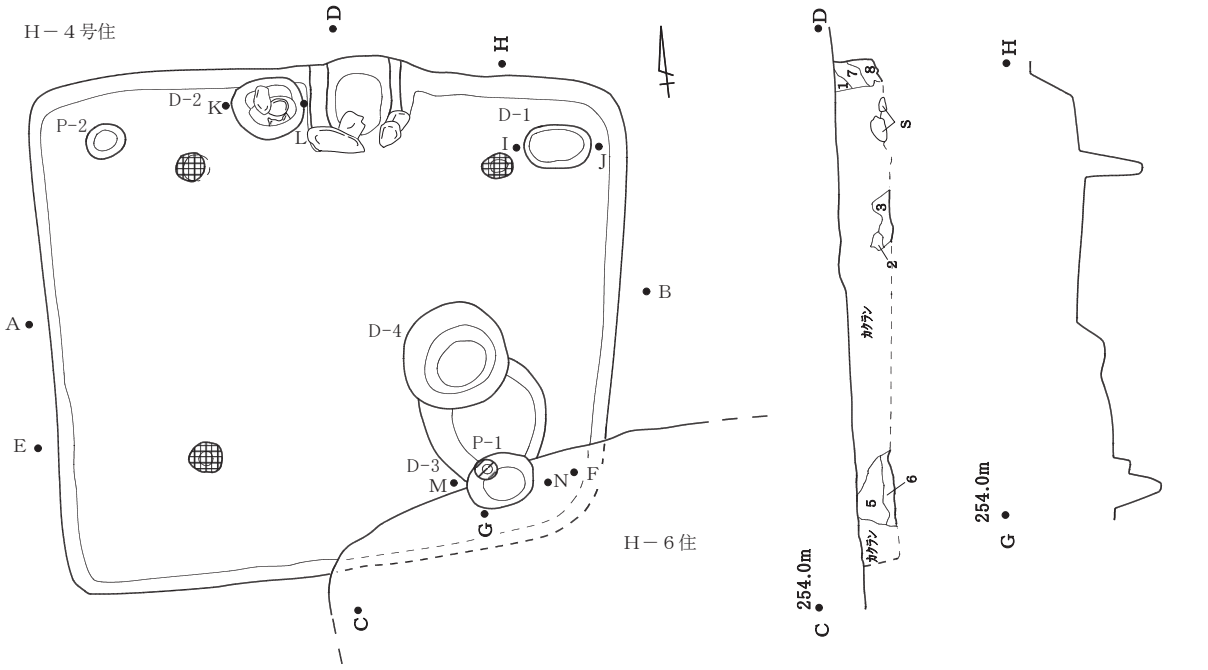
坏	156g
甕	2040g
他	3g
計	2198g

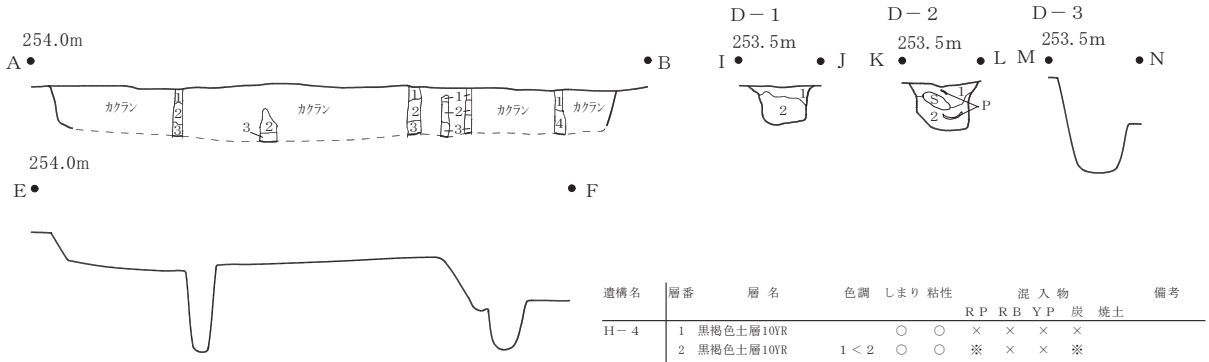
１層：０～15cm
２層：０～20cm

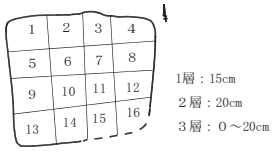
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－２	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※	※	※	
	3	黒褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	×	※	※	×	
	4	褐色土層10YR	3＜4	◎	○	※	△	※	×	×	貼床
D－１	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	※	※		



第18図　H－２号住居址実測図





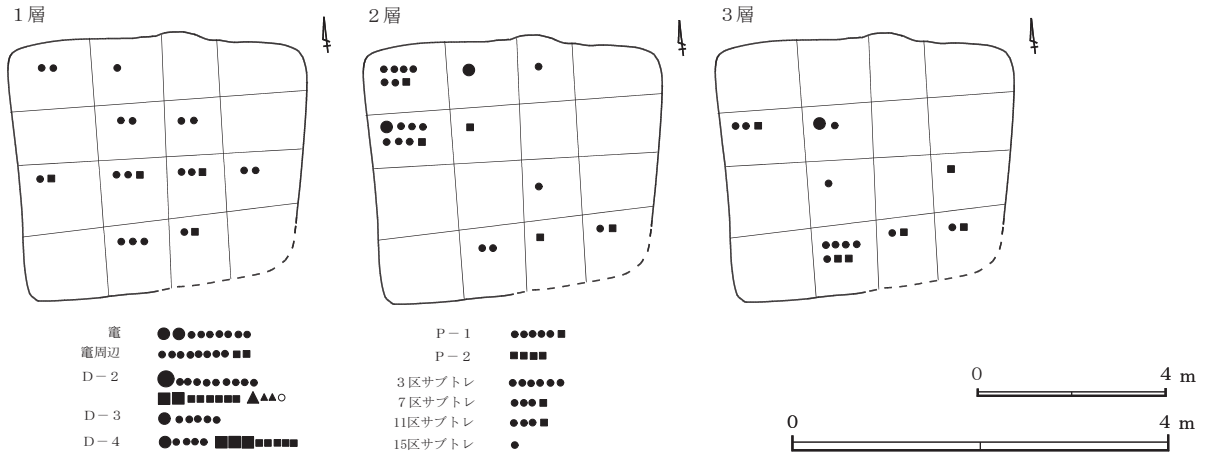


1層：15cm
2層：20cm
3層：０～20cm

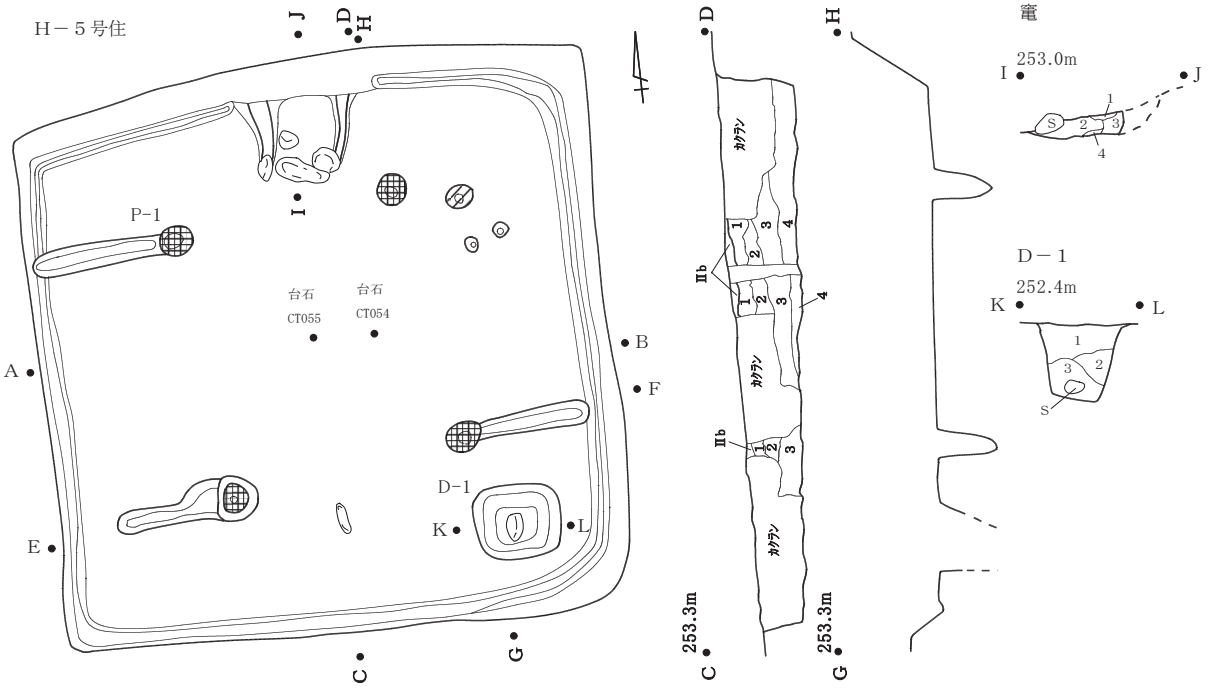
土師器
坏　782g
甕　2,707g
他　115g
須恵器　6g
計　3,610g

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－４	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	×	※		
	3	黒褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	×	※	※	
	4	黒褐色土層10YR	3＜4	○	○	△	×	×	※	×	埋め戻し
	5	暗褐色土層10YR	1＜5	○	○	△	※	※	※		埋め戻し
	6	暗褐色土層10YR	5＜6	○	○	△	※	※	※		埋め戻し
	7	暗褐色土層10YR	1＜7	○	○	△	×	※	※	※	竈土
	8	赤褐色土層10YR	7＜8	○	△	◎	×	×	×	※	竈袖
D－１	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	※	※			
	2	褐色土層10YR	1＜2	△	△	○	△	△			
D－２	1	黄褐色土層10YR		○	○	◎	△	※	×	※	
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	○	×	※	×	×	

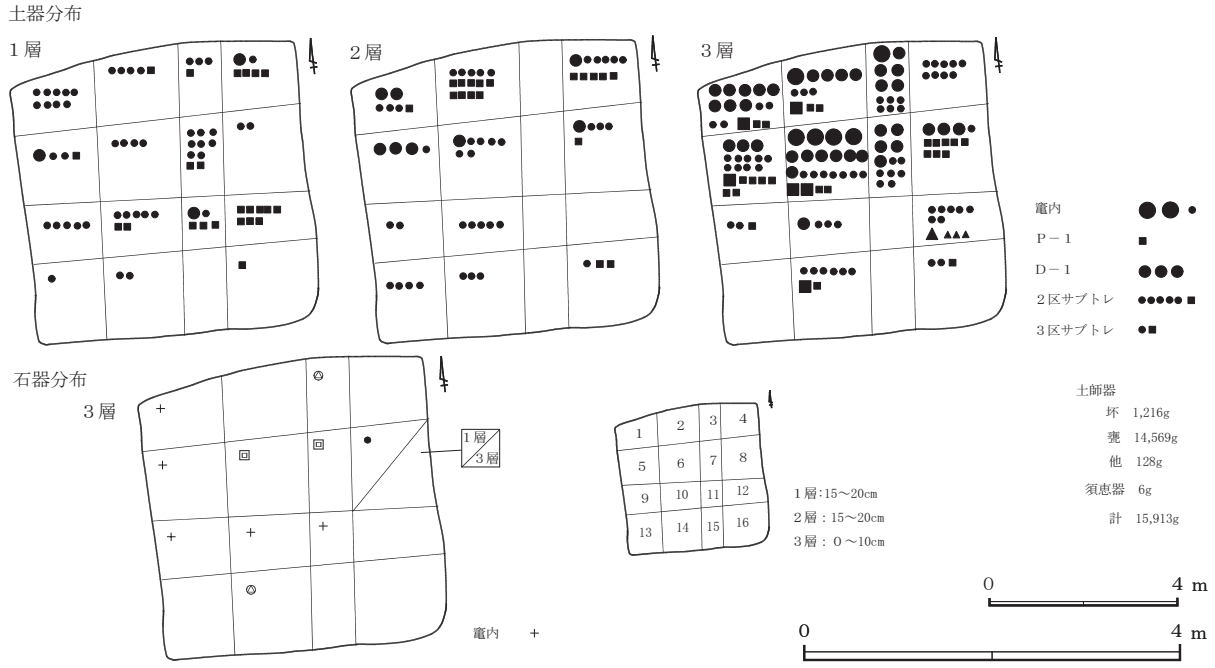
土器分布



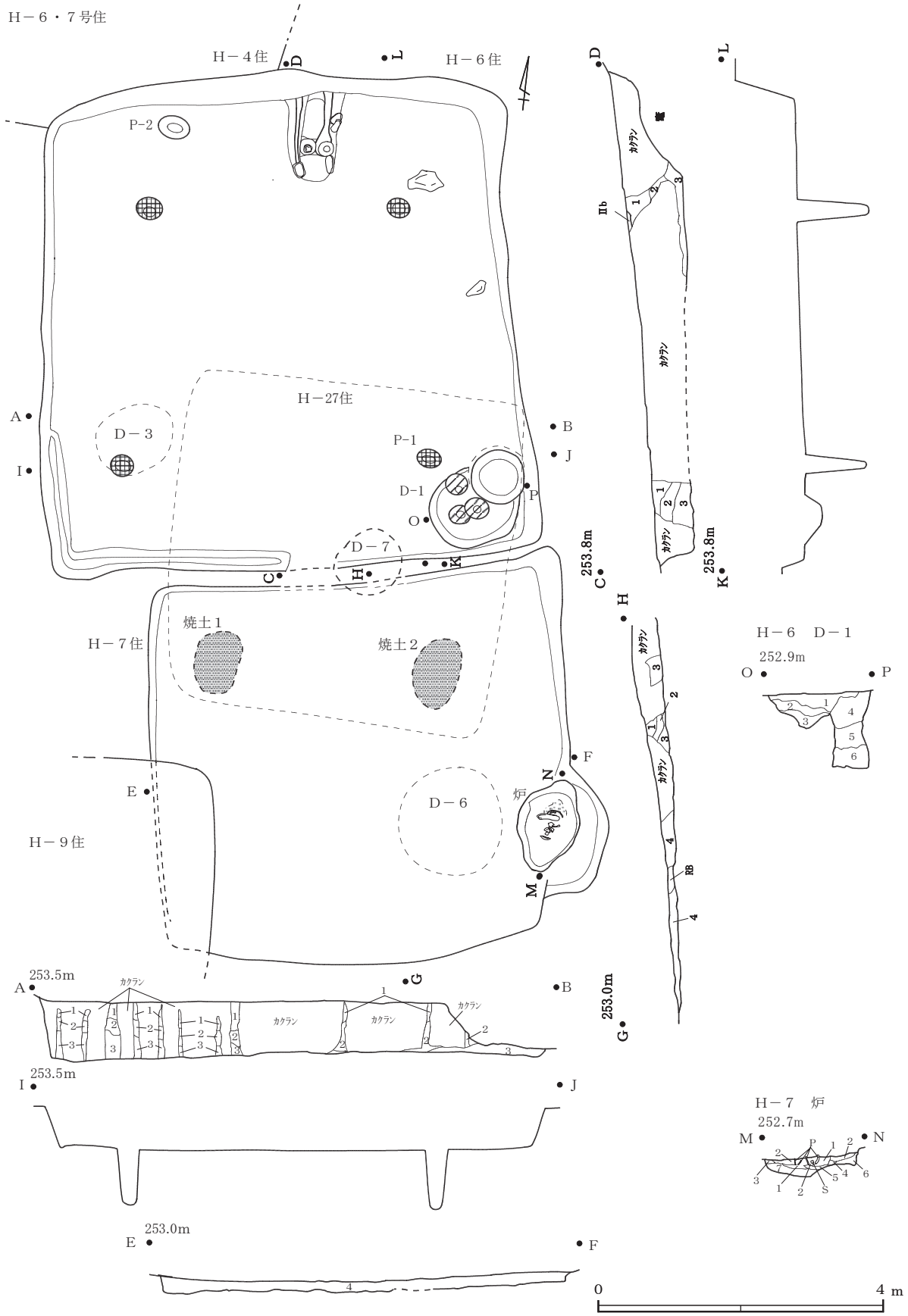
第19図　H－４号住居址実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－5	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	×		
	3	黒褐色土層10YR	2＜3	○	○	×	×	※	※	
	4	暗褐色土層10YR	3＜4	○	○	※	※	※	※	
竈	1	暗赤褐色土層5YR		△	○	※	×	×	※	※
	2	赤褐色土層2.5YR	1＜2	△	○	△	※	※	※	△
	3	暗赤褐色土層5YR	3＜2	△	○	※	×	※	※	※
	4	褐色土層7.5YR	4＜2	△	○	※	×	×	×	×
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	※	※	
	2	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	※	※	



第20図　H－5号住居址実測図

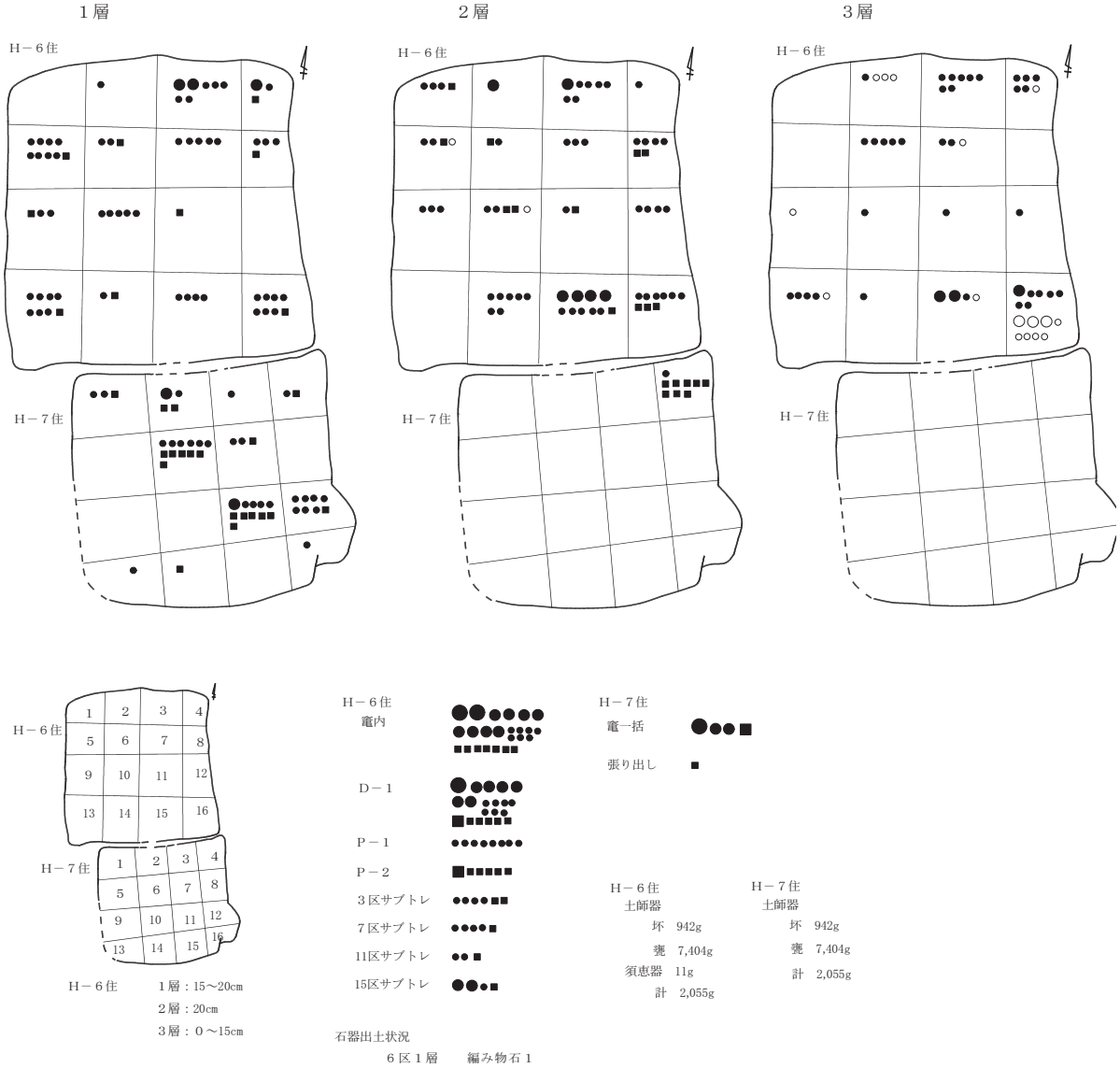


第21図　H－6号・H－7号・H－27号住居址実測図（1）

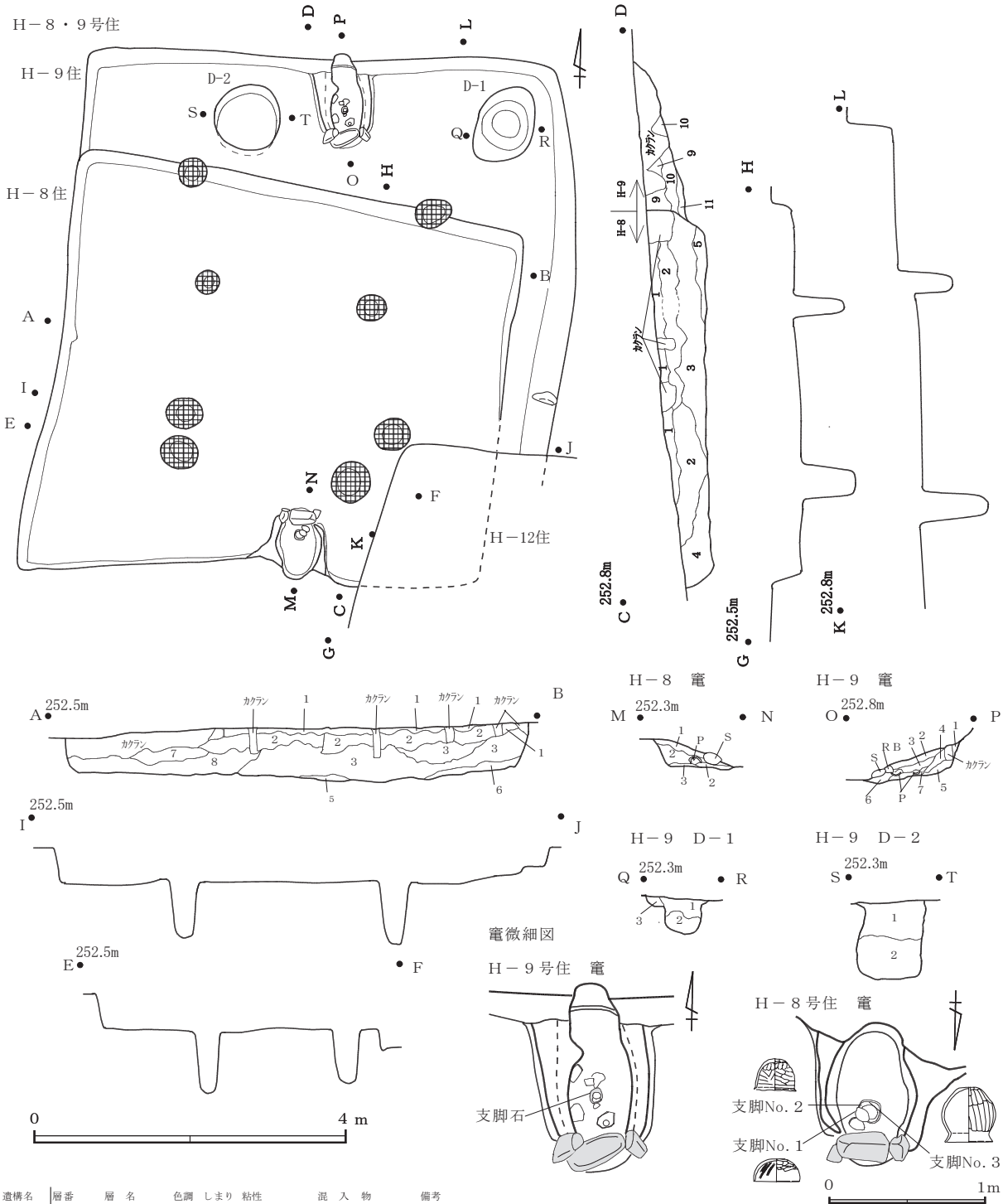
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－6	1	黒色土層10YR		○	○	×	×	×			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	※			埋め戻し
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	×	×	※			
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※			
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	△	△			
	4	褐色土層10YR	1＜4	◎	△	△	○	△			埋め戻し
	5	褐色土層10YR	5＜4	△	△	※	△	△			埋め戻し
	6	黄褐色土層10YR	5＜6	×	△	○	※	◎			

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－7	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※			
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	○	△	○	※	※	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	1＜3	○	○	※	×	※	※	※	
	4	暗褐色土層10YR	4＜1	○	○	×	×	※			
炉	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※			
	2	褐色土層10YR	1＜2	△	○	※	※	○			
	3	黒褐色土層10YR	3＜2	△	○	×	×	×			
	4	褐色土層7.5YR	1＜4	△	△	△	×	※	×	※	
	5	褐色土層10YR	1＜5	○	○	△	×	※			
	6	赤褐色土層5YR	1＜6	◎	△	※	×	×	×	△	
	7	暗褐色土層10YR	1＜7	◎	○	※	×	×			

土器分布



第22図 H－6号・H－7号・H－27号住居址実測図（2）

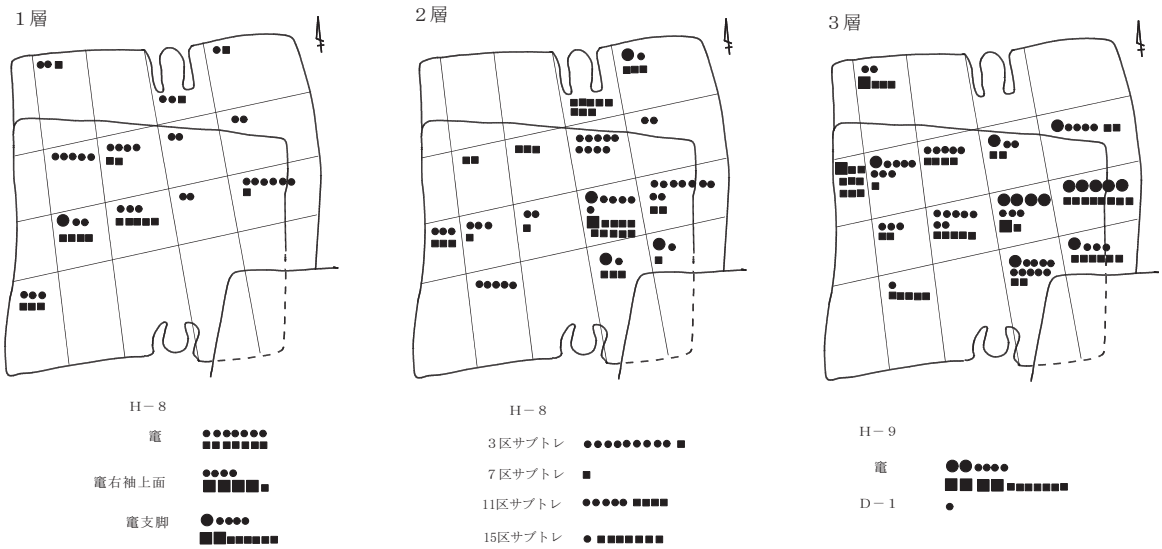


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－8	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	×			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	△	※	※		
	4	暗褐色土層7.5YR	2＜4	○	○	※	×	※	※	※	竈
	5	褐色土層10YR	3＜5	○	○	△	×	※			
	6	褐色土層7.5YR	3＜6	○	○	△	×	※	※	※	
	7	黒褐色土層10YR	7＜2	○	○	×	×	×			
	8	暗褐色土層10YR	3＜8	○	○	※	※	※			
H－9	9	黒褐色土層10YR	1＜9	○	○	※	×	×	※		H-9住竈
	10	暗褐色土層10YR	9＜10	○	○	※	×	※	※	※	H-9住竈
	11	褐色土層10YR	10＜11	○	○	△	※	※	※		H-9住竈
H－8竈	1	黒褐色土層7.5YR		○	○	※	×	×	※		
	2	暗褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	※	×	×	※	※	
	3	黒褐色土層7.5YR	3＜2	○	○	×	×	×	※	×	

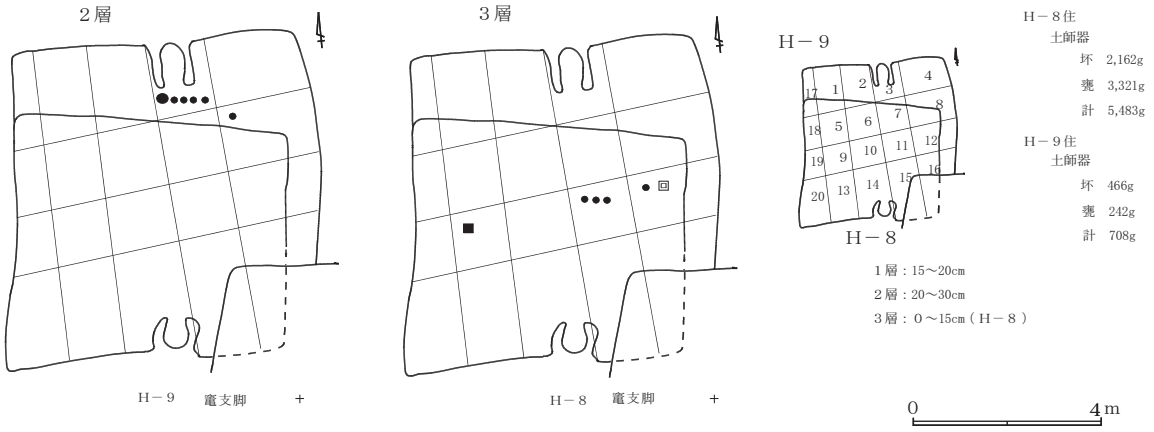
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－9竈	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	×	×	×	※	※	
	2	暗褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	※	×	※	※	※	
	3	暗褐色土層7.5YR	2＜3	○	○	※	※	※	※	※	
	4	赤褐色土層5YR	3＜4	△	△	※	×	※	※	○	
	5	暗褐色土層7.5YR	5＜4	○	○	×	×	×	※	×	
	6	明赤褐色土層5YR	3＜6	△	△	△	※	※	※	△	
	7	暗赤褐色土層5YR	7＜4	△	△	※	×	※	※	△	
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	※	
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	×	×	×	
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	※	×	×	
D－2	1	黄褐色土層10YR		△	○	○	○	○			埋め戻し
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	△	○	◎	○	◎			埋め戻し

第23図　H－8号・H－9号住居址実測図（1）

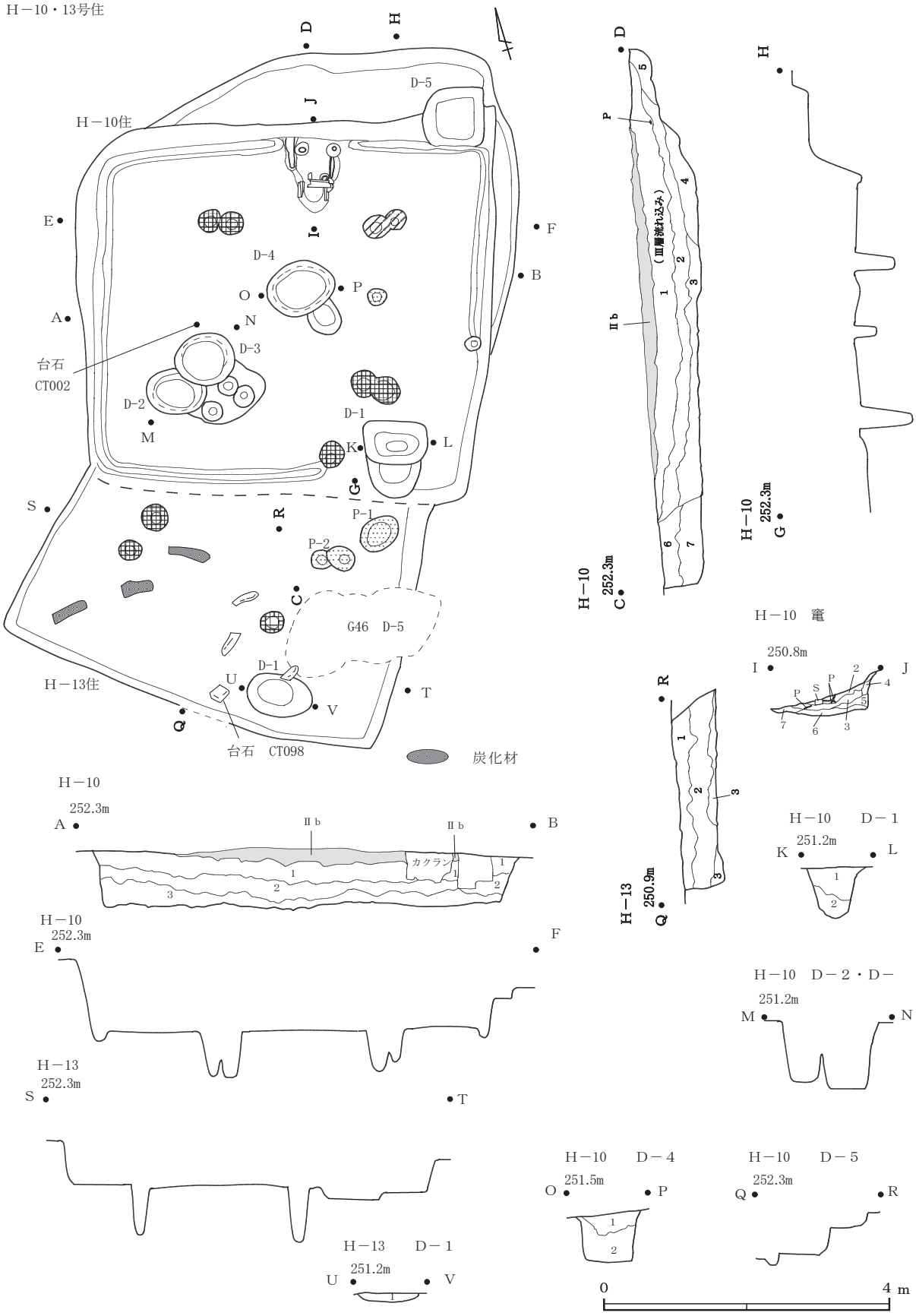
土器分布



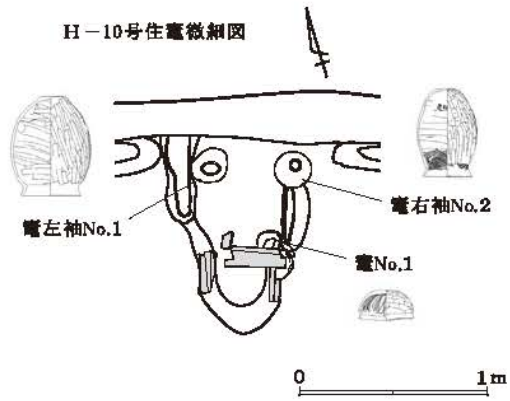
石器分布



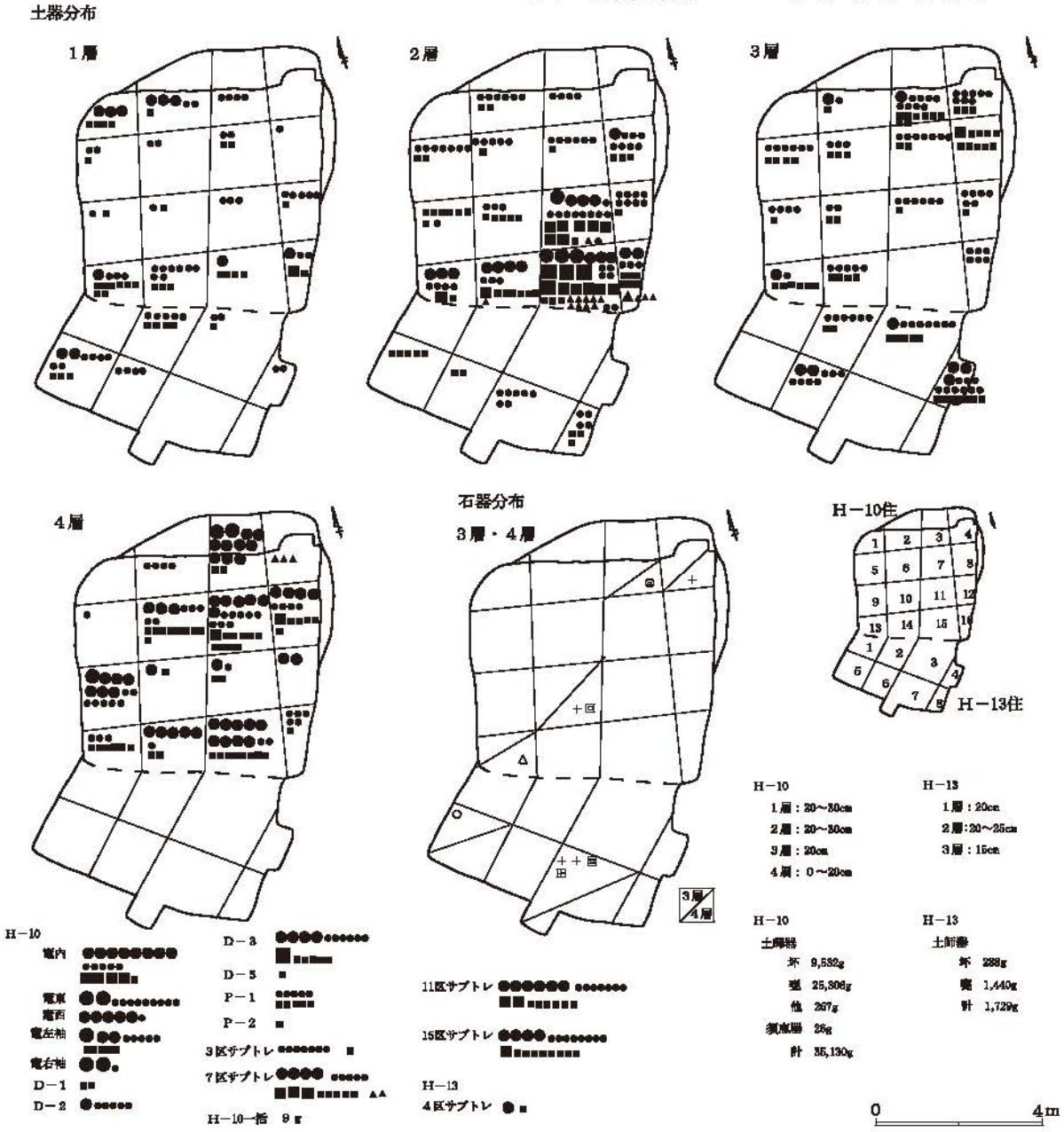
第24図　H－8号・H－9号住居址実測図（2）



第25図　H－10号・H－13号住居址実測図（1）

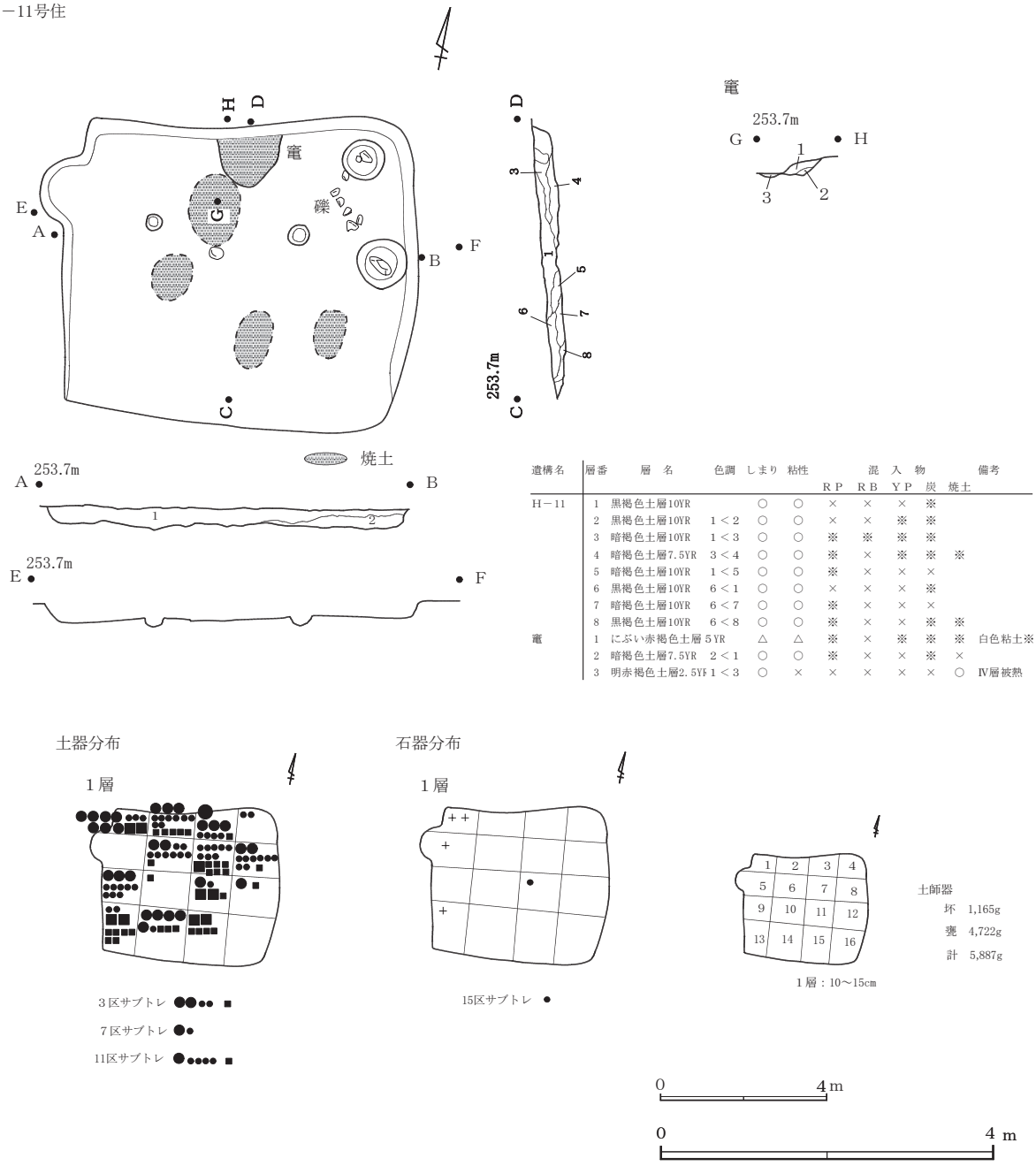


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RH	YP	炭	焼土	備考
H－10	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	×			
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	△	※	※	※		
	4	褐色土層10YR	3＜4	○	○	△	※	※	※		
	5	褐色土層10YR	3＜6	○	○	△	×	×			
	6	黒褐色土層10YR	1＜6	○	○	×	×	×			
	7	暗褐色土層10YR	6＜7	○	○	※	※	※	※	※	別住層
竈	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	×	住居覆土
	2	褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	△	×	×	※	×	
	3	黄褐色土層7.5YR	2＜3	○	○	◎	×	※	※	※	
	4	褐色土層7.5YR	4＜3	○	○	※	×	×	※	×	
	5	明褐色土層7.5YR	5＜3	○	○	○	×	※	※	※	
	6	褐色土層7.5YR	6＜5	○	○	△	×	※	※	※	
	7	褐色土層7.5YR	3＜7	○	○	※	×	※	※	※	
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※	×	×	
D－4	1	褐色土層10YR		△	○	△	△	※	×	×	
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	△	○	○	△	△	×	×	
H－13	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	×	南北セ
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※	※	×	南北セ
	3	黒褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	×	※	※	※	南北セ
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	※	※	×	×	



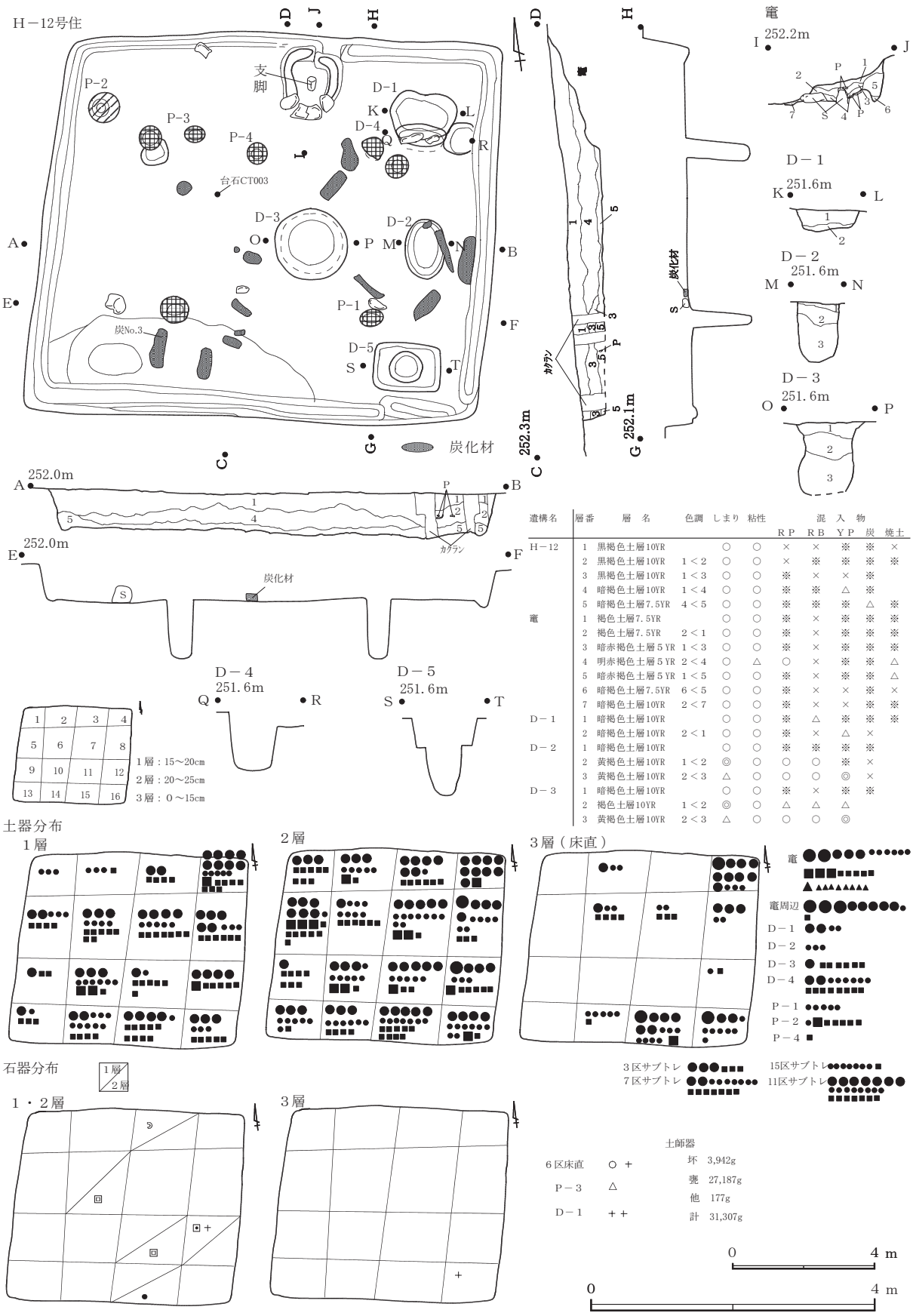
第26図　H－10号・H－13号住居址実測図（2）

H－11号住



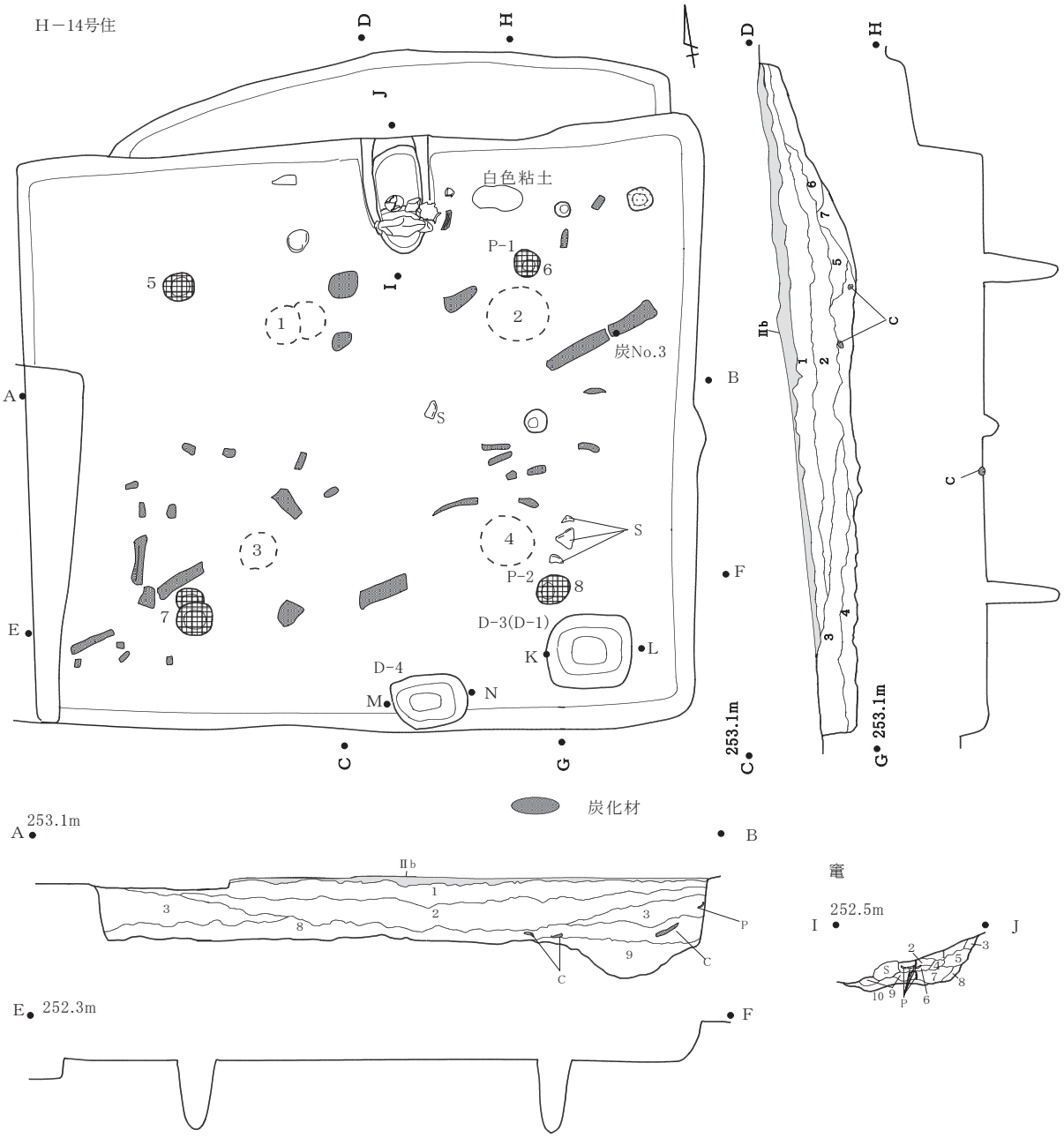
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－11	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	※		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	※	※		
	3	暗褐色土層10YR	1＜3	○	○	※	※	※	※		
	4	暗褐色土層7.5YR	3＜4	○	○	※	×	※	※	※	
	5	暗褐色土層10YR	1＜5	○	○	※	×	×	×		
	6	黒褐色土層10YR	6＜1	○	○	×	×	×	※		
	7	暗褐色土層10YR	6＜7	○	○	※	×	×	×		
	8	黒褐色土層10YR	6＜8	○	○	※	×	×	※	※	
竈	1	にぶい赤褐色土層5YR		△	△	※	×	※	※	※	白色粘土※
	2	暗褐色土層7.5YR	2＜1	○	○	※	×	×	※	×	
	3	明赤褐色土層2.5YR	1＜3	○	×	×	×	×	×	○	Ⅳ層被熱

第27図　H－11号住居址実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－12	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※	※	×
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	※	※	※	※
	3	黒褐色土層10YR	1＜3	○	○	※	×	×	※	
	4	暗褐色土層10YR	1＜4	○	○	※	※	△	※	
	5	暗褐色土層7.5YR	4＜5	○	○	※	※	※	△	※
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	※	×	※	※	※
	2	褐色土層7.5YR	2＜1	○	○	※	×	※	※	※
	3	暗赤褐色土層5YR	1＜3	○	○	※	×	※	※	※
	4	明赤褐色土層5YR	2＜4	○	△	○	×	※	※	△
	5	暗赤褐色土層5YR	1＜5	○	○	※	×	※	※	△
	6	暗褐色土層7.5YR	6＜5	○	○	※	×	×	※	×
	7	暗褐色土層10YR	2＜7	○	○	※	×	×	※	※
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	△	※	※	※
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	×	△	×	
D－2	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	※	※	
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	◎	○	○	○	※	×	
	3	黄褐色土層10YR	2＜3	△	○	○	○	◎	×	
D－3	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※	※	
	2	褐色土層10YR	1＜2	◎	○	△	△	△		
	3	黄褐色土層10YR	2＜3	△	○	○	○	◎		

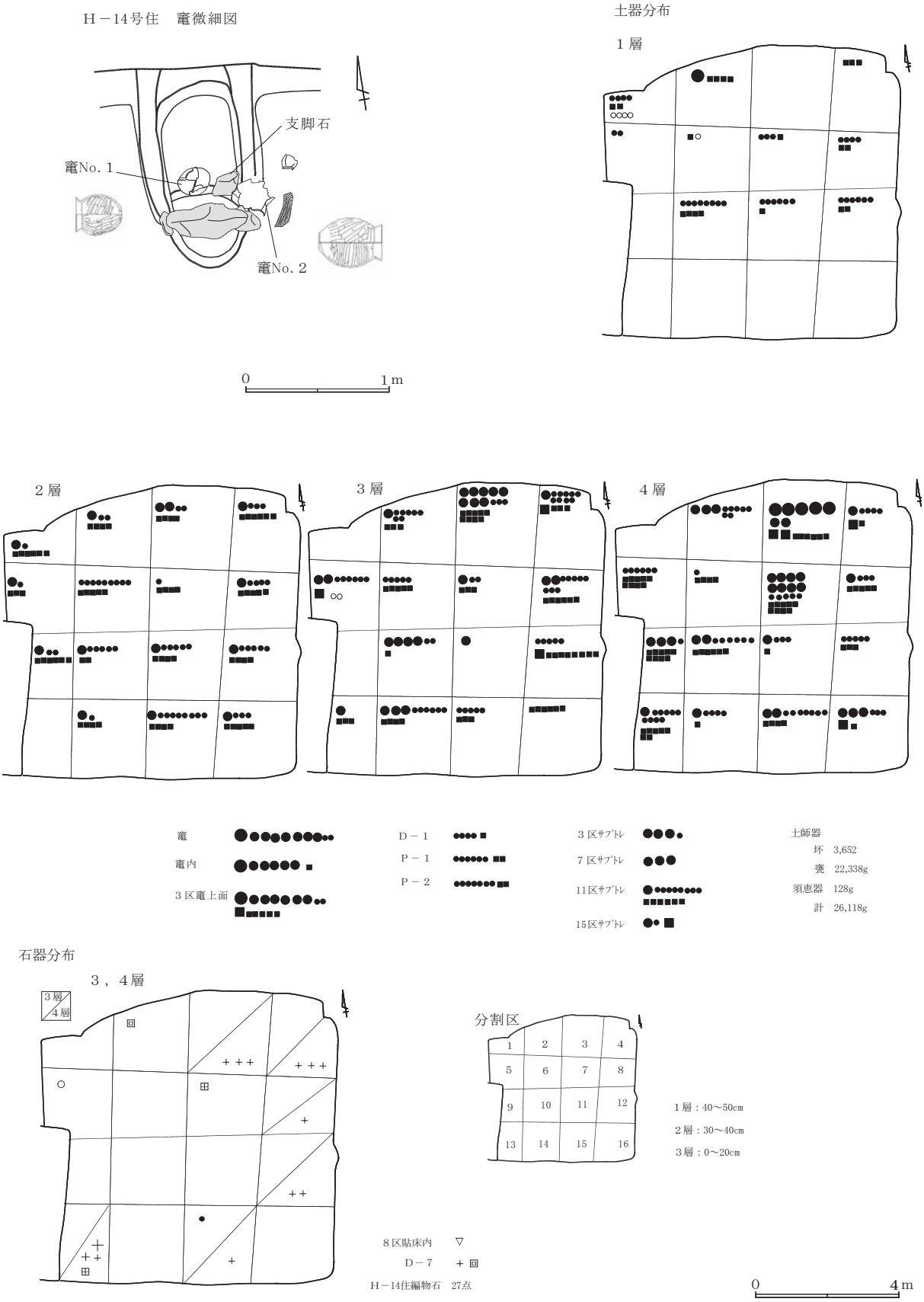
第28図　H－12号住居址実測図



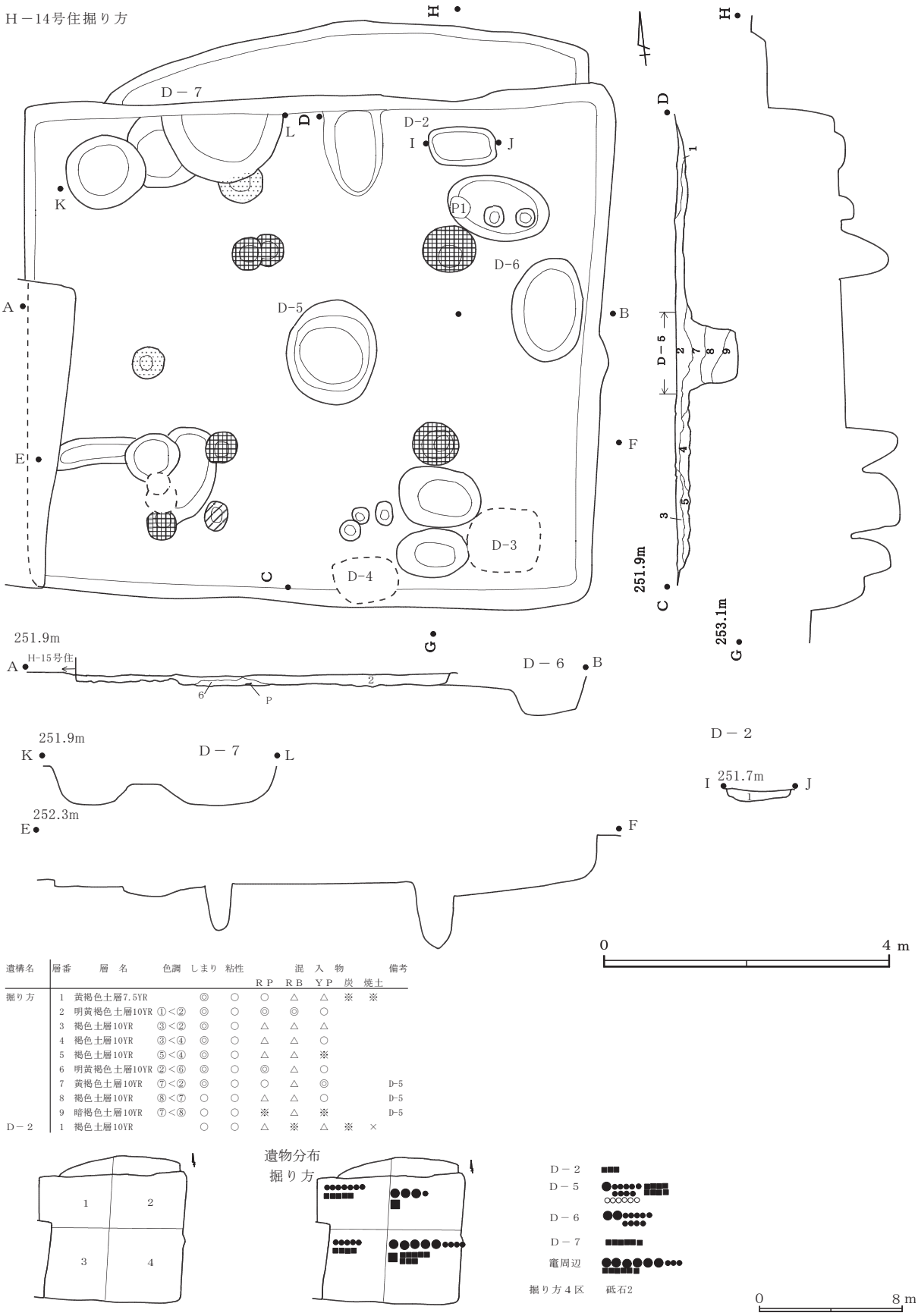
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－14	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	×	Ⅲ層
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	※	※	※	
	4	暗褐色土層7.5YR	3＜4	○	○	※	×	※	△	※	
	5	暗褐色土層10YR	2＜5	○	○	※	×	※	※	※	
	6	褐色土層7.5YR	2＜6	○	○	※	※	※	※	※	竈土
	7	暗褐色土層7.5YR	5＜7	○	○	※	×	※	※	※	竈土
	8	褐色土層7.5YR	2＜8	○	○	△	×	△	○	※	
	9	明褐色土層10YR	8＜9	◎	○	△	×	○	×	×	床下土坑

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	△	×	※	※	※
	2	褐色土層7.5YR	2＜1	○	○	△	×	※	※	※
	3	褐色土層7.5YR	1＜3	○	○	△	×	※	※	※
	4	にぶい赤褐色土層	2＜4	○	△	△	×	※	※	△
	5	赤褐色土層5YR	4＜5	○	△	△	×	※	×	△
	6	赤褐色土層5YR	4＜6	○	○	※	×	×	※	△
	7	明赤褐色土層2.5YR	4＜7	○	△	△	×	※	※	○
	8	明赤褐色土層5YR	8＜7	○	○	○	×	※	×	△
	9	赤褐色土層5YR	2＜9	○	○	○	×	※	※	△
	10	赤褐色土層5YR	9＜10	○	○	○	×	※	※	△
D－3	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	△	※	
（D－1）	2	褐色土層10YR		○	○	△	△	△		
	3	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	※	※		
	4	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	※		
	5	褐色土層10YR	3＜4	○	○	△	△	△		
D－4	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	※	△	※	

第29図　H－14号住居址実測図（1）

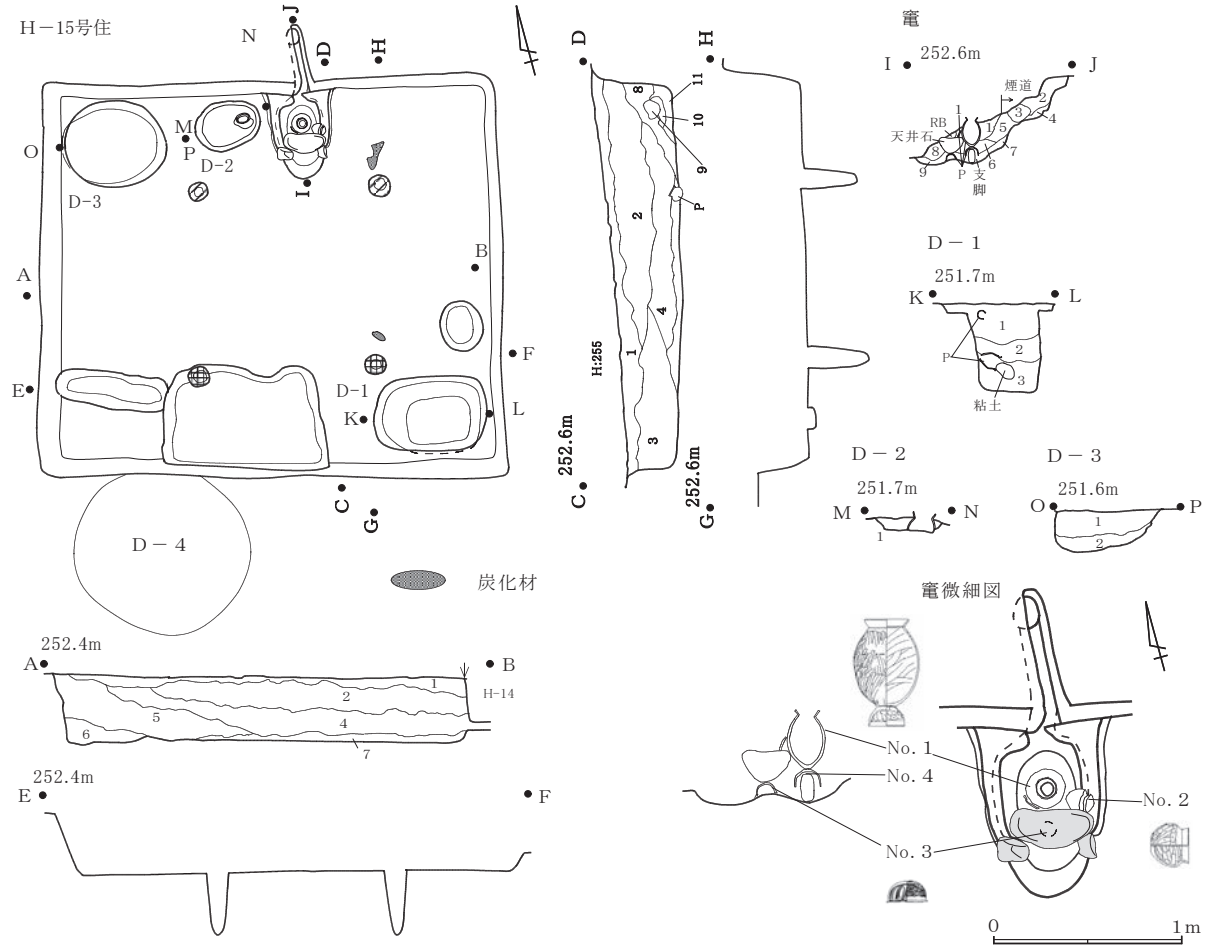


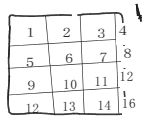
第30図　H－14号住居址実測図（2）



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
掘り方	1	黄褐色土層7.5YR		◎	○	○	△	△	※	※	
	2	明黄褐色土層10YR	①＜②	◎	○	◎	◎	○			
	3	褐色土層10YR	③＜②	◎	○	△	△	△			
	4	褐色土層10YR	③＜④	◎	○	△	△	○			
	5	褐色土層10YR	⑤＜④	◎	○	△	△	※			
	6	明黄褐色土層10YR	②＜⑥	◎	○	◎	△	○			
	7	黄褐色土層10YR	⑦＜②	◎	○	○	△	◎			D-5
	8	褐色土層10YR	⑧＜⑦	○	○	△	△	○			D-5
	9	暗褐色土層10YR	⑦＜⑧	○	○	※	△	※			D-5
D－2	1	褐色土層10YR		○	○	△	※	△	※	×	

第31図　Ｈ－14号住居址実測図（３）

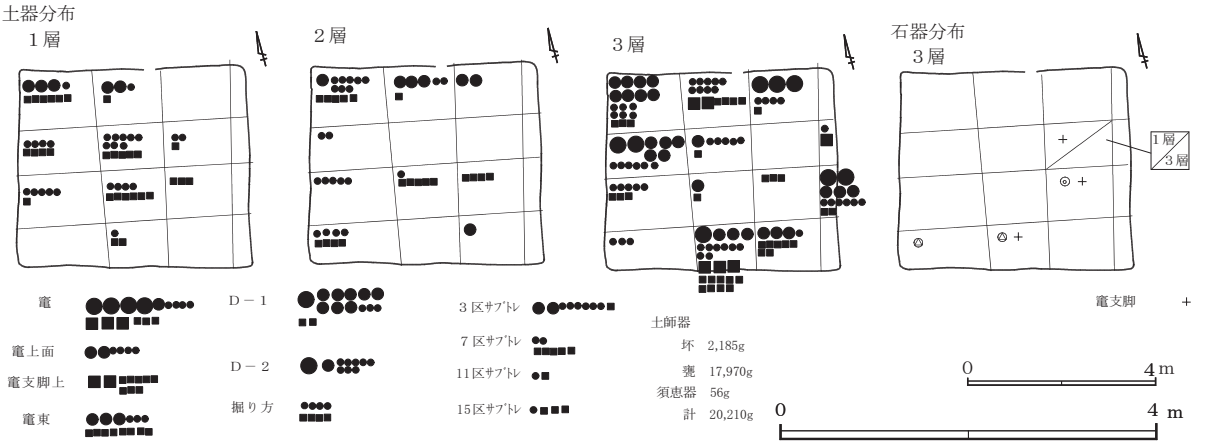




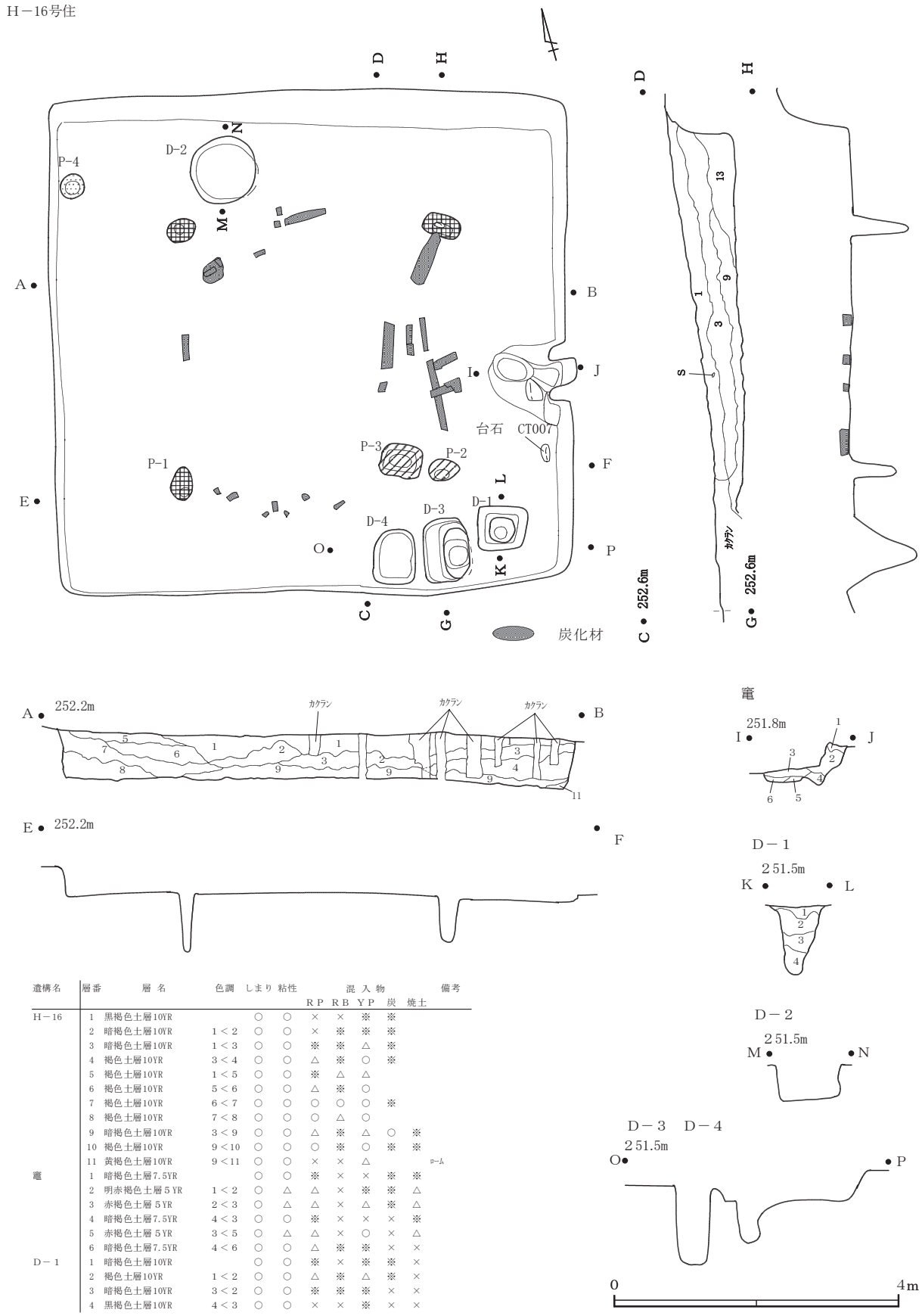
1層:40cm
2層:30～40cm
3層：0～20cm

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－15	1	暗褐色土層10YR		○	○	×	×	△		
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	○	○	※	
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	○	※	○	※	
	4	褐色土層10YR	2＜4	○	○	○	○	○	※	
	5	褐色土層10YR	5＜4	○	○	○	△	○	※	
	6	褐色土層10YR	6＜5	○	○	△	※	△	※	
	7	暗褐色土層10YR	7＜4	○	○	△	※	△	○	※
	8	褐色土層10YR	8＜4	○	○	△	※	△	※	※
	9	黒褐色土層10YR	9＜8	○	○	×	×	×	※	
	10	黄褐色土層10YR	9＜10	△	○	◎	×	×	×	×
	11	褐色土層7.5YR	8＜11	○	○	△	×	※	※	※

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
竈	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	※	×	※	※	※
	2	暗赤褐色土層5YR	2＜1	○	○	※	×	※	※	※
	3	赤褐色土層5YR	2＜3	○	△	△	×	×	※	△
	4	黒褐色土層5YR	4＜3	○	○	×	×	×	※	※
	5	明赤褐色土層5YR	3＜5	○	△	○	×	※	※	△
	6	褐色土層7.5YR	6＜5	○	○	○	×	×	×	※
	7	暗赤褐色土層5YR	6＜7	○	○	※	×	×	×	△
	8	黒褐色土層7.5YR	8＜1	○	△	×	×	※	※	※
	9	暗赤褐色土層5YR	8＜9	○	○	△	×	※	※	△
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	△	※	
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	×	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	×	※		
D－2	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	△	※	
D－3	1	黄褐色土層10YR		○	○	○	○	◎		
	2	褐色土層10YR	2＜1	○	○	△	○	○	※	※



第32図　H－15号住居址実測図

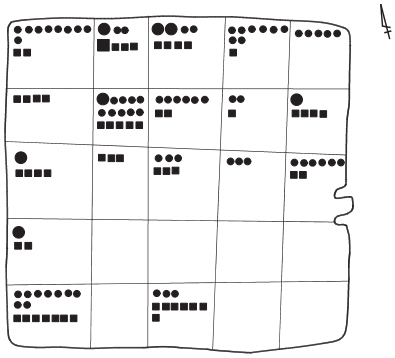


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－16	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	※	※	※		
	3	暗褐色土層10YR	1＜3	○	○	※	※	△	※		
	4	褐色土層10YR	3＜4	○	○	△	※	○	※		
	5	褐色土層10YR	1＜5	○	○	※	△	△			
	6	褐色土層10YR	5＜6	○	○	△	※	○			
	7	褐色土層10YR	6＜7	○	○	○	○	○	※		
	8	褐色土層10YR	7＜8	○	○	○	△	○			
	9	暗褐色土層10YR	3＜9	○	○	△	※	△	○	※	
	10	褐色土層10YR	9＜10	○	○	○	※	○	※	※	
	11	黄褐色土層10YR	9＜11	○	○	×	×	△			ローム
竈	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	※	×	×	※	※	
	2	明赤褐色土層5YR	1＜2	○	△	△	×	※	※	△	
	3	赤褐色土層5YR	2＜3	○	△	△	×	△	※	△	
	4	暗褐色土層7.5YR	4＜3	○	○	※	×	×	×	※	
	5	赤褐色土層5YR	3＜5	○	△	△	×	○	×	△	
	6	暗褐色土層7.5YR	4＜6	○	○	△	※	※	×	×	
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※	※	×	
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	※	△	※	×	
	3	暗褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	※	※	×	×	
	4	黒褐色土層10YR	4＜3	○	○	×	×	※	×	×	

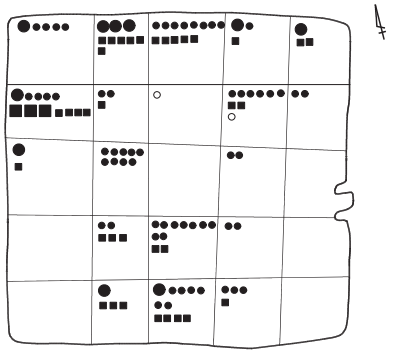
第33図　H－16号住居址実測図（1）

土器分布

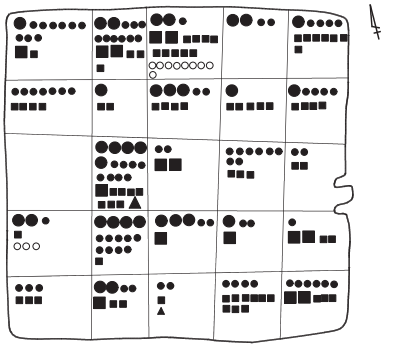
1層



2層

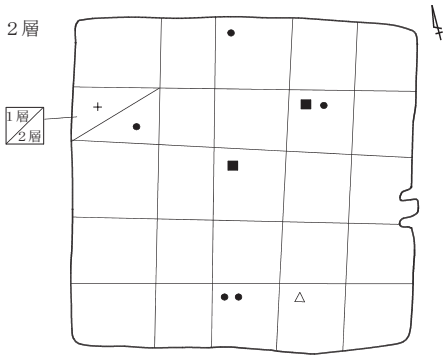


3層

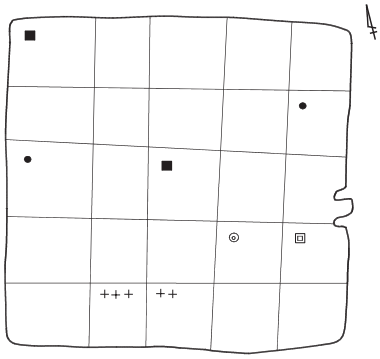


石器分布

2層



3層



15区サブトレ　△

21	1	2	3	4
22	5	6	7	8
23	9	10	11	12
24	13	14	15	16
25	17	18	19	20

1層：30～50cm
2層：30～40cm
3層：0～20cm

土師器

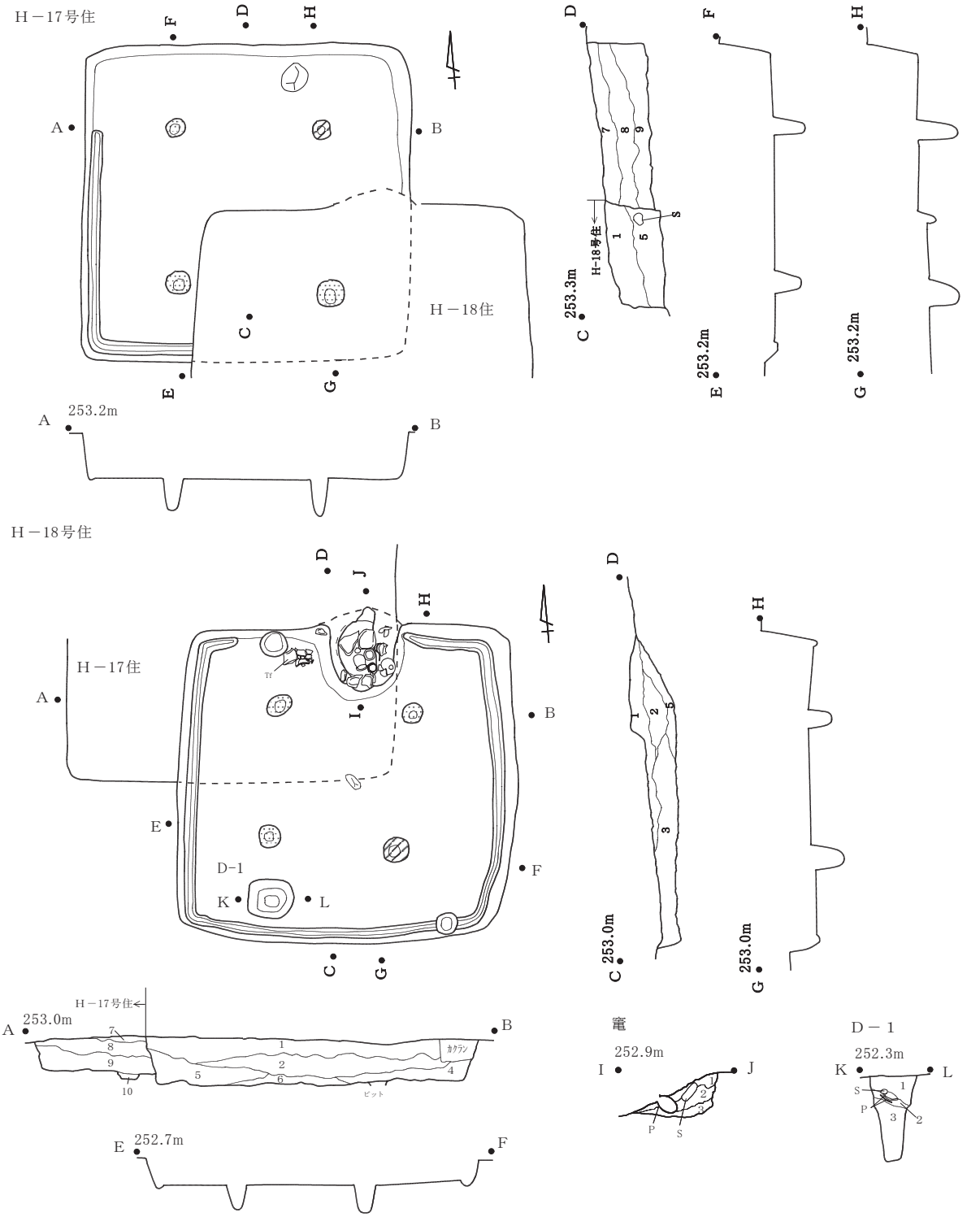
坏	3,705g
甕	7,899g
他	120g
須恵器	122g
計	11,846g

カマド内
P－1
P－2
P－3
D－1
D－2
D－4

3区サブトレ
7区サブトレ
11区サブトレ
15区サブトレ
一括

0　4m

第34図　H－16号住居址実測図（2）

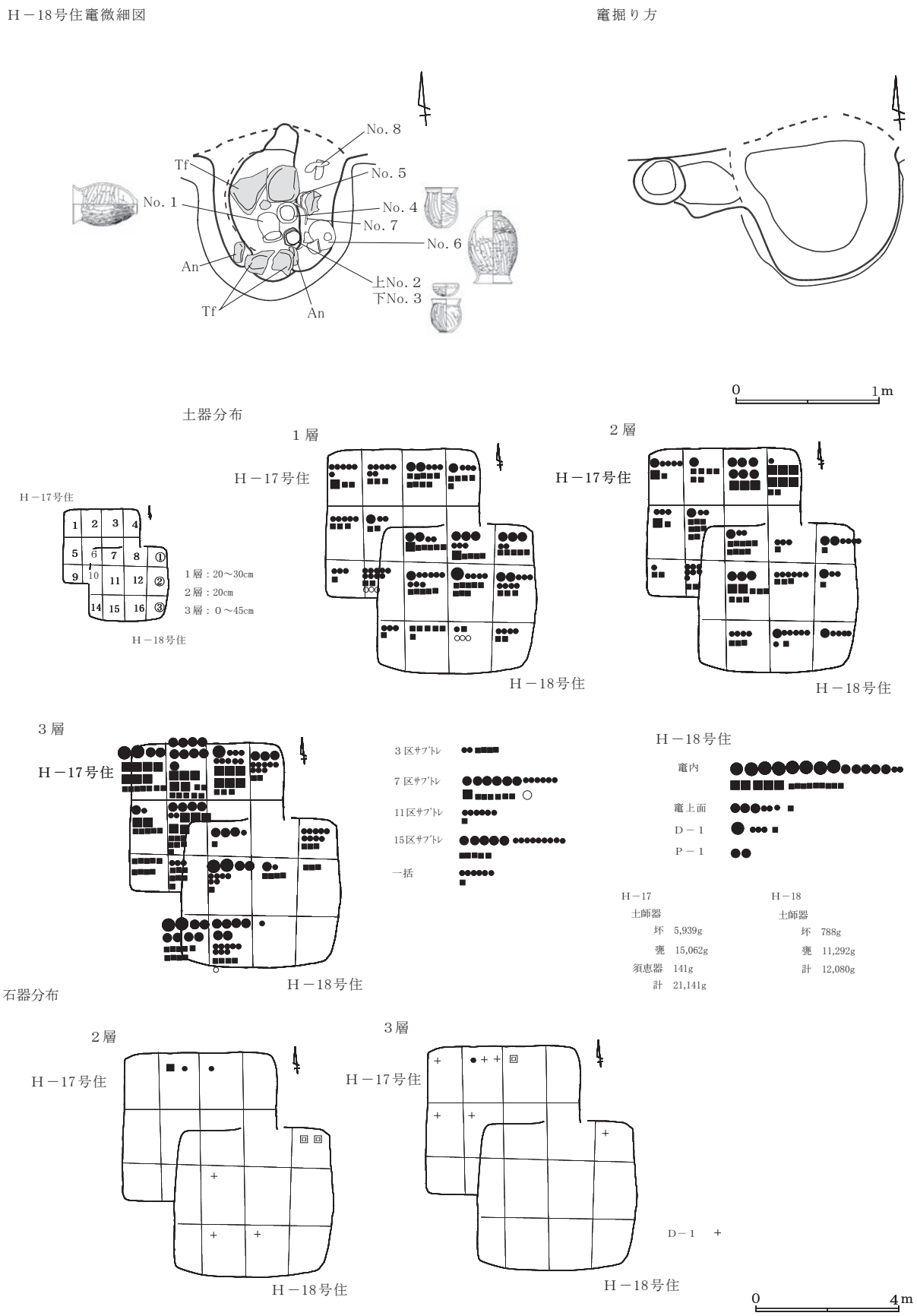


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－18	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※	×	×	
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	△	△	○	※	×	
	4	暗褐色土層10YR	4＜2	○	○	※	×	※	※	×	
	5	暗褐色土層10YR	1＜5	○	○	※	×	※	※	×	
	6	褐色土層10YR	2＜6	○	○	△	×	※	※	×	竈土
	7	黒褐色土層10YR	7＜1	○	○	×	×	×	×	×	H－17号住
	8	黒褐色土層10YR	7＜8	○	○	※	×	※	※	×	H－17号住
	9	暗褐色土層10YR	8＜9	○	○	※	×	※	※	×	H－17号住

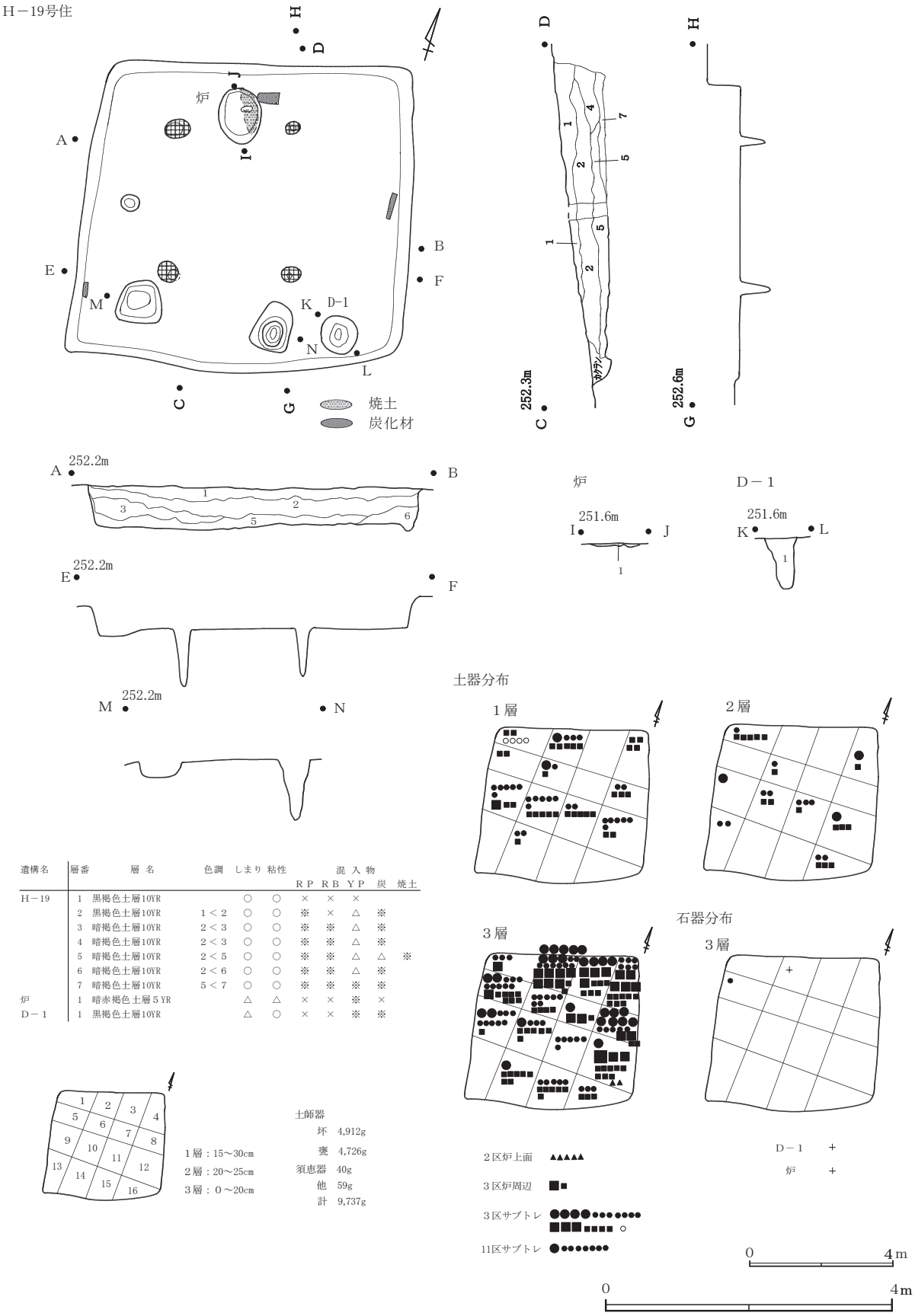
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
竈	1	明褐色土層7.5YR		◎	△	○	×	※			
	2	赤褐色土層 5YR	2＜1	○	○	△	×	×	※	△	
	3	赤褐色土層 5YR	2＜3	○	△	△	×	×	※	△	
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	×	※			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	※	×		

0　4 m

第35図　H－17号・H－18号住居址実測図（1）



第36図　H－17号・H－18号住居址実測図（2）

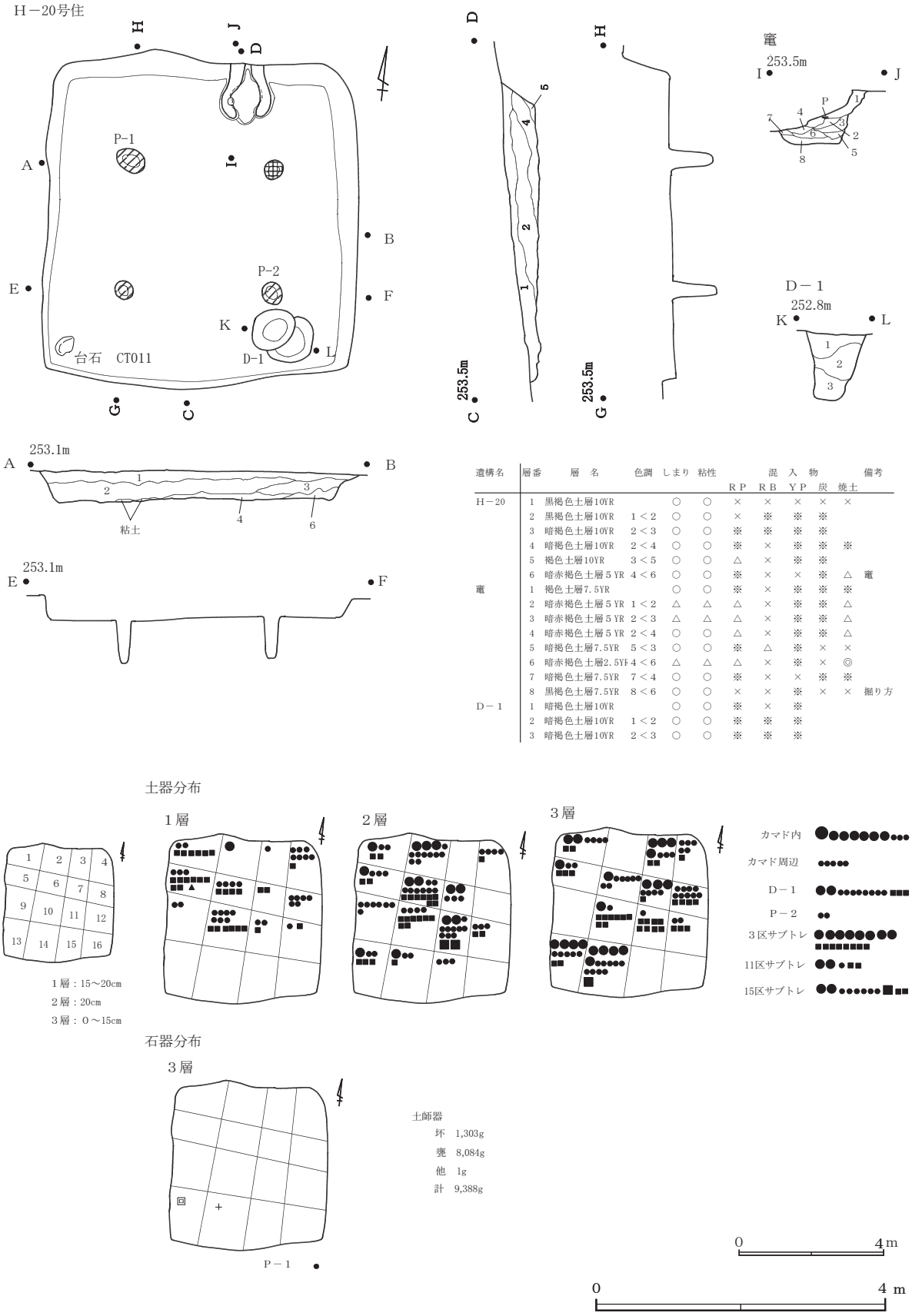


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－19	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	△	※	
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	△	※	
	4	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	△	※	
	5	暗褐色土層10YR	2＜5	○	○	※	※	△	△	※
	6	暗褐色土層10YR	2＜6	○	○	※	※	△	※	
	7	暗褐色土層10YR	5＜7	○	○	※	※	※	※	
炉	1	暗赤褐色土層5YR		△	△	×	×	※	×	
D－1	1	黒褐色土層10YR		△	○	×	×	※	※	

1層：15～30cm
2層：20～25cm
3層：0～20cm

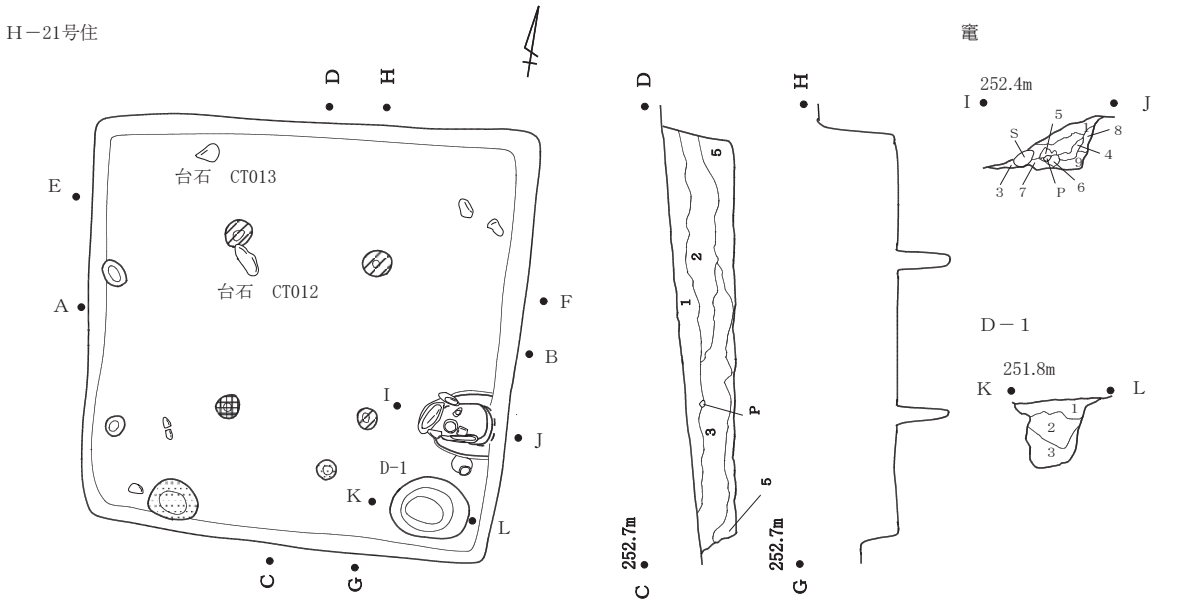
土師器
坏 4,912g
甕 4,726g
須恵器 40g
他 59g
計 9,737g

第37図　H－19号住居址実測図

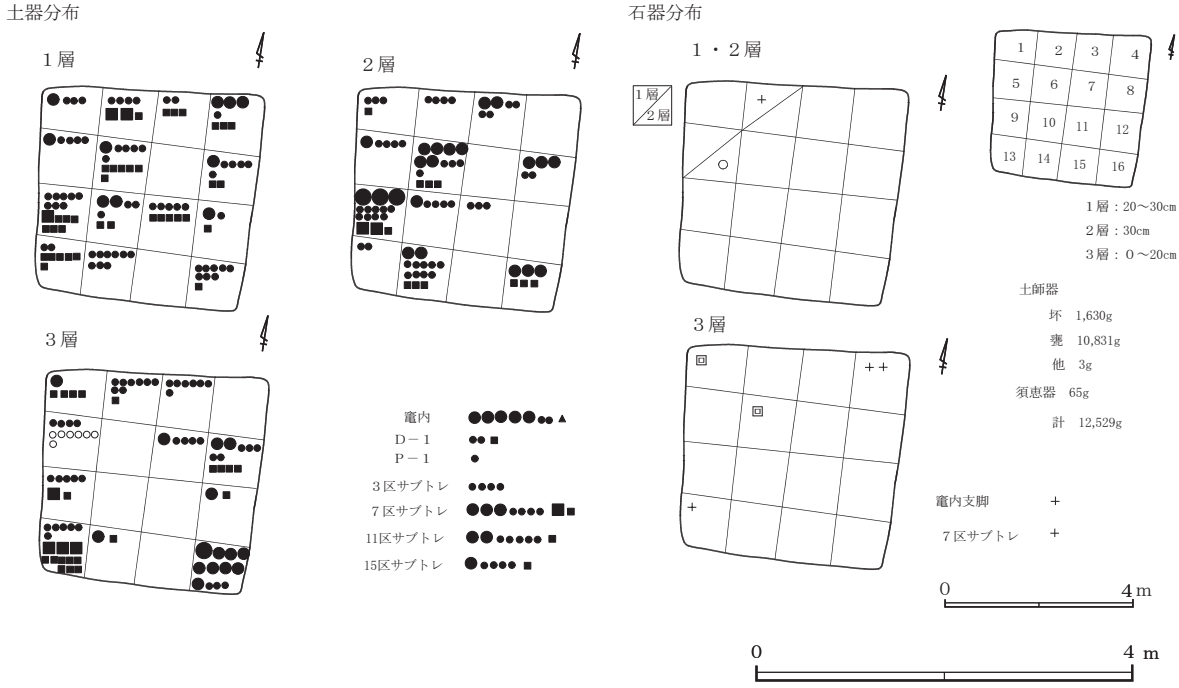


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－20	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	×	
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	※	※	※		
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	※	※		
	4	暗褐色土層10YR	2＜4	○	○	※	×	※	※	※	
	5	褐色土層10YR	3＜5	○	○	△	×	※	※		
	6	暗赤褐色土層5YR	4＜6	○	○	※	×	×	※	△	竈
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	※	×	※	※	※	
	2	暗赤褐色土層5YR	1＜2	△	△	△	×	※	※	△	
	3	暗赤褐色土層5YR	2＜3	△	△	△	×	※	※	△	
	4	暗赤褐色土層5YR	2＜4	○	○	△	×	※	※	△	
	5	暗褐色土層7.5YR	5＜3	○	○	※	△	※	×	×	
	6	暗赤褐色土層2.5YR	4＜6	△	△	△	×	※	×	◎	
	7	暗褐色土層7.5YR	7＜4	○	○	※	×	×	※	※	
	8	黒褐色土層7.5YR	8＜6	○	○	×	×	※	×	×	掘り方
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※			
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	※			

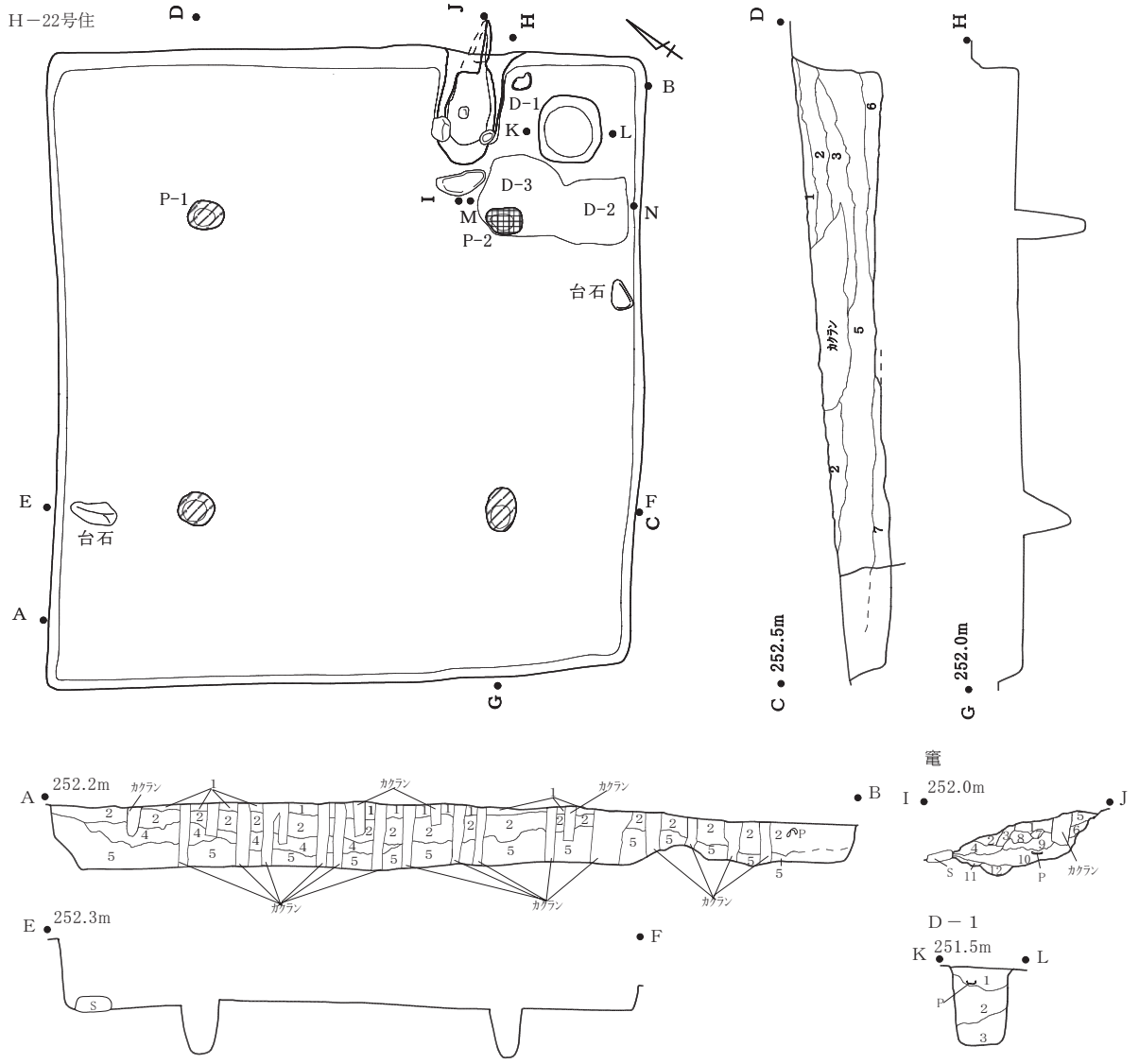
第38図　H－20号住居址実測図



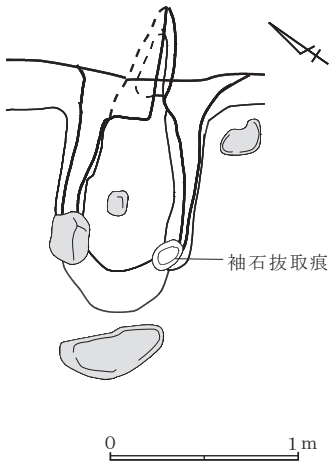
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－21	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※	※	
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※	※	
	3	褐色土層10YR	1＜3	○	○	△	△	△	※	
	4	褐色土層10YR	1＜4	○	○	△	※	△	※	※
	5	暗褐色土層10YR	5＜2	○	○	※	※	※	○	
竈	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※	※	×
	2	暗褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	※	×	※	※	
	3	暗褐色土層7.5YR	2＜3	○	○	※	※	※	※	
	4	赤褐色土層5YR	2＜4	△	△	△	×	※	※	△
	5	黄褐色土層10YR	2＜5	○	△	○	×	×	×	×
	6	暗赤褐色土層5YR	6＜4	○	○	△	×	×	×	※
	7	赤褐色土層5YR	6＜7	○	△	△	×	※	×	△
	8	暗赤褐色土層5YR	8＜4	○	○	※	×	×	※	※
	9	暗赤褐色土層5YR	9＜8	○	○	※	×	※	※	※
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	×	※	×
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※	※	×
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	※	×	×



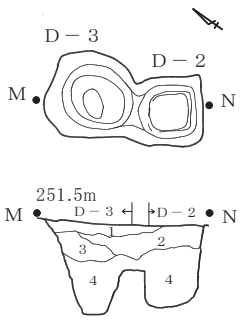
第39図　H－21号住居址実測図



竈微細図



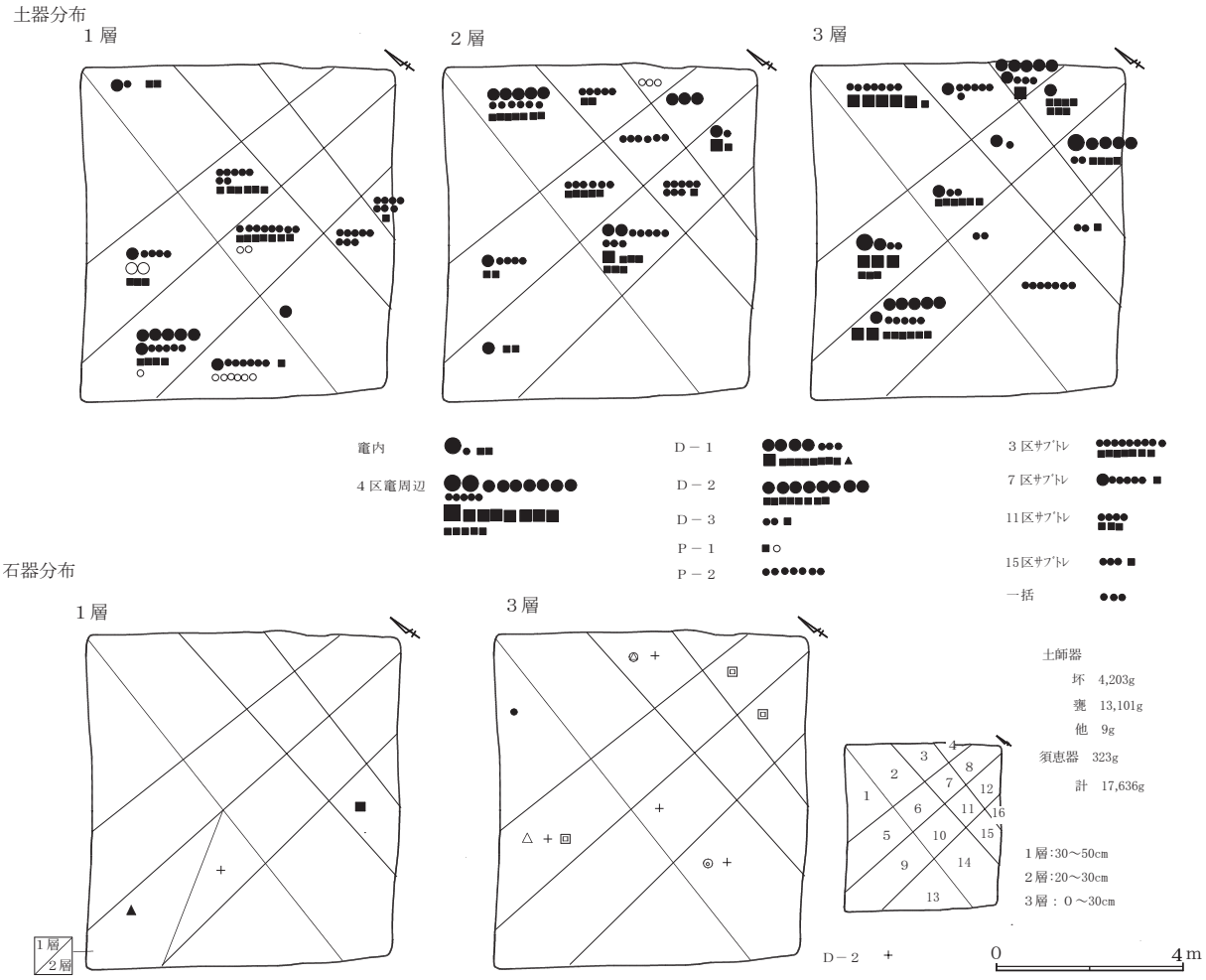
掘り方土坑



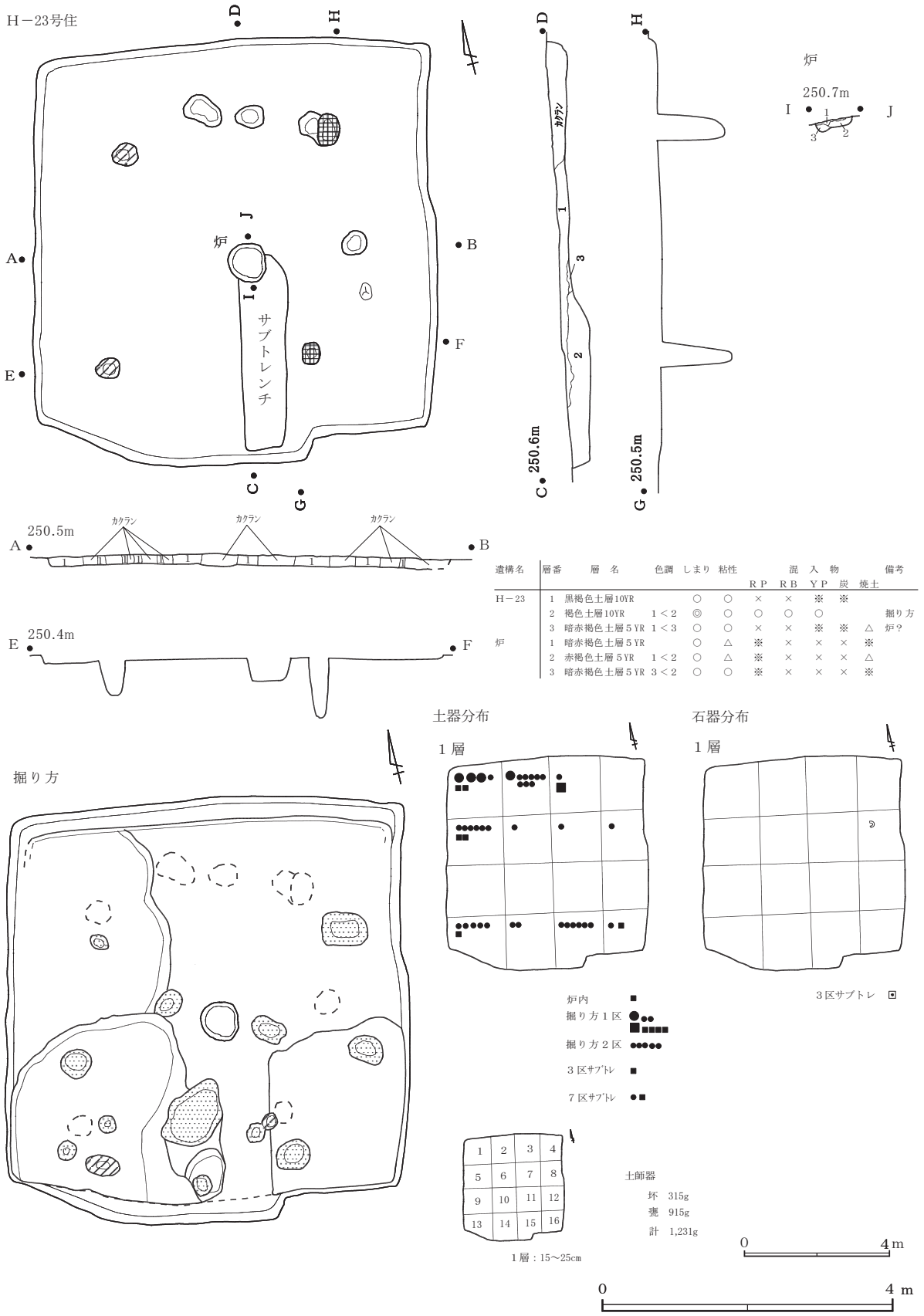
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－22	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	※		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	※			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	△	△	※		
	4	暗褐色土層10YR	2＜4	○	○	※	※	△	※		
	5	褐色土層10YR	3＜5	○	○	△	△	△	※		
	6	褐色土層10YR	5＜6	○	○	△	※	△	※		
	7	黄褐色土層10YR	5＜7	◎	△	○	◎	○			貼床
竈	1	褐色土層10YR		○	○	△	×	※	×	※	
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	×	※	×	※	
	3	褐色土層10YR	3＜1	○	○	△	×	※	×	※	
	4	暗褐色土層7.5YR	4＜2	△	○	※	×	※	※	※	
	5	暗赤褐色土層5YR	1＜5	○	○	△	×	※	×	△	
	6	暗赤褐色土層5YR	6＜5	○	○	△	×	×	※	△	
	7	褐色土層10YR	1＜7	○	○	△	×	※	×	×	
	8	褐色土層10YR	8＜1	○	○	△	×	※	×	×	
	9	黄褐色土層10YR	1＜9	○	△	◎	×	※	×	※	
	10	赤褐色土層5YR	4＜10	△	△	△	×	※	※	○	
	11	黒褐色土層7.5YR	11＜10	×	△	△	×	×	×	※	
	12	暗褐色土層7.5YR	12＜10	△	△	※	×	※	×	※	
D－1	1	褐色土層10YR		○	○	△	×	△	※	×	
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	△	△	×	×	
	3	黄褐色土層10YR	2＜3	○	○	○	△	※	×	×	
D－2	1	褐色土層10YR		◎	○	△	※	△			貼床
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	△	△	※		
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	×			D－3
	4	黒褐色土層10YR	3＜4	○	○	×	※	※			D－3

0　4 m

第40図　H－22号住居址実測図（1）

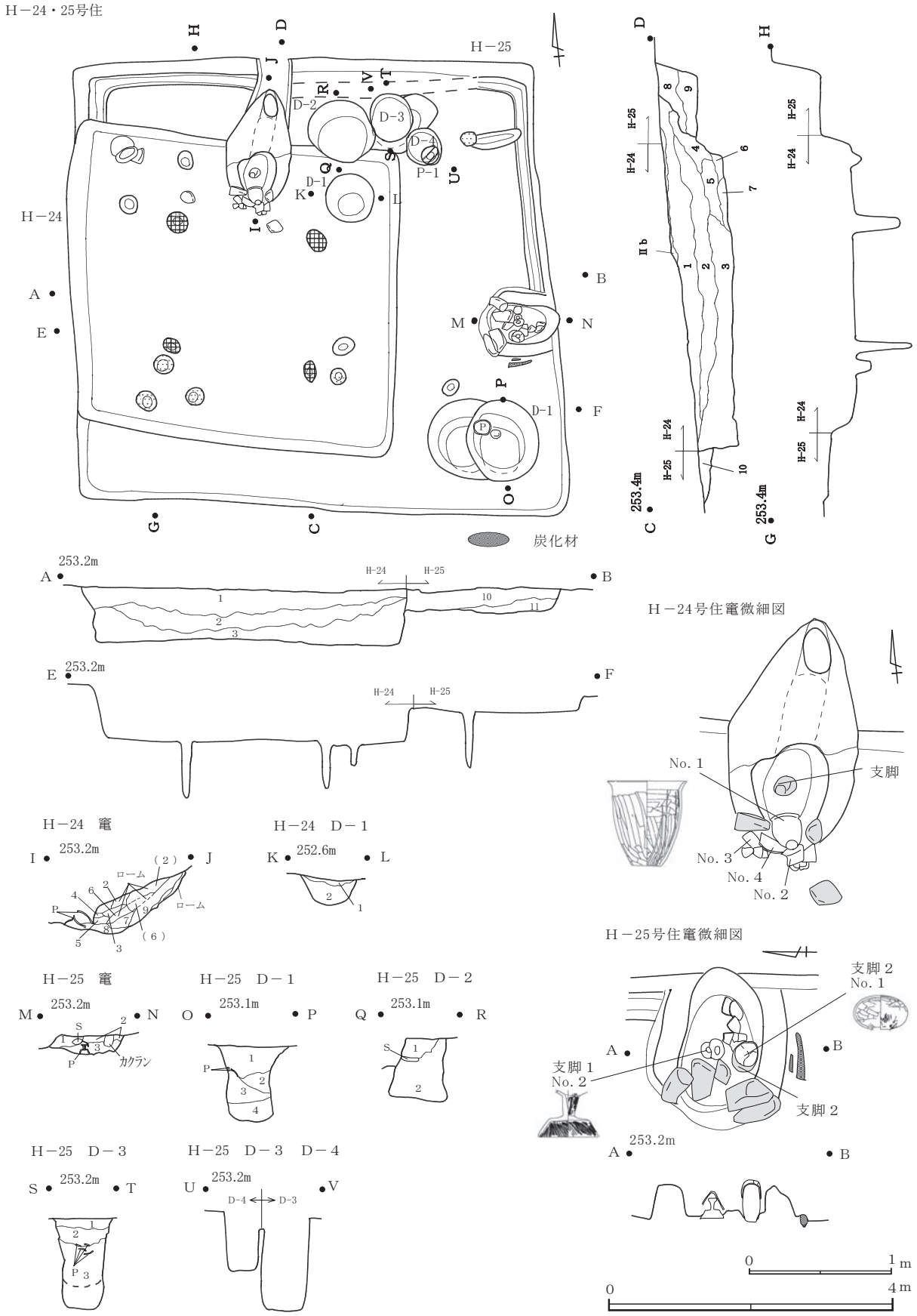


第41図　H－22号住居址実測図（2）



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－23	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※	※		
	2	褐色土層10YR	1＜2	◎	○	○	○	○			掘り方
	3	暗赤褐色土層5YR	1＜3	○	○	×	×	※	※	△	炉？
炉	1	暗赤褐色土層5YR		○	△	※	×	×	×	※	
	2	赤褐色土層5YR	1＜2	○	△	※	×	×	×	△	
	3	暗赤褐色土層5YR	3＜2	○	○	※	×	×	×	※	

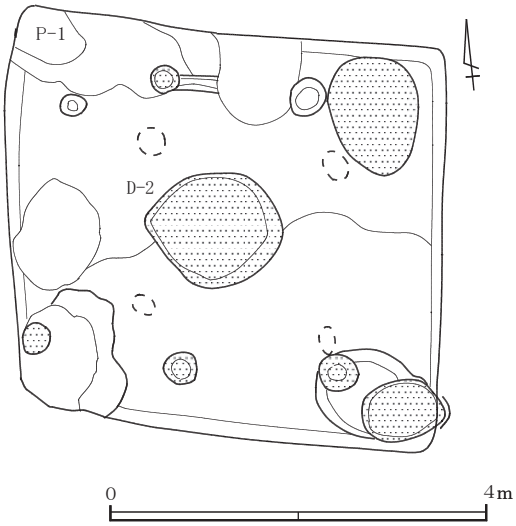
第42図　H－23号住居址実測図

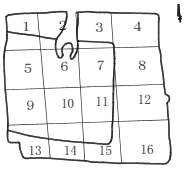


第43図　H－24号・H－25号住居址実測図（1）

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－24	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※			
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※	※		
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	△	△	○	※		
	4	黄褐色土層10YR	2＜4	○	○	◎	×	※	×	×	竈
	5	暗褐色土層7.5YR	2＜5	○	○	※	×	△	※	※	竈
	6	黄褐色土層7.5YR	5＜6	○	○	◎	×	※	※	※	竈
	7	暗赤褐色土層5YR	5＜7	○	△	※	×	※	※	○	竈
	8	暗褐色土層10YR	1＜8	○	○	※	×	※	※		H－25号住
	9	暗褐色土層10YR	8＜9	○	○	※	×	※	※		H－25号住
	10	暗褐色土層10YR	1＜10	○	○	※	×	※	※		H－25号住
	11	暗赤褐色土層5YR	10＜11	○	○	※	※	※	※	※	H－25号住.竈土
H－24竈	1	褐色土層10YR		○	○	△	△	※	※	×	
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	○	○	◎	○	△	※	×	竈本体
	3	褐色土層10YR	3＜2	○	○	△	×	※	※		
	4	暗褐色土層10YR	4＜3	○	○	※	×	※	※		
	5	赤褐色土層5YR	4＜5	△	○	△	×	※	※	△	
	6	黄褐色土層10YR	3＜6	○	○	◎	○	※	×	×	竈本体
	7	明赤褐色土層5YR	6＜7	△	△	◎	×	※	×	◎	
	8	暗赤褐色土層5YR	8＜7	△	△	※	×	※	※	△	
	9	にぶい赤褐色土層	9＜2	○	○	△	※	※	※	△	煙道部分
	10	明褐色土層7.5YR	9＜10	○	○	○	×	×	×	※	
H－24D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	△	※		
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	○	◎	○	○	○	※	※	
H－24D－2	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	△	※	×	覆土のみ
H－25竈	1	暗赤褐色土層5YR		○	○	×	×	×	※	※	
	2	暗赤褐色土層5YR	1＜2	○	○	※	×	×	※	△	
	3	赤褐色土層5YR	2＜3	○	○	※	×	×	※	○	
H－25D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	×	×	※	※		
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	×	×	※	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	×	×	※	△	※	
	4	暗褐色土層10YR	3＜4	○	○	×	※	※	※	×	
H－25D－2	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※	×	×	
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	△	△	※	×	
H－25D－3	1	褐色土層10YR		○	○	△	×	△	※	※	
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	○	○	○	※	△	※	※	
	3	褐色土層10YR	3＜2	○	○	△	×	△	×	×	

H－24号住　掘り方

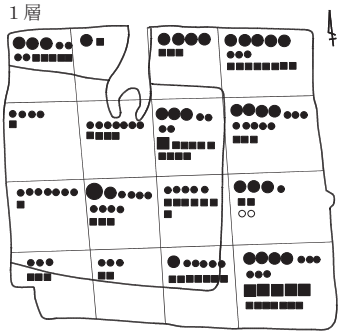




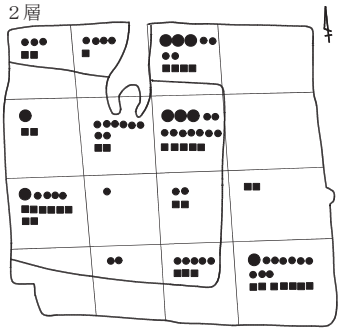
H－24	H－25	H－24 土師器		H－25 土師器	
1層：20～30cm	1層：15～20cm	坏	2,867g	坏	2,554g
2層：20～30cm	2層：0～20cm	甕	27,638g	甕	4,555g
3層：30cm		須恵器	264g	他	87g
4層：0～20cm		計	30,768g	計	7,196g

土器分布

1層

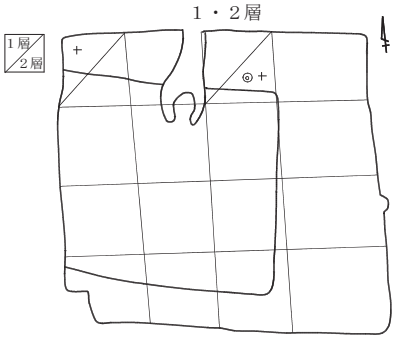


2層

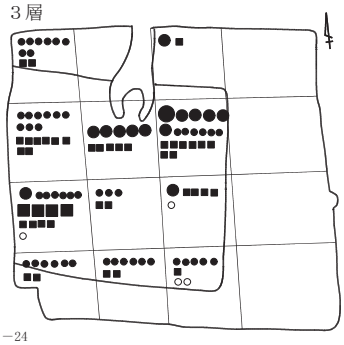


石器分布

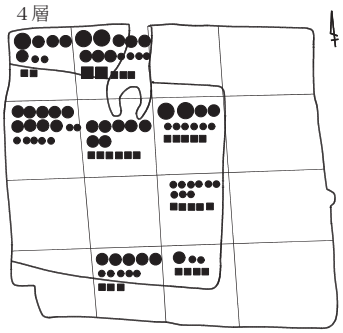
1・2層



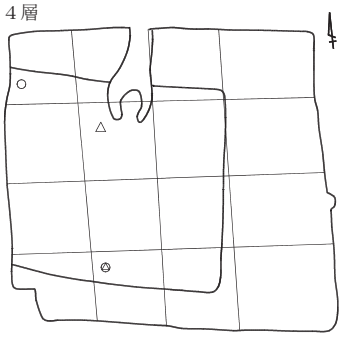
3層



4層



4層



H－24

竈内

6区竈周辺

D－1

D－2

P－1

3区サブトレ

7区サブトレ

11区サブトレ

15区サブトレ

H－25

竈内

竈支脚

D－1

D－2

D－3

D－4

P－1

一括

一括不明　３６０ｇ

H－24,25一括　○

H－25　3区溝　◎◎◎

H－25　D－2　⊞

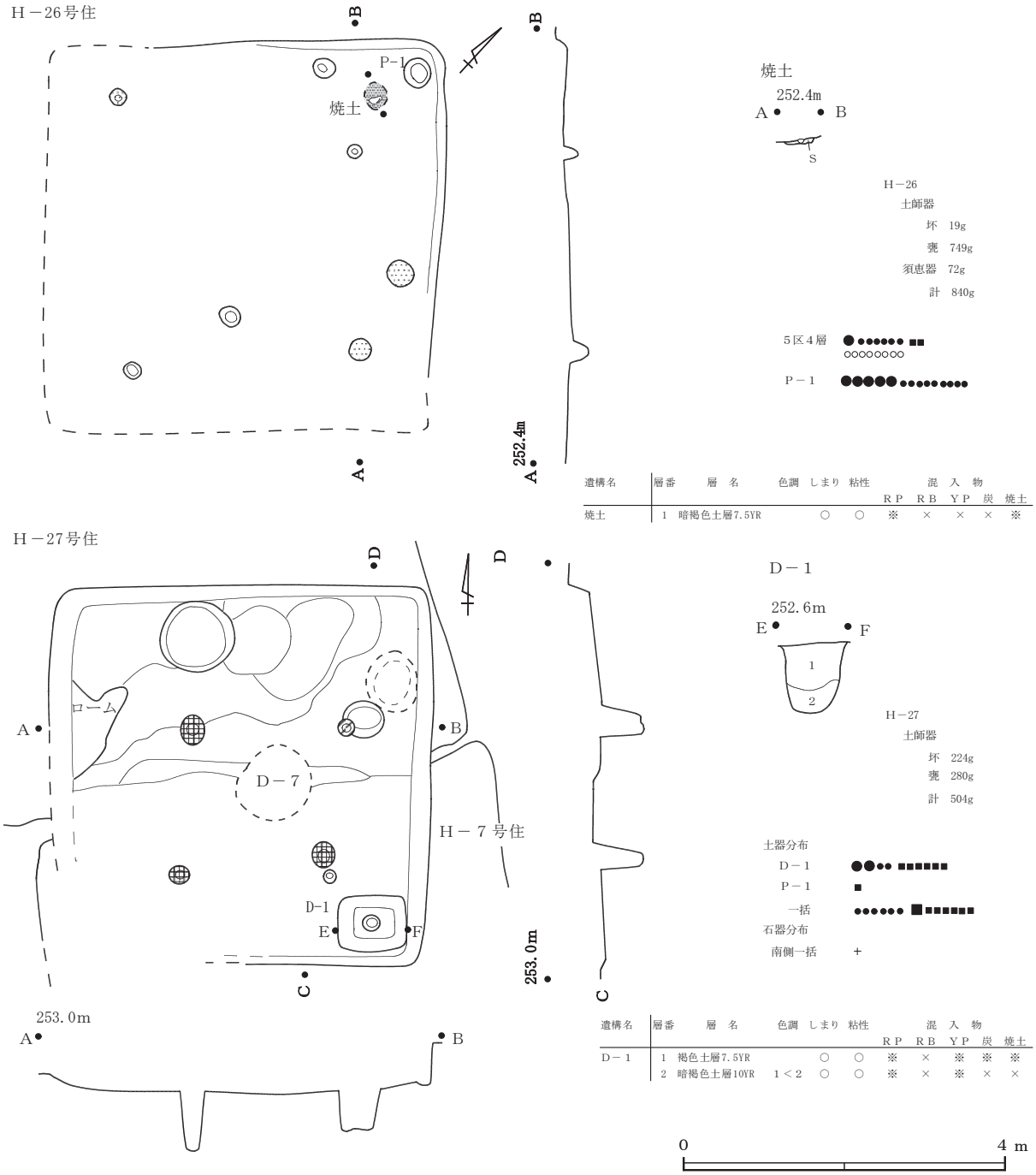
H－25　D－3　▲ ◎

H－25　D－4　◎

H－25　10区　⧈

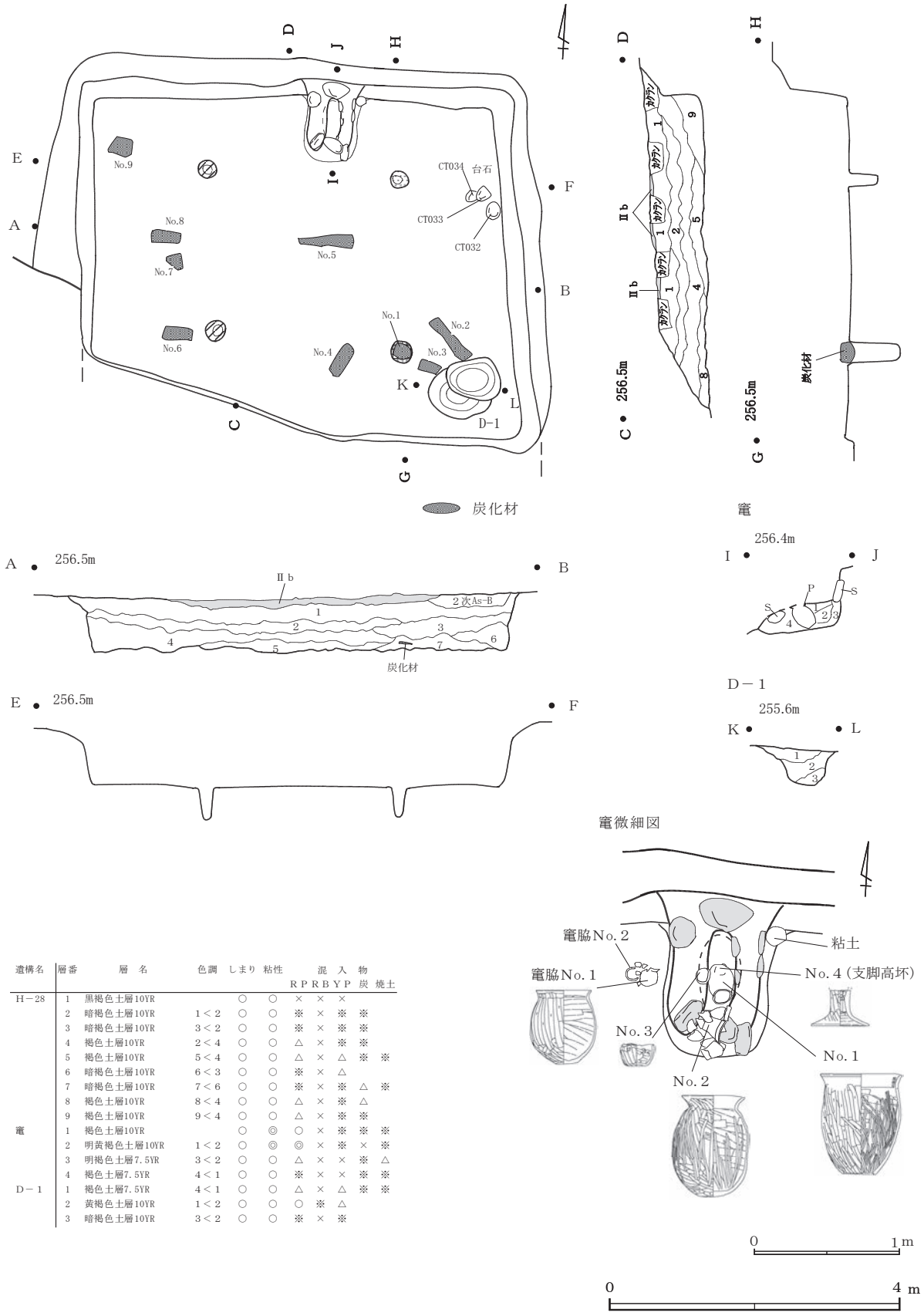
0　4m

第44図　H－24号・H－25号住居址実測図（2）



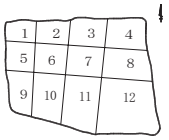
第45図　H－26号・H－27号住居址実測図

H－28号住



遺構名	層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－28	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※	※	
	3	暗褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	×	※	※	
	4	褐色土層10YR	2＜4	○	○	△	×	※	※	
	5	褐色土層10YR	5＜4	○	○	△	×	△	※	※
	6	暗褐色土層10YR	6＜3	○	○	※	×	△		
	7	暗褐色土層10YR	7＜6	○	○	※	×	※	△	※
	8	褐色土層10YR	8＜4	○	○	△	×	※	△	
	9	褐色土層10YR	9＜4	○	○	△	×	※	※	
竈	1	褐色土層10YR		○	◎	○	×	※	※	※
	2	明黄褐色土層10YR	1＜2	○	◎	◎	×	※	×	※
	3	明褐色土層7.5YR	3＜2	○	○	△	×	×	※	△
	4	褐色土層7.5YR	4＜1	○	○	※	×	×	※	※
D－1	1	褐色土層7.5YR	4＜1	○	○	△	×	△	※	※
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	○	○	○	※	△		
	3	暗褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	×	※		

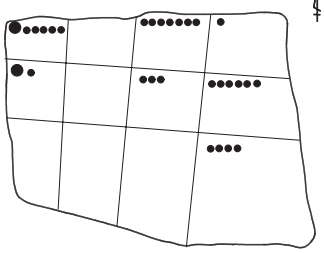
第46図　H－28号住居址実測図（1）



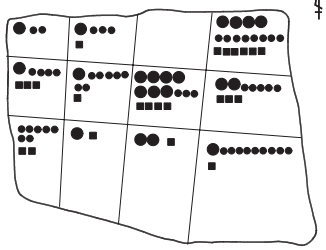
1層：20cm
2層：15～20cm
3層：0～30cm

土器分布

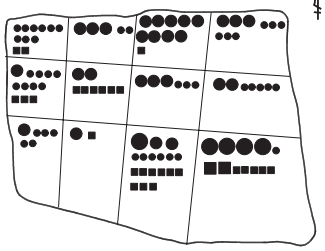
1層



2層



3層

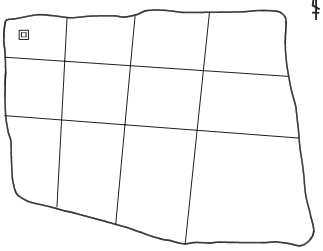


竈内
3区竈右脇
2区竈脇
D－1
3区サブトレ
7区サブトレ
11区サブトレ
一括

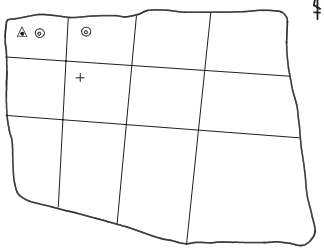
土師器
坏　1,926g
甕　22,328g
他　159g
計　24,412g

石器分布

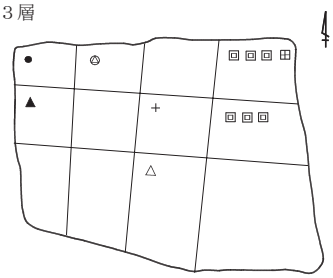
1層



2層



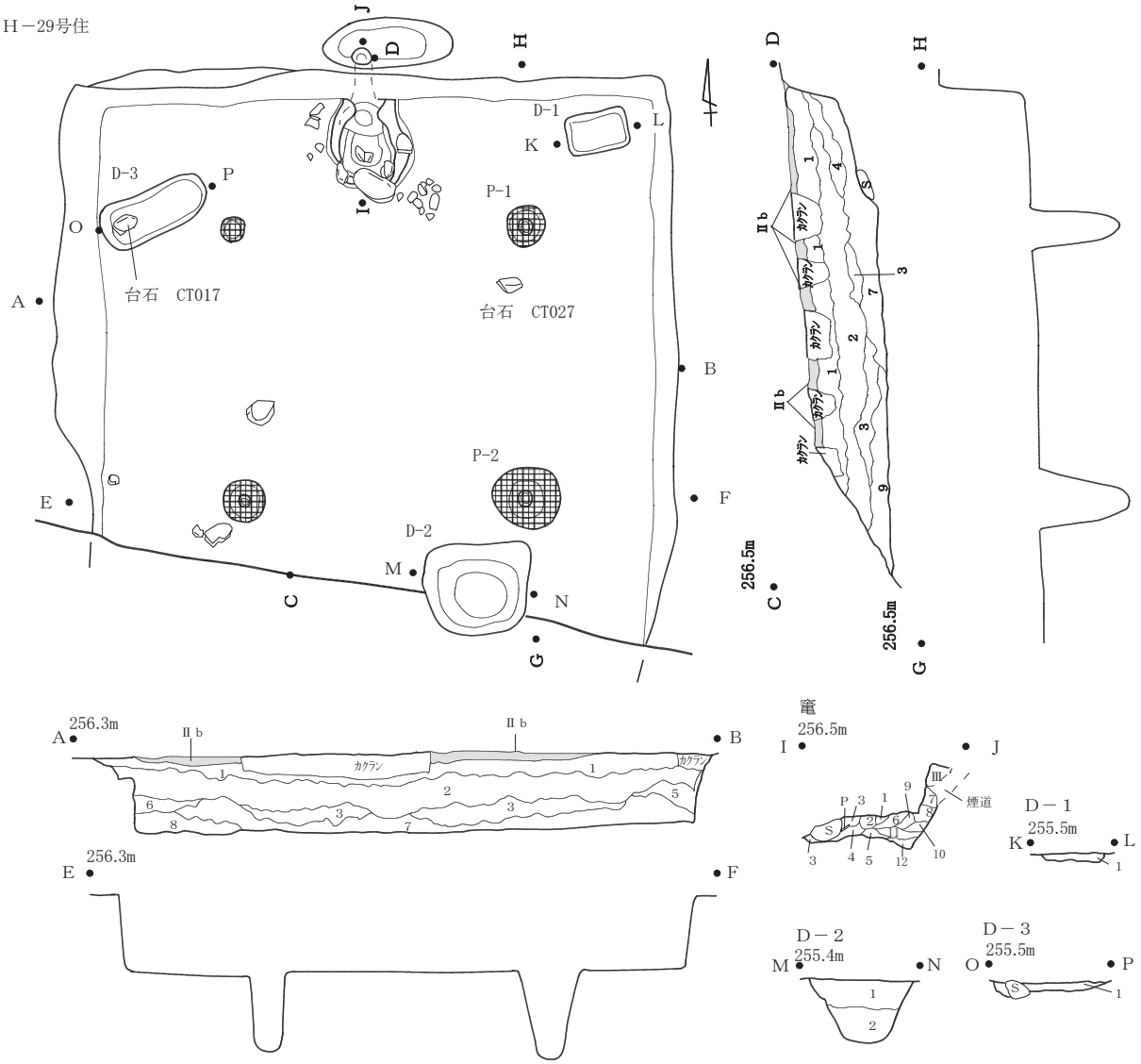
3層



D－1　△
11区サブトレ　●

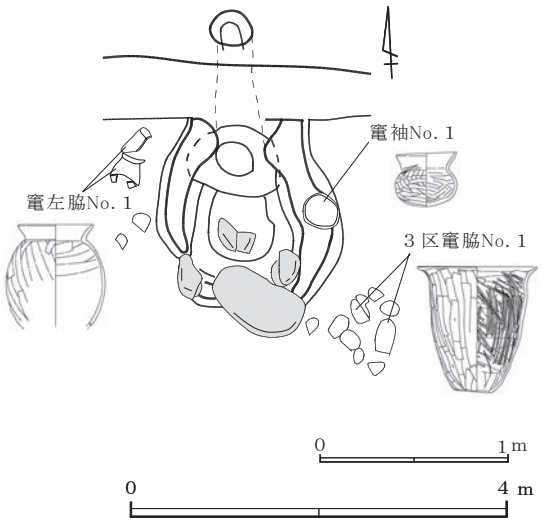
0　4m

第47図　H－28号住居址実測図（2）

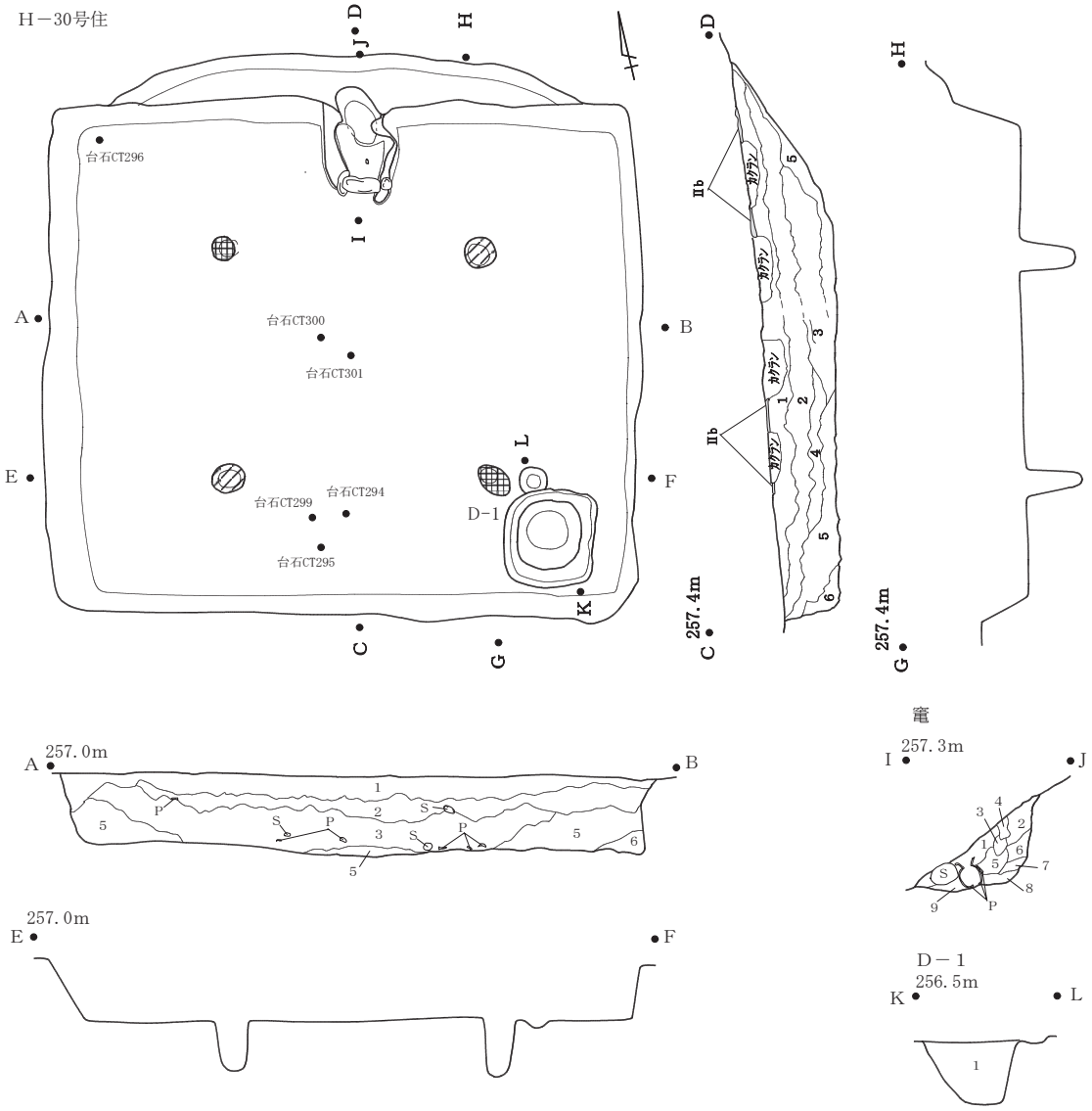


遺構名	層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－29	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	×	※			
	3	褐色土層10YR	3＜2	○	○	△	※	△	△		
	4	褐色土層10YR	2＜4	○	○	△	×	※	※		
	5	黄褐色土層10YR	2＜5	○	○	○	※	△	※		
	6	褐色土層10YR	6＜2	○	○	△	×	※			
	7	明黄褐色土層10YR	3＜7	○	○	◎	○	○			
	8	明黄褐色土層10YR	8＜7	○	○	◎	△	△			
	9	黄褐色土層10YR	3＜9	○	○	○	○	○			
竈	1	褐色土層10YR		○	○	△	×	×			
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	○	○	◎	×	※			ｶﾏﾄﾞ土
	3	褐色土層10YR	3＜2	△	○	△	×	※	※	※	
	4	褐色土層7.5YR	3＜4	△	○	△	×	×	※	※	焼道（焚口）
	5	明褐色土層7.5YR	4＜5	○	○	△	×	※	※	※	焼道（焚口）
	6	明黄褐色土層10YR		○	◎	◎	×	×			ｶﾏﾄﾞ土
	7	褐色土層7.5YR		△	○	△	×	※	×		焼道（焚口）
	8	明褐色土層7.5YR	7＜8	△	○	○	×	×	×	※	焼道（焚口）
	9	赤褐色土層5YR	8＜9	△	○	△	×	×	※	△	焼道（焚口）
	10	暗赤褐色土層5YR	10＜9	△	○	△	×	×	×	※	焼道（焚口）
	11	赤褐色土層5YR	9＜11	△	○	△	×	×	※	△	焼道（焚口）
	12	黒褐色土層7.5YR	12＜11	△	○	×	×	×			灰○
D－1	1	黄褐色土層10YR		○	○	○	△	△			
D－2	1	褐色土層10YR		○	○	○	△	△			
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	○	◎	◎	△	△			
D－3	1	暗褐色土層10YR		○	○	△	※	△			

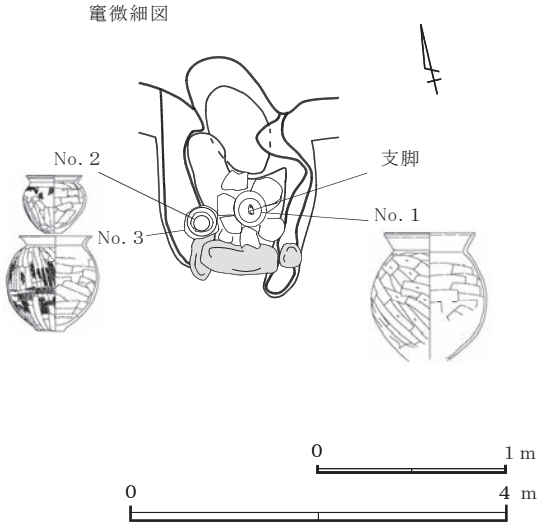
竈微細図



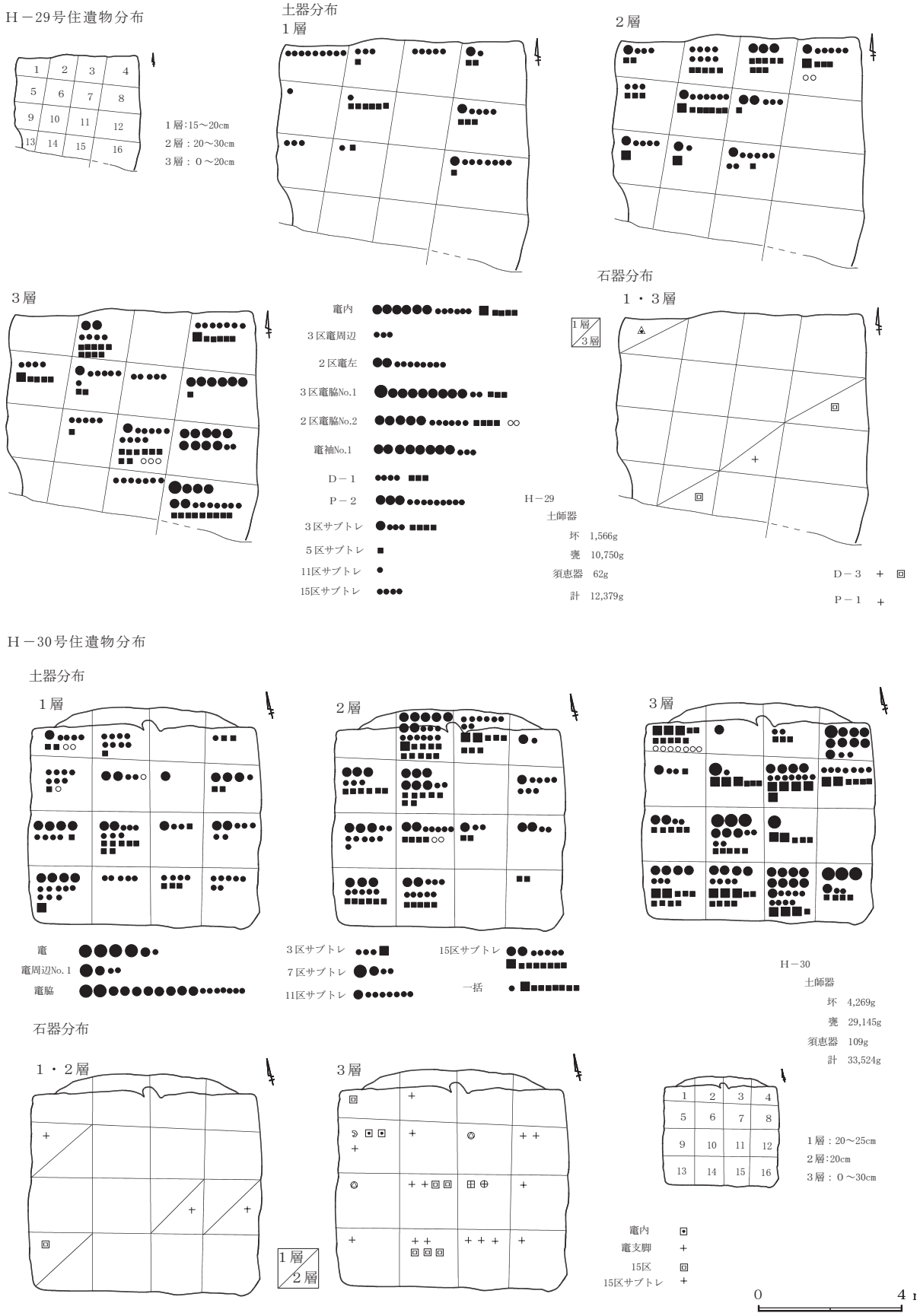
第48図　H－29号住居址実測図



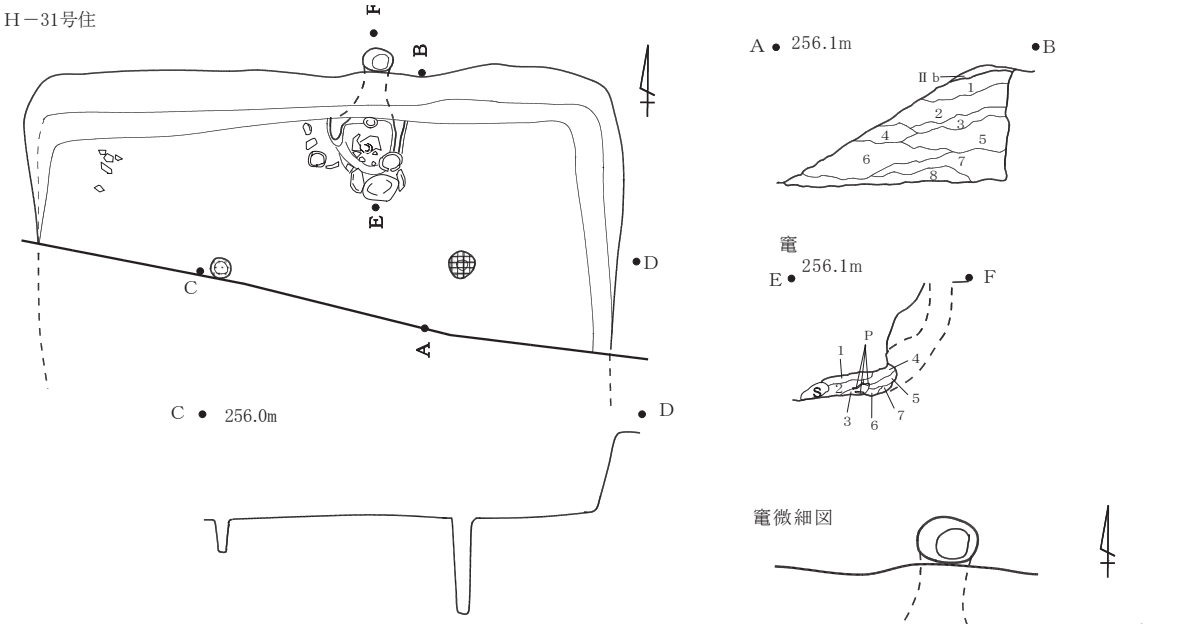
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－30	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※		
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	△	×	△		
	4	褐色土層10YR	2＜4	○	○	△	×	△		
	5	黄褐色土層10YR		○	○	◎	※	○		
	6	褐色土層10YR	6＜5	○	○	△	×	△		
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	△	×	※	※	※
	2	明褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	○	×	×	※	※
	3	暗褐色土層7.5YR	3＜1	○	○	※	×	×	※	×
	4	明黄褐色土層10YR	2＜4	◎	○	◎	×	×	×	×
	5	橙色土層7.5YR	4＜5	○	○	◎	×	※	×	※
	6	鈍い赤褐色土層5YR	6＜5	△	○	◎	×	※	×	△
	7	赤褐色土層5YR	7＜6	△	○	◎	×	×	×	△
	8	鈍い赤褐色土層5YR	8＜7	△	○	○	×	※	×	△
	9	赤褐色土層5YR	1＜9	○	○	○	×	※	※	△
D－1	1	黄褐色土層10YR		○	○	◎	△	○		



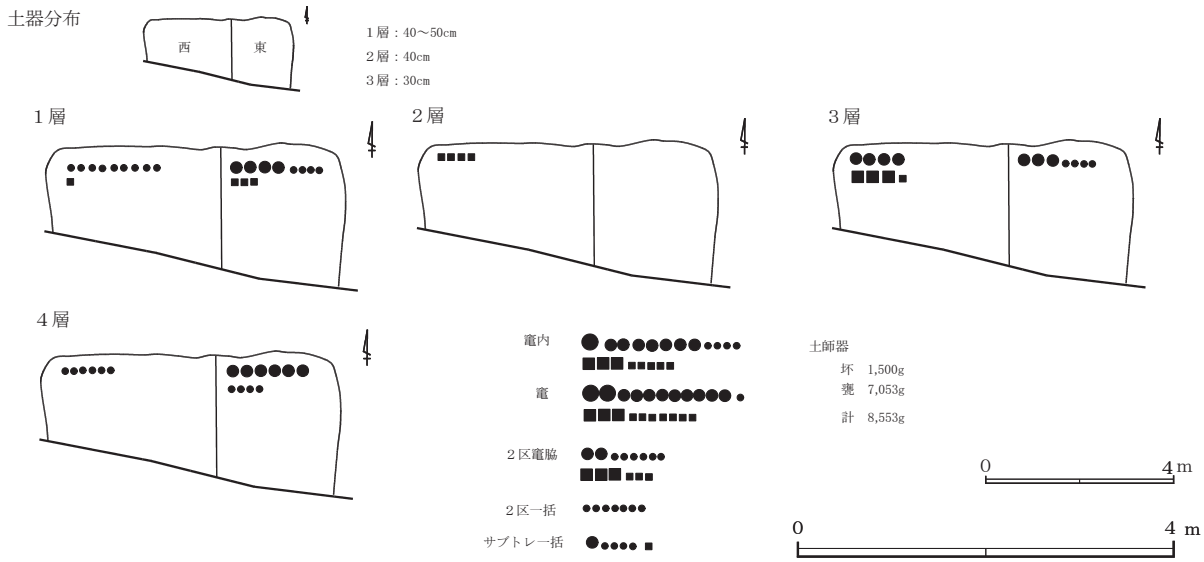
第49図　H－30号住居址実測図



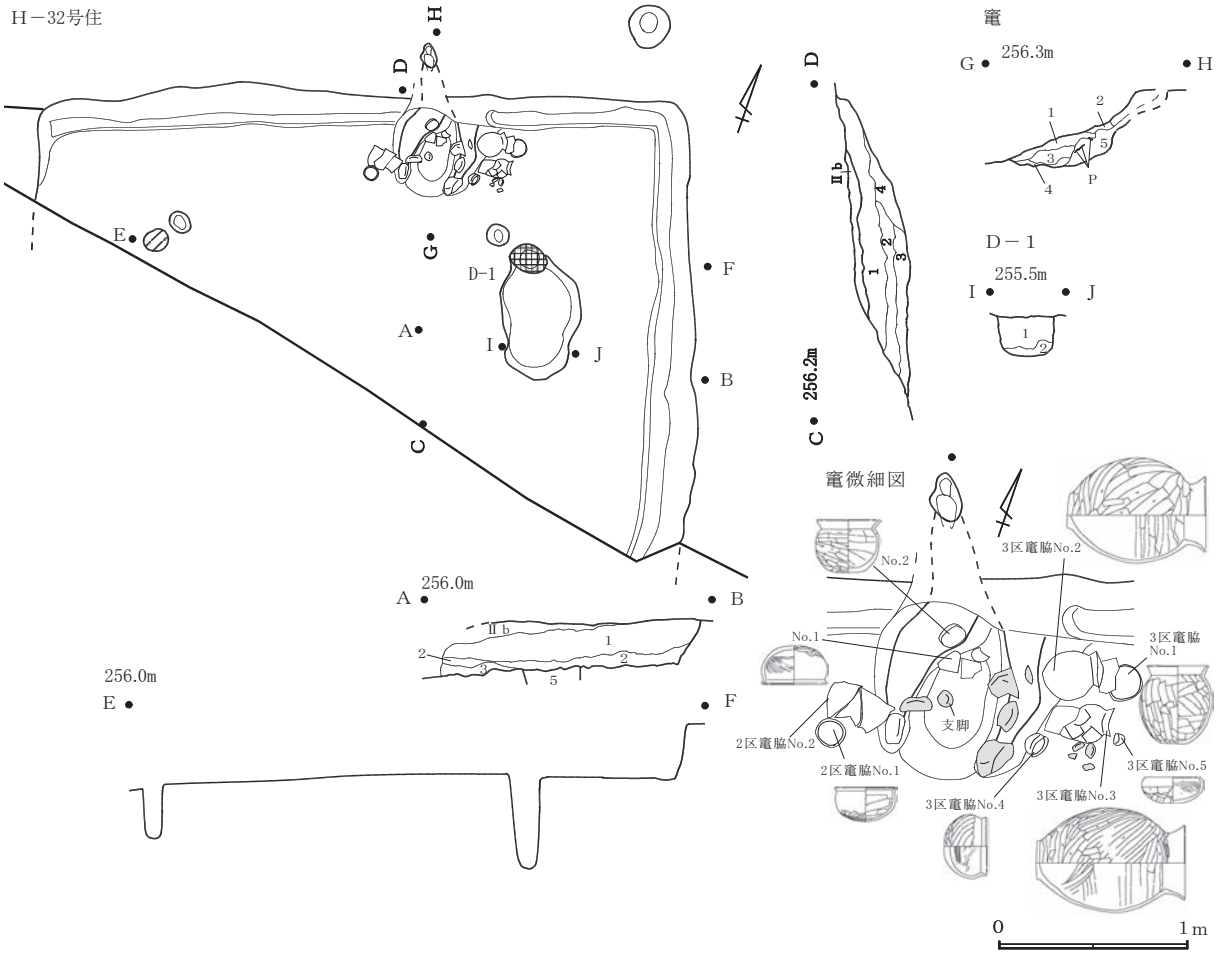
第50図　H－29号・H－30号住居址実測図



遺構名	層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－31	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※			
	3	黒褐色土層10YR	3＜2	○	○	×	※	※	※		
	4	暗褐色土層10YR	2＜4	○	○	※	×	※			
	5	褐色土層10YR	3＜5	○	○	△	※	△	※		
	6	褐色土層10YR	5＜6	○	○	△	△	○	※		
	7	褐色土層10YR	5＜7	○	○	△	×	△	※		
	8	褐色土層10YR	7＜8	○	○	△	※	△	※	※	
竈	1	褐色土層10YR		○	○	△	※	△	※	※	
	2	明褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	○	×	※	※	※	
	3	明褐色土層7.5YR	2＜3	○	○	△	×	※	※	※	
	4	明黄褐色土層10YR	2＜3	○	○	◎	×	×	×	×	竈構築土
	5	明赤褐色土層2.5YR	4＜3	△	△	※	×	×	×	○	
	6	褐色土層7.5YR	6＜5	○	○	△	×	×	×	※	
	7	暗褐色土層7.5YR	7＜6	○	○	※	×	×	×	×	黒灰※



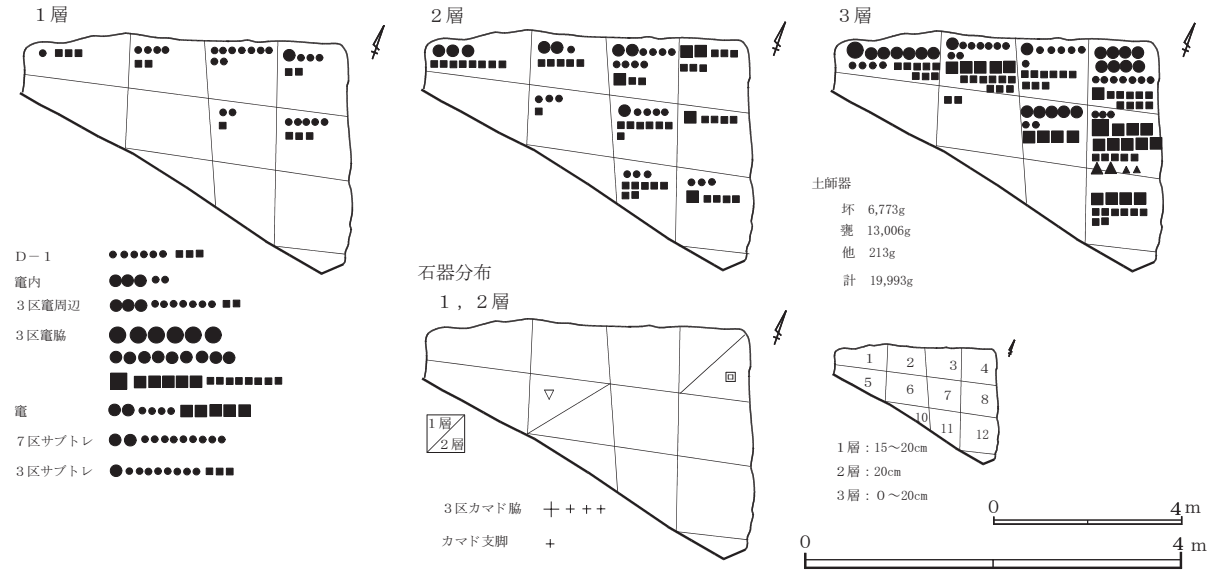
第51図　H－31号住居址実測図



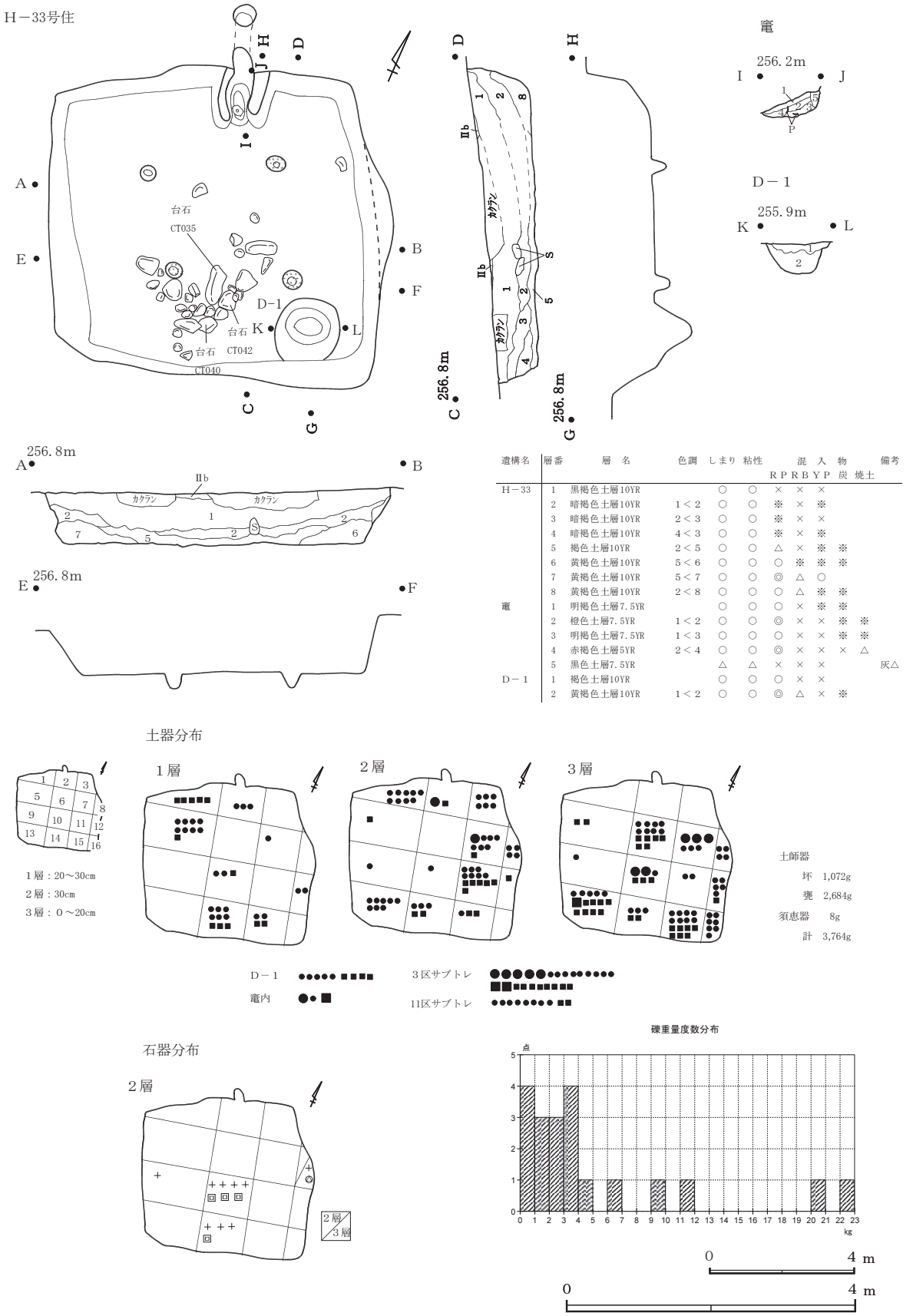
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R	P	R	B	Y	P	炭	焼土
H－32	1	黒褐色土層10YR		○	○	×		×		×			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×		×		×			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※		×		※		※	
	4	褐色土層10YR	3＜4	○	○	△		※		△			
	5	褐色土層7.5YR	2＜5	○	○	△		×		※		※	※
	6	黒褐色土層10YR	6＜3	○	○	×		×		※		※	

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R	P	R	B	Y	P	炭	焼土
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	△		×		※		※	※
	2	暗褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	○		×		※		※	※
	3	鈍い赤褐色土層5YR	1＜3	○	○	○		×		※		×	△
	4	赤褐色土層5YR	4＜3	△	△	△		×		△		×	※
	5	橙色土層7.5YR	3＜5	○	◎	◎		×		※		×	△
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×		×		※		×	×
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※		※		△		×	×

土器分布

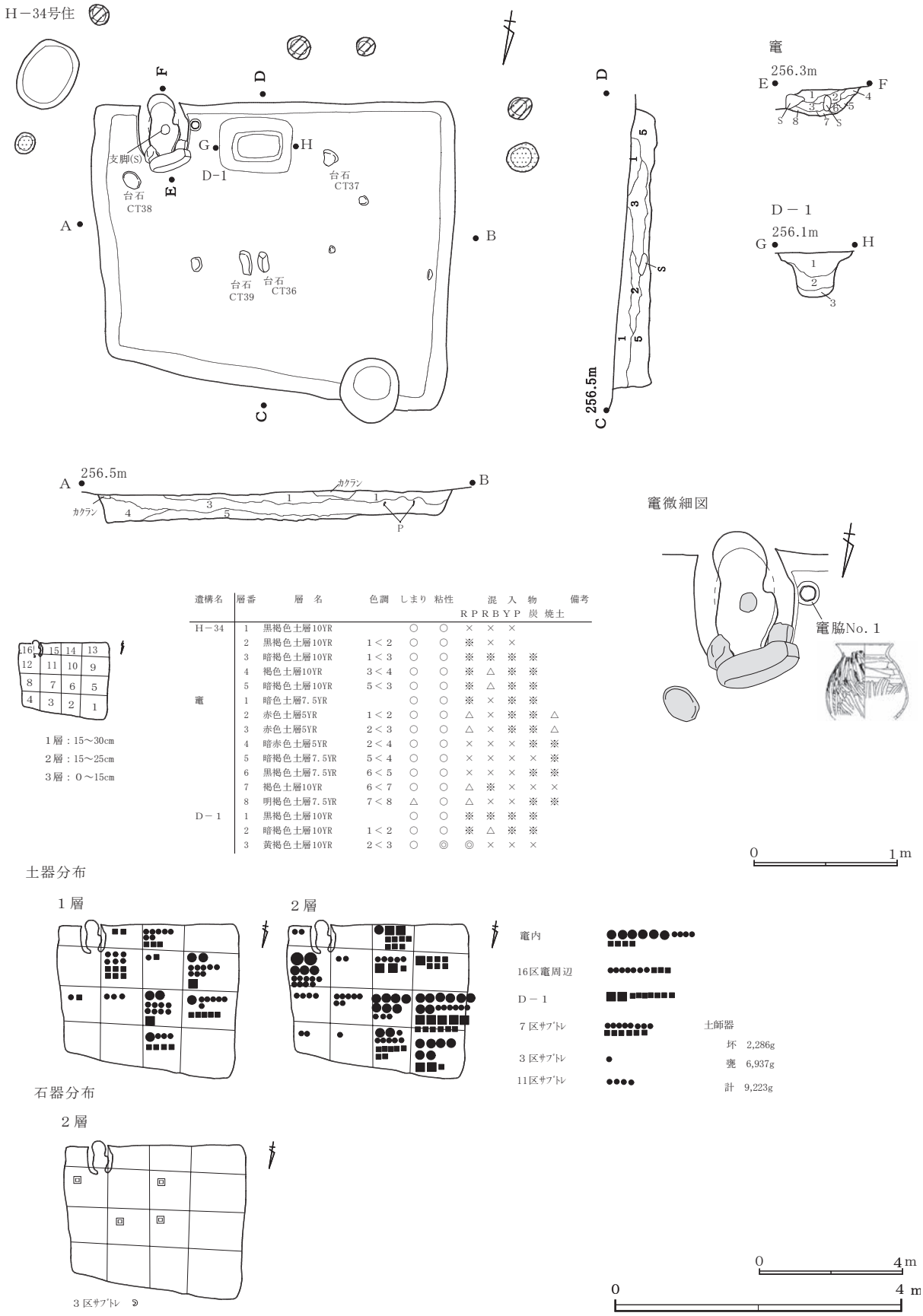


第52図　H－32号住居址実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－33	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	×			
	4	暗褐色土層10YR	4＜3	○	○	※	×	※			
	5	褐色土層10YR	2＜5	○	○	△	×	※	※		
	6	黄褐色土層10YR	5＜6	○	○	○	※	※	※		
	7	黄褐色土層10YR	5＜7	○	○	◎	△	○			
	8	黄褐色土層10YR	2＜8	○	○	○	△	※	※		
竈	1	明褐色土層7.5YR		○	○	○	×	※	※		
	2	橙色土層7.5YR	1＜2	○	○	◎	×	×	※	※	
	3	明褐色土層7.5YR	1＜3	○	○	○	×	×	※	※	
	4	赤褐色土層5YR	2＜4	○	○	◎	×	×	×	△	
	5	黒色土層7.5YR		△	△	×	×	×			灰△
D－1	1	褐色土層10YR		○	○	○	×	×			
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	○	○	◎	△	×	※		

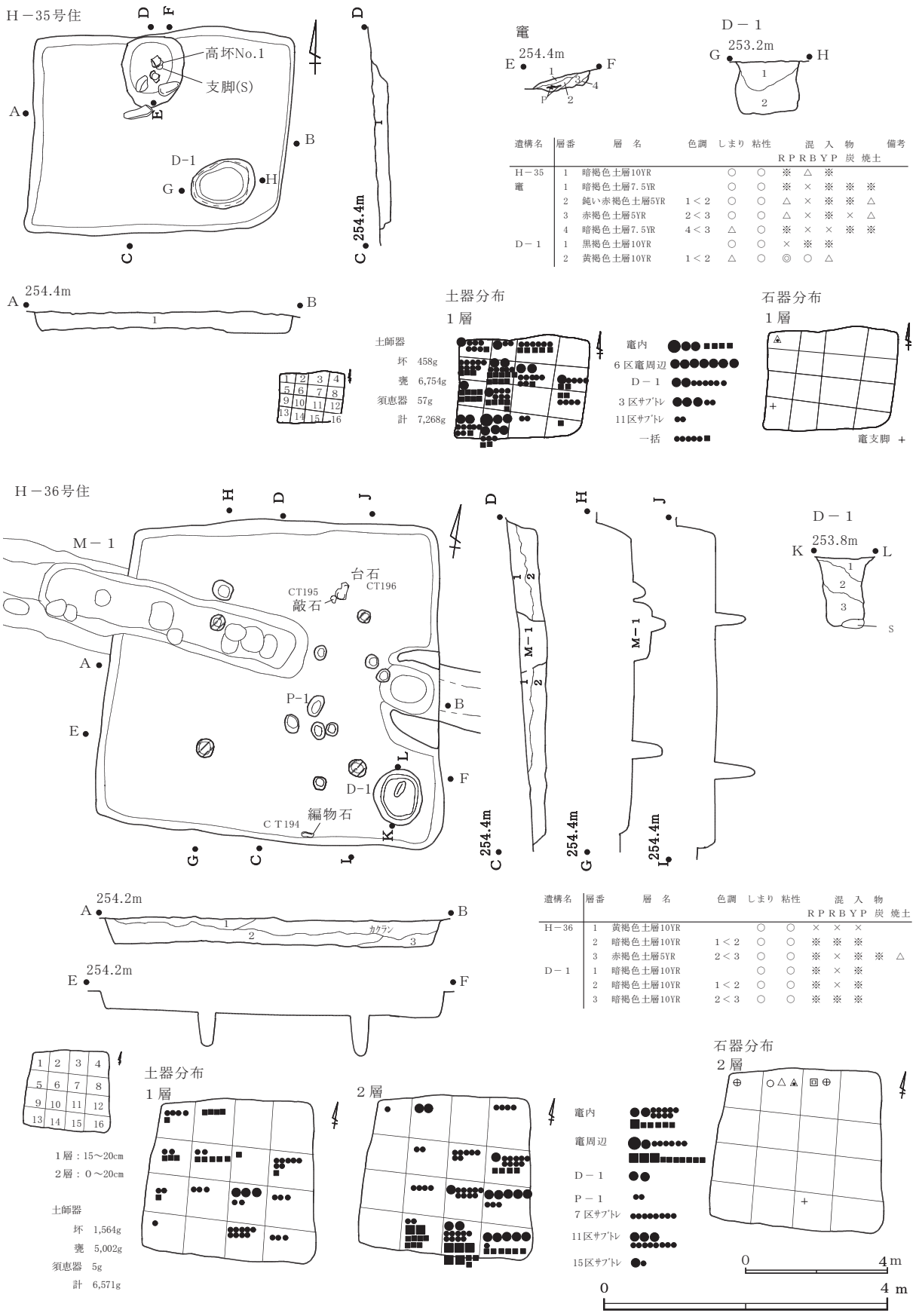
第53図　H－33号住居址実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R	P	R	B	Y	P	炭	焼土	備考
H－34	1	黒褐色土層10YR		○	○	×		×	×	×				
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※		×	×	×				
	3	暗褐色土層10YR	1＜3	○	○	※		※	※	※		※		
	4	褐色土層10YR	3＜4	○	○	※		△	※	※		※		
	5	暗褐色土層10YR	5＜3	○	○	※		△	※	※		※		
竈	1	暗色土層7.5YR		○	○	※		×	※	※		※		
	2	赤色土層5YR	1＜2	○	○	△		×	※	※		※	△	
	3	赤色土層5YR	2＜3	○	○	△		×	※	※		※	△	
	4	暗赤色土層5YR	2＜4	○	○	×		×	×	×		※	※	
	5	暗褐色土層7.5YR	5＜4	○	○	×		×	×	×		×	※	
	6	黒褐色土層7.5YR	6＜5	○	○	×		×	×	×		※	※	
	7	褐色土層10YR	6＜7	○	○	△		※	×	×		×	×	
	8	明褐色土層7.5YR	7＜8	△	○	△		×	×	×		※	※	
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	※		※	※	※		※		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※		△	※	※		※		
	3	黄褐色土層10YR	2＜3	○	◎	◎		×	×	×				

1層：15～30cm
2層：15～25cm
3層：0～15cm

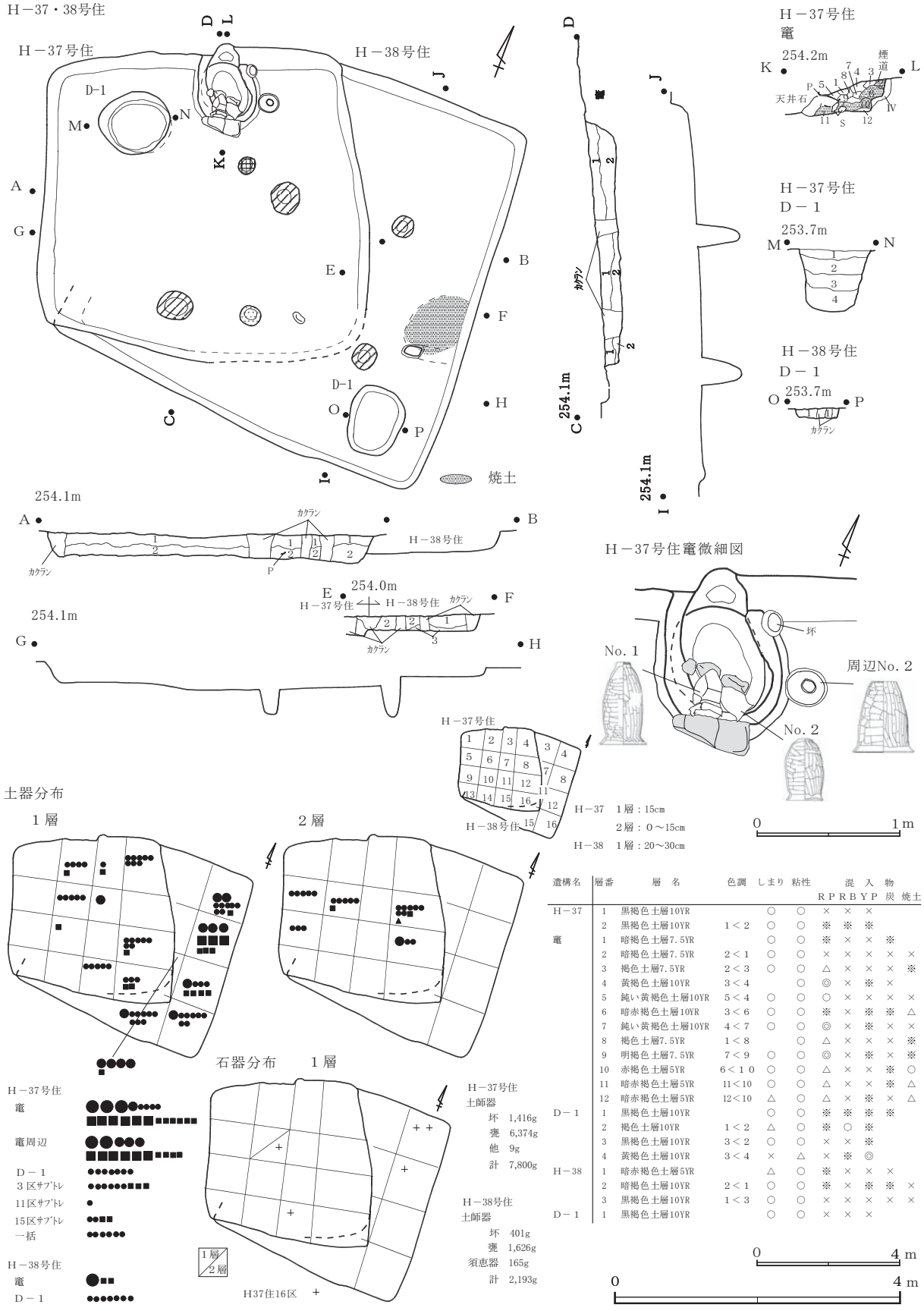
第54図　H－34号住居址実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－35	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	△	※			
竈	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	※	×	※	※	※	
	2	鈍い赤褐色土層5YR	1＜2	○	○	△	×	※	※	△	
	3	赤褐色土層5YR	2＜3	○	○	△	×	※	×	△	
	4	暗褐色土層7.5YR	4＜3	△	○	※	×	×	※	※	
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	※	※			
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	△	○	◎	○	△			

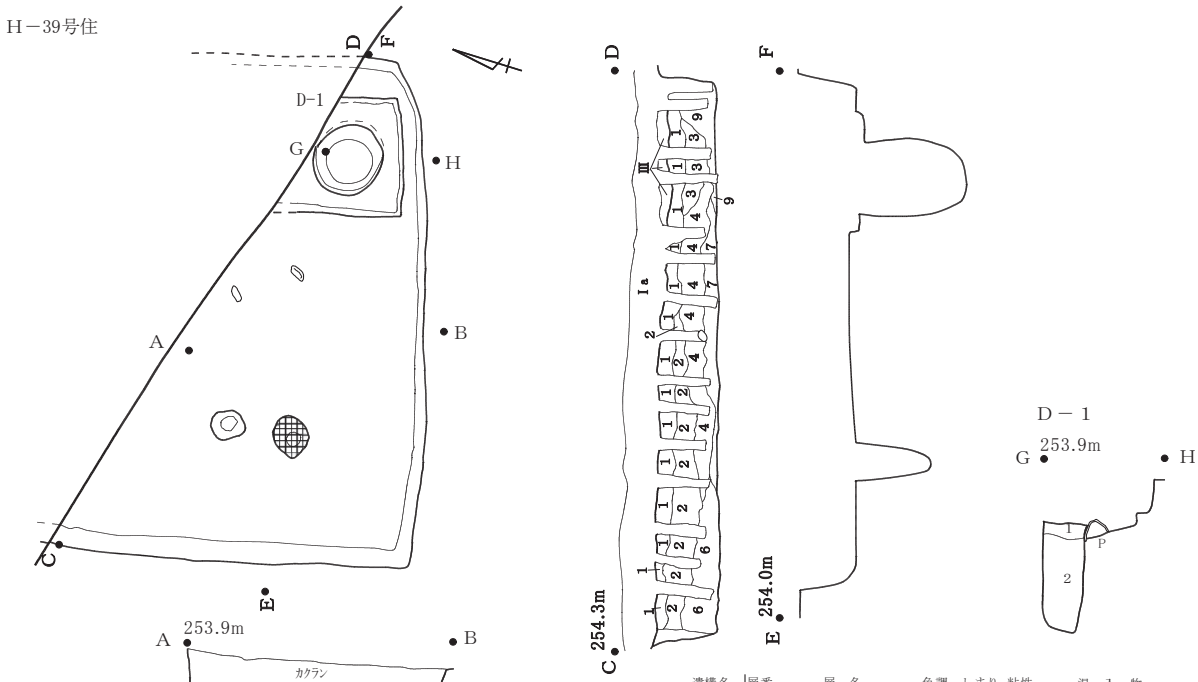
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－36	1	黄褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※		
	3	赤褐色土層5YR	2＜3	○	○	※	×	※	※	△
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※		
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	※		

第55図　H－35号・H－36号住居址実測図

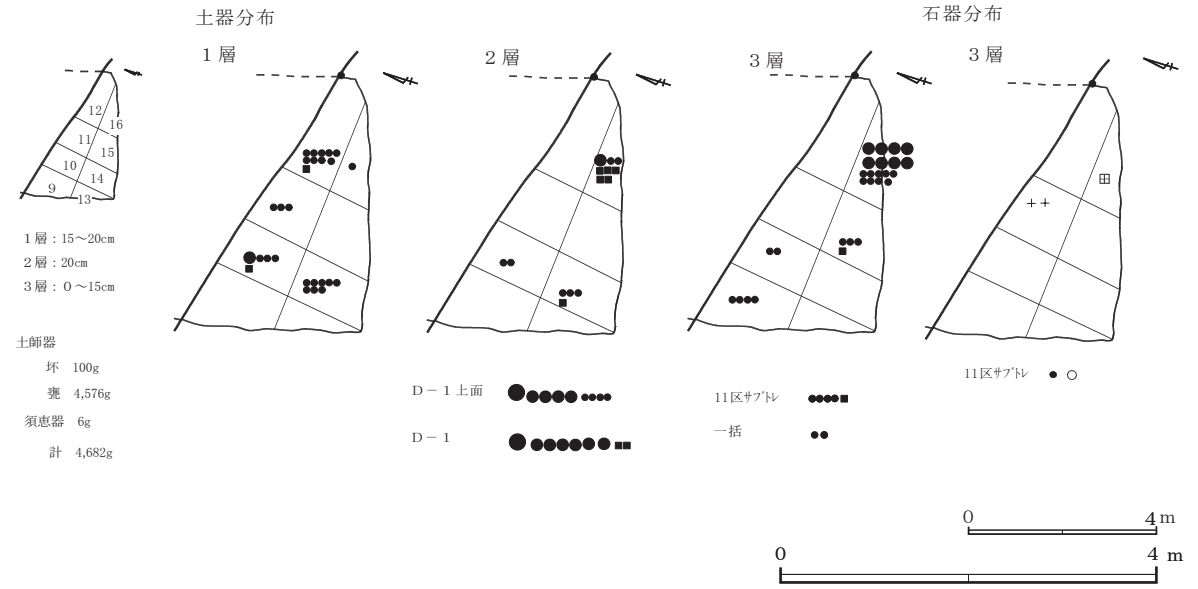


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－37	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	※		
竈	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	※	×	×	※	
	2	暗褐色土層7.5YR	2＜1	○	○	×	×	×	×	×
	3	褐色土層7.5YR	2＜3	○	○	△	×	×	×	※
	4	黄褐色土層10YR	3＜4		○	◎	×	※	×	
	5	鈍い黄褐色土層10YR	5＜4	○	○	○	×	×	×	×
	6	暗赤褐色土層10YR	3＜6	○	○	※	×	※	※	△
	7	鈍い黄褐色土層10YR	4＜7	○	○	◎	×	※	×	×
	8	褐色土層7.5YR	1＜8		○	△	×	×	×	※
	9	明褐色土層7.5YR	7＜9	○	○	◎	×	※	×	※
	10	赤褐色土層5YR	6＜10	○	○	△	×	×	※	○
	11	暗赤褐色土層5YR	11＜10	○	○	△	×	×	※	△
	12	暗赤褐色土層5YR	12＜10	△	○	△	×	※	×	△
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	※	※	※	
	2	褐色土層10YR	1＜2	△	○	※	○	※		
	3	黒褐色土層10YR	3＜2	○	○	×	×	※		
	4	黄褐色土層10YR	3＜4	×	△	×	※	◎		
H－38	1	暗赤褐色土層5YR		△	○	※	×	×	×	
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	×	※	※	×
	3	黒褐色土層10YR	1＜3	○	○	×	×	×	×	×
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		

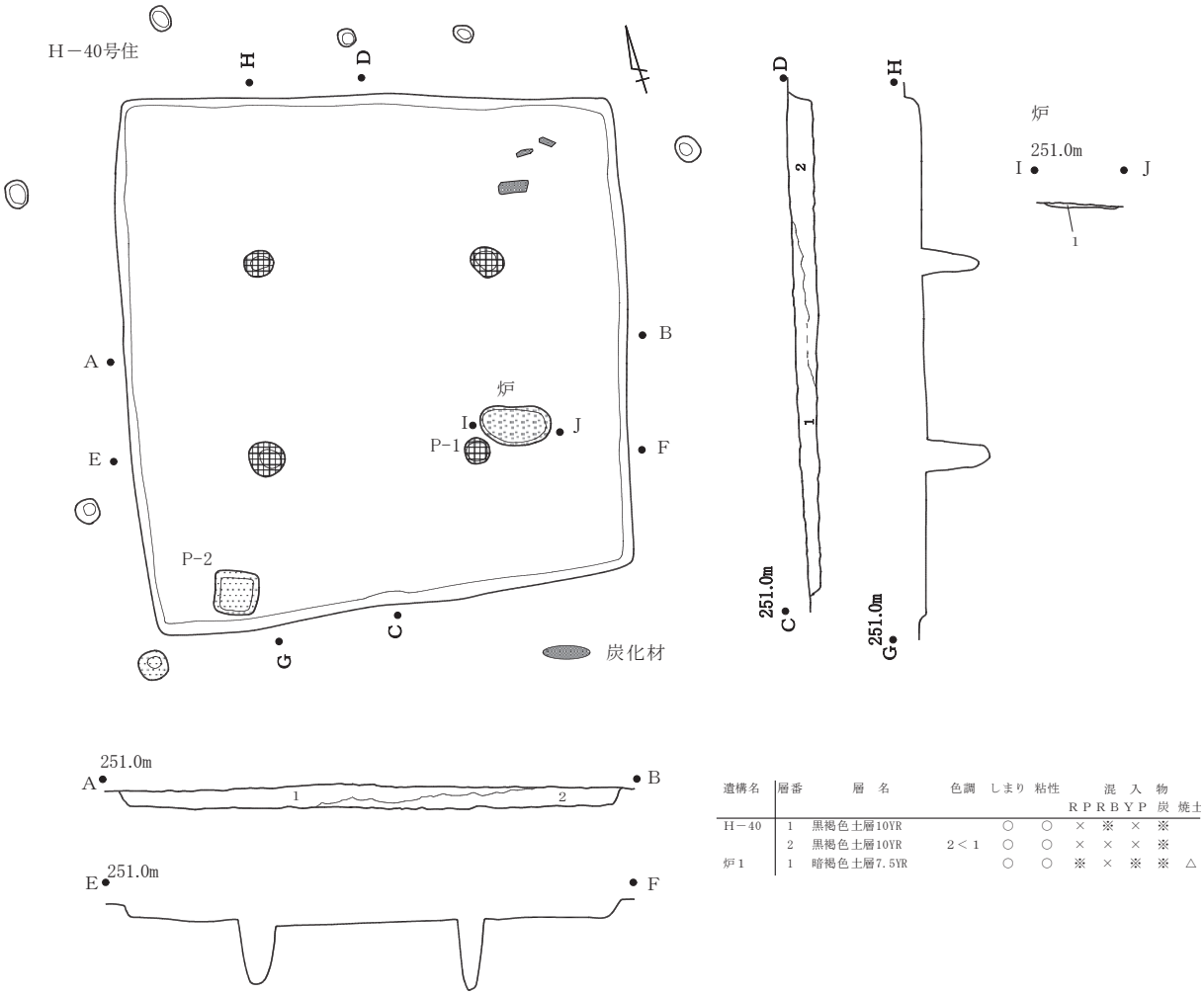
第56図　H－37号・H－38号住居址実測図



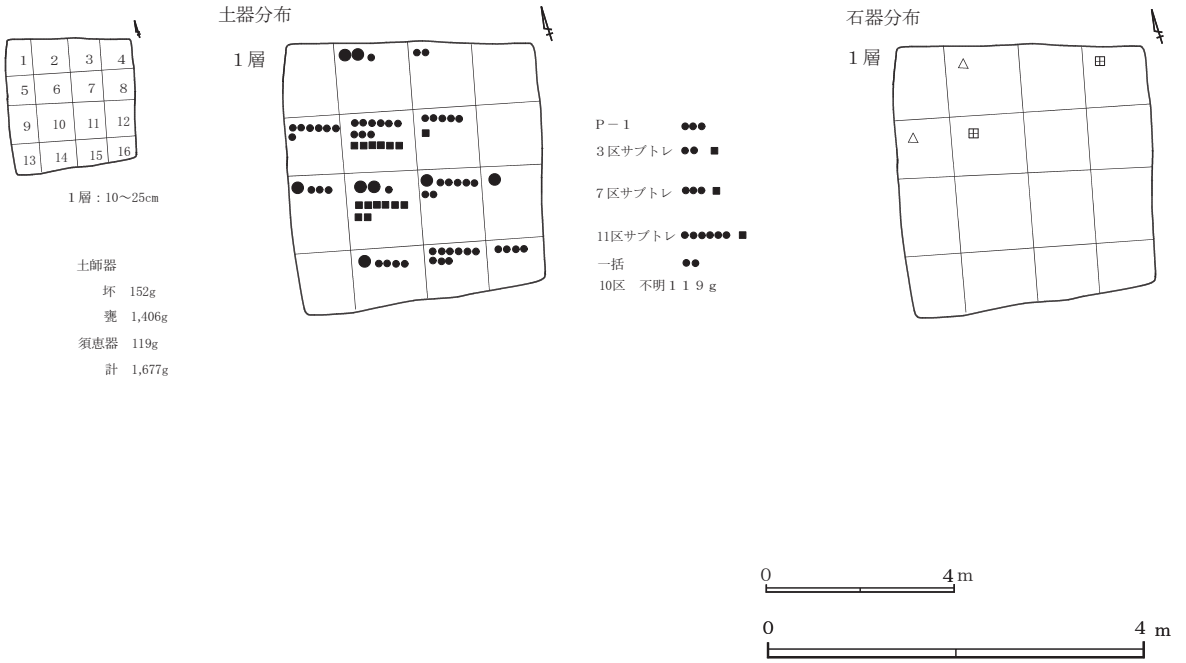
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－39	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	※	※	
	3	暗褐色土層7.5YR	1＜3	○	○	※	×	※	※	※
	4	褐色土層7.5YR	2＜4	○	○	※	△	※	※	※
	5	褐色土層10YR	4＜5	○	○	△	△	※		
	6	黄褐色土層10YR	2＜6	○	○	◎	△	○	※	
	7	明褐色土層5YR	7＜5	○	○	※	×	※	△	△
	8	暗褐色土層10YR	8＜5	○	○	※	※	×	※	
	9	暗褐色土層7.5YR	3＜9	○	○	※	※	※	※	※
D－1	1	暗褐色土層　暗10YR		○	○	※	※	※	※	
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	※	△	※	※



第57図　H－39号住居址実測図



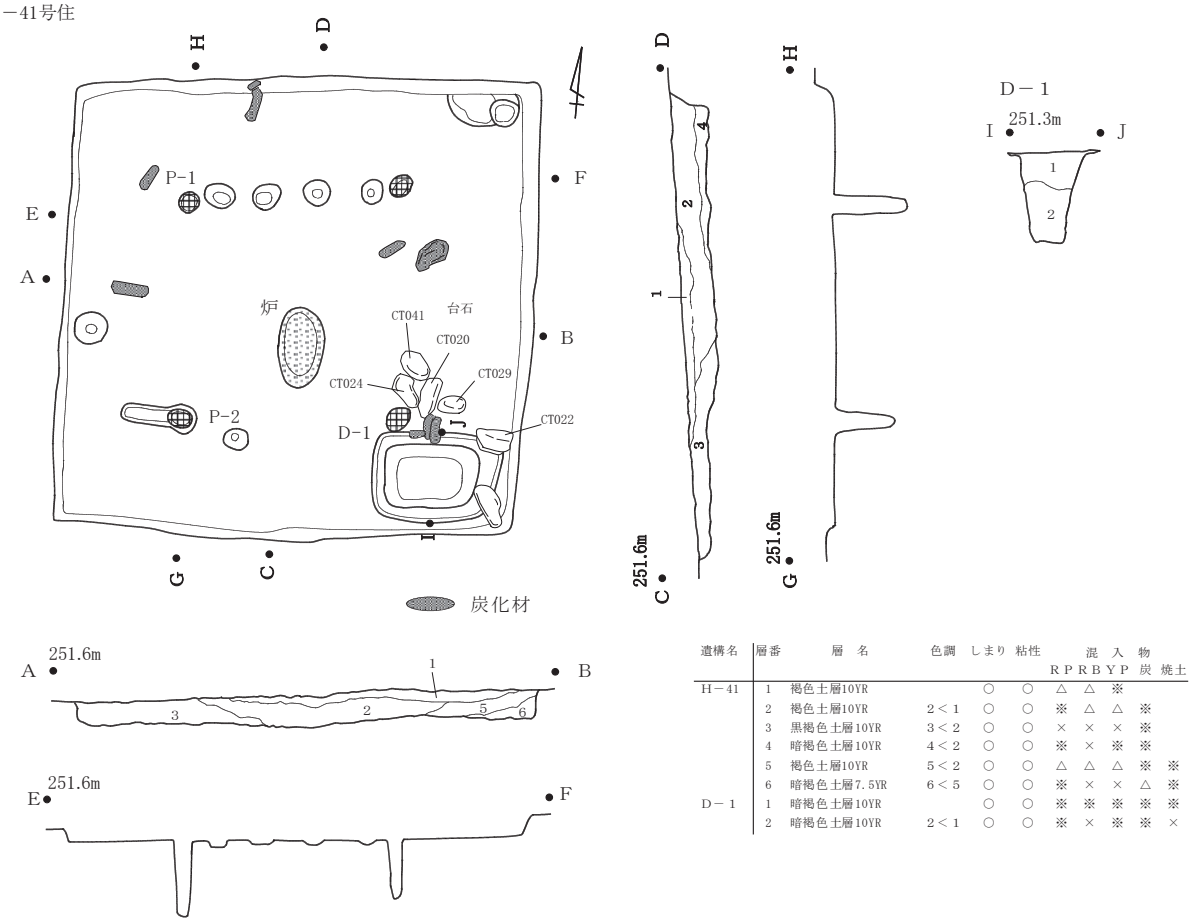
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－40	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	※	×	※	
	2	黒褐色土層10YR	2＜1	○	○	×	×	×	※	
炉1	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	※	×	※	※	△



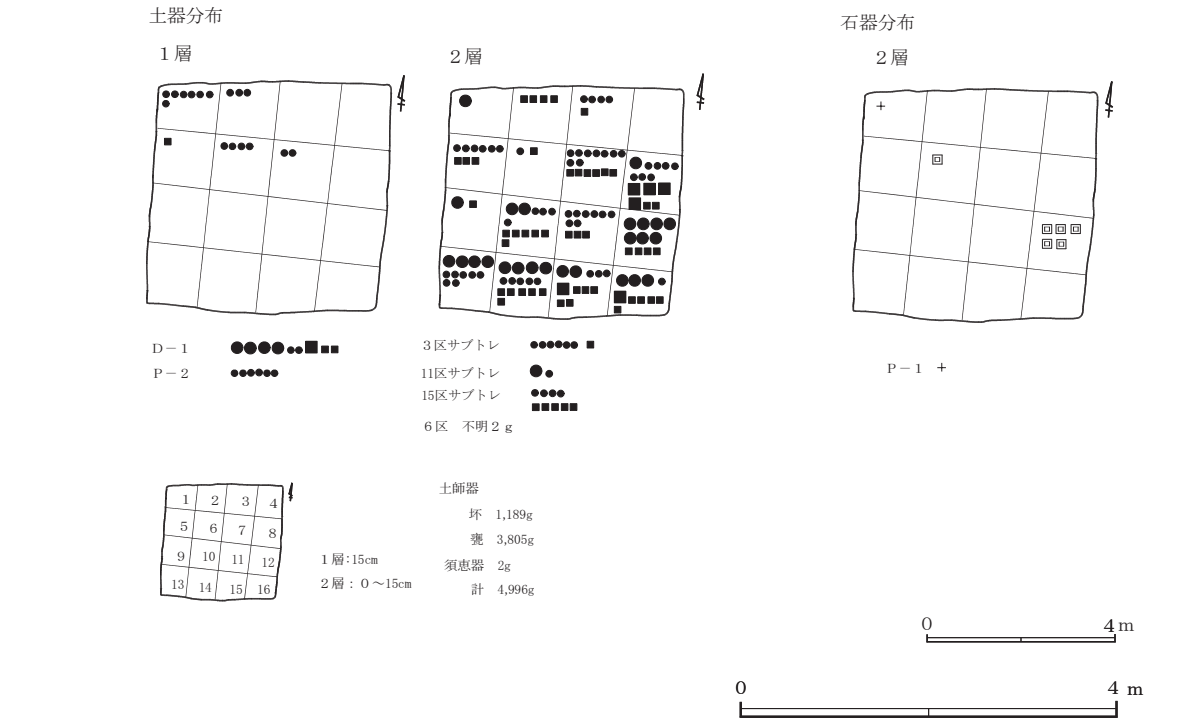
土師器
坏　152g
甕　1,406g
須恵器　119g
計　1,677g

第58図　H－40号住居址実測図

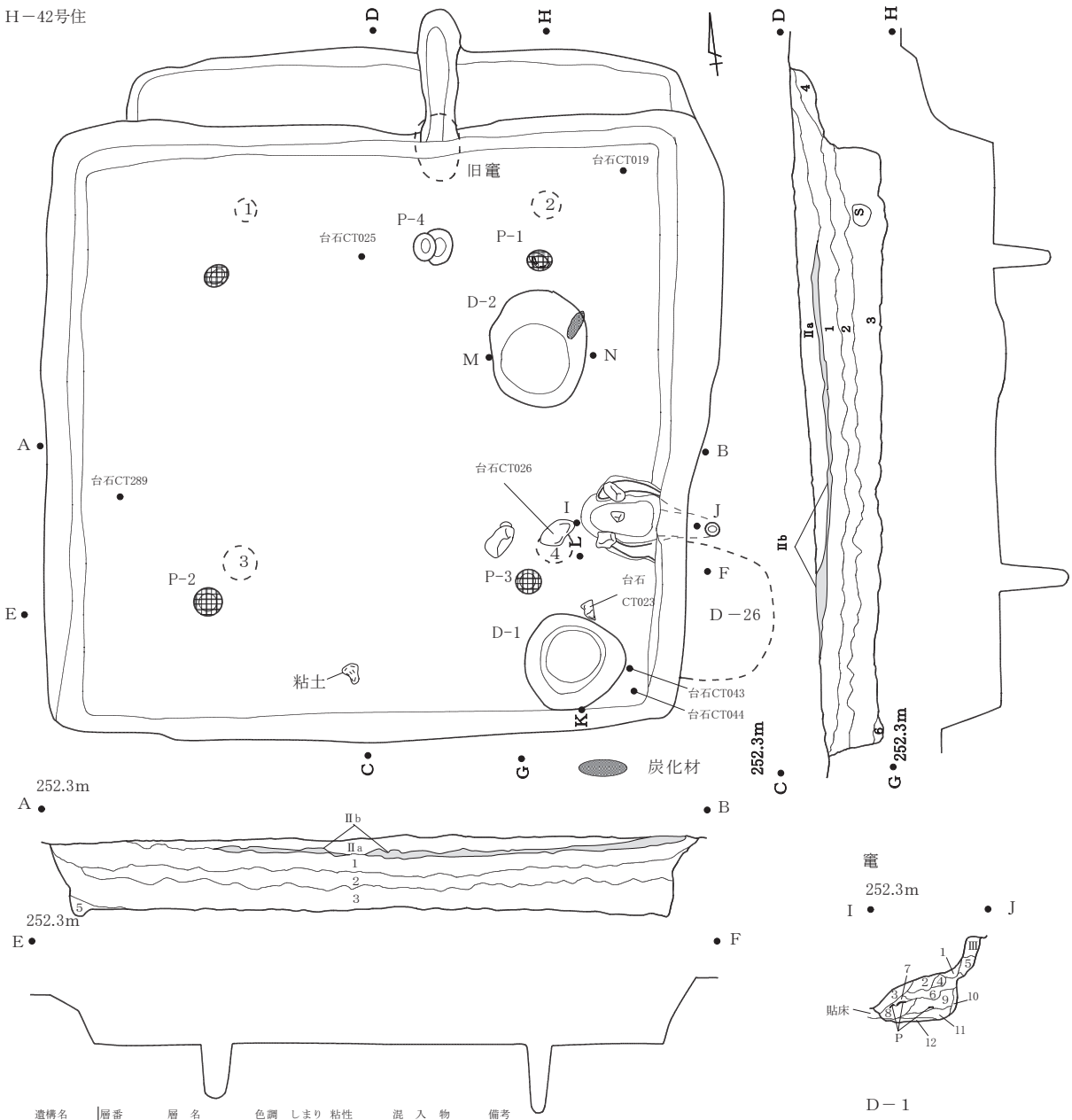
H－41号住



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－41	1	褐色土層10YR		○	○	△	△	※		
	2	褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	△	△	※	
	3	黒褐色土層10YR	3＜2	○	○	×	×	×	※	
	4	暗褐色土層10YR	4＜2	○	○	※	×	※	※	
	5	褐色土層10YR	5＜2	○	○	△	△	△	※	※
	6	暗褐色土層7.5YR	6＜5	○	○	※	×	×	△	※
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	※	※	※
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	×	※	※	×

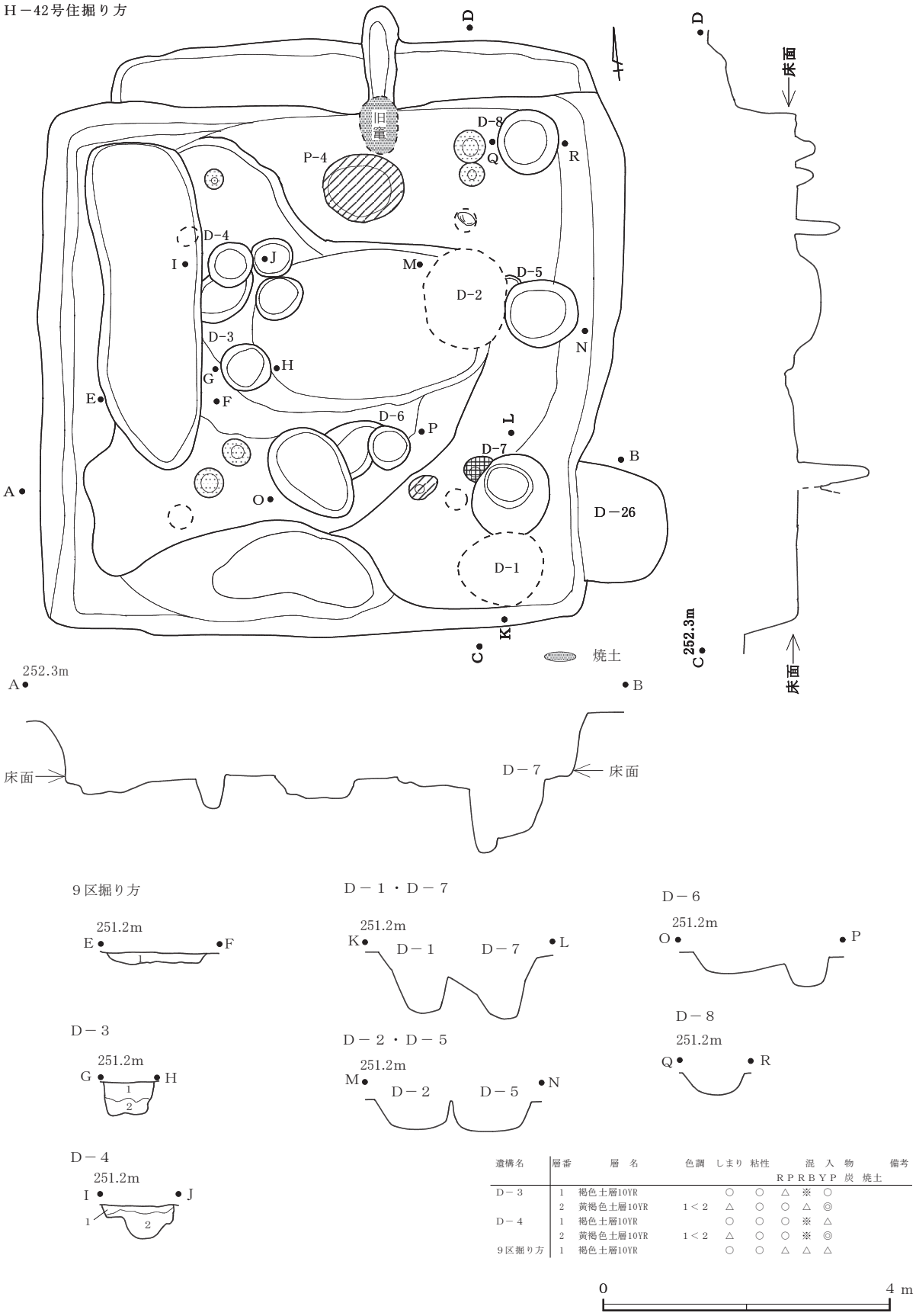


第59図　H－41号住居址実測図



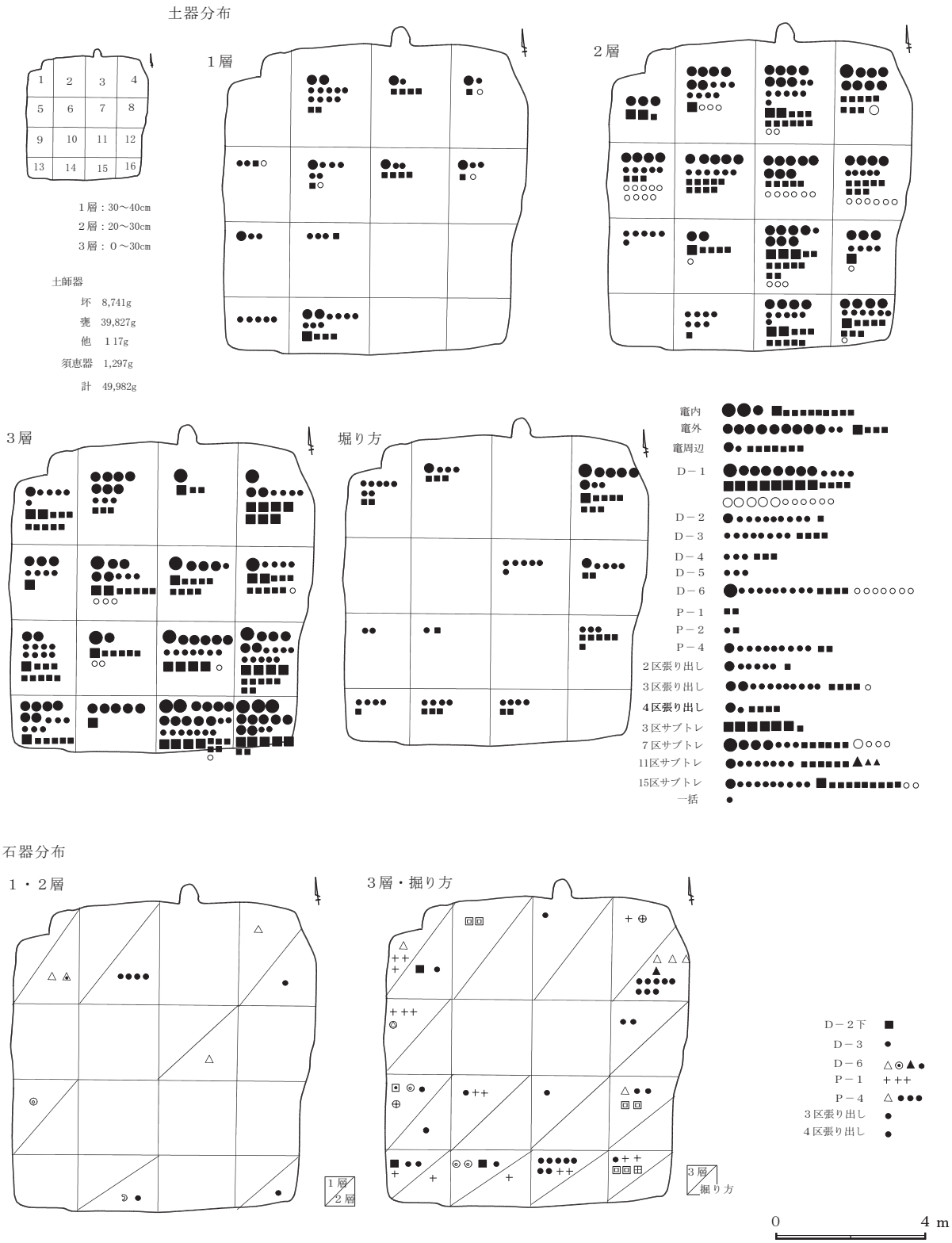
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R P	R B	Y P	炭	焼土	備考
H－42	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			Ⅲ層
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	※			
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×		※		
	4	暗褐色土層10YR	1＜4	○	○	×	×	×			
	5	褐色土層10YR	3＜5	○	○	×		※			
	6	褐色土層10YR	3＜6	○	○	※	×				
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	※	×	※	※	※	
	2	明褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	△	×	※	※	※	
	3	明褐色土層7.5YR	3＜2	○	○	△	×	※	※	※	
	4	橙色土層7.5YR	1＜4	○	○	◎	×	×	×	※	
	5	褐色土層7.5YR	1＜5	○	○	※	×	※	※	※	
	6	明赤褐色土層5YR	2＜6	○	○	◎	×	※	×	○	
	7	にぶい赤褐色土層5YR	7＜6	○	○	△	×	※	×	△	
	8	明赤褐色土層5YR	7＜8	○	○	△	×	※	×	○	
	9	明赤褐色土層2.5YR	8＜9	△	△	△	×	※	×	○	
	10	にぶい赤褐色土層5YR	10＜9	○	○	※	×	※	×	※	
	11	赤褐色土層5YR	11＜9	○	○	△	×	※	×	△	
	12	褐色土層7.5YR	11＜12	○	○	△	×	※	×	※	
D－1	1	暗褐色土層7.5YR		○	○		×		※	※	
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○		×	○	※	※	
	3	にぶい暗褐色土層10YR	1＜3	○	○	※	×	○	※	※	
D－2	1	褐色土層10YR		○	○	○	×		※	※	
	2	褐色土層10YR		○	○	△	△	○			粘土※
	3	黄褐色土層10YR	1＜2	△	○	○	○	◎		※	

第60図　H－42号住居址実測図（1）

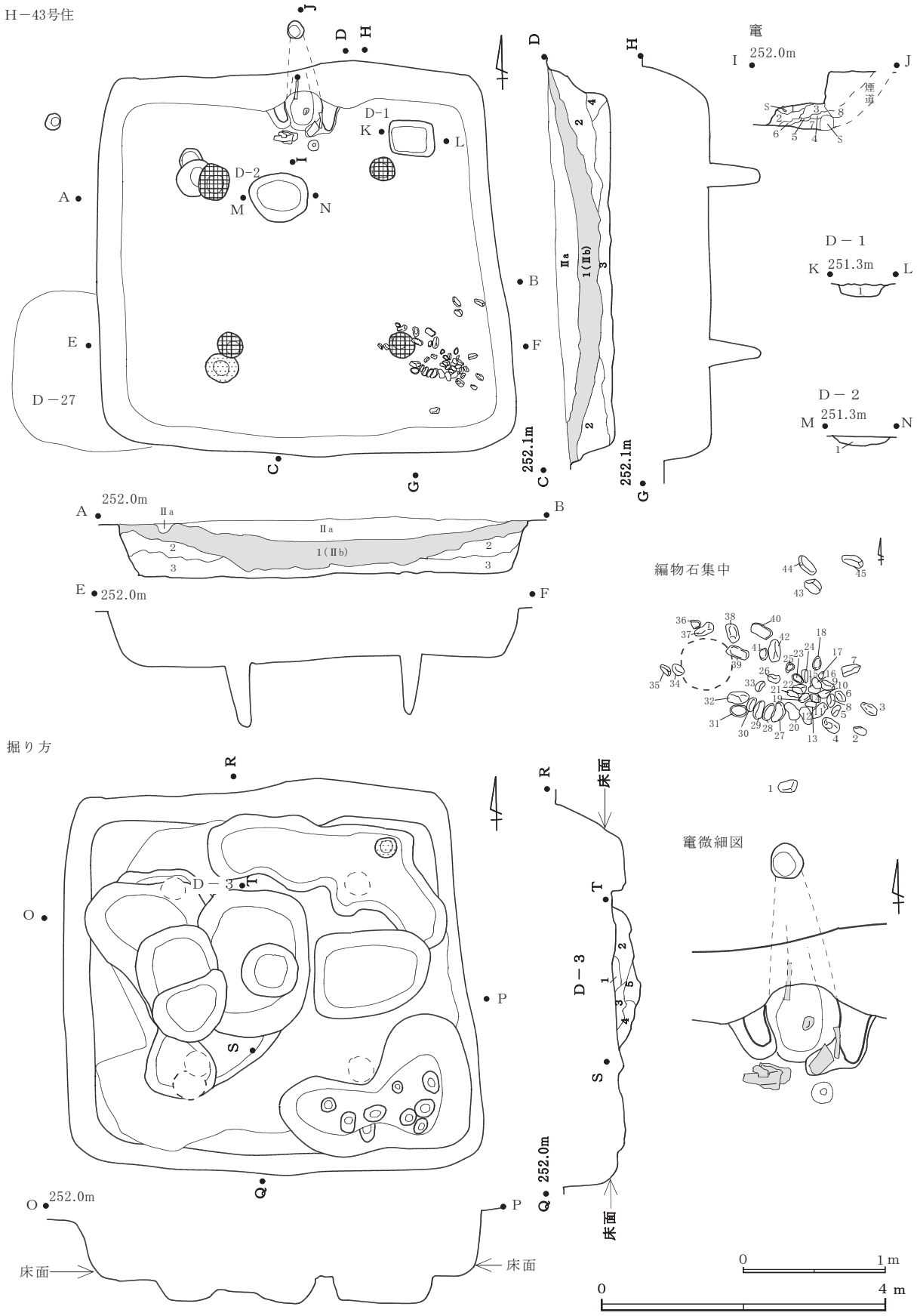


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
D－3	1	褐色土層10YR		○	○	△	※	○			
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	△	○	○	△	◎			
D－4	1	褐色土層10YR		○	○	○	※	△			
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	△	○	○	※	◎			
9区掘り方	1	褐色土層10YR		○	○	△	△	△			

第61図　H－42号住居址実測図（2）



第62図　H－42号住居址実測図（3）

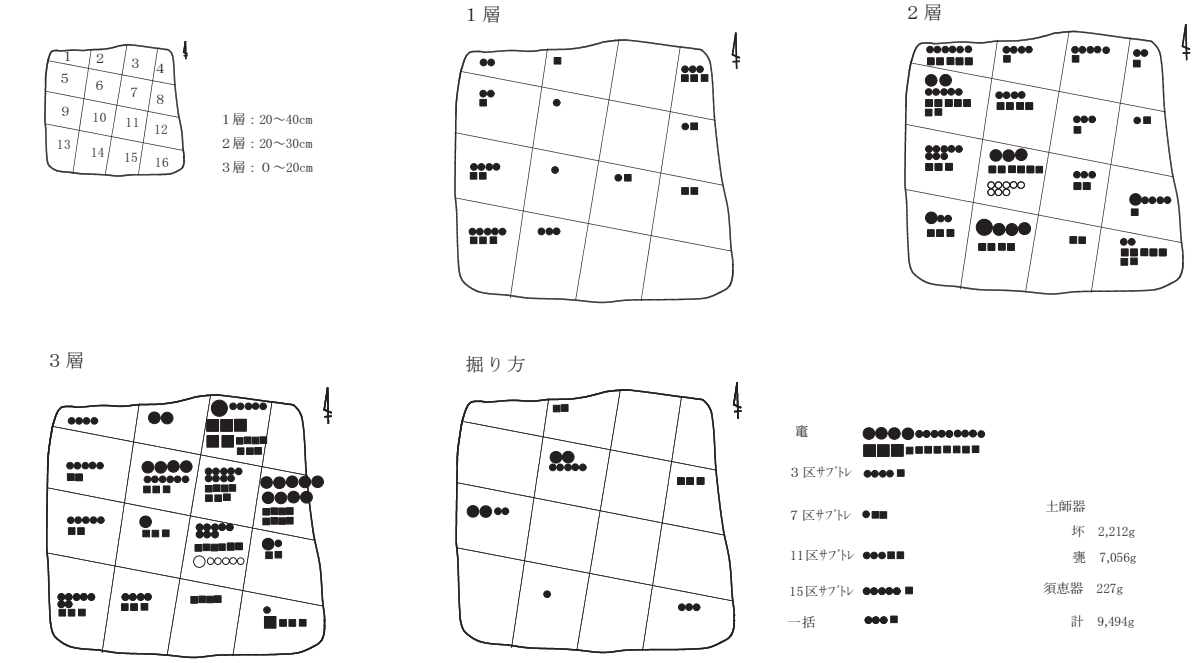


第63図　H－43号住居址実測図（1）

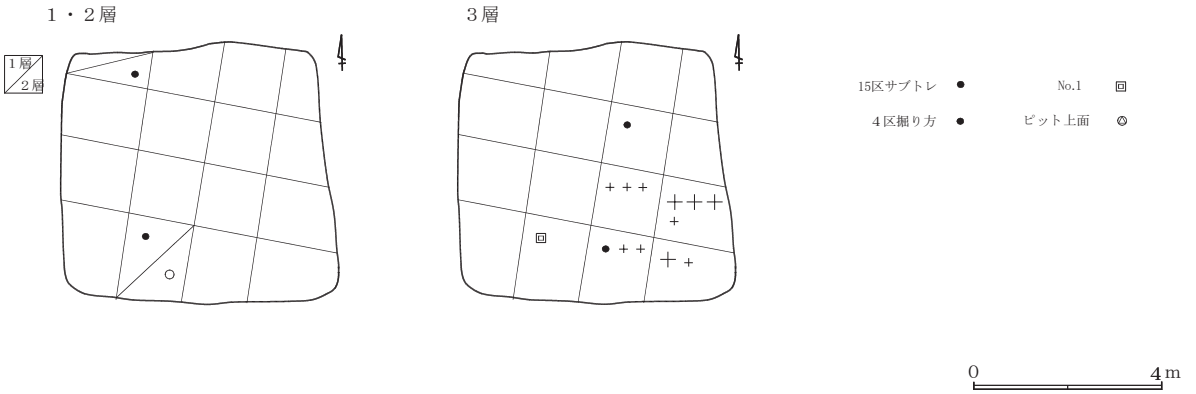
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
H－43	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			Ⅱb
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	×			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	※			
	4	黄褐色土層10YR	2＜4	○	○	◎	×	※			竈
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	△	×	△	※	※	
	2	褐色土層7.5YR	2＜1	○	○	△	×	△	※	×	
	3	明褐色土層7.5YR	1＜3	○	○	◎	×	△	×	※	
	4	赤褐色土層5YR	4＜3	△	○	○	×	※	×	△	
	5	明赤褐色土層5YR	4＜5	△	△	△	×	※	×	○	
	6	赤褐色土層5YR	2＜6	○	○	○	×	※	×	△	
	7	明赤褐色土層2.5YR	4＜7	△	○	○	×	※	×	○	
	8	褐色土層7.5YR	8＜7	○	○	×	×	×	×	※	

遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
D－1	1	褐色土層10YR		○	○	○	※	○	※	×	
D－2	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	△	※		
D－3	1	暗褐色土層10YR		○	○	△	×	△			
	2	褐色土層10YR	1＜2		○	○	△	○			
	3	褐色土層10YR	1＜3	○	○	△	×	△			
	4	黄褐色土層10YR	3＜4	△	○	○	△	◎			
	5	黄橙色土層7.5YR	5＜4	○	○	◎	×	△			

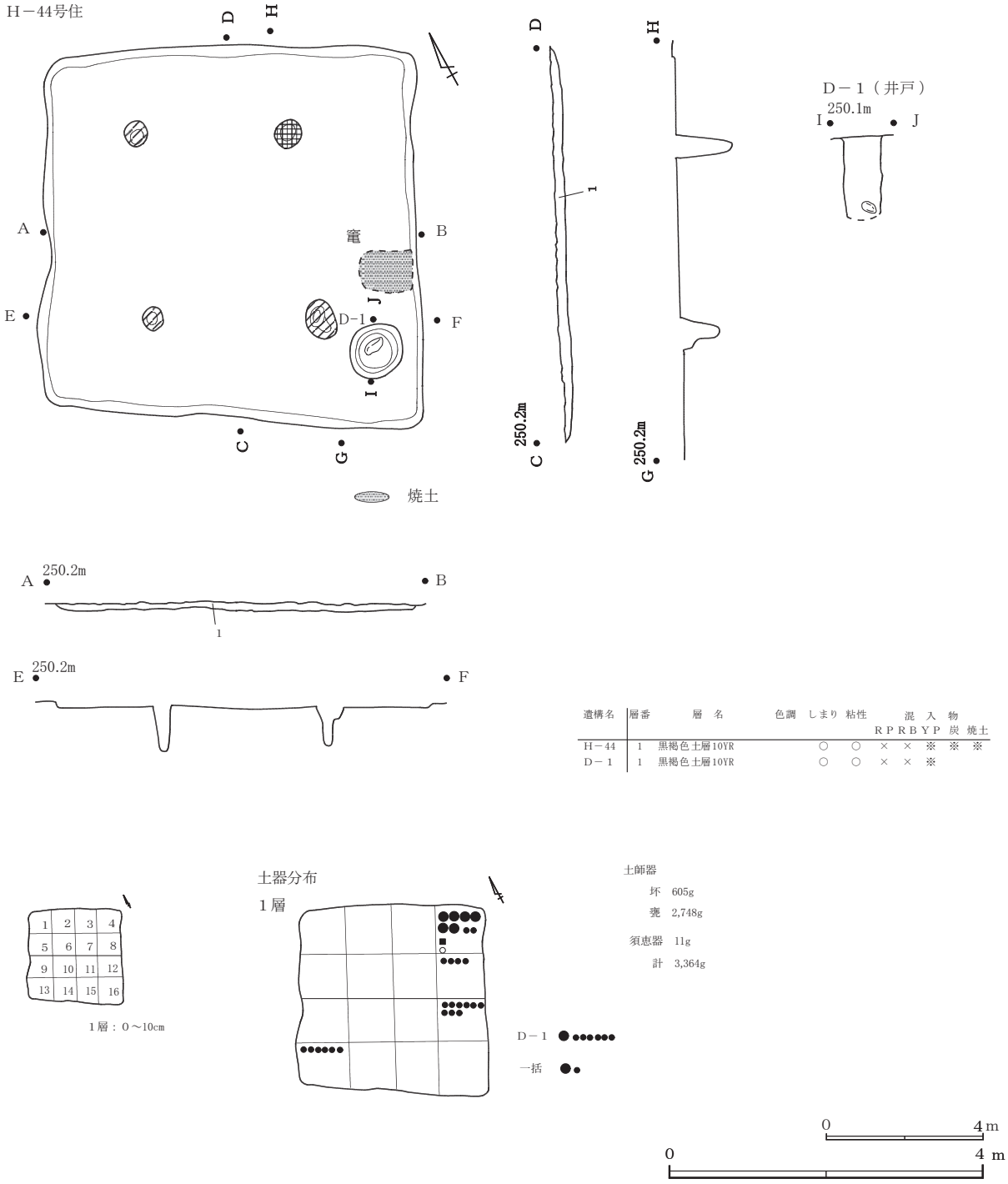
土器分布



石器分布

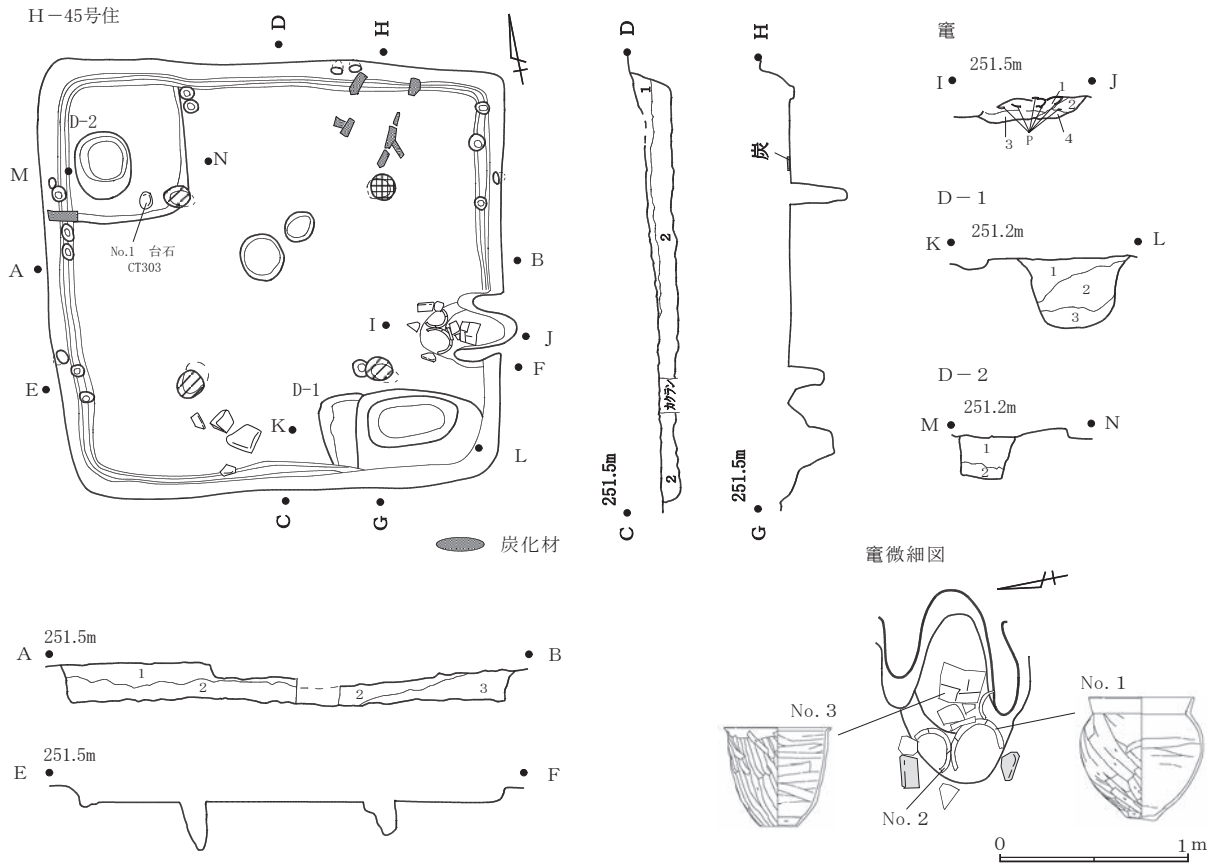


第64図　H－43号住居址実測図（1）



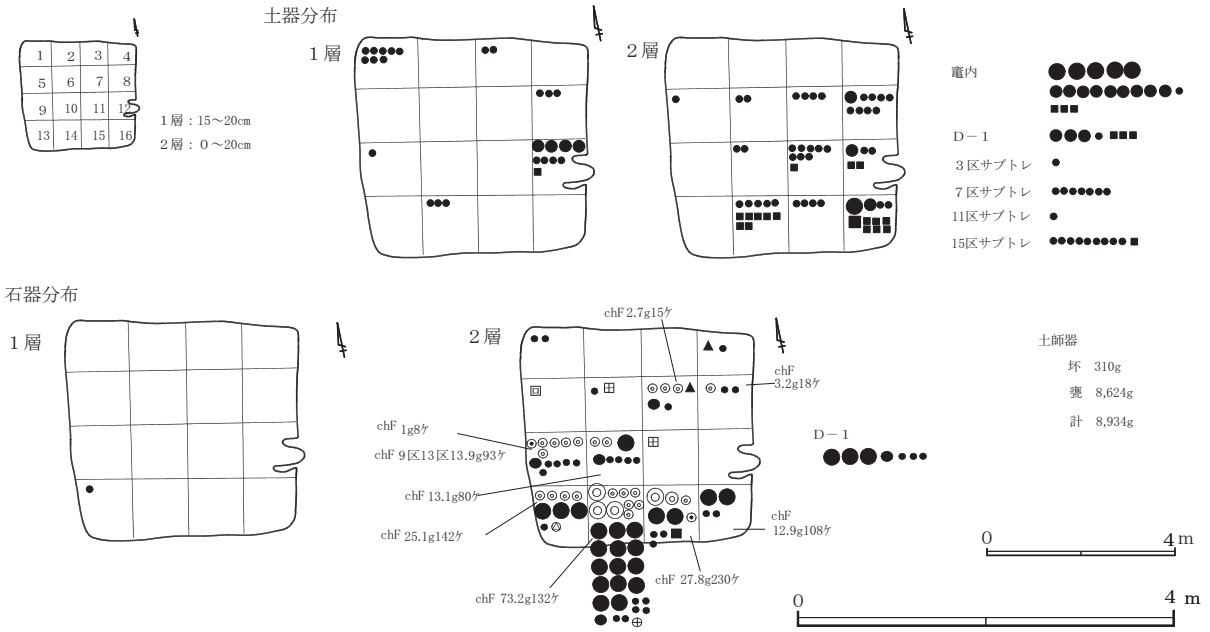
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－44	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※	※	※
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※		

第65図　H－44号住居址実測図

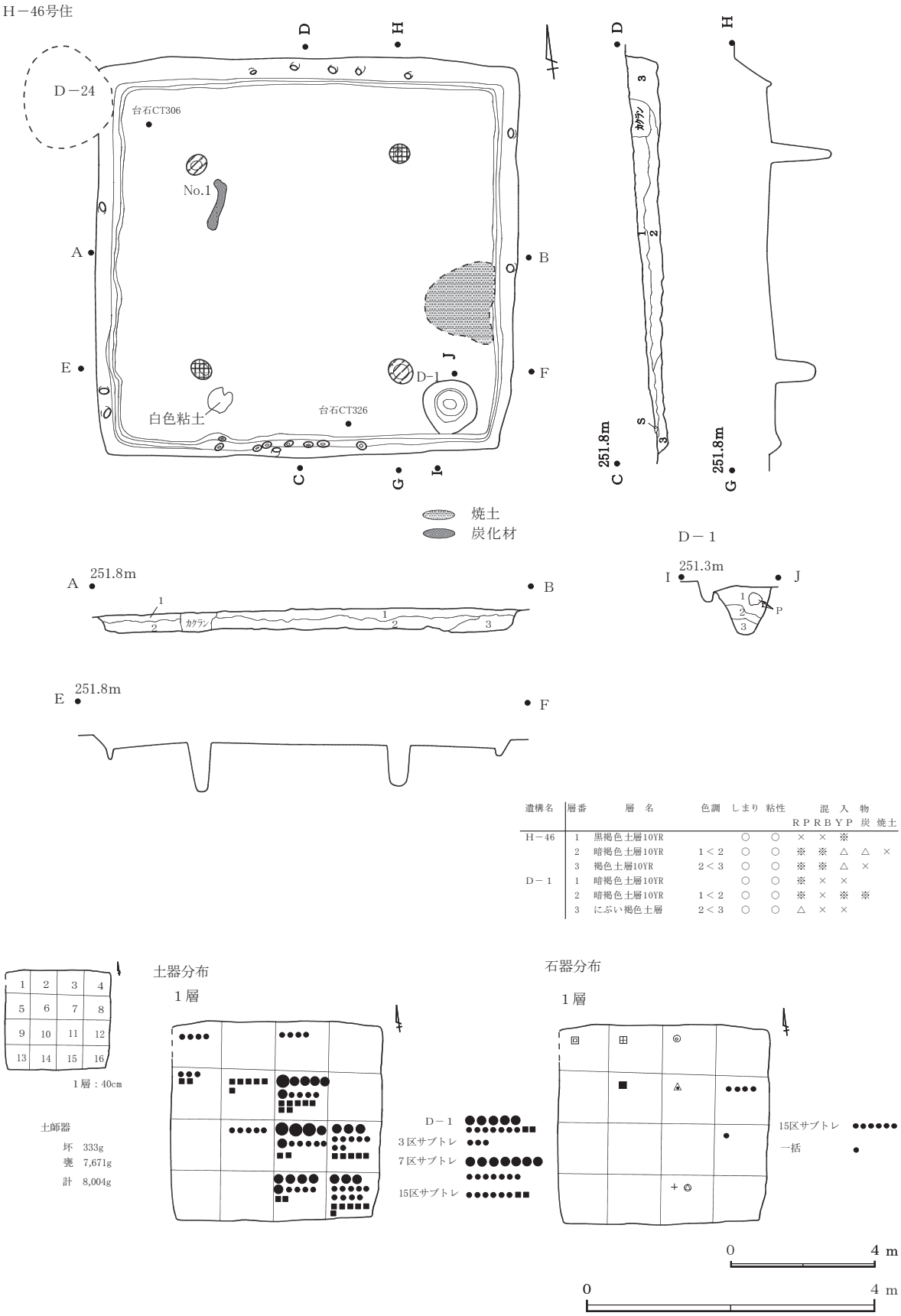


遺構名	層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－45	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	×	※		
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	△	△		
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	△	※	※
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	△	×	※	※	※
	2	暗褐色土層7.5YR	2＜1	○	○	※	×	×	×	※
	3	赤褐色土層5YR	1＜3	○	○	○	×	×	※	△
	4	赤褐色土層7.5YR	2＜4	○	○	※	×	※	×	※

遺構名	層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	※	△		
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	△	△		
	3	黄褐色土層10YR	2＜3	○	○	○	※	△		
D－2	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	△	※	
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	※	△	×	

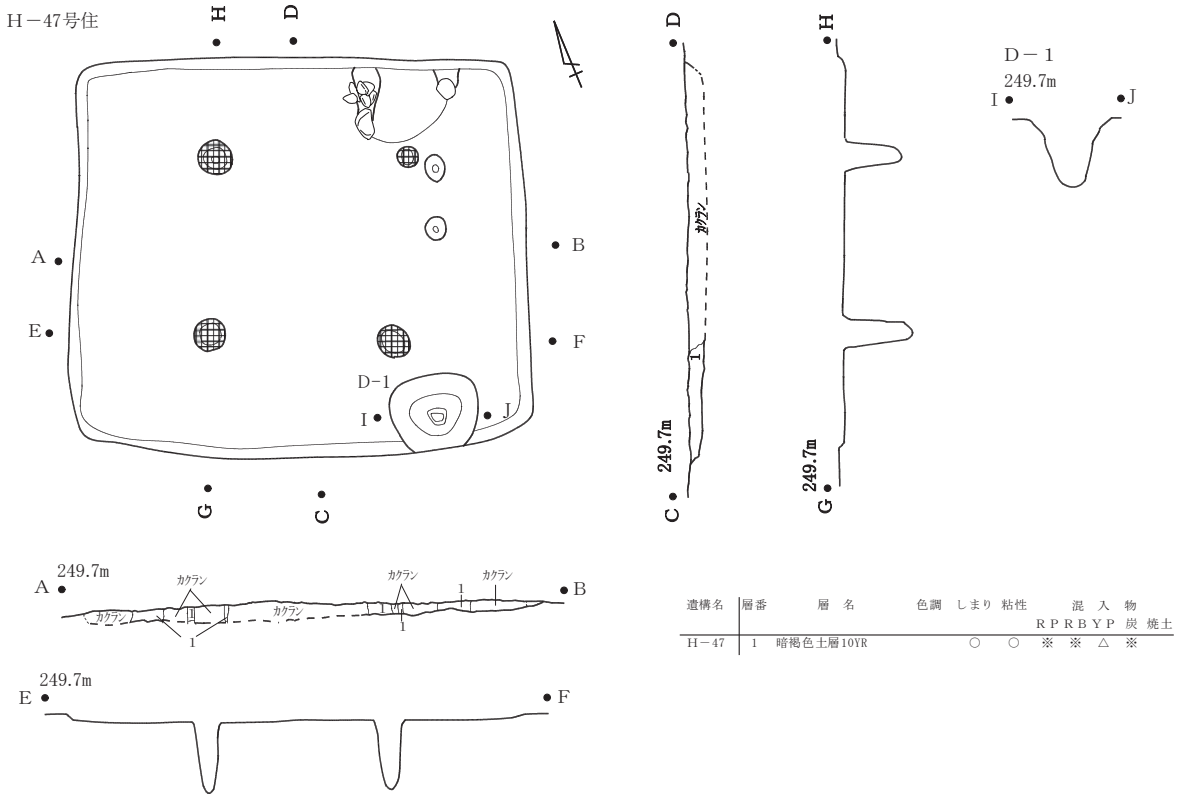


第66図　H－45号住居址実測図

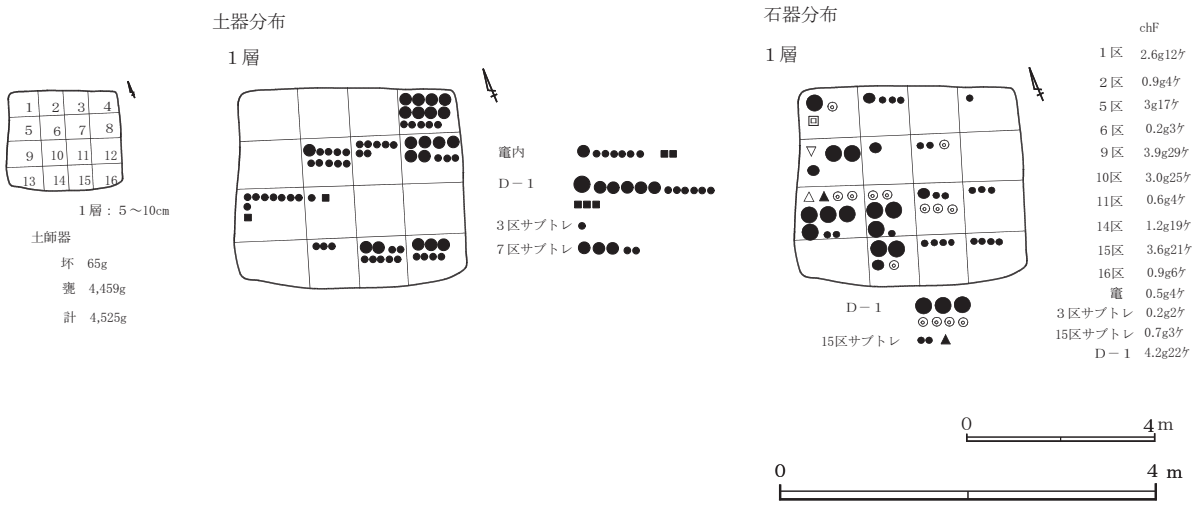


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－46	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	△	△	×
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	△	×	
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	×		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※	※	
	3	にぶい褐色土層	2＜3	○	○	△	×	×		

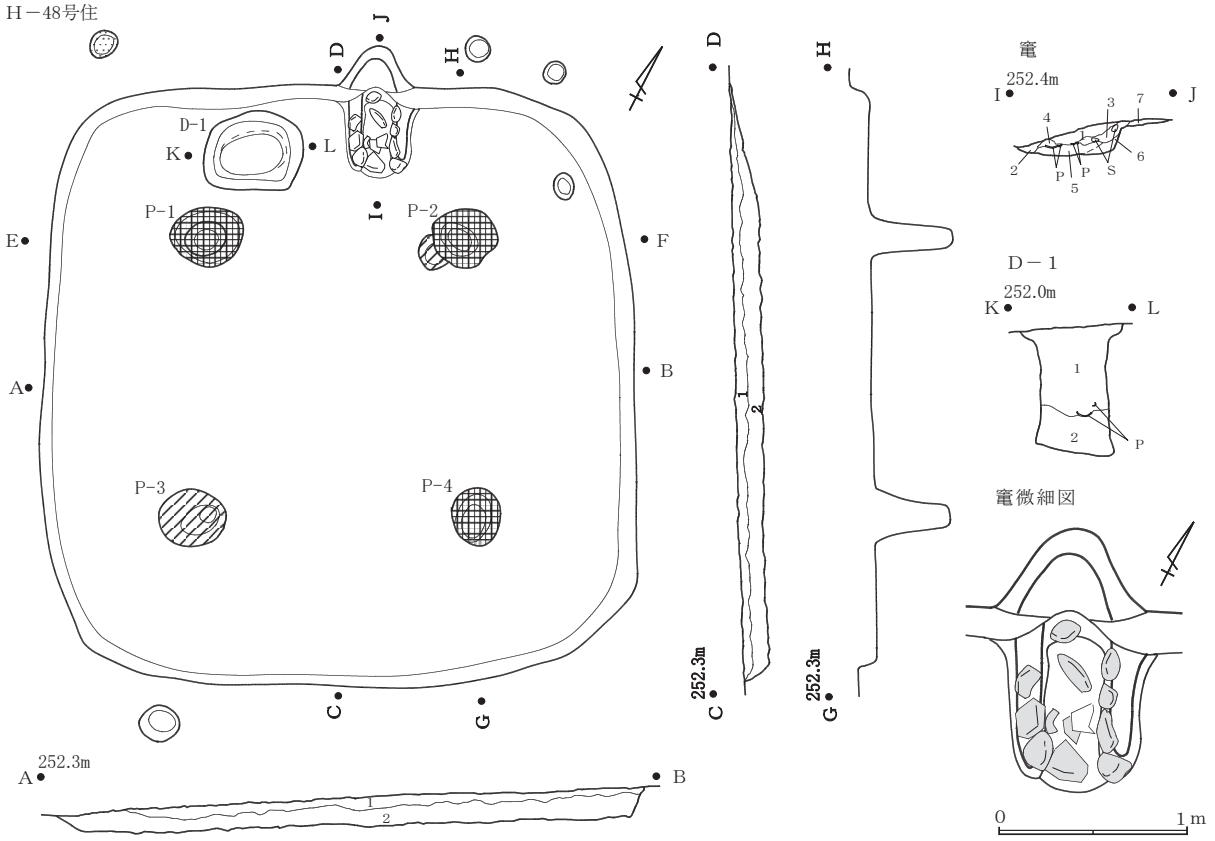
第67図　H－46号住居址実測図

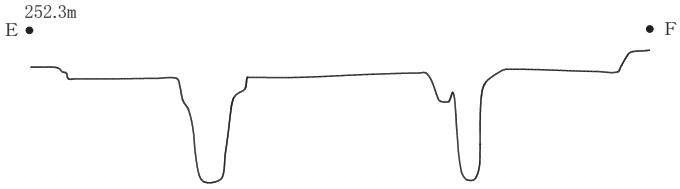


遺構名	層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 RPRBYP	炭	焼土
H－47	1	暗褐色土層10YR		○	○	※ ※ △	※	

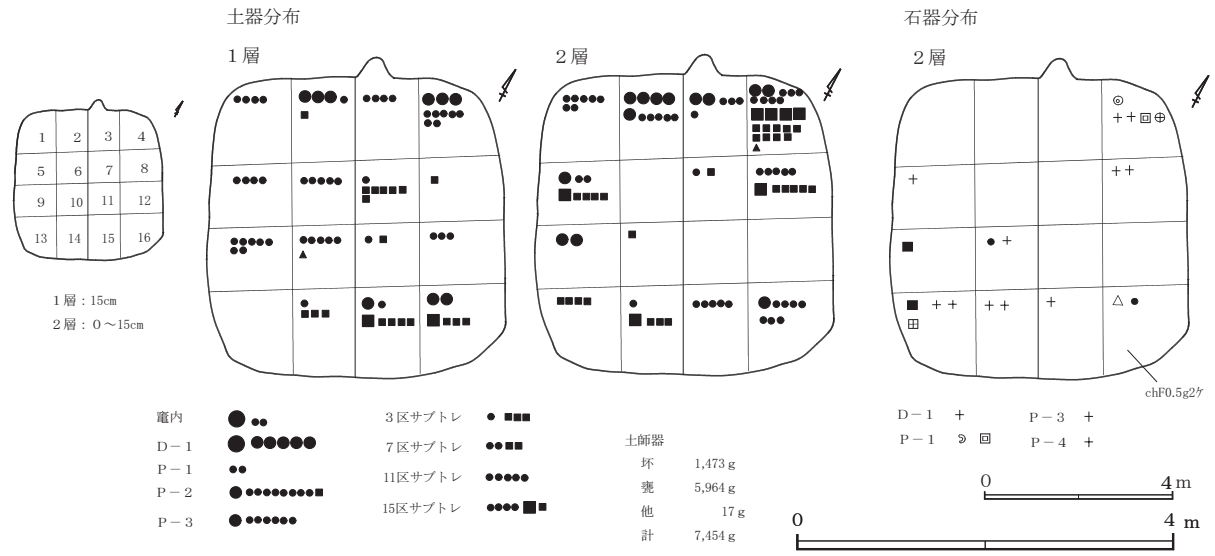


第68図　H－47号住居址実測図

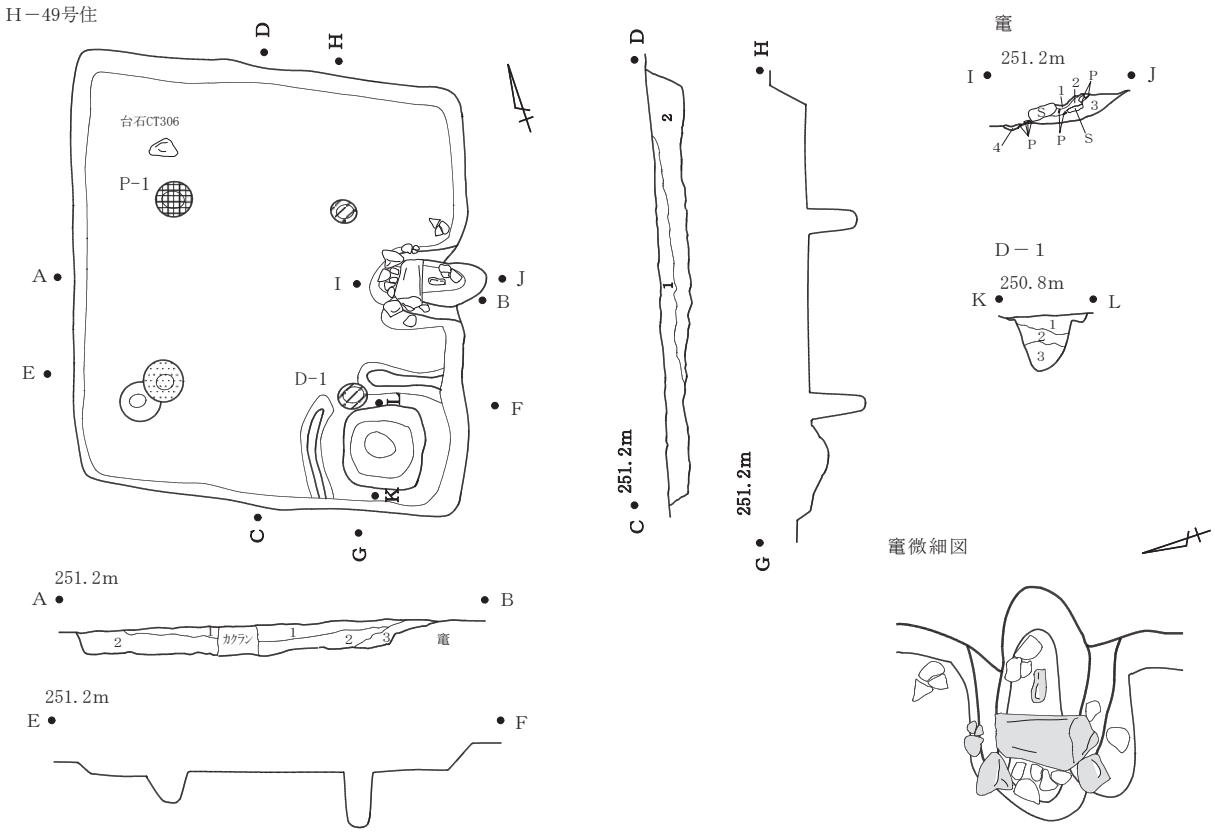




遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－48	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※	×	
竈	1	褐色土層7.5YR		○	○	△	×	※	※	※
	2	褐色土層10YR	2＜1	○	○	△	×	×	×	×
	3	明褐色土層7.5YR	1＜3	○	○	○	×	※	※	※
	4	にぶい黄褐色土層10YR	1＜4	○	○	○	×	×	×	×
	5	暗赤褐色土層5YR	1＜5	○	○	△	×	×	※	△
	6	褐色土層7.5YR	6＜5	○	○	△	×	※	※	※
	7	褐色土層7.5YR	7＜8	○	○	※	×	×	×	※
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	※	※	
	2	黄褐色土層10YR	1＜2	△	△	◎	×	◎		

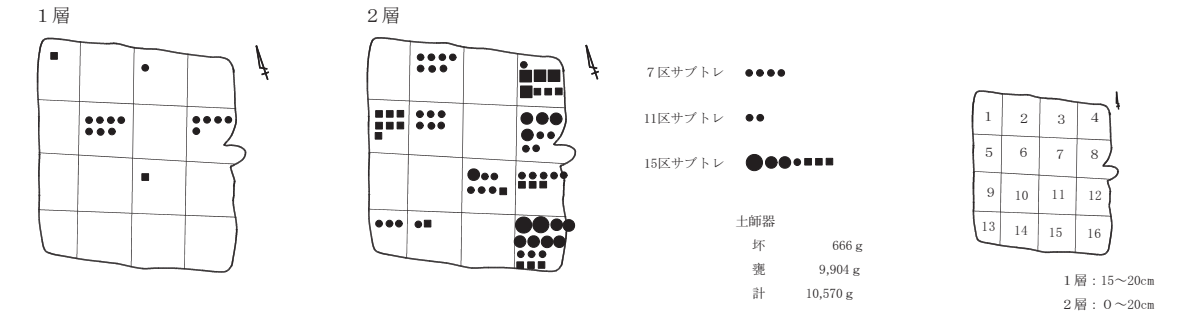


第69図　H－48号住居址実測図

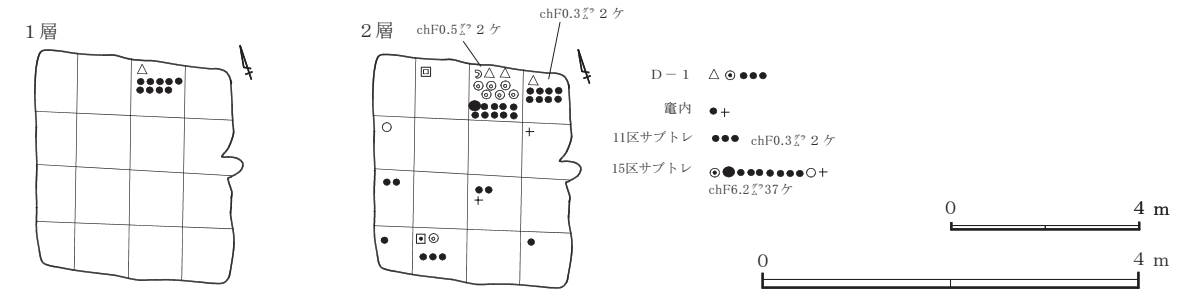


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
H－49	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	×		
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	×	×	×	※	
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	×	※	※
竈	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	※	×	×	×	×
	2	にぶい褐色土層7.5YR	1＜2	○	○	※	×	×	×	×
	3	暗褐色土層7.5YR	3＜2	○	○	※	×	※	※	※
	4	暗褐色土層7.5YR	1＜4	○	○	※	×	×	×	※
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※	×	×	※	
	2	暗褐色土層10YR	2＜1	○	○	※	×	×	※	
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	△	×	×	※	

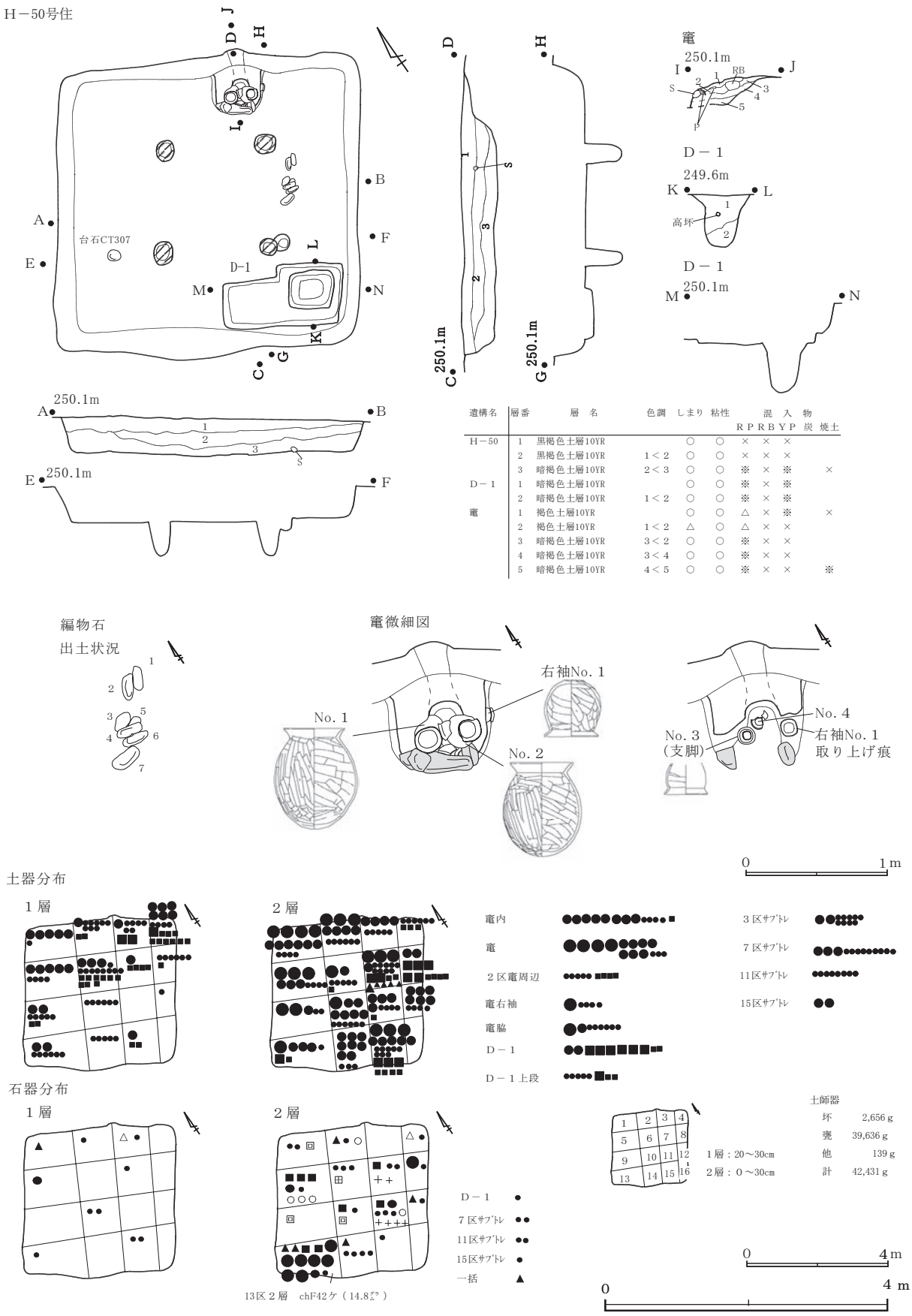
土器分布



石器分布

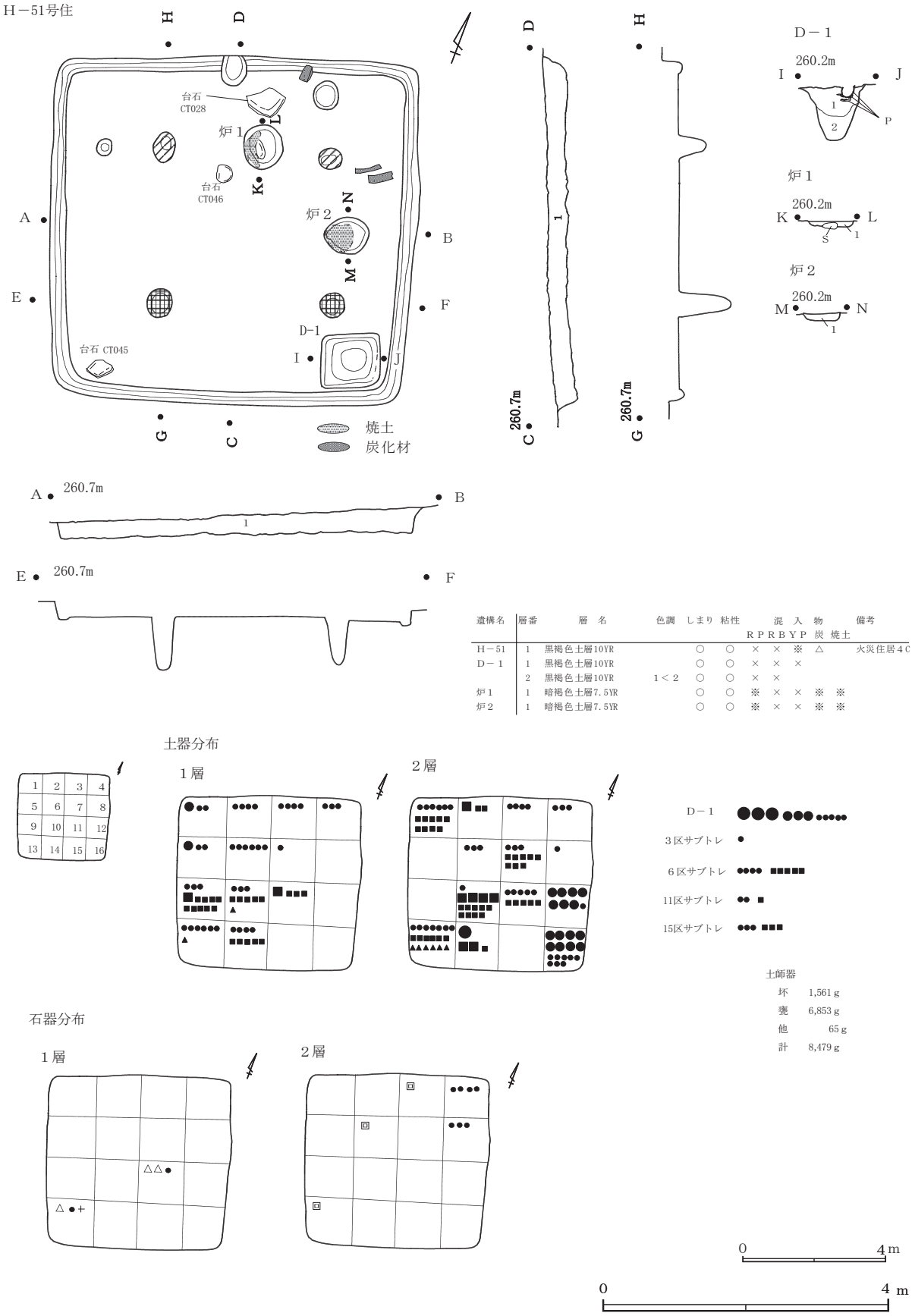


第70図　H－49号住居址実測図



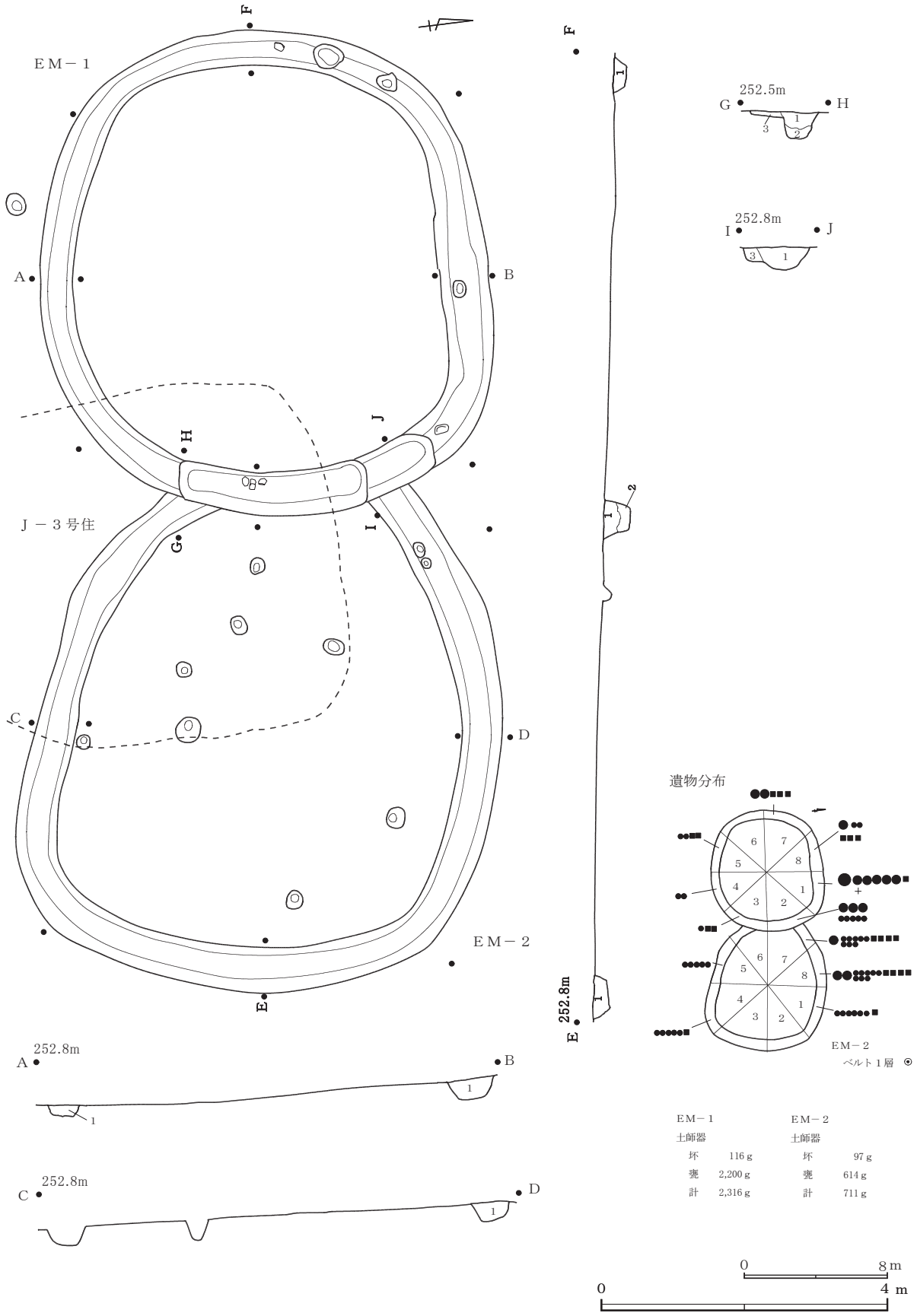
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R	P	R	B	Y	P	炭	焼土
H－50	1	黒褐色土層10YR		○	○	×		×	×	×			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×		×	×	×			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※		×	×	※			×
D－1	1	暗褐色土層10YR		○	○	※		×	×	※			
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※		×	×	※			
竈	1	褐色土層10YR		○	○	△		×	×	※			×
	2	褐色土層10YR	1＜2	△	○	△		×	×	×			
	3	暗褐色土層10YR	3＜2	○	○	※		×	×	×			
	4	暗褐色土層10YR	3＜4	○	○	※		×	×	×			
	5	暗褐色土層10YR	4＜5	○	○	※		×	×	×			※

第71図　H－50号住居址実測図

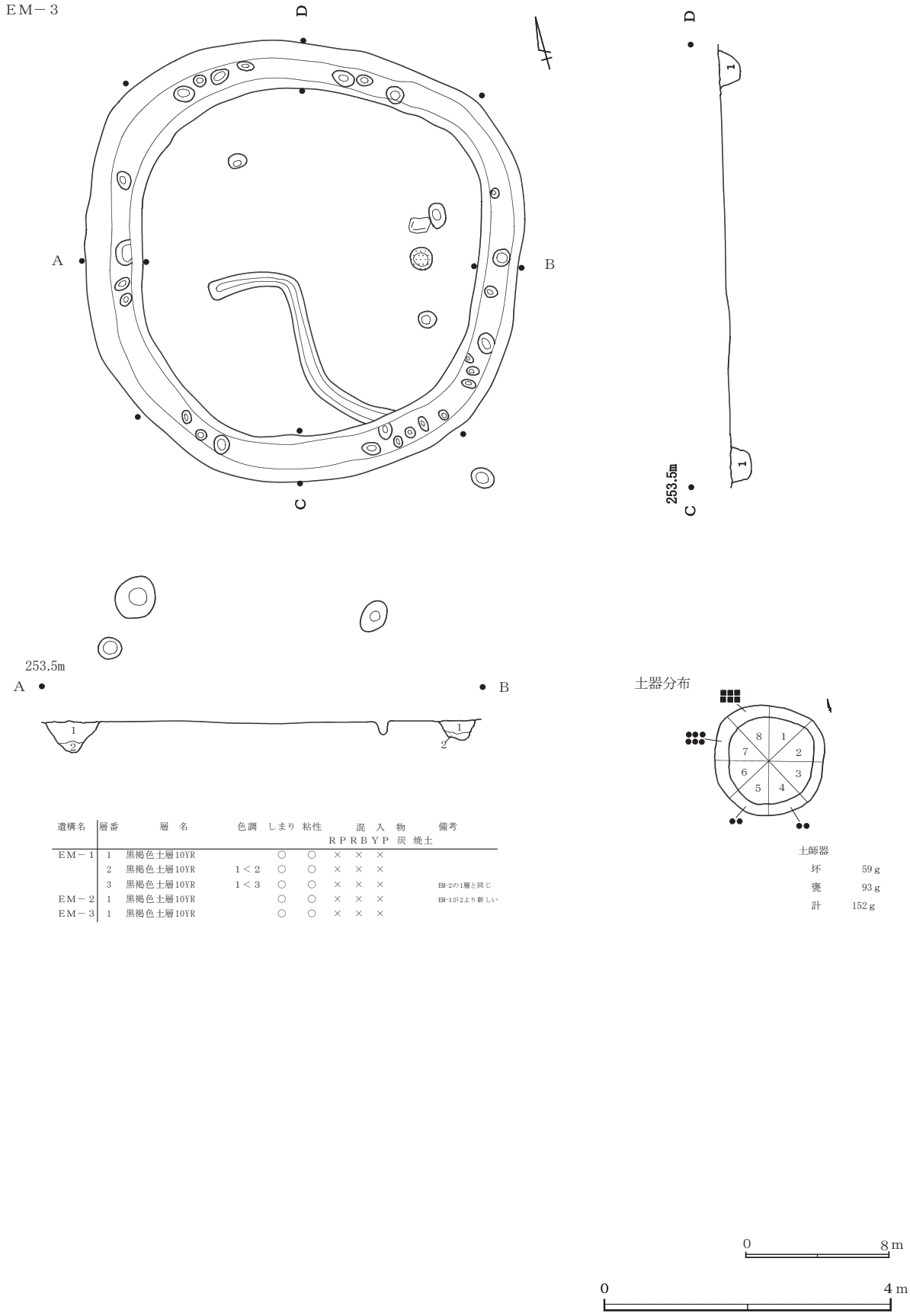


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 R	P	R	B	Y	P	炭	焼土	備考
H－51	1	黒褐色土層10YR		○	○	×		×		※		△		火災住居4C
D－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×		×		×				
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×		×						
炉1	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	※		×		×		※	※	
炉2	1	暗褐色土層7.5YR		○	○	※		×		×		※	※	

第72図　H－51号住居址実測図



第73図　ＥＭ－１号・ＥＭ－２号円形周溝状遺構実測図

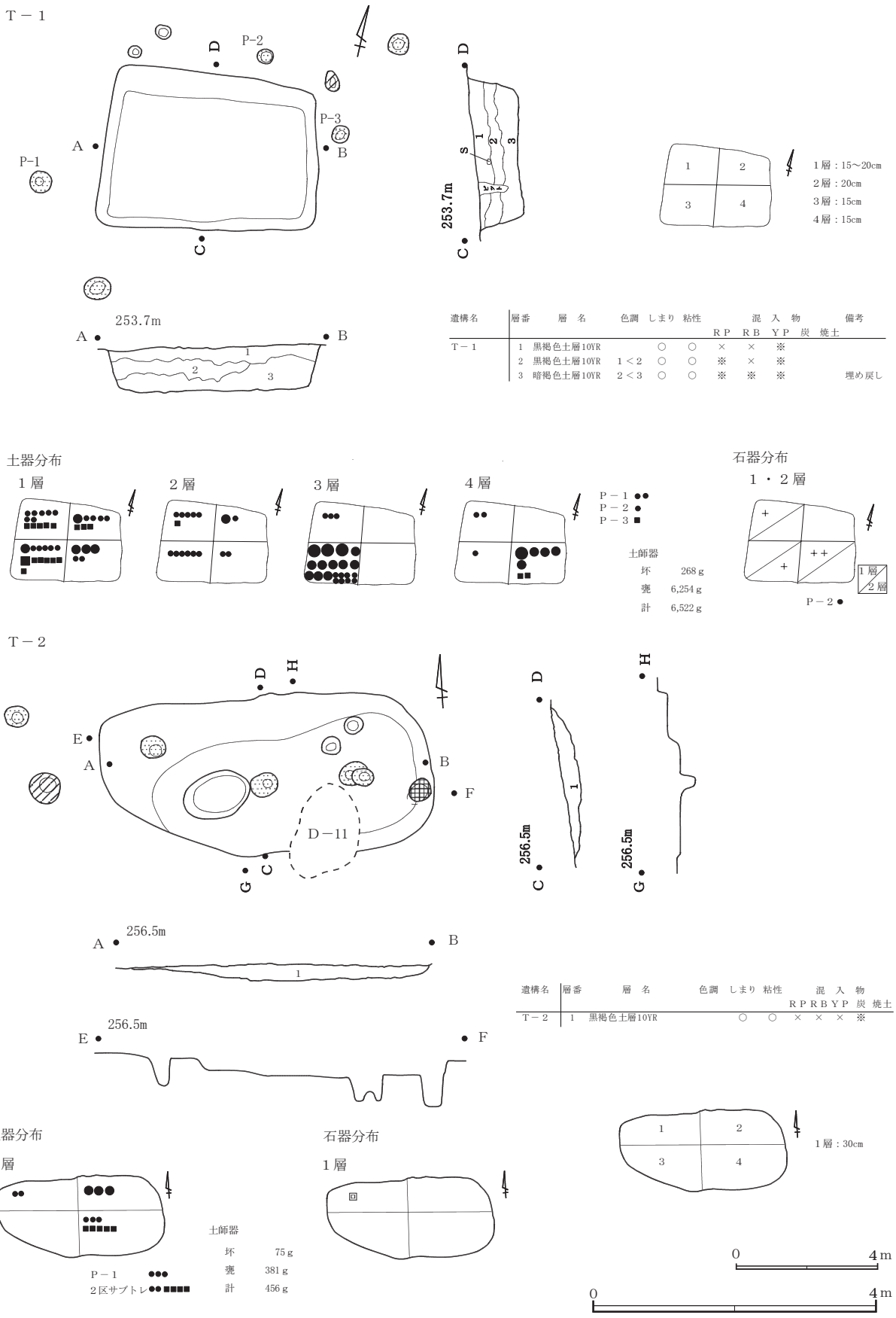


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
EM－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	×			
	3	黒褐色土層10YR	1＜3	○	○	×	×	×			EM-2の1層と同じ
EM－2	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			EM-1が2より新しい
EM－3	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			

土師器

坏	59 g
甕	93 g
計	152 g

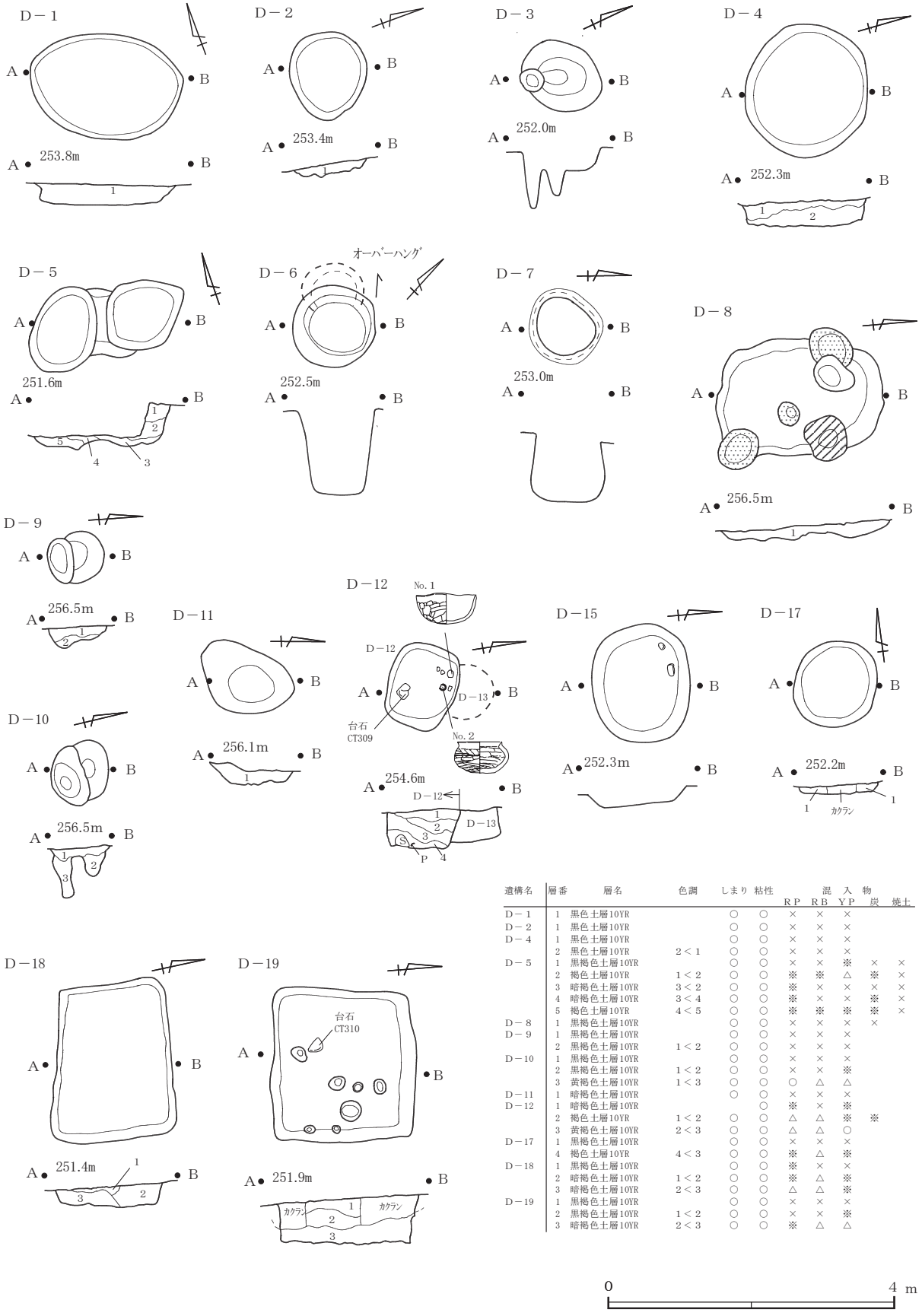
第74図　ＥＭ－３号円形周溝状遺構実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
T－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※			
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	×	※			
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	※	※			埋め戻し

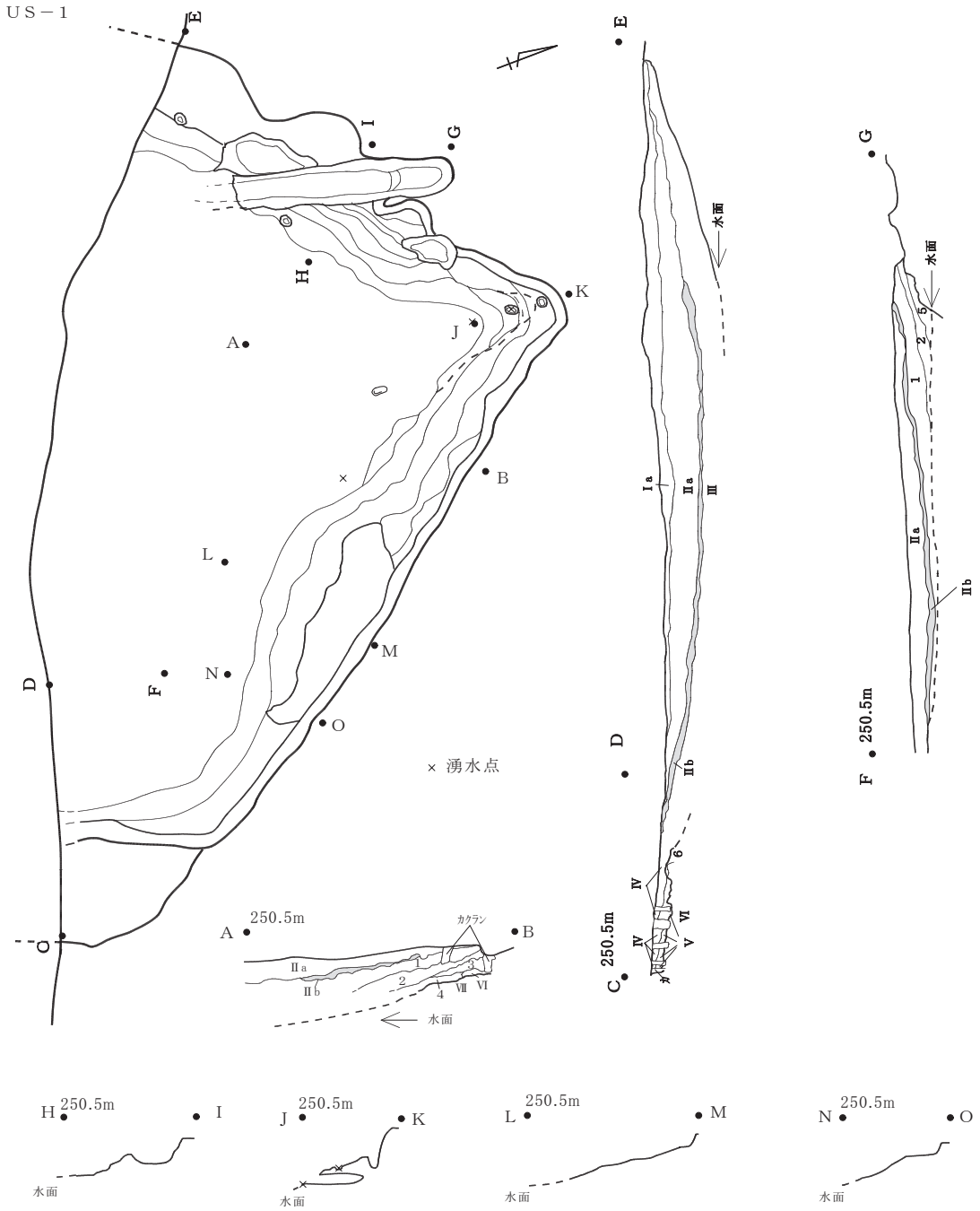
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
T－2	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		※

第75図　T－1号・T－2号竪穴状遺構実測図



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
D－1	1	黒色土層10YR		○	○	×	×	×		
D－2	1	黒色土層10YR		○	○	×	×	×		
D－4	1	黒色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒色土層10YR	2＜1	○	○	×	×	×		
D－5	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	※	×	×
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	※	△	※	×
	3	暗褐色土層10YR	3＜2	○	○	※	×	×	×	×
	4	暗褐色土層10YR	3＜4	○	○	※	×	×	※	×
	5	褐色土層10YR	4＜5	○	○	※	※	※	※	×
D－8	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	
D－9	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	×		
D－10	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	※		
	3	黄褐色土層10YR	1＜3	○	○	○	△	△		
D－11	1	暗褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
D－12	1	暗褐色土層10YR			○	※	×	※		
	2	褐色土層10YR	1＜2	○	○	△	△	※	※	
	3	黄褐色土層10YR	2＜3	○	○	△	△	○		
D－17	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	4	褐色土層10YR	4＜3	○	○	※	△	※		
D－18	1	黒褐色土層10YR		○	○	※	×	×		
	2	暗褐色土層10YR	1＜2	○	○	※	△	※		
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	△	△	※		
D－19	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	※		
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	△	△		

第76図　土坑実測図

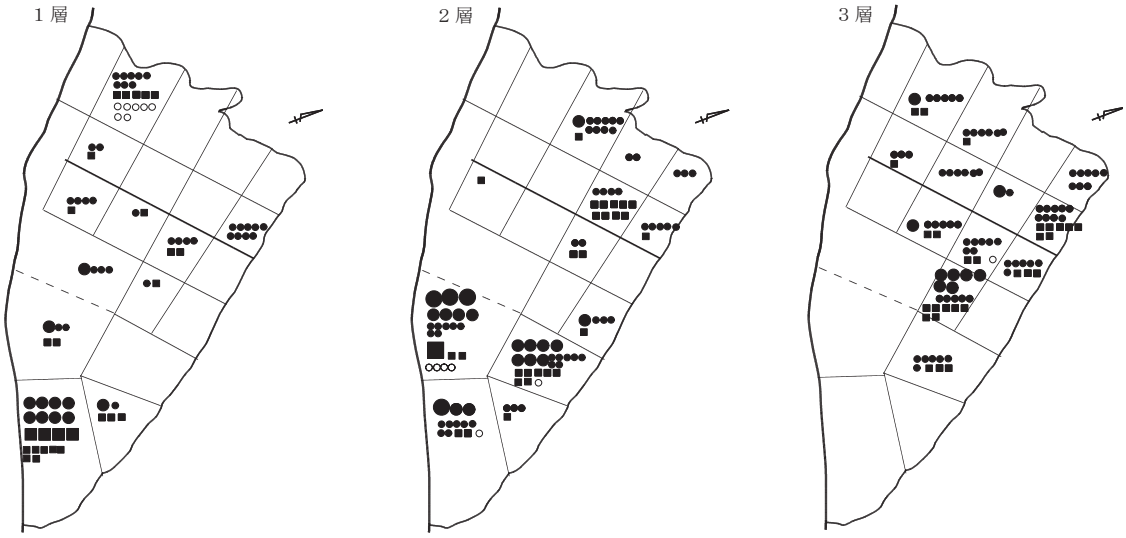


遺構名	層番	層　名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
US－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×		
	2	黒褐色土層10YR	1＜2	○	○	×	×	※		
	3	褐色土層10YR	2＜3	○	○	△	△	△		
	4	褐色土層10YR	3＜4	○	○	△	△	○		
	5	黒褐色土層10YR	2＜5	○	○	×	×	※		
	6	褐色土層10YR	1＜6	○	○	※	※	※		

0　　4m

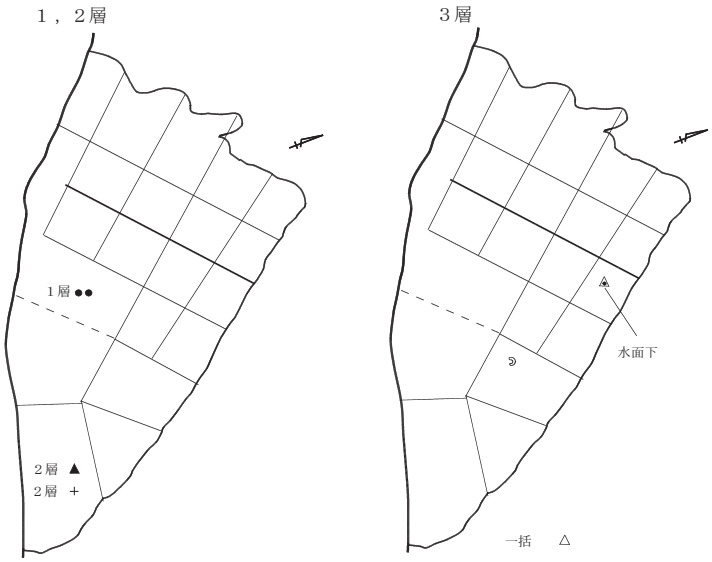
第77図　ＵＳ－１号溜池実測図（１）

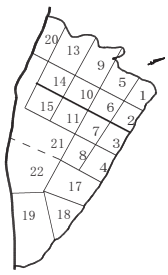
土器分布



土師器	
坏	3,474
甕	14,395 g
須恵器	205g
計	18,074 g

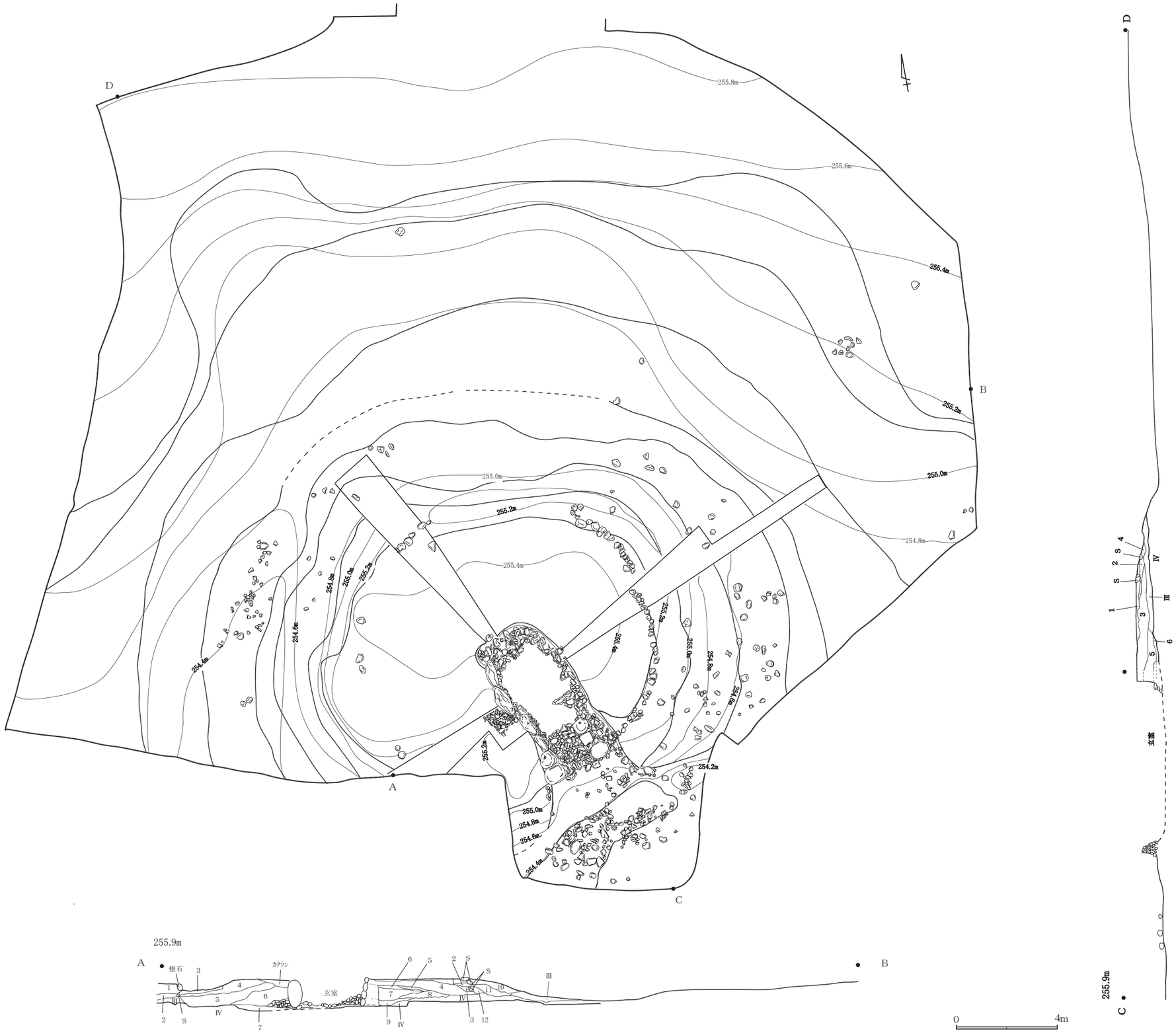
石器分布





0 8m

第78図　ＵＳ－１号溜池実測図（２）



第79図　K－1号古墳全体図

６．古墳（第79図～81図）

Ｄ区において、斜面に構築された終末期古墳の一部が検出された。古墳は約２／３検出し、南側は道路及び畑の区画によって削平されていた。検出した遺構は墳丘、墳丘前庭部、周堀、古墳主体部である。

墳丘

規模は直径約15m、やや不整形となる円墳である。墳丘上部は耕作によって水平に削平されていた。石質入口部と繋がる根石が確認された。西側部分では遺存状態は良好であったが、かなりの範囲で根石が欠落していた。墳丘斜面及び周堀内に崩れた根石が確認された。根石の大きさは人頭大程の安山岩である。墳丘内部まで根石が埋め込まれている部分も認められた。根石部分を境として墳丘は二段であった可能性が推定される。

墳丘前庭部

前庭部は石室開口部より「ハ」の字状に開いていた。この部分には周堀はなく、張り出し状となっていた。この部分では、一部撹乱の影響を受けていたが、配石状に礫が並んだ状態を確認した。

周堀

周堀は、地山を掘削して周堀は造られていた。古墳自体が斜面にあるため、周堀の幅は一定ではなく、深さも浅い。周堀底面の一部には根石の一部が崩れ落ちていた。

主体部

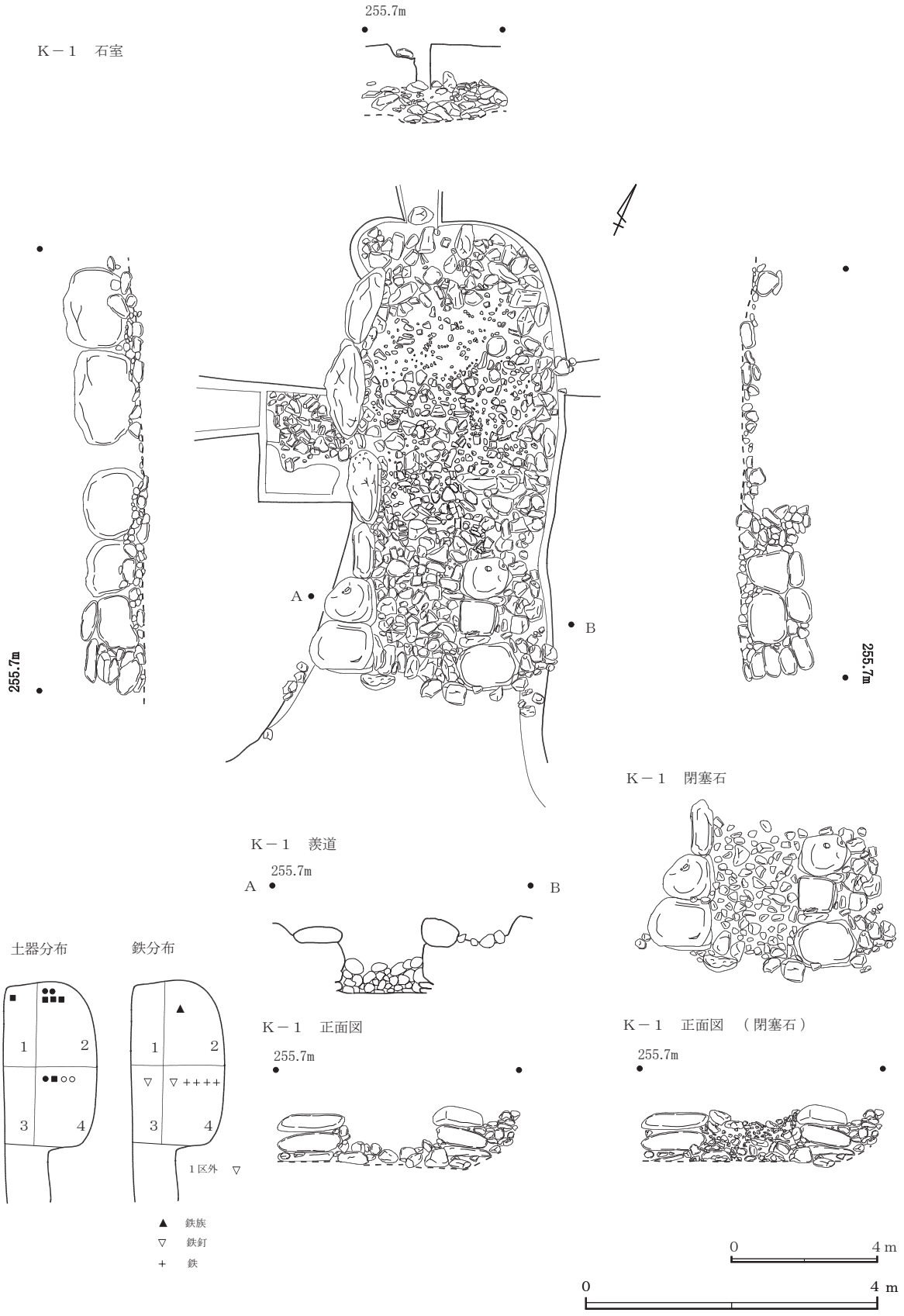
撹乱により状態が良好ではなかったが、南に開口する片袖型の横穴式石室である。長軸（入口から奥壁裏）約６ｍ（推定）、最大幅約４ｍ（裏込め部分）である。羨道部分は長さ1.6m、幅1.1m、玄室長さ3.8mである。正面と羨道には閉塞石が確認された。左右の壁は非対称で、正面左側が、大形礫を１枚ずつ直線状に並べているのに対して、右側は礫が積まれた状態であった。奥壁は除去され、裏込めの礫のみが検出された。壁礫は全て安山岩の自然石である。左壁には裏込めが確認されたが、右壁では確認されなかった。

遺物出土状況

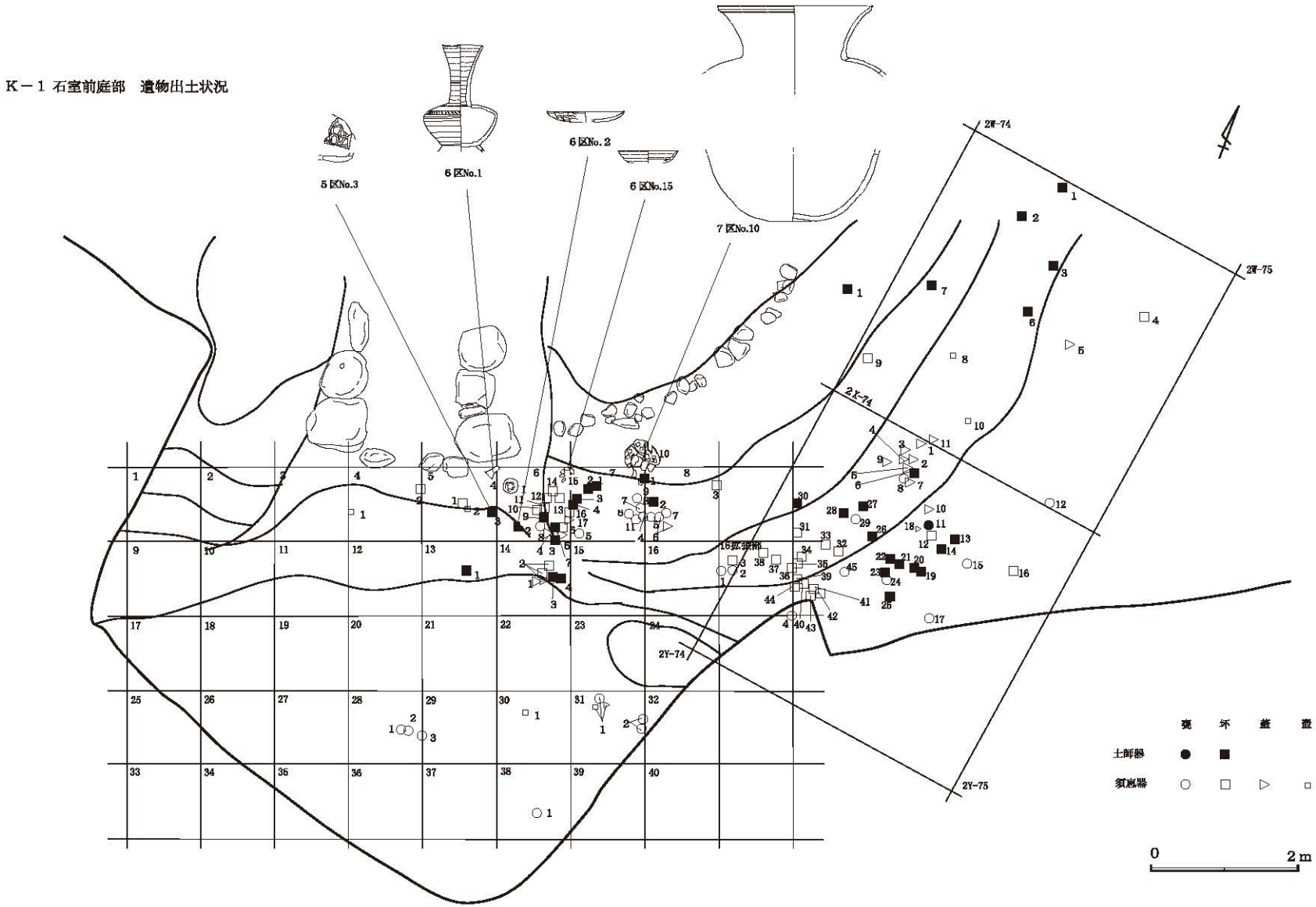
古墳出土の遺物は、墳丘前庭部、周堀、主体部から出土した。前庭部では石室入口右側脇で遺物が集中して出土した。入口部分では須恵器の長頸壺が置かれた状態で出土した。また、根石のある中段で須恵器大甕が潰れた状態で出土した。周堀部分でも多数の遺物が出土したが、全て土器破片である。出土した土器は、土師器の坏、須恵器の坏、蓋（環状摘）、甕、長頸壺で、その年代は、７世紀後半から８世紀前半に帰属する。

石室からは、土師器片、鉄製品が少数出土したが、撹乱により原位置を留めている遺物は皆無であった。すべて浅間Ａ軽石で石室が覆われた撹乱層からの出土である。石室内の遺物のほとんどは持ち出されている状態であった。

（井上慎也）



第80図　K－1号古墳石室実測図



第81図　K－1号古墳遺物出土状況

（２）遺物（第83図～130図）

１．土師器・須恵器（第82図～第111図・第２表）

住居址等の遺構から中期後半から後期前半と終末期（律令期）にかけての土器群が検出された。土師器は全ての住居址で出土したが、須恵器については一部の住居址、古墳で少数出土した。住居址出土の土器には、出土状況によって覆土中、床面直上、竈や貯蔵穴等の住居内施設に分けられ、覆土中の土器を除き、土器群としての一括性が認められた。

土師器の器種は坏（内斜口縁、口縁内湾、須恵器模倣坏）、高坏、鉢、坩、壺、小形甕、台付甕、甕（胴部球状及び長胴化）、甑、鍋、ミニチュア土器（手捏土器）であり、ほとんどの器種が出揃っている。須恵器の器種は坏、坏蓋、瓮、甕、長頸壺である。器種組成では坏、高坏、小形甕、甕、甑が基本セットとなり、これに他の器種やミニチュア土器が複数共伴する傾向が認められた。ミニチュア土器には器種・用途が不明も含まれ、多数出土する住居址の存在は特徴的である。なお、当該期に組成する韓式土器については注意して土器分類を行ったが、本遺跡では確認できなかった。須恵器はＨ－38号・42号住居址で完形品が少数出土した以外は、覆土出土で小破片のみであり、客体的な組成状況である。

出土土器については、復元率によってＡ（80％以上の復元率で完形に近い状態で、一部が欠損したものも含む）、Ｂ（50％以上の復元率で、器形が判別できる状態の土器）、Ｃ（50％以下の復元率であるが、器形が推定できる土器）、Ｄ（25％以下の復元率で器形の一部が接合する大形破片。器種は判明しても器形は不明なもの）、Ｅ（接合しない破片資料）に分類した。接合・分類作業によってＡ～Ｃの土器（須恵器の破片のみは除く）を合計で561個体（Ａ区277個体、Ｂ区272個体、Ｃ区７個体、Ｄ区５個体）を抽出した。Ｄ、Ｅの土器は個体分類せず、重量のみとした。全個体のうち、373個体について図示した。

主な住居址出土土器

Ｈ－10号住居址　高坏の脚部のみ10個体がまとまって出土した。

Ｈ－12号住居址　口縁部に注口状の凹みをもつ坏（13）が出土した。

Ｈ－18号住居址　竈では坏、小形甕、甕等８個体（２～９）が使用された状態で土器が出土した。

Ｈ－19号住居址　炉周辺で坏（13）を伏せた状態、土匙（14）が出土した。

Ｈ－21号住居址　甕の底部に類似した口唇部が撫でにより調整された土器（１）が出土した。

Ｈ－28号住居址　器形に穿孔（２カ所）をもつ土器（７）が出土した。

Ｈ－29号住居址　須恵器坏蓋破片が１点（５）出土した。

Ｈ－30号住居址　内面に黒色処理、ミガキがある鉢（15）と須恵器坏蓋破片が２点（12･13）出土した。

Ｈ－42号住居址　本遺跡で最も多く須恵器が出土したが、点数は少ない。須恵器坏蓋（９）には扁平な摘みがある。瓮（13）は口縁部のみが欠損する。

Ｈ－50号住居址　土器出土量及び個体数が最も多い。特に小形甕と甕の個体数が目立つ。口縁部が「く」の字に屈曲する甕（６）は、一般的な甕にみられる調整とは異なり、外面が丁寧な箆磨きが施されている。

Ｈ－51号住居址　出土したほとんどの土器が接合し、９個体が確認された一括資料である。高坏（２）は内面に４カ所　の穿孔がある。

Ｋ－１号古墳　前底部で渦巻状暗文のある坏（３）、長頸壺（４）、大甕（５）が出土した。

	土師坏	坩	高坏	高坏脚	短頸壺	鉢	小形甕	壺	甕	甑	ミニチュア	須恵器坏	その他	小計
H－1	5	4	7				2	2	3					23
H－4	3						2		2		1			8
H－5	4						3		5	1				13
H－6	4								2	1				7
H－7							2							2
H－8	8		1	1			1							11
H－9	2		1											3
H－10	4			10			2		5	1	6			28
H－11						1	2		2					5
H－12	6					2	1		10	2			器台1	22
H－13	2					1	3		5	1	1			13
H－15	3					3	9	4	3	2				24
H－16	2										3			5
H－17	3		4				1		4	2				14
H－18	2						2	1	4					9
H－19	9	3	6					2			1			21
H－20	2							1	3					6
H－21	2					3	1		4		1			11
H－22	4	1	2	3	2		2	1	6	2	6		土製品1	30
H－23	3													3
H－24	2		1			1	4	2	10		3			23
H－25		2	2				1		6		1			12
H－28	1		2			1	2		8	1	1			16
H－29	1	1					2		3	1		1		9
H－30	11					4	3	3	6	2		2		31
H－31	1		1	1			3	1	2					9
H－32	17	1				2	3		5	1				29
H－34	6					1	2		1	1	2			13
H－35			1						5					6
H－36	1	1				1		2	6		1			12
H－37	6					1	1		2	1				11
H－38				1								1		2
H－39							1		1	1			鍋1	4
H－40	1							1	1					3
H－41	2								2					4
H－42	8					1	2	2	7	1	1	3	瓮1	26
H－43	5					2	1		3					11
H－44										2	1			3
H－45						1			5					6
H－46								1	2					3
H－47									1					1
H－48	3		1					1		2				7
H－49								1	3					4
H－50	9		1		1	1	10	2	16	3	2			45
H－51	3		1				1		4		1			10
T－1									3					3
合　計	145	13	31	16	3	26	69	27	160	28	32	7	4	561

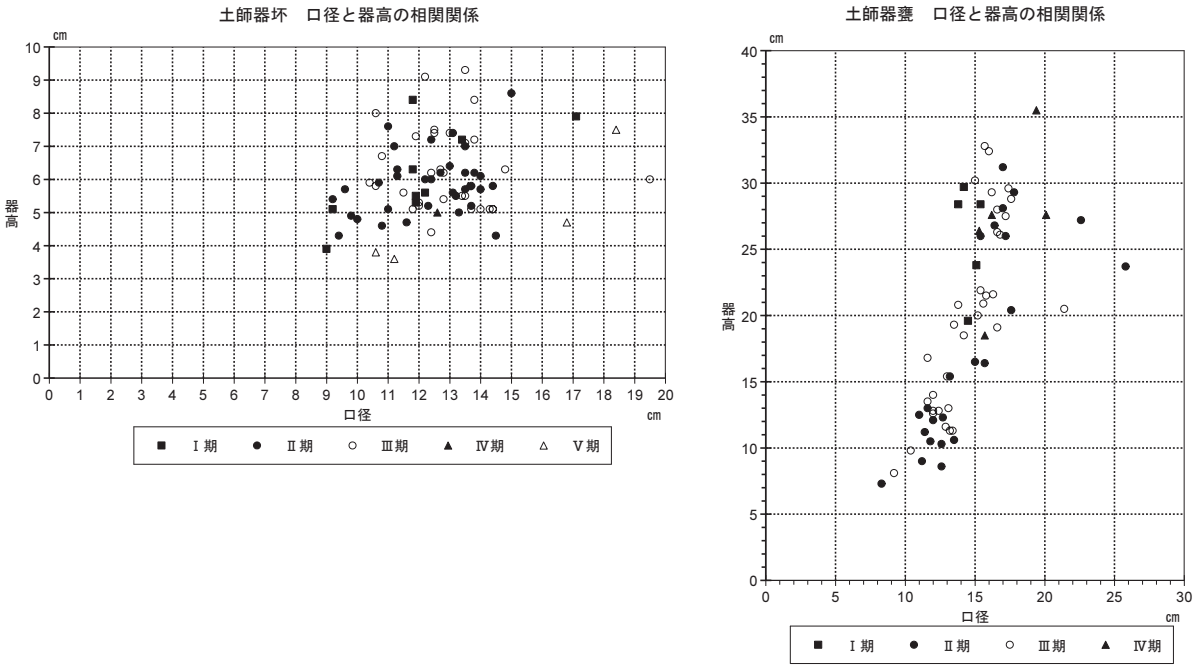
第２表　古墳時代土器個体別集計表

出土土器について（第82図）

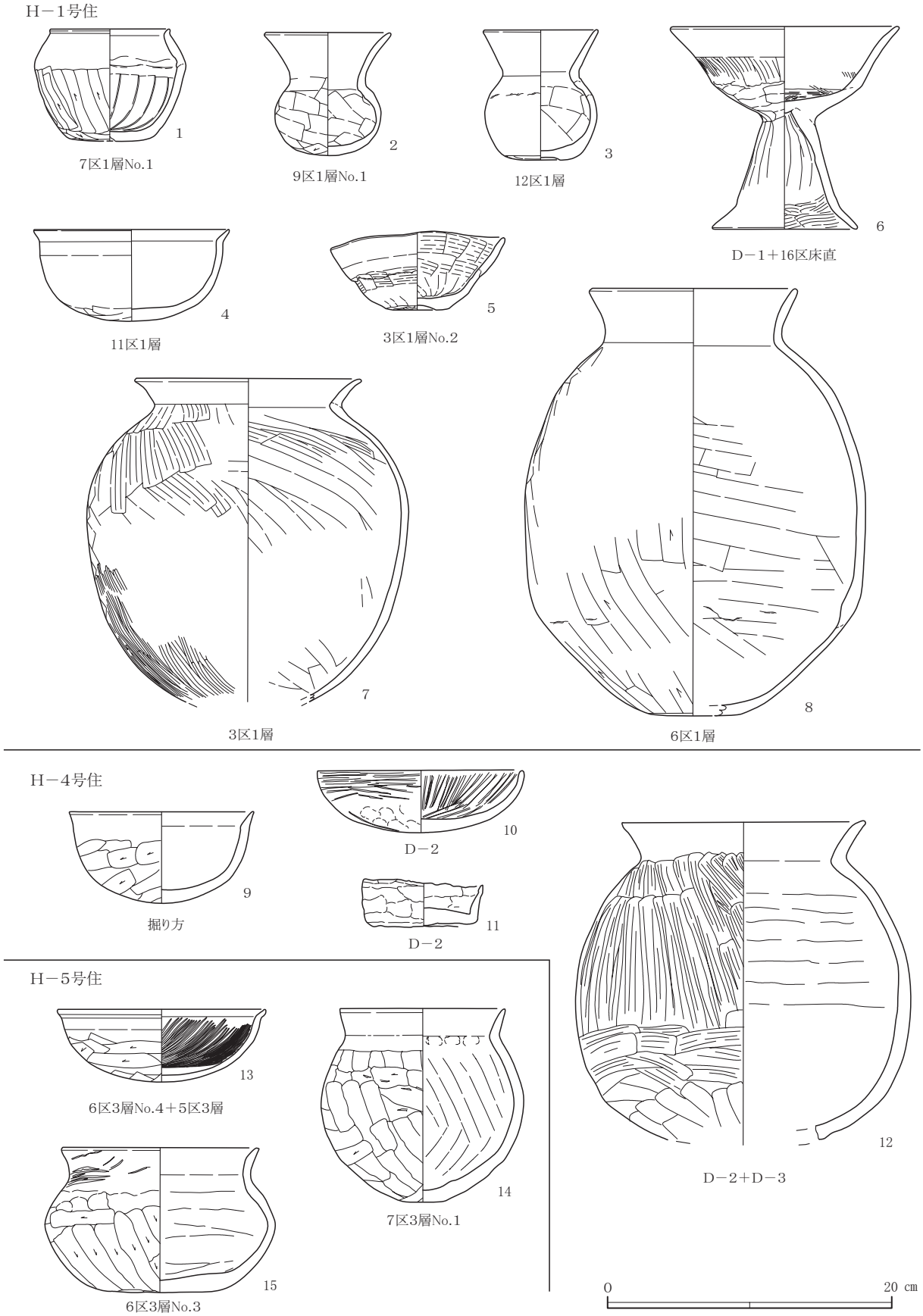
本遺跡出土の土師器の坏類と甕類の大きさについて、口径と器高を基準としたグラフを作成した（大きさが復元できるものに限定）。坏では口径９～14.5㎝、器高４～7.5㎝の間に集中が認められた。口径ではⅠ期とⅡ期はⅢ期に比べて小さい傾向が認められた。また、器高では数値に幅があるため、時期差は認められなかった。なお、Ⅴの坏は口径が大きく、器高が低くなるといった当該期の特徴が認められた。甕では大きさに口径11～13㎝で器高10～13㎝（小形）、口径14～17㎝で器高16～22㎝（中形）、口径15～18㎝以上で器高26～30㎝以上（大形）の３つの集中が認められた。Ⅰ期は中形から大形が多く、Ⅱ期とⅢ期では大きさに差が認められなかった。

なお、甕及び壺には口縁部～胴部を水平にカットし、再利用して甕等を載せた器台に転用したものが認められた。器台には破断面に磨滅による使用痕が観察された。今後、二次転用品として注意する必要がある。

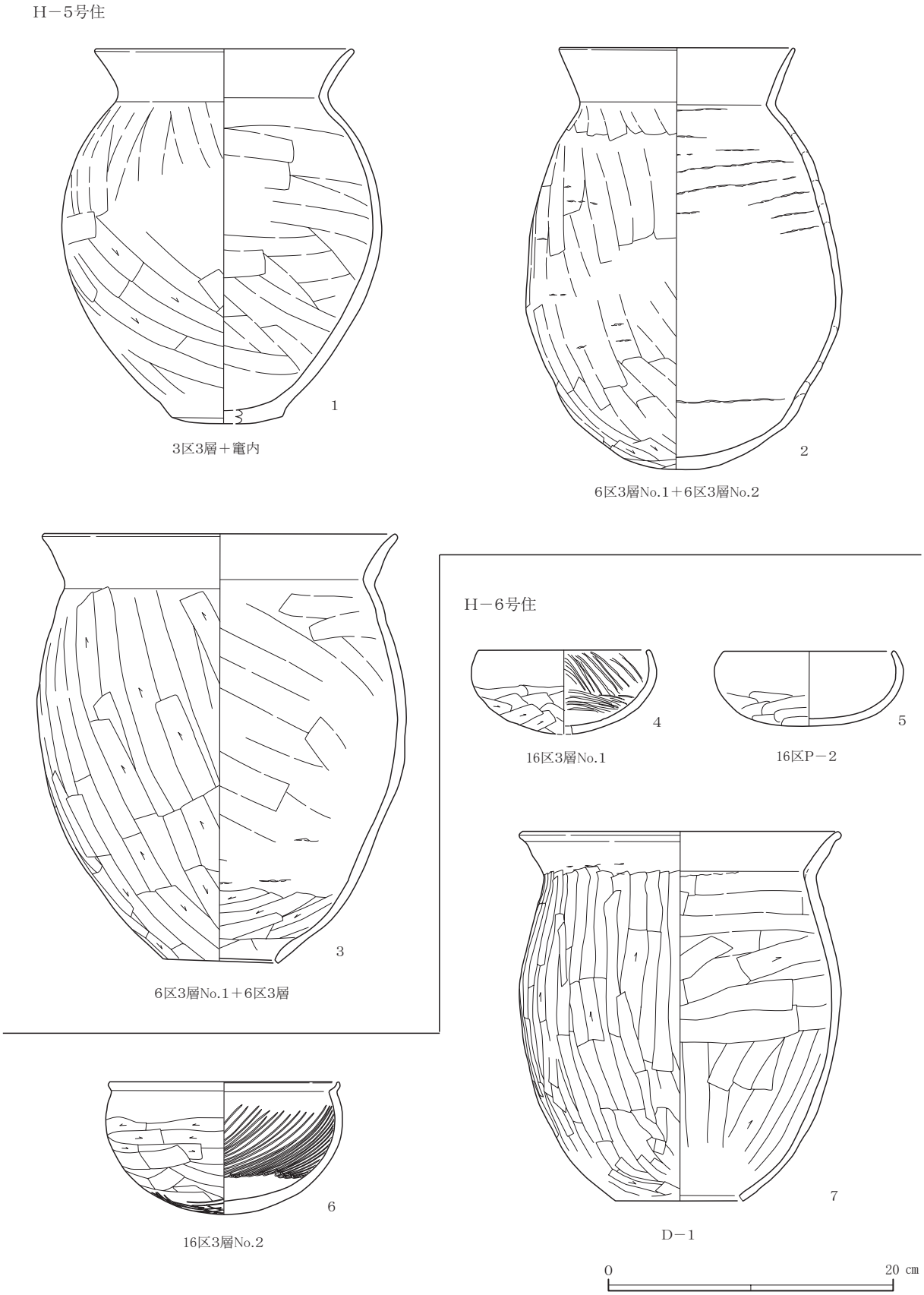
（井上慎也）



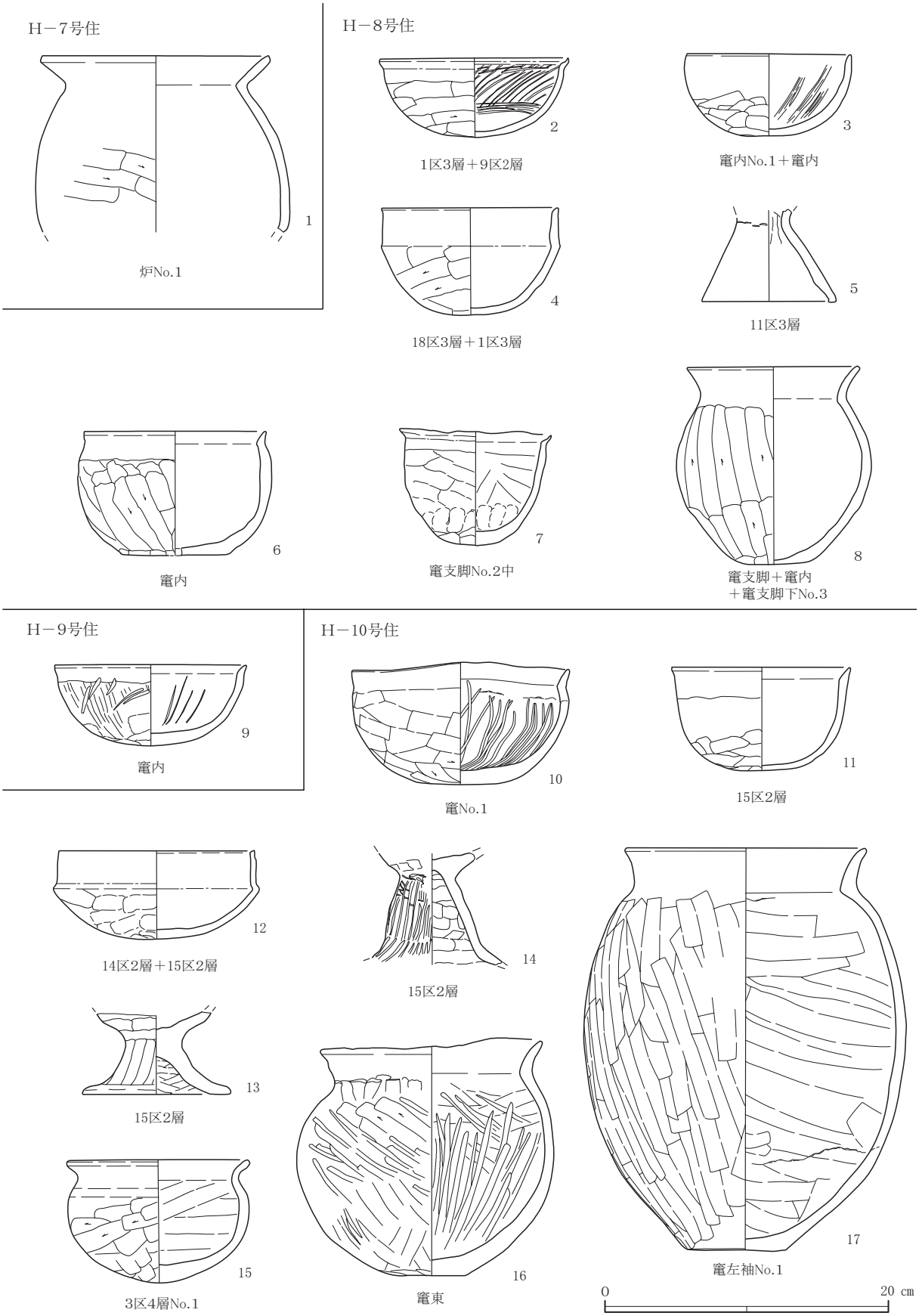
第82図　土師器坏・甕の高さと幅集計グラフ



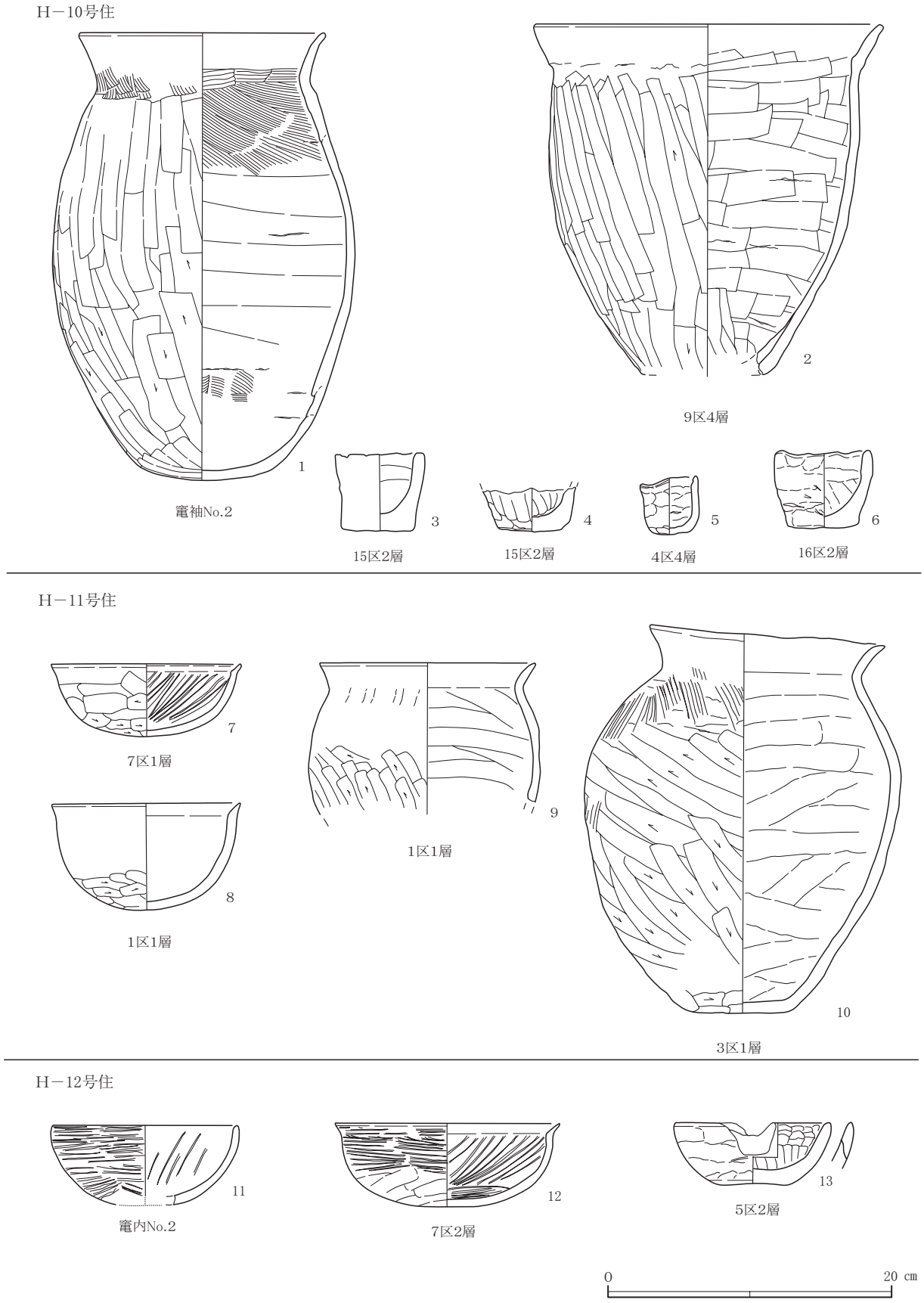
第83図　H－1号・H－4号・H－5号住居址出土土器実測図



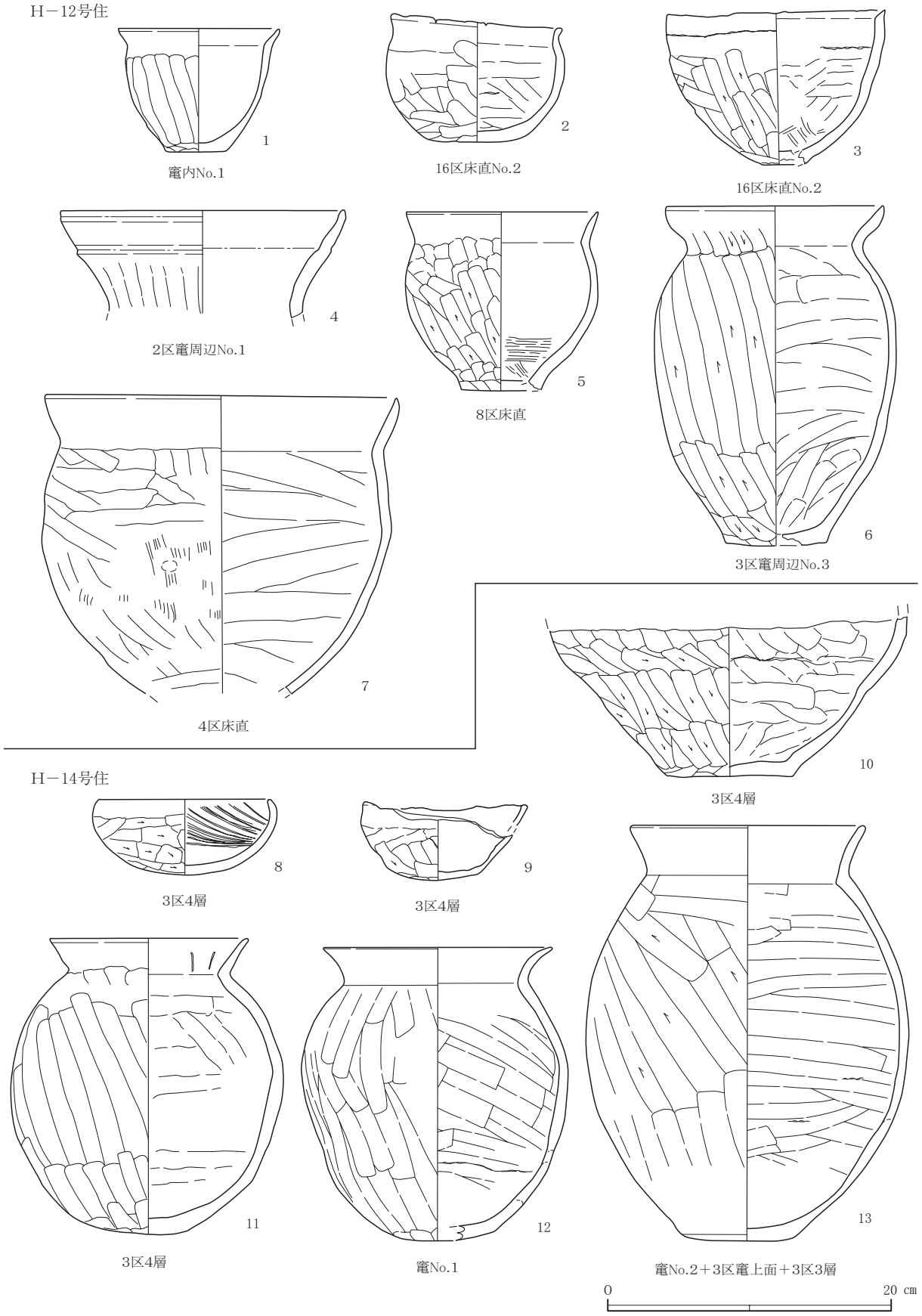
第84図　H－5号・H－6号住居址出土土器実測図



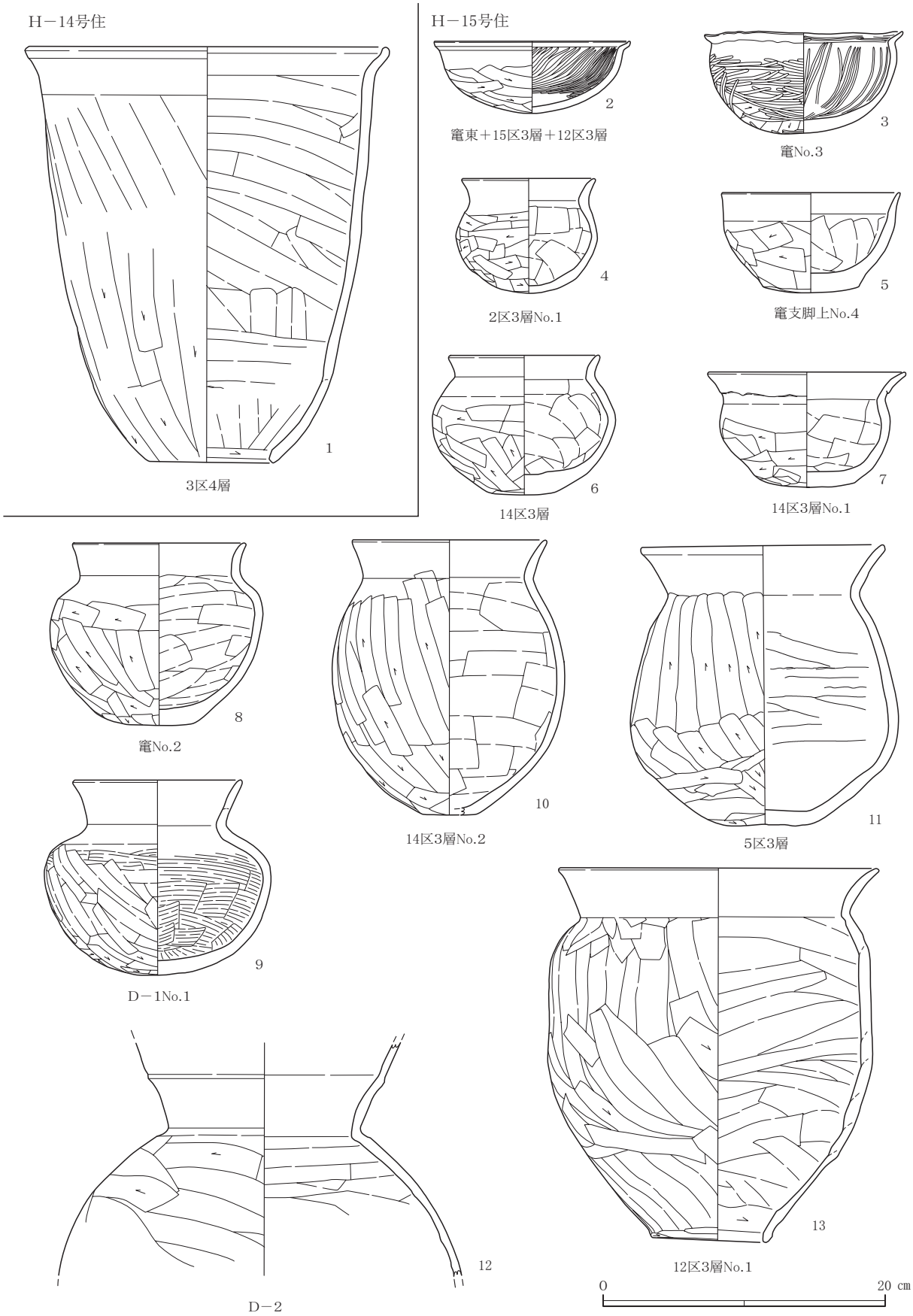
第85図　H－7号・H－8号・H－9号・H－10号住居址出土土器実測図



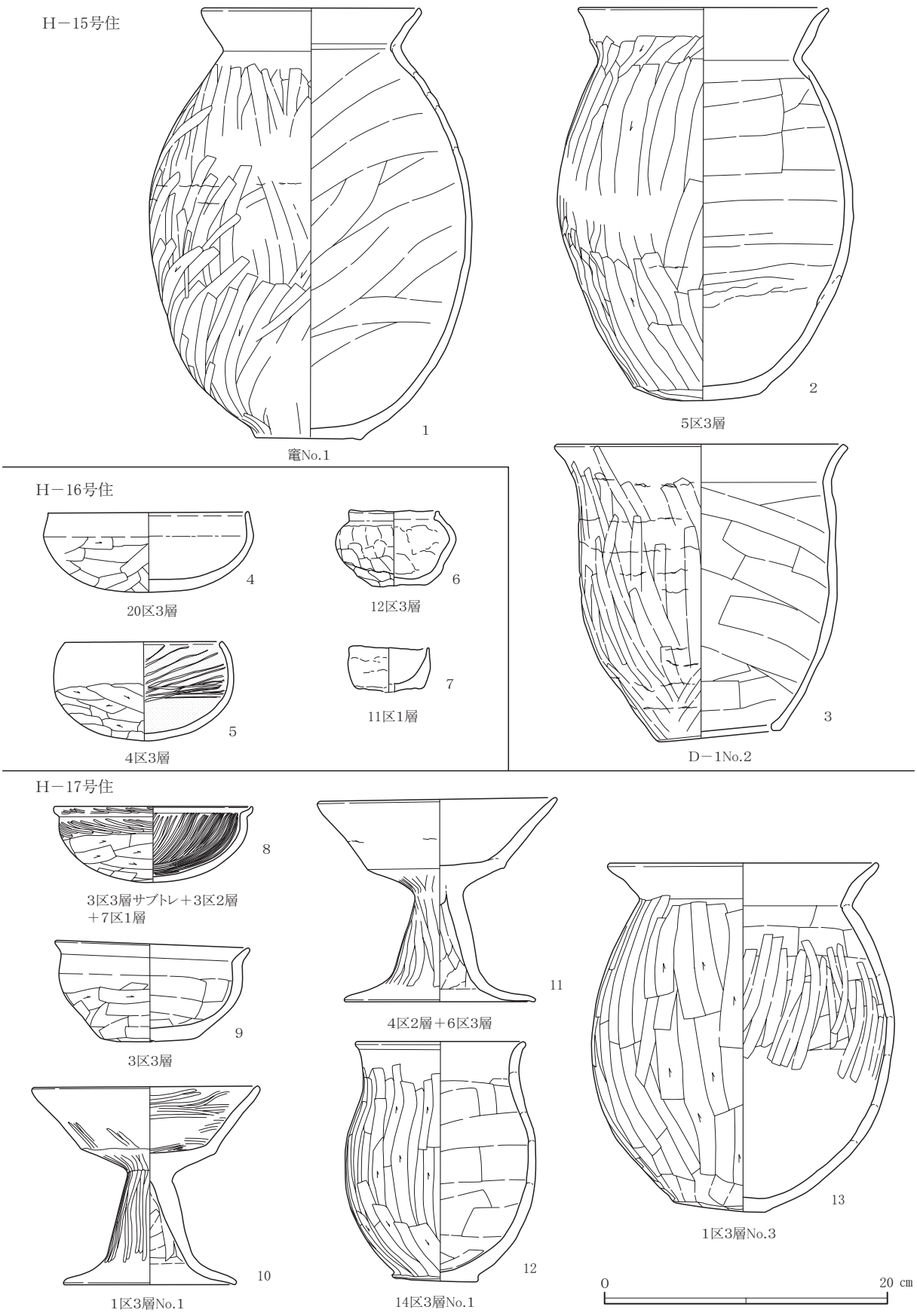
第86図　H－10号・H－11号・H－12号住居址出土土器実測図



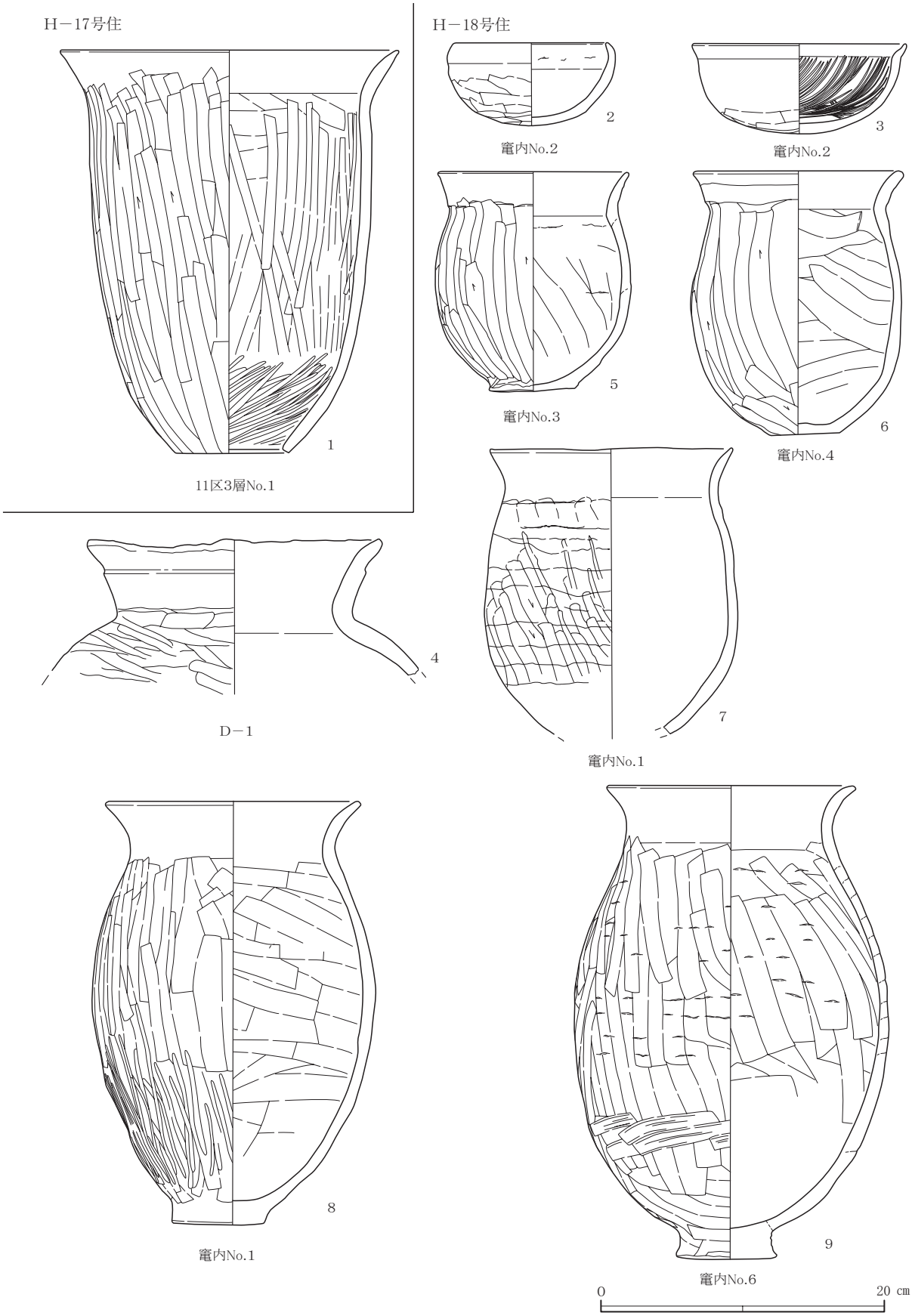
第87図　H－12号・H－14号住居址出土土器実測図



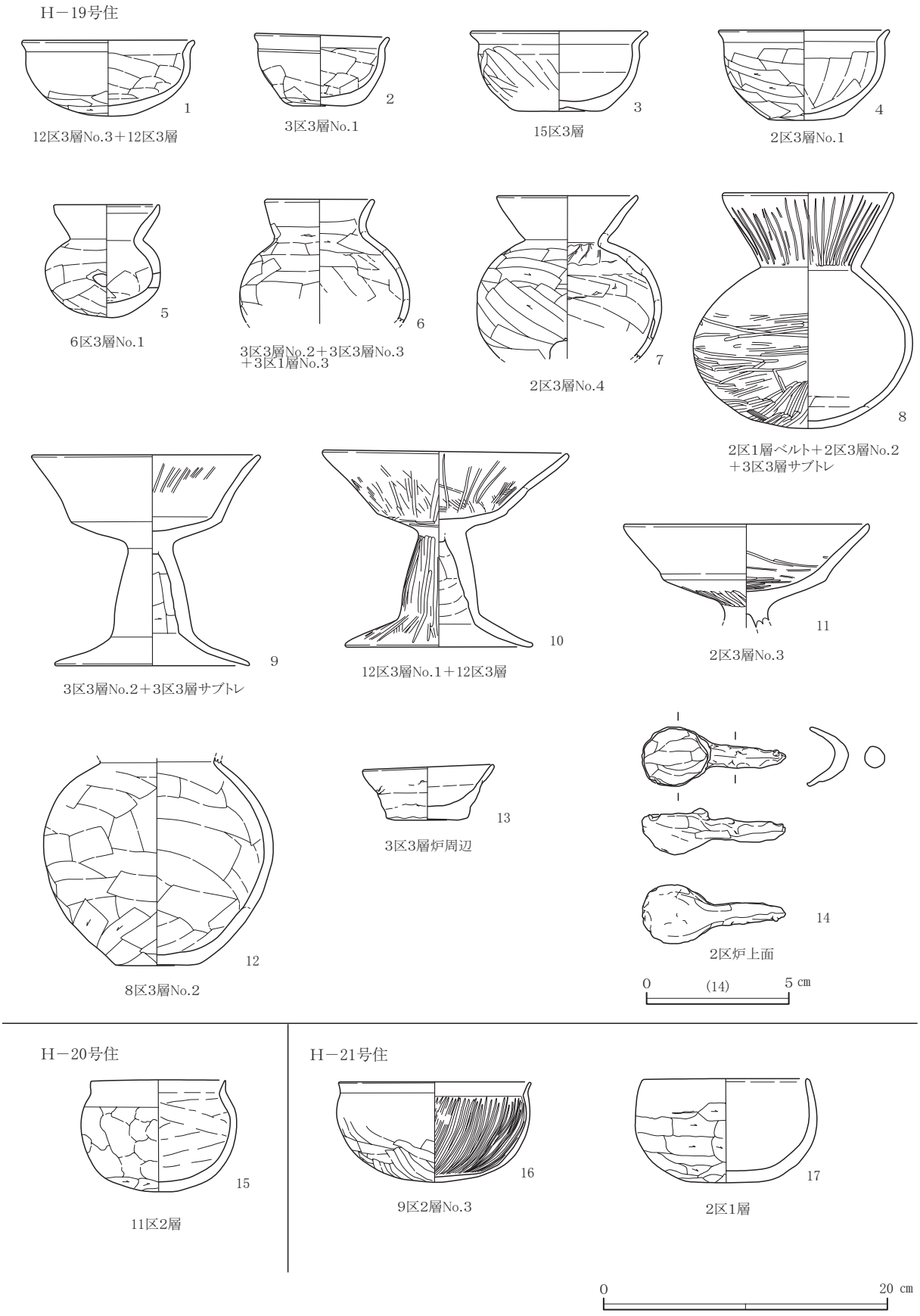
第88図　H－14号住居址出土土器実測図



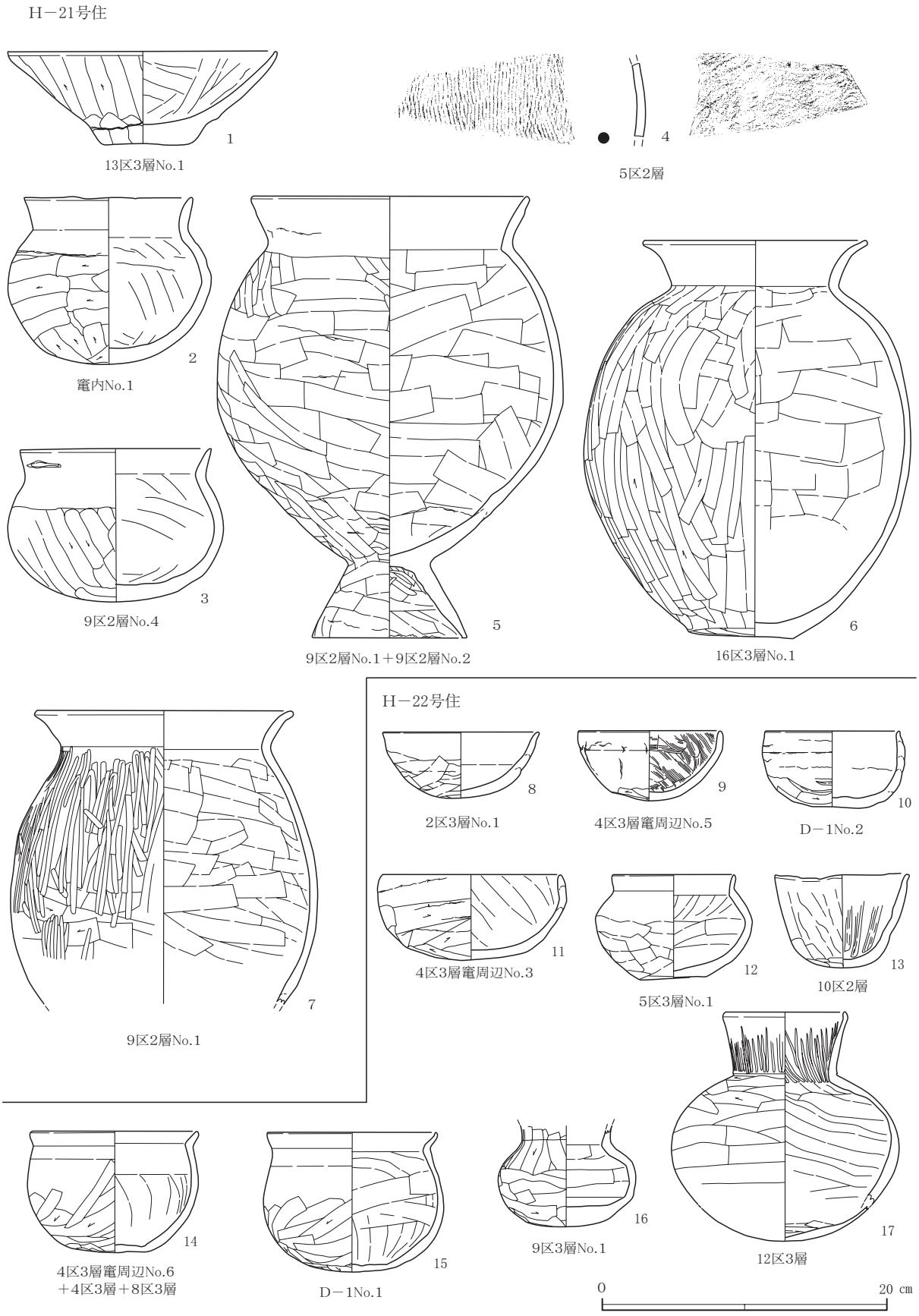
第89図　H－15号・H－16号・H－17号住居址出土土器実測図



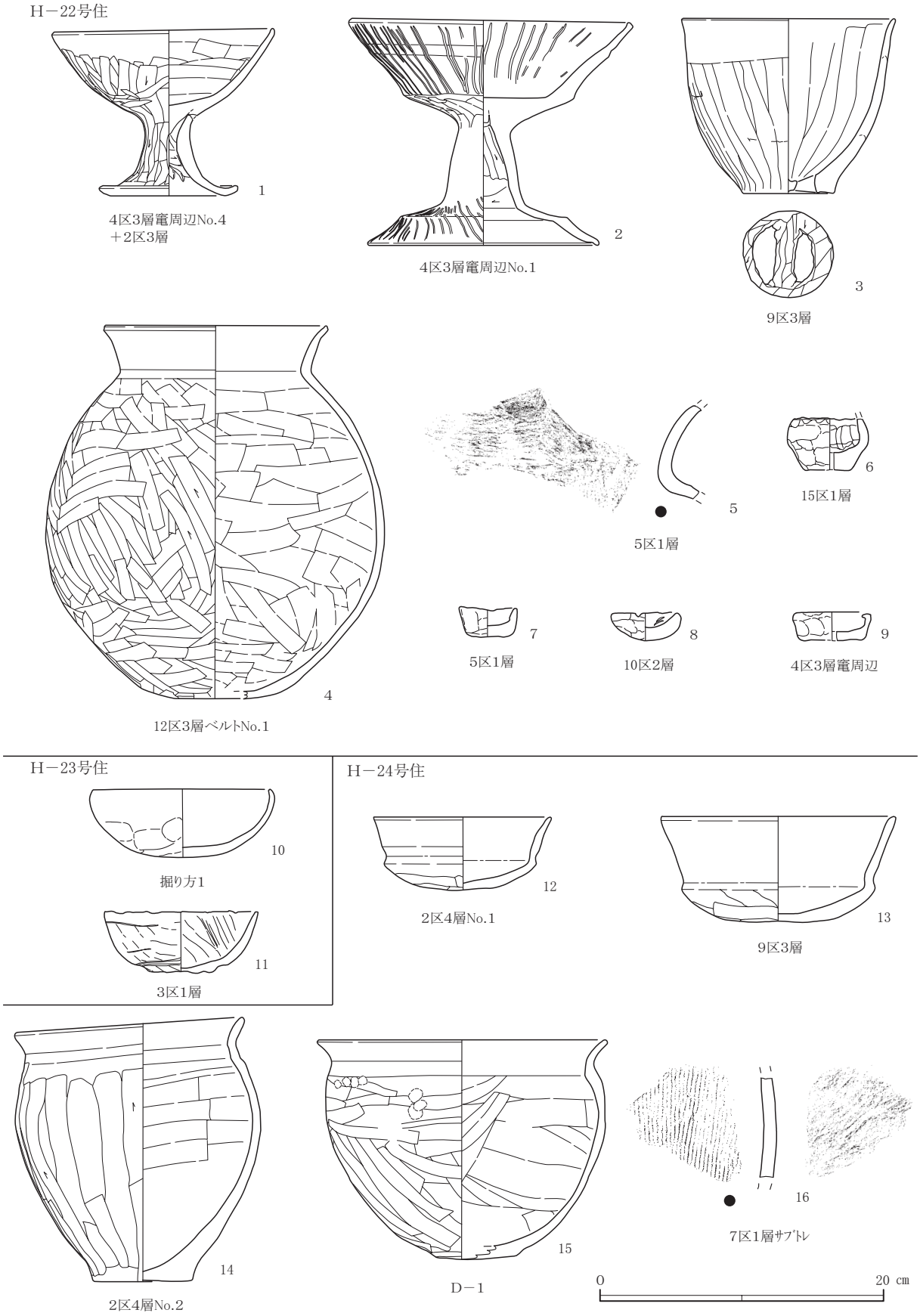
第90図　H－17号・H－18号住居址出土土器実測図



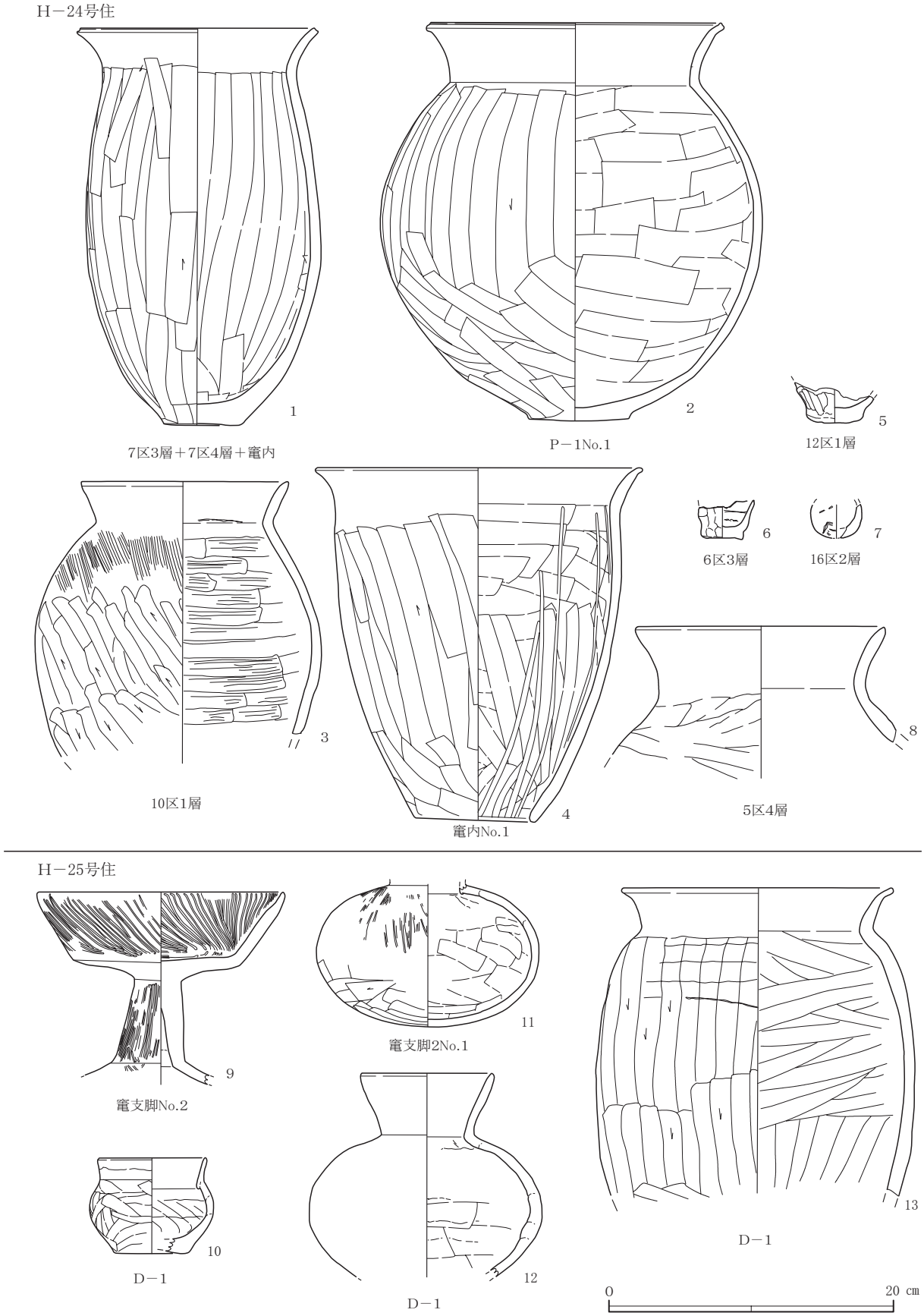
第91図　H－19号・H－20号・H－21号住居址出土土器実測図



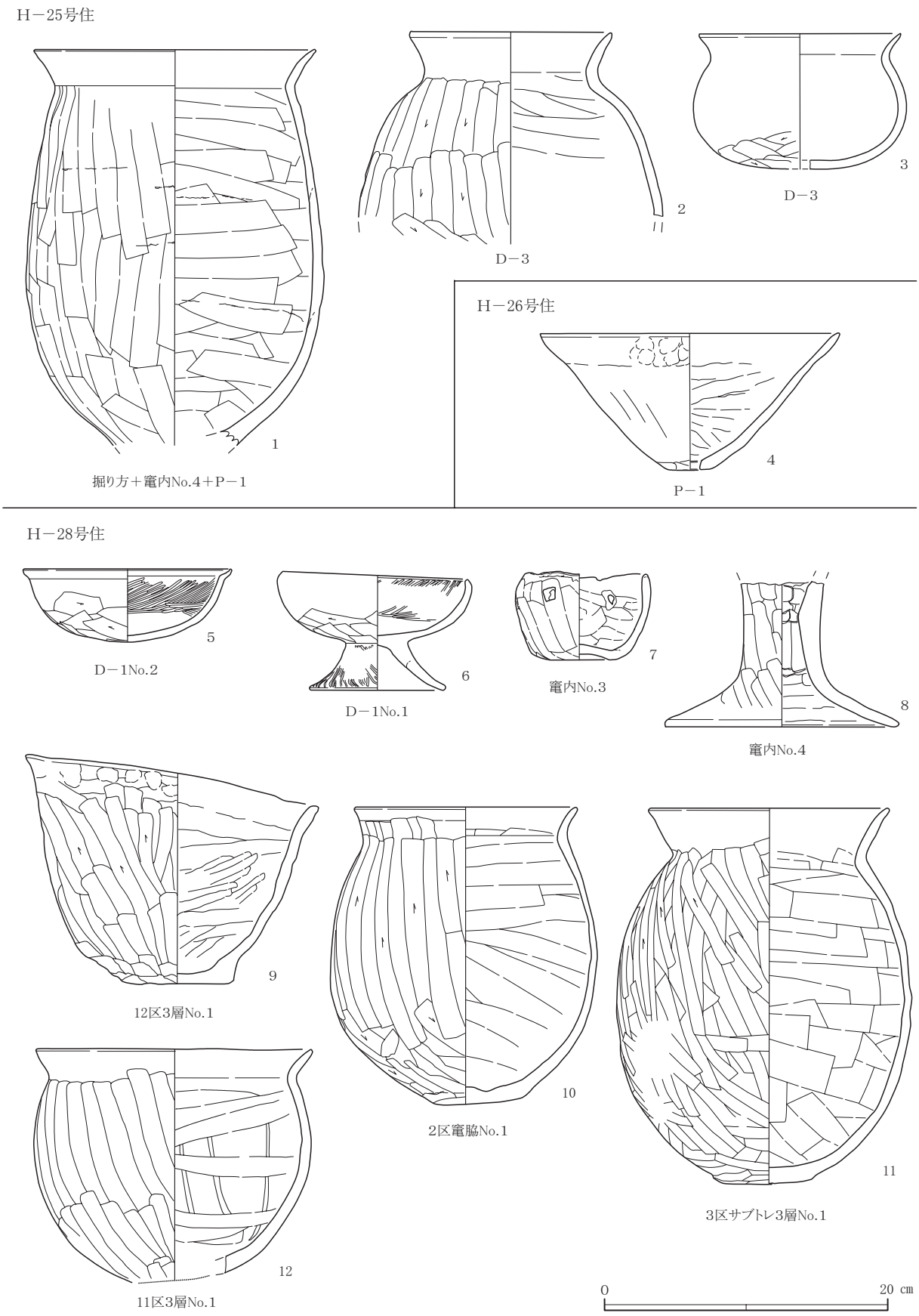
第92図　H－21号住居址出土土器実測図



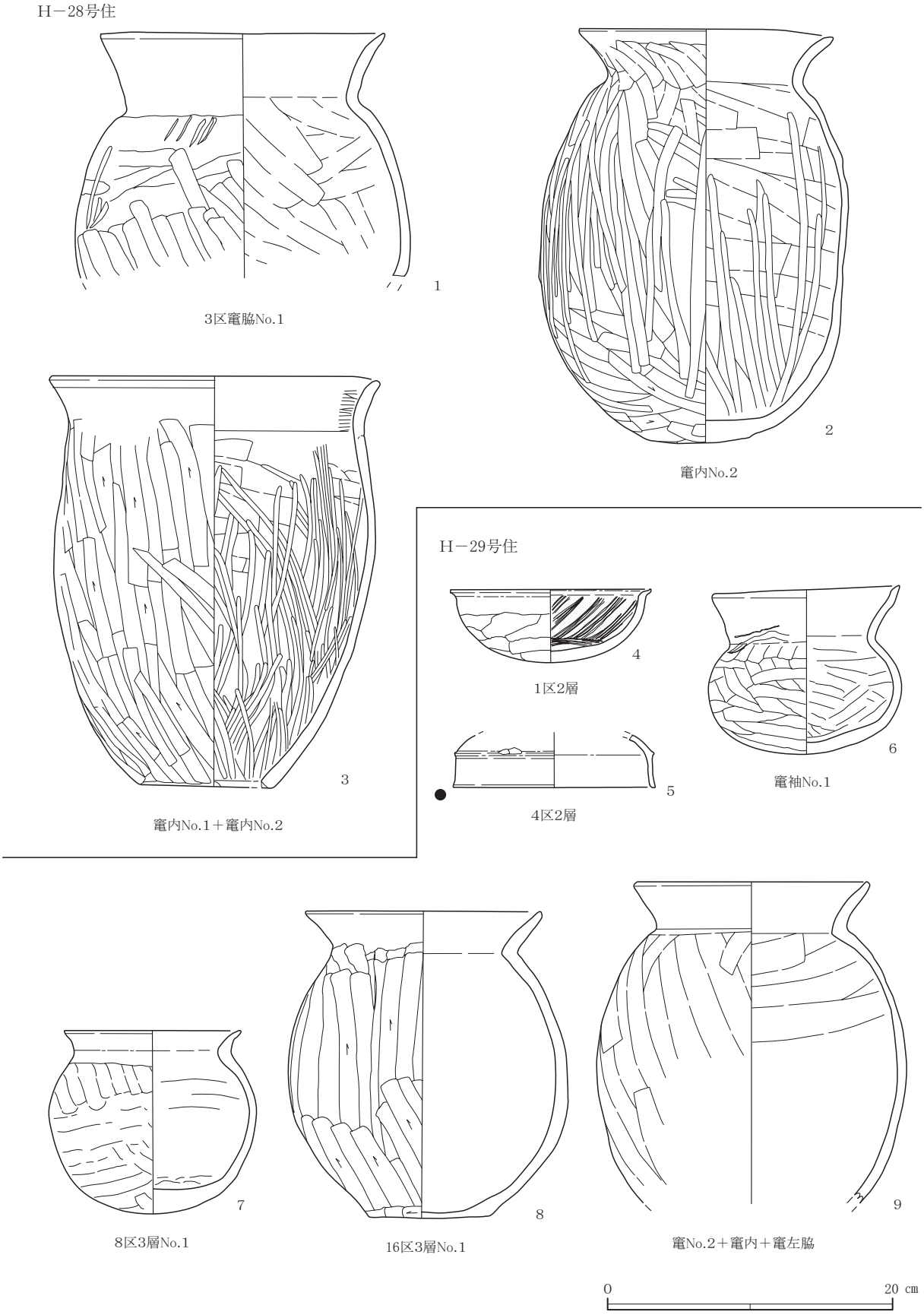
第93図　H－22号・H－23号・H－24号住居址出土土器実測図



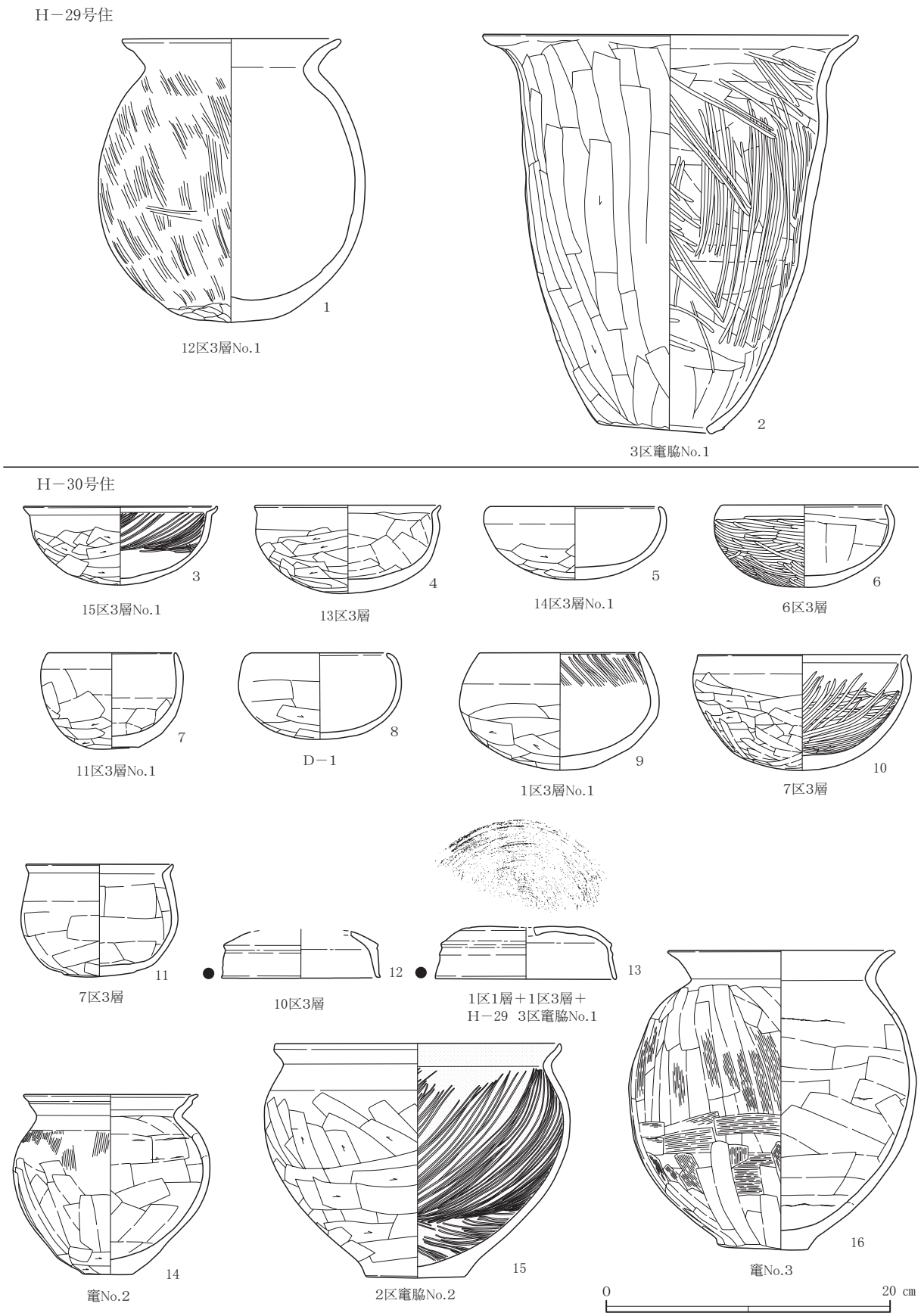
第94図　H－24号・H－25号住居址出土土器実測図



第95図　H－25号・H－26号・H－28号住居址出土土器実測図

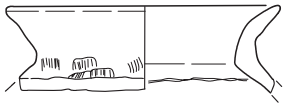


第96図　H－28号・H－29号住居址出土土器実測図



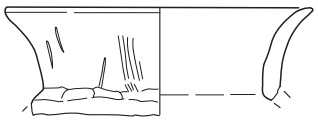
第97図　H－29号・H－30号住居址出土土器実測図

H－30号住



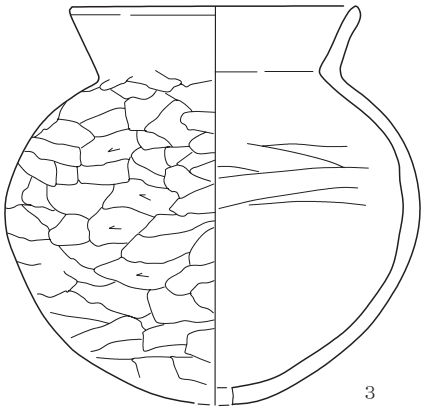
1

14区3層



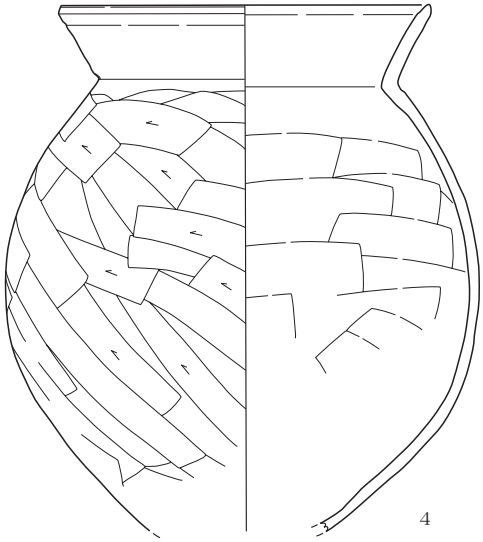
2

10区3層



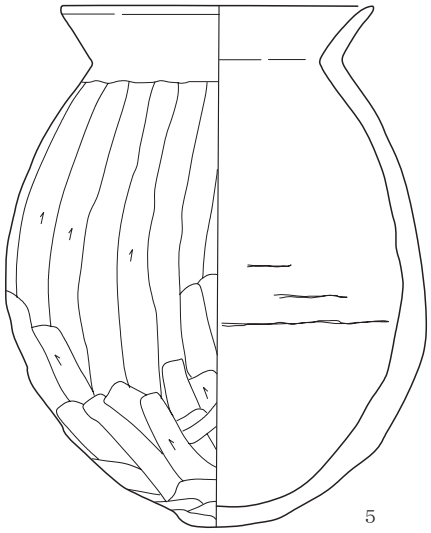
3

10区ベルト3層



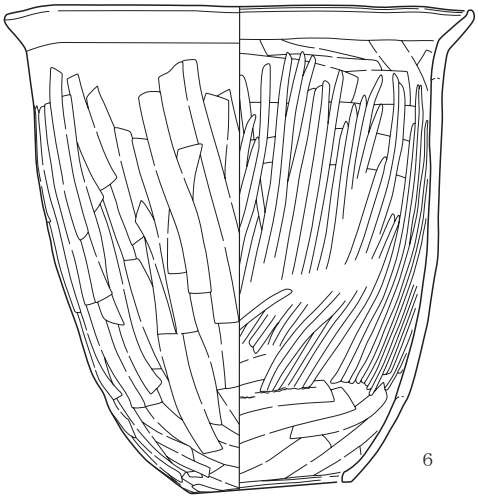
4

竈No.1



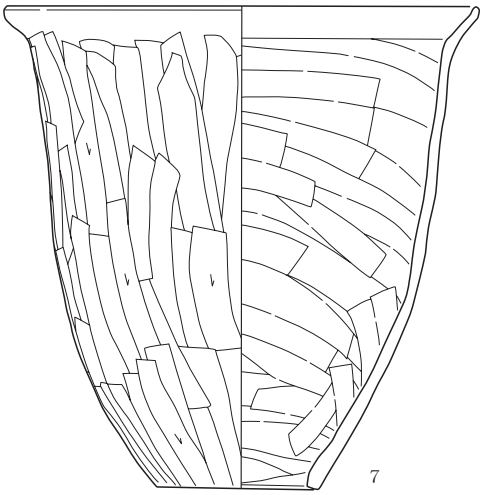
5

16区3層No.1



6

2区竈脇No.1

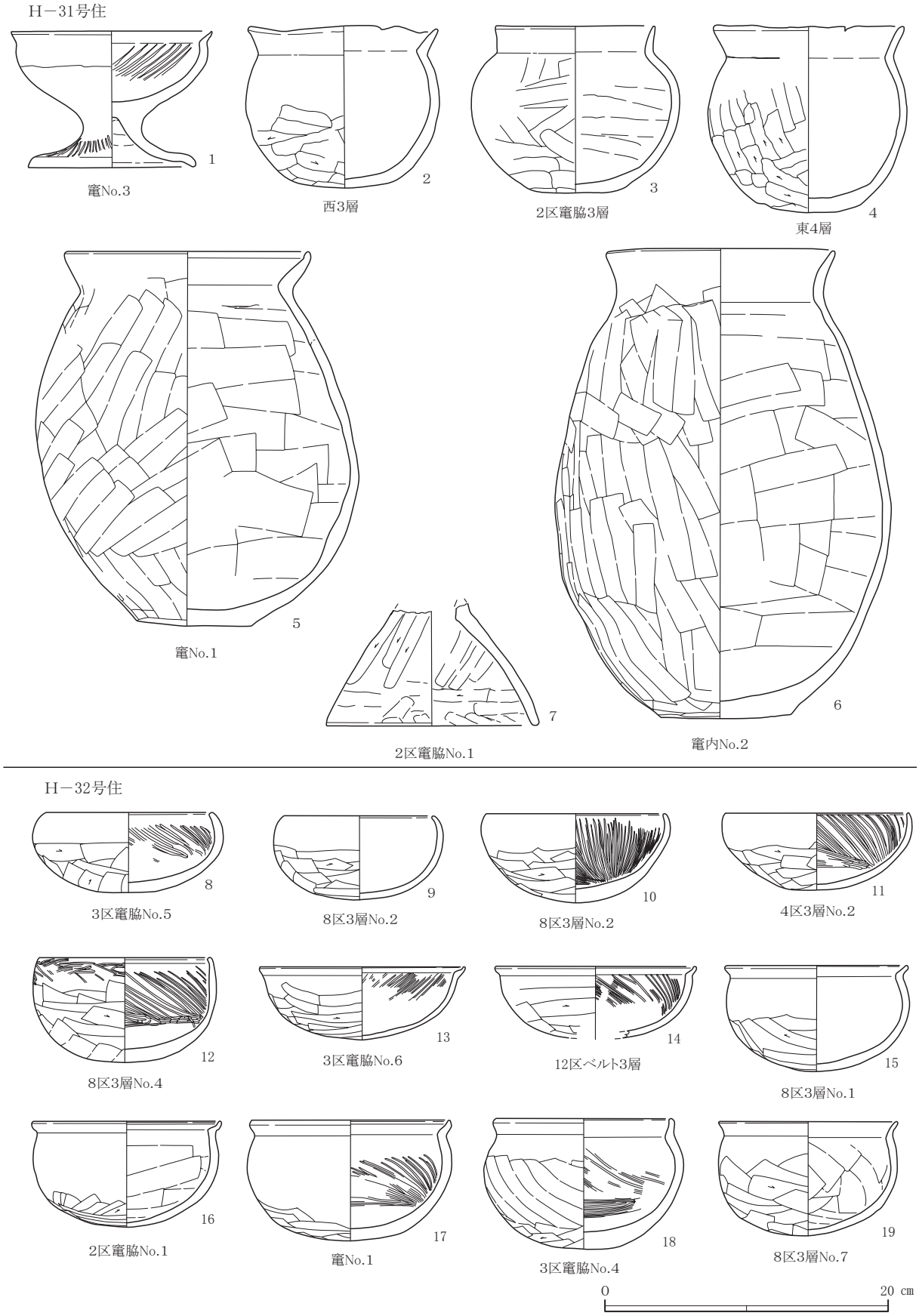


7

4区3層

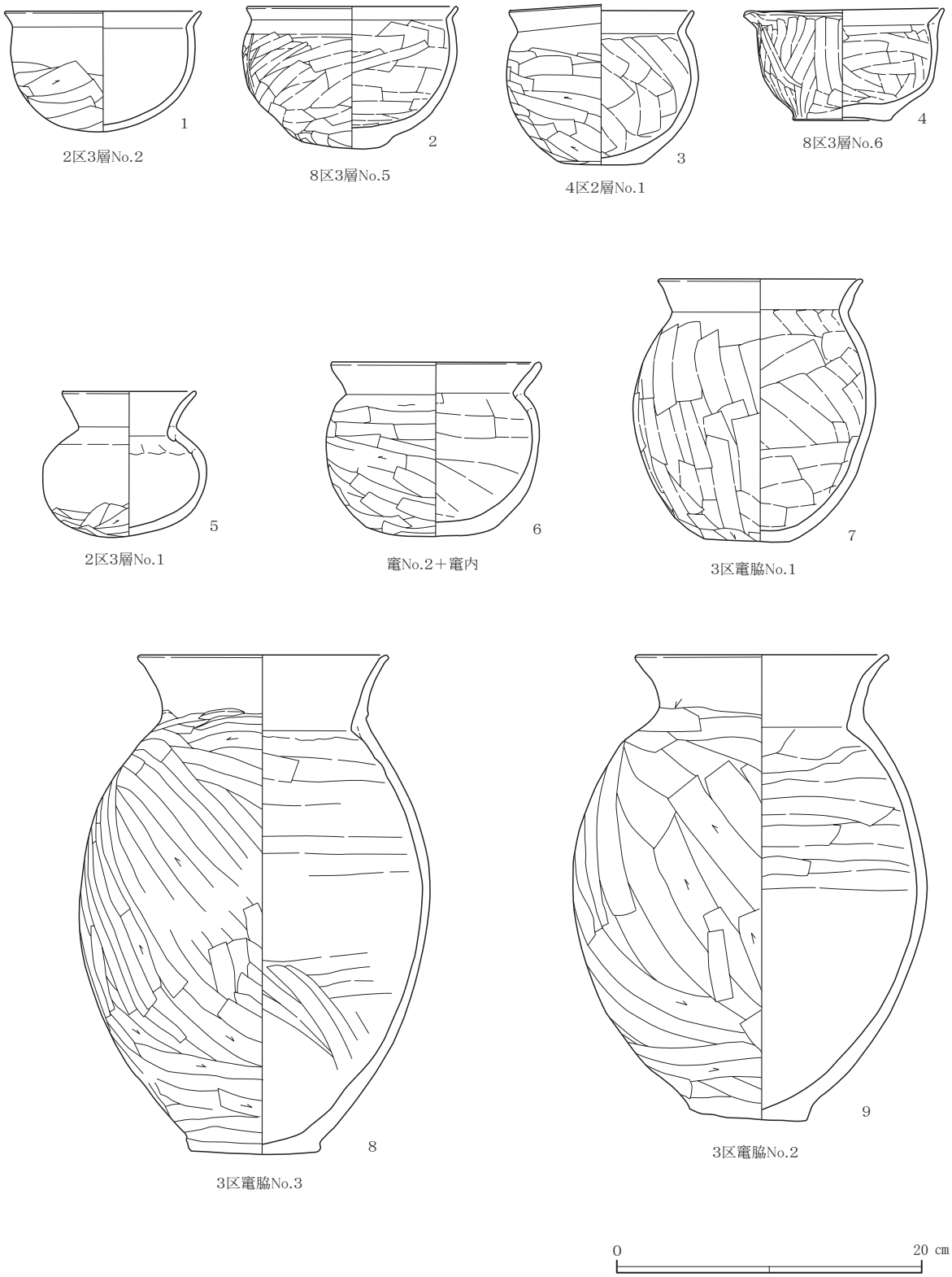
0　20 ㎝

第98図　H－30号住居址出土土器実測図

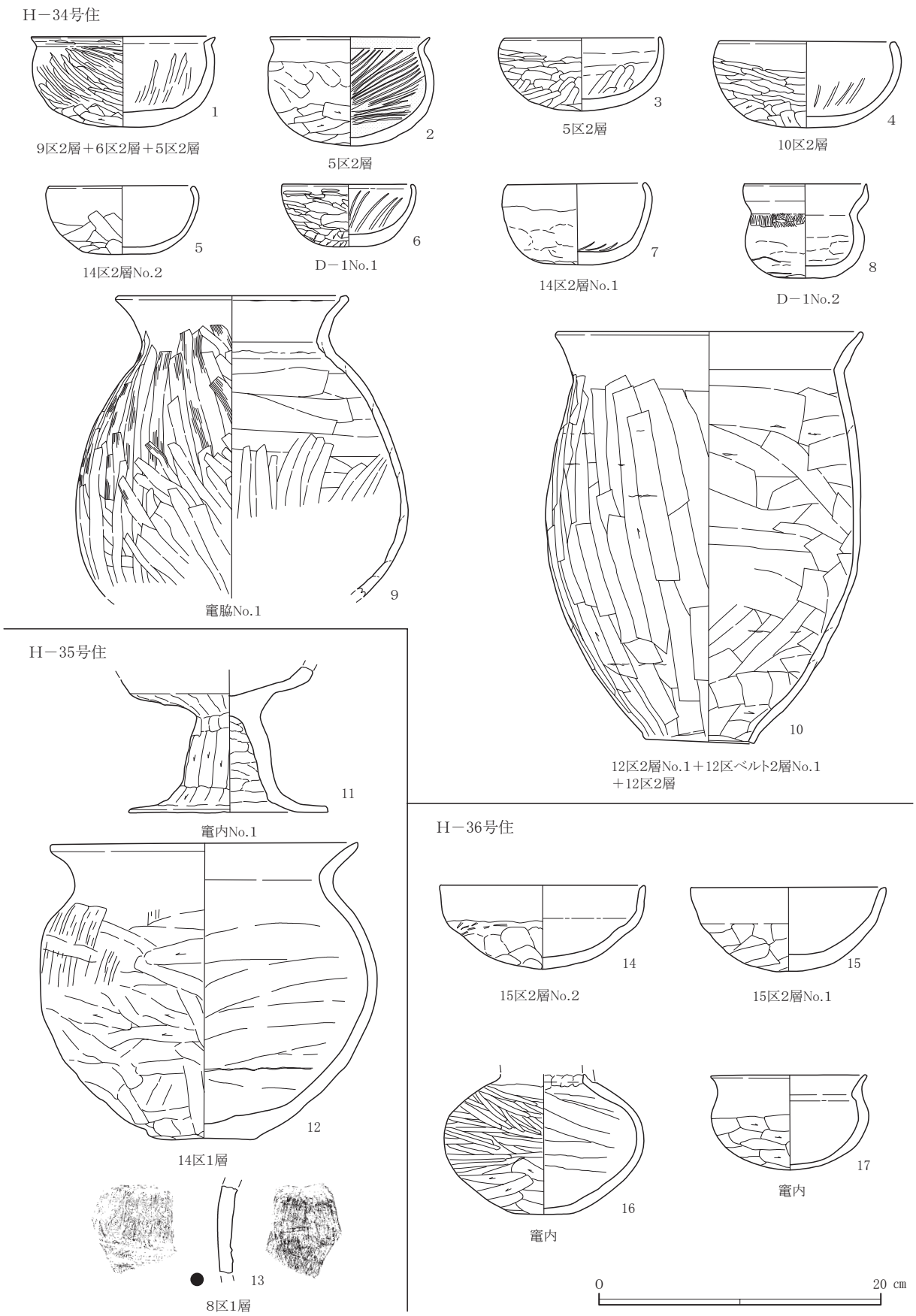


第99図　H－31号・H－32号住居址出土土器実測図

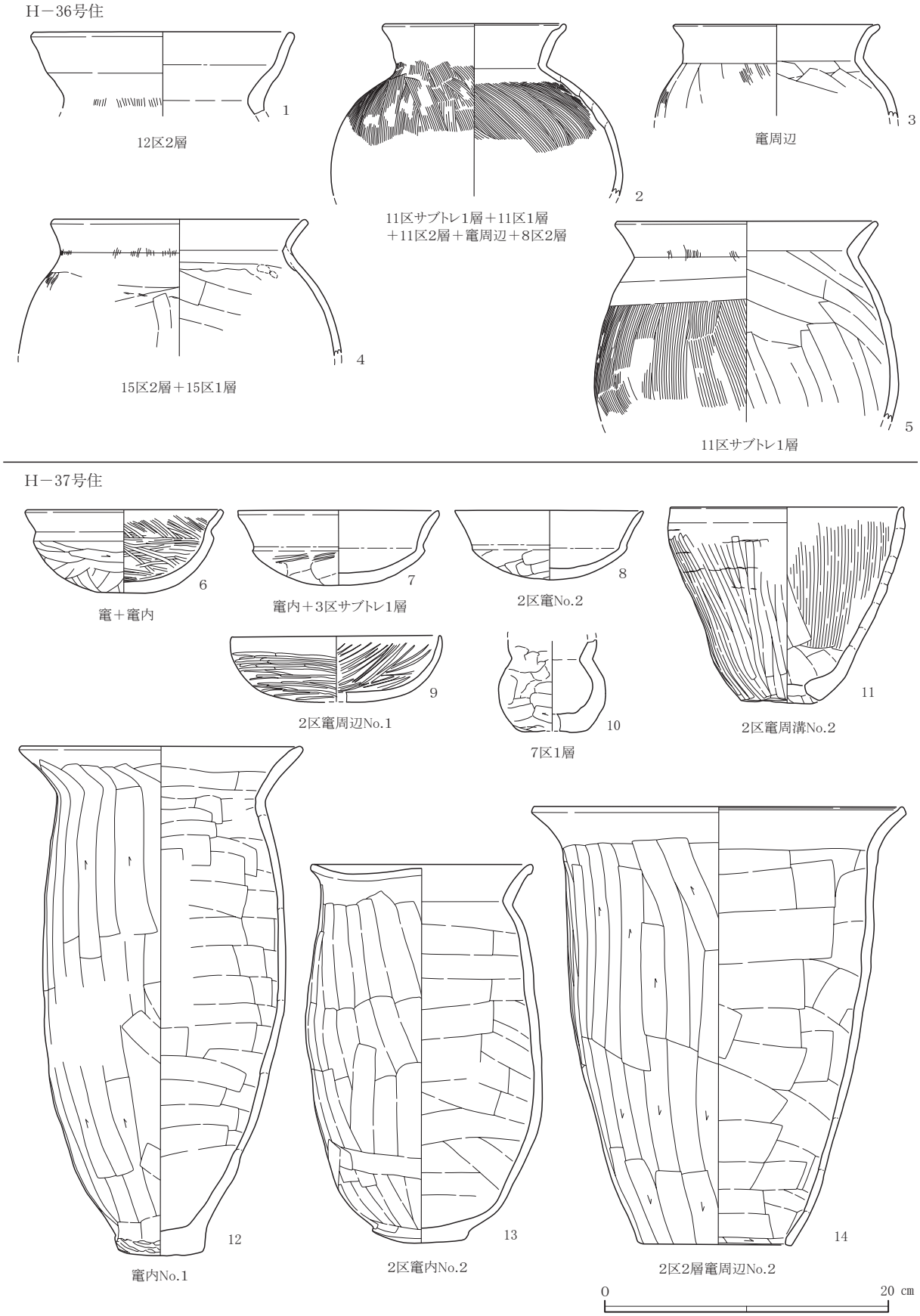
H－32号住



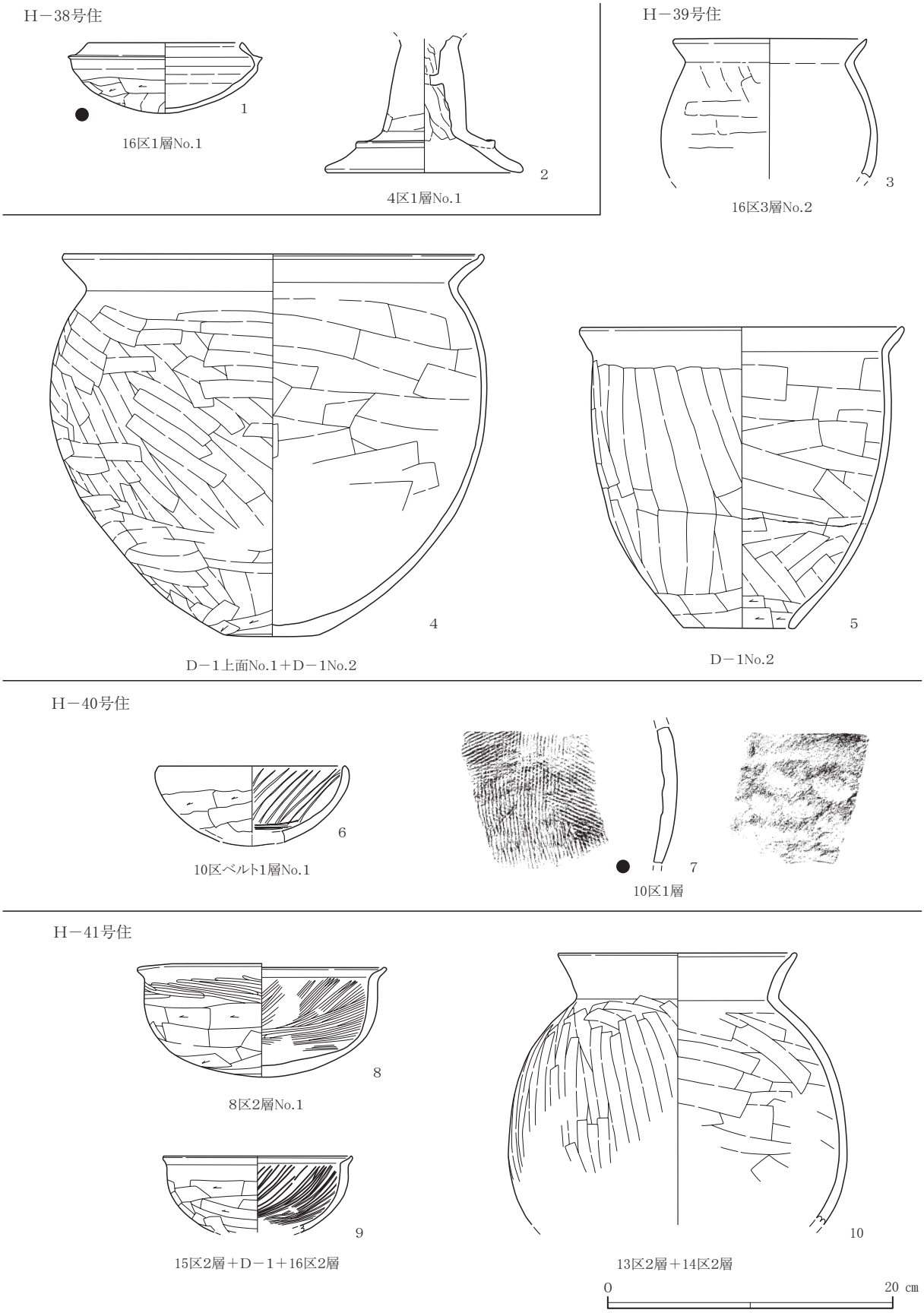
第100図　H－32号住居址出土土器実測図



第101図　H－34号・H－35号・H－36号住居址出土土器実測図

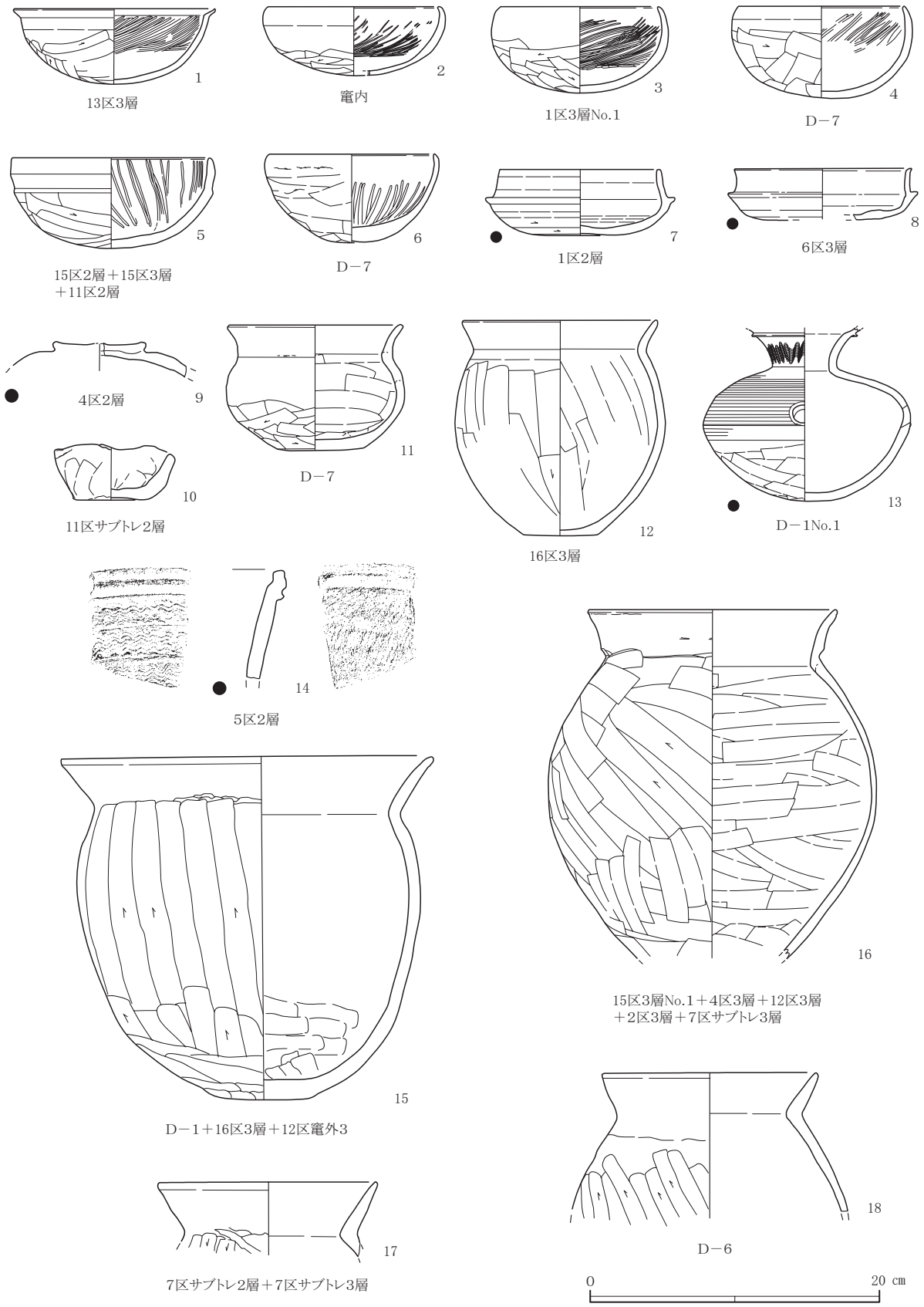


第102図　H－36号・H－37号住居址出土土器実測図

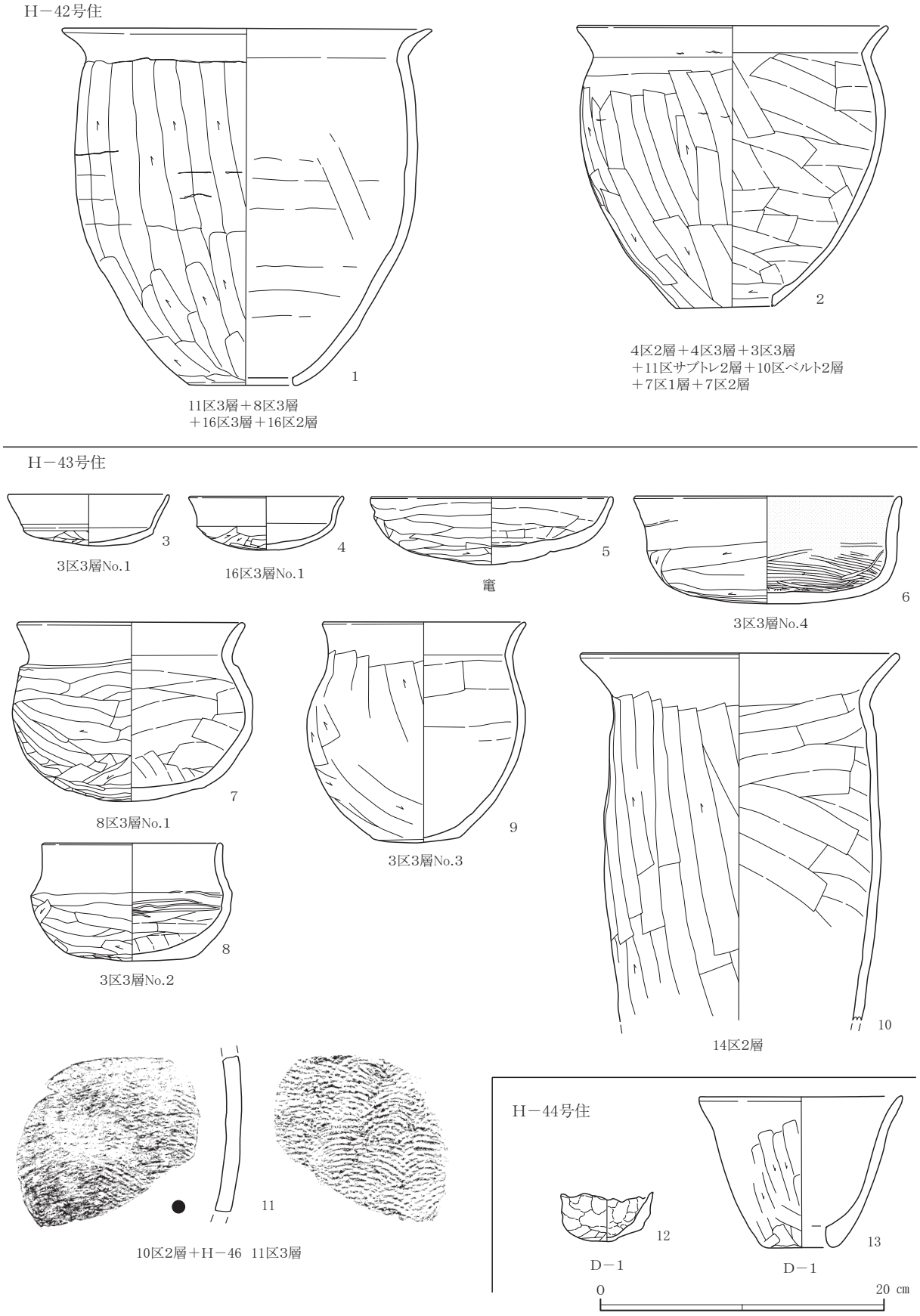


第103図　H－38号・H－39号・H－40号・H－41号住居址出土土器実測図

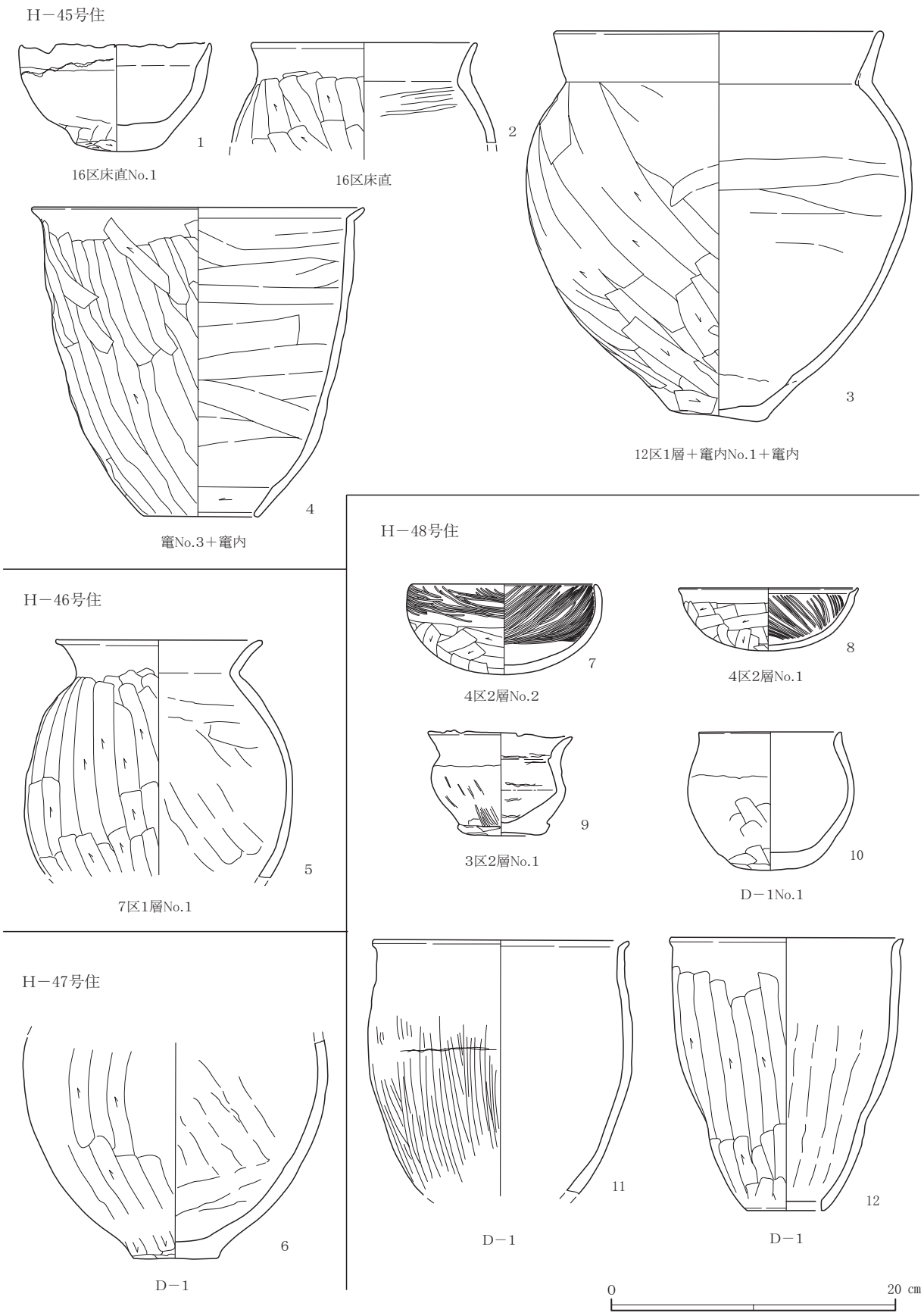
H－42号住



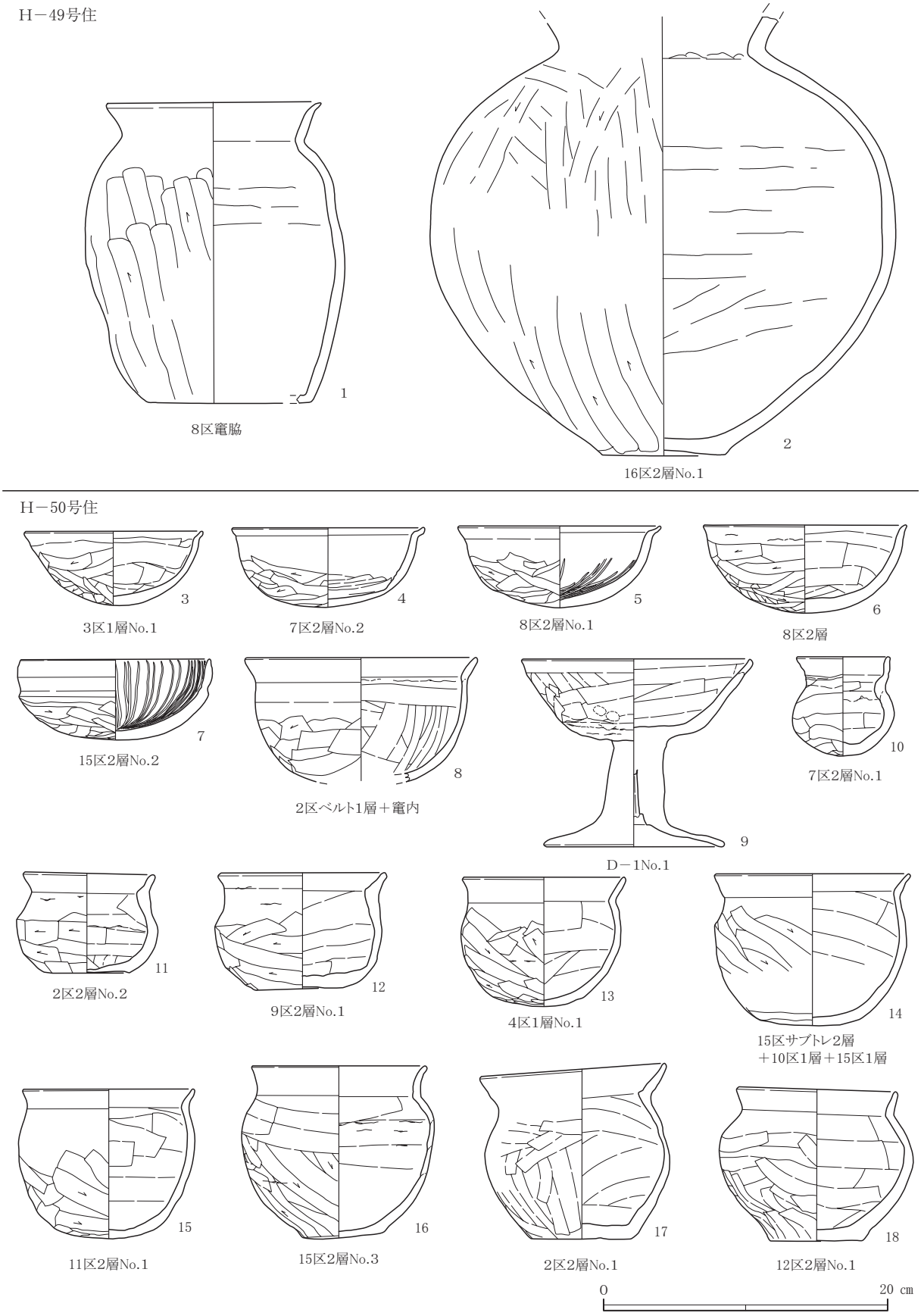
第104図　H－42号住居址出土土器実測図



第105図　H－42号・H－43号住居址出土土器実測図

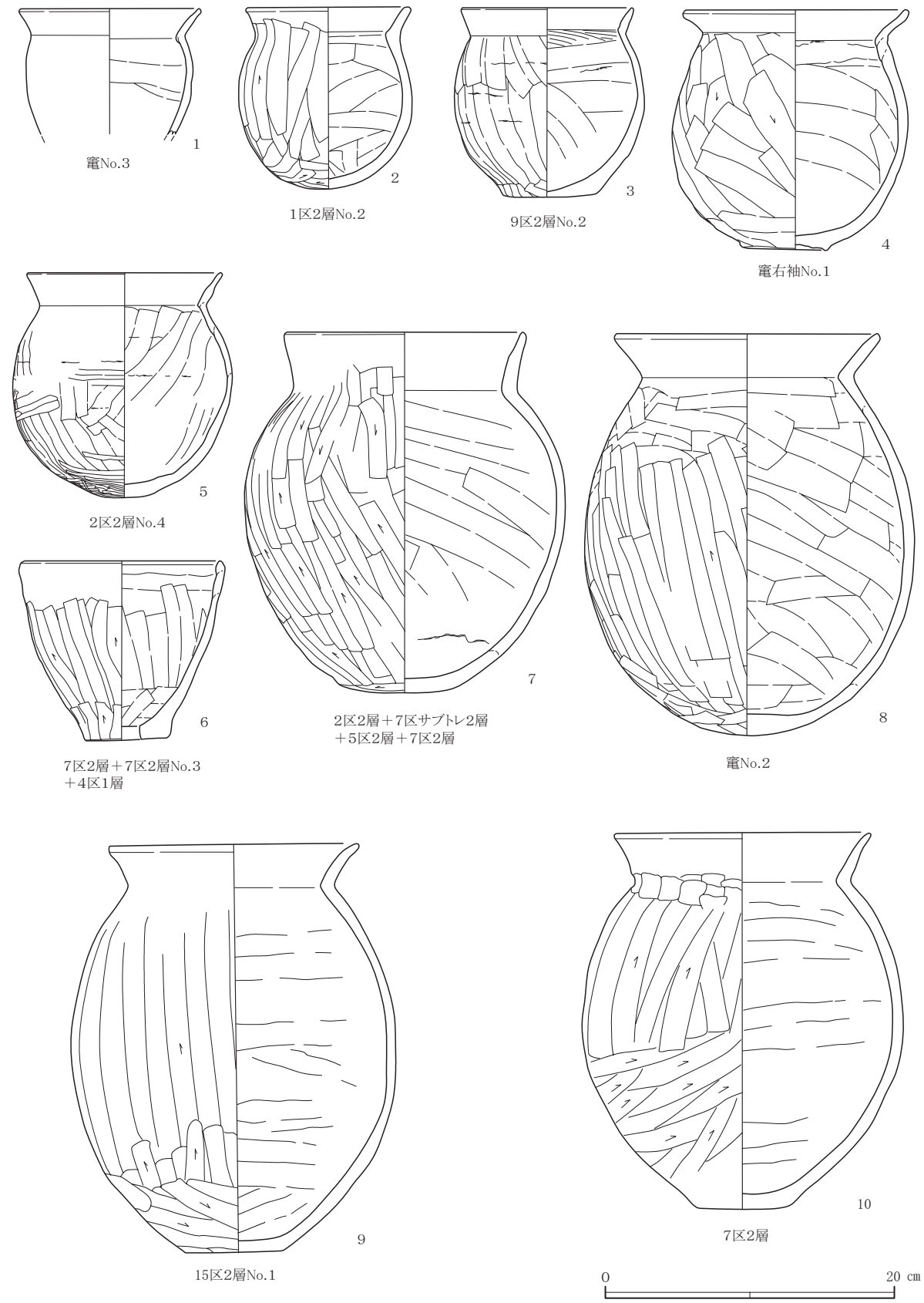


第106図　H－45号・H－46号・H－47号・H－48号住居址出土土器実測図



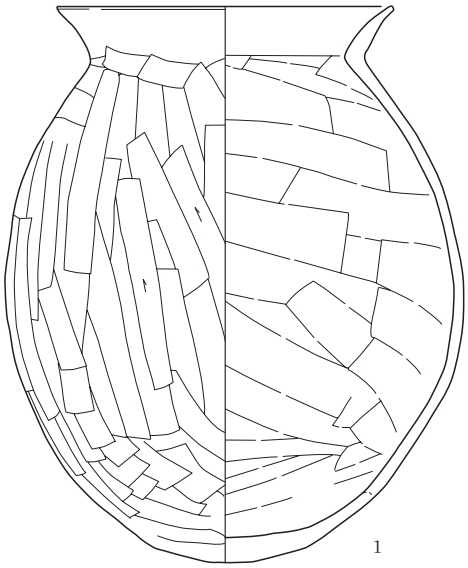
第107図　H－49号・H－50号住居址出土土器実測図

H－50号住



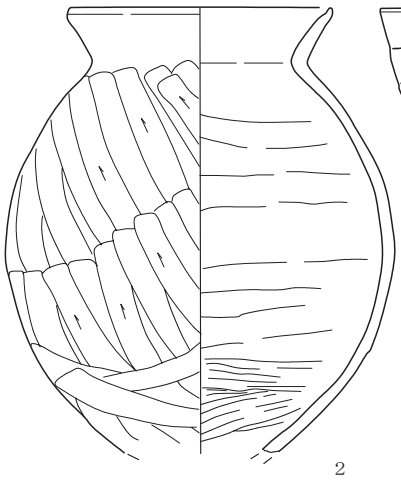
第108図　H－50号住居址出土土器実測図（1）

H－50号住



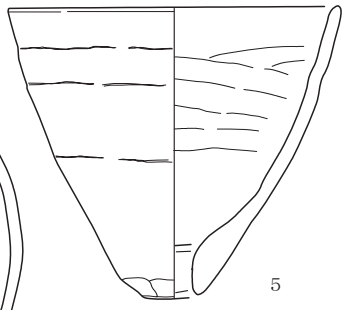
1

竈内No.1



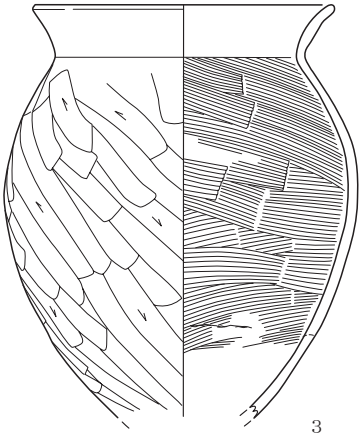
2

2区1層＋1区1層
＋1区2層＋竈内



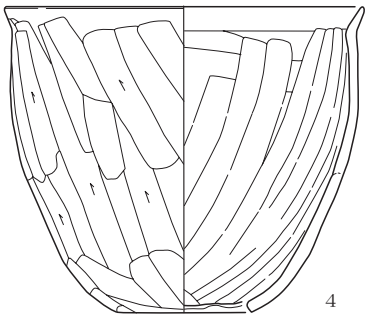
5

1区2層No.1



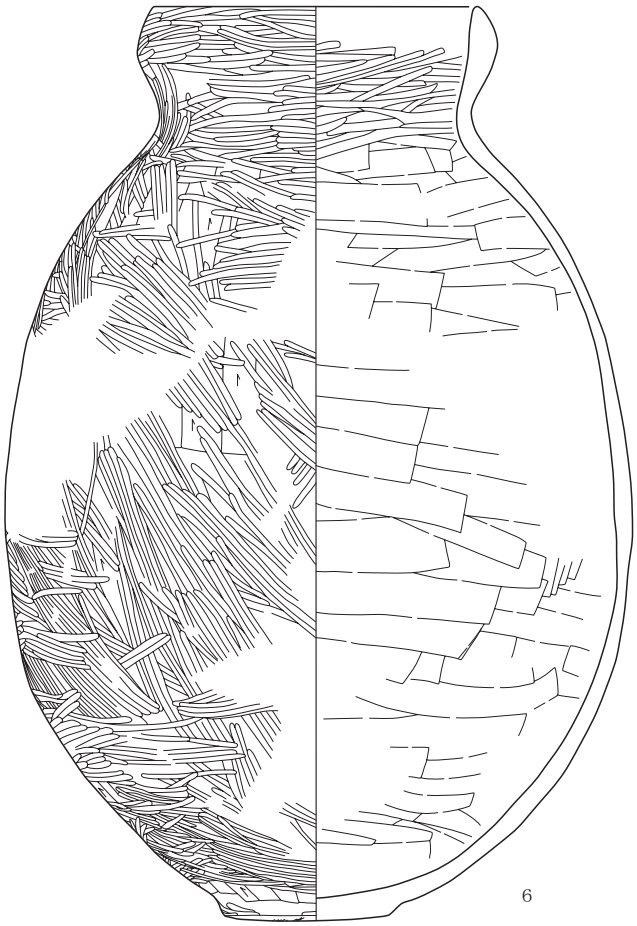
3

13区2層No.1



4

1区2層

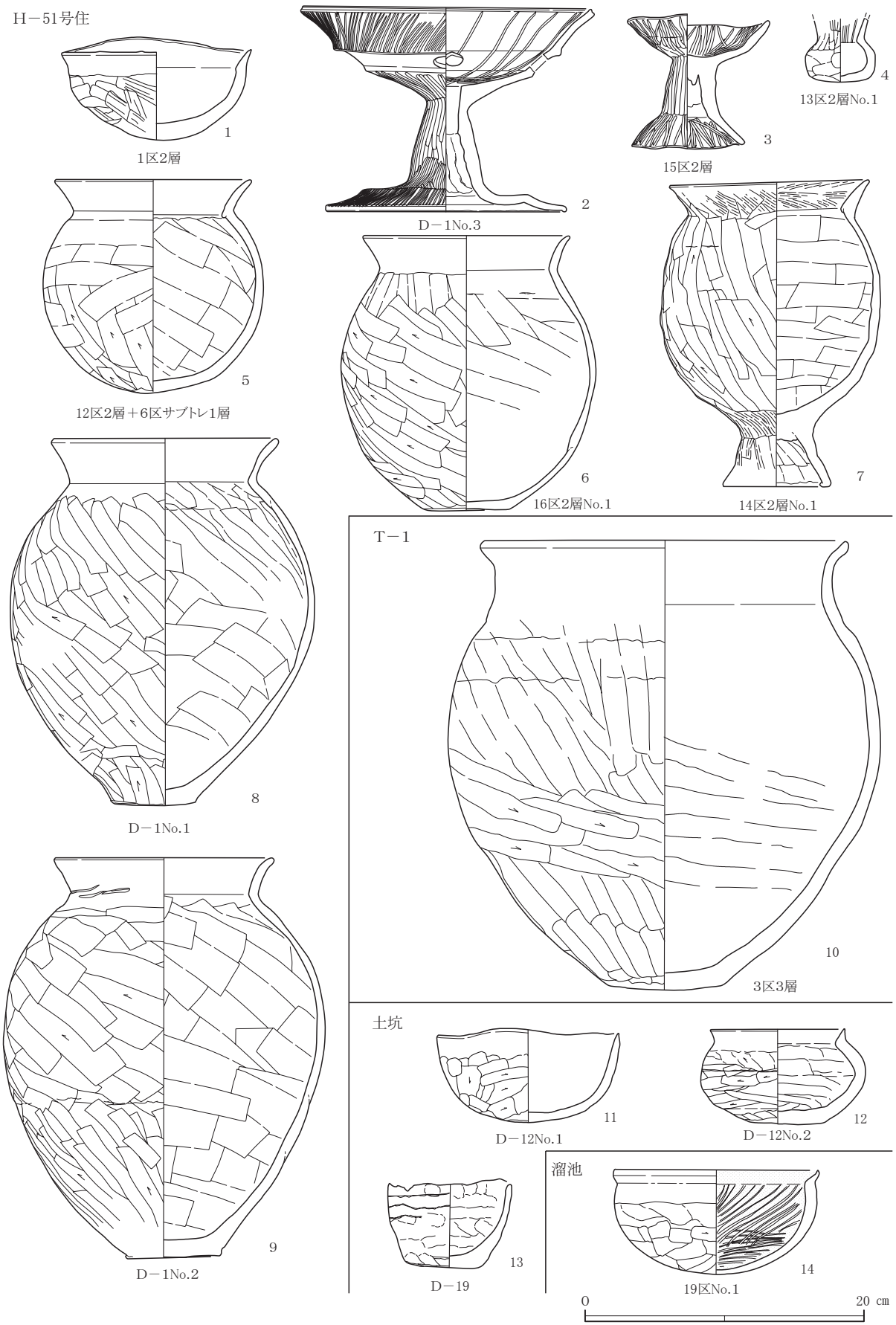


6

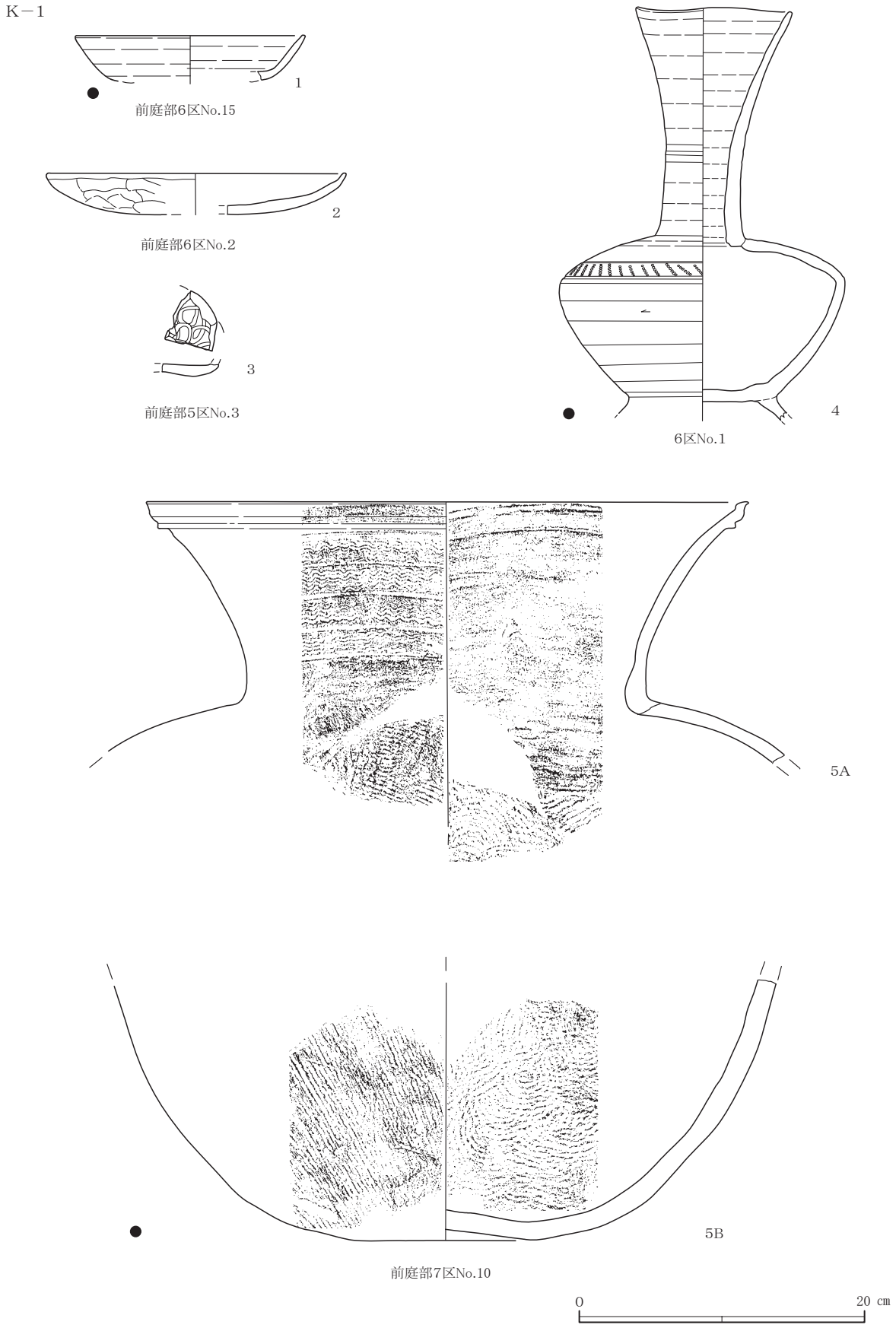
1区2層＋5区2層No.1
＋1区1層＋5区1層

0　20 cm

第109図　H－50号住居址出土土器実測図（2）



第110図　H－51号住居址出土土器実測図



第111図　K－1号古墳出土土器実測図

２．石製品・石製模造品・石器（第112図～第130図・第３表・第４表）

本遺跡では、石製品・石製模造品及び関連遺物（工程品）、編物石、台石等の工具等の石器が多数確認された。出土状況から判断した結果、石製模造品の工房址と覆土中から石製品及び石製模造品が出土した住居址が認められた。石製品・石製模造品はⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期を主体とするが、工房址の時期はⅡ期に集中する。

工房址では完成品と未成品、素材剥片、原石･石核、調整剥片･砕片等の製作関連遺物（工程品）、砥石、敲石、台石等石製工具類及び鉄製工具といった遺物が出土した。また、製作時に飛び散ったものを集めた白色粘土化した残滓（塊）も床面及び工作ピット（土坑）内で出土した。

出土遺物については、器種・形態分類、石材分類を行い、器種組成と石材組成（点数と重量）を作成した。また、器種分類では製作工程を把握するために完成品と未成品、原石・石核、素材剥片、調整剥片・砕片に分類した。各器種の大きさと重量を比較するため長幅グラフ、重量度数分布グラフを作成した。また、図示は完成品と未成品を中心にしたが、工房址の遺物については原石・石核、素材剥片も図示した。

古墳時代の石器分類

Ａ類（石製品）・・・玉類（勾玉・管玉・小玉等、臼玉は除く）、特殊遺物（実用品・呪術用）
原石・石核（工程品）
剥片類：未成品、素材剥片、調整剥片・砕片（工程品）

Ｂ類（石製模造品）・・・（石製模造品）：勾玉形、剣形、臼玉、有孔円板・方板等（非実用品・祭祀用）
原石・石核（工程品）
剥片類：未成品、素材剥片、調整剥片・砕片（工程品）

Ｃ類（石製品）・・・紡錘車（実用品）
原石・石核（工程品）
剥片類：未成品、素材剥片、調整剥片・砕片（工程品）

Ｄ類・・・その他の石製品（石製模造品以外の石製品、用途不明）

Ｅ類（工具）・・・砥石、台石、敲石類及び磨石（１類：石製品・石製模造品製作工具、２類：それ以外の工具）

Ｆ類（石器）・・・編物石（実用品）

石器出土状況及び器種組成（第３表）

古墳時代の石器は、石製品・石製模造品及び関連遺物を主体として工房址と住居址等の覆土中から出土した。

工房址ではＢ類及びＣ類の製作が主体であり、Ａ類の製作は認められなかった。Ａ類の製品は全て搬入品である。遺構毎に出土量、器種組成に差が認められるが、両者とも廃棄行為を示すもので、前者は「製作に伴う廃棄」、後者は「使用による廃棄」で異なる用途が窺えられた。工房址には、全ての製作工程が完結する製作活動が活発であるパターン（Ａ）と製作活動が部分的で、関連遺物も少ない製作が低調であるパターン（Ｂ）が存在する。また、遺構覆土中のものは、完成品あるいは未成品のみが出土する使用廃棄（Ｃ）パターンと剥片類のみで廃棄時に混入した廃棄混入パターン（Ｄ）が存在する。

Ａパターンは、Ｈ－42、45、47、49、50号住居址が該当する。各住居址では製作される器種が異なり、Ｈ－42、49号住居址ではＢ類の製作、Ｈ－45、47号住居址では臼玉製作を主体とし、剣形も製

作、Ｈ－50号住居址では剣形の製作とＣ類である紡錘車の製作が認められた。原石・石核を組成するのは、Ｈ－42、45、50号住居址で、Ｈ－47、50号住居址では石核が完全に消費し尽くされていたか、あるいは他への搬出が推定される。

Ｂパターンは、Ｈ－８、16、17、22、(43)、46、48、51号住居址が該当する。

Ｃパターンは、Ｈ－10、12、13、15、23、24、25、28、30、32、34、36、40号住居址が該当する。

Ｄパターンは、Ｈ－５、11、19、21、39号住居址が該当する。

住居址以外の遺構では、溜池で勾玉、剣形が出土した。Ｄ－19号土坑では勾玉が出土した。遺構外では勾玉形、剣形、臼玉、原石が単独で出土しており、特定の場所に遺物が集中する範囲は認められなかった。

Ａ類では、勾玉は２軒の住居址と溜池で出土した。管玉は４軒の住居址で出土した。点数は各住居址で１～２点であり少ない。Ｂ類では剣形、臼玉が主体であり、勾玉形、有孔円板・方板が少数組成するが、器種に多様性は認められない。剣形の未成品（半成品）や器種が特定できない未成品も多数組成する。剣形及び未成品は14軒で出土した。臼玉は13軒で出土した。Ｈ－25号住居址では、臼玉が27点まとまって出土した。原石は２軒の住居址、石核は９軒の住居址で組成し、製作に伴う剥片類が共伴している。Ｃ類では10軒の住居址で紡錘車が出土した。紡錘車の製作はＨ－49、50号住居址で認められた。

Ｄ類は石製模造品以外の用途不明な石製品で、６軒の住居址で出土した。出土数は少なく、全て遺跡外からの搬入品である。Ｅ類は33軒の住居址で出土した。石製品・石製模造品の工房址出土のＤ類石器は製作にかかわる工具と考えられ、工房址以外で出土したＤ類石器は、別の用途で使用されたものと考えられる。Ｄ類は台石が30軒の住居址で出土し、多い住居址で８点出土している。台石の出土状況では床面に安置されたものと覆土に廃棄されたものが認められた。砥石は12軒、敲石は４軒で出土した。工房址では台石、敲石、砥石のうち必ず１点が組成している。磨石は10軒で出土した。台石のみ組成する住居址、砥石及び磨石を組成する住居址もあることから、石製品・石製模造品の製作以外に何らかの作業が行われた可能性が想定できる。Ｆ類は編物石（こも石）で、37軒の住居址で出土した。編物石は住居址床面直上で密集して出土する傾向が認められ、特にＨ－14、30、32、42、43、48、50号住居址では10点以上出土し、中でもＨ－43号住居址では、狭い範囲で47点もの編物石が出土しており特異である。

加賀塚遺跡の石器群の特徴は、１．石製品・石製模造品及び関連遺物（Ａ類～Ｃ類）、２．台石等の工具（Ｅ類）、３．編物石（Ｆ類）に大別でき、これら３種類の石器が組み合わさって石器群を形成している。加賀塚遺跡では石器を組成する住居址は、44軒で認められ、全体の86％を占める高い確率で組成が認められた。このことは、石製品・石製模造品の工房址の石器群を除いたとしても、中期後半から後期前半の間においても、なお石器を使用し続けていたものと考えられる。

石材組成（第４表）

器種組成別の石材は、Ａ類～Ｃ類（石製品・石製模造品）においては、滑石（3,943.5ｇ）と蛇紋岩（2,433.1ｇ）が多用され、それ以外の石材（446.4ｇ）はほとんど利用されていない傾向が認められた。滑石と蛇紋岩は石質的には同一石材であり、細分によって区別された石材である。滑石と蛇紋岩は、藤岡・甘楽地域（群馬県南西部）に広がる「三波川帯」で産出が知られていることから、加賀塚遺跡の石材も肉眼観察による比較と産出地との地理的状況から同地域のものが利用されている可能性が高い。

Ｄ類の石材は結晶片岩、牛伏砂岩、頁岩、碧玉、チャート、メノウが利用されている。

Ｅ類の石材は砥石では、牛伏砂岩が主体で、流紋岩、頁岩が少数利用されている。牛伏砂岩は滑石と

蛇紋岩の産出地と一部分布が重なる石材である。流紋岩は、「砥沢石」と呼ばれる南牧村付近で産出する石材と類似する。台石、敲石、磨石には在地の安山岩が利用されている。Ｆ類の編物石も在地の安山岩が利用されている。

石器各説（第112図～第130図）

Ａ類

勾玉（１～３）

勾玉は３点出土した。メノウ質の良質な石材（滑石）で、Ｂ類のものとは形態が異なり、実用品として製作されている。丁寧な研磨により断面楕円形になるよう仕上げられている。穿孔は両面から行われている。大きさは長さ２～４㎝で長幅比が1.5：１に分布が集中する。

管玉（４～10）

管玉は７点（うち未成品１点）が出土した。４～８は青緑色を蛇紋岩系の石材で、同一母岩である。穿孔した後、研磨によって細長く仕上げ、必要に応じてカットされている。大きさは長さに違いがあるが直径はほぼ同じである。９は緑灰色の碧玉に類似した石材である。10は未成品で、削り、研磨によって多面体の素材に成型している。両端部には、削り痕、研磨によって平坦に仕上げられている。

Ｂ類

勾玉形（11～18）

勾玉形は８点出土した。滑石製で、勾玉を模造した形態である。形態は幅広扁平である以外、Ａ類の勾玉と同じである。形割によって側面整形され、先に両面を研磨している。断面は四角形である。

剣形（19～37）

剣形はⅠ形態（背表面にＹ字状及び平行する稜をもつ形態）とⅡ形態（両面が平坦である形態）に分類できる。Ⅰ形態は20、34、35、37である。それ以外は全てⅡ形態である。両面、側面とも研磨により整形され、断面が三角形（刃がつくもの）と四角形（刃が無いもの）に分けられる。穿孔は１カ所あるいは縦横に２カ所認められる。穿孔痕が円形に残るものもある（23、26）。28～33は未成品及び有孔の石製品の可能性が考えられる。

剣形未成品（38～45）

未成品の状態から、剣形の製作は、「板状の横長剥片を素材押圧剥離等によって微調整→表裏面の研磨による厚みを均一にする→側面研磨により平面剣形に調整する」工程が認められる。欠損しているものは、穿孔前に廃棄された遺物である。

有孔円板（46～48）

「方形の剥片を素材を研磨→周縁を削って円形に整形（面取り）→両面を研磨した後、削面を研磨して調整」している。側面は滑らかではなく、角が残る。穿孔は３カ所（46）、２カ所（47、48）ある。

有孔方板（49～52）

縦長状の剥片を研磨→両端部及び両側面を切断（切削）→研磨によって平面長方形に整形→長軸方向に穿孔」している。52以外は全て穿孔が２カ所である。

有孔石製品・未成品（53～58）

穿孔をもつ形態不明の石製品・未成品である。研磨が一部のみで穿孔されたもの（55、56）もある。

無孔未成品（59～61）

59は有孔円板の未成品である。60、61は研磨された臼玉の素材（形割）と考えられる。

平玉（62）

形態的には臼玉と同じであるが、大きさで区別した。表裏面、側面とも研磨されている。

臼玉・臼玉未成品（63～196）

臼玉は129点出土した。H－25号住居址出土の27点は全て成品で、H－45号住居址は製作に伴う欠損品である。臼玉の成品は径５～７㎜、未成品は径８～11㎜の大きさに集中する。厚さでは成品、未成品共に2.5～４㎜の範囲で集中するが、未成品では1.5～２㎜のものも多く認められた。これは欠損により､薄くなったものと推定される｡臼玉製作は表裏面を研磨した方形素材を切削して円形に整形(形割)し、穿孔後に、側面を中心とした研磨によって丸く仕上げている（形割→穿孔→研磨)。断面（胴）形状は研磨の程度によるが、篠原氏の分類（篠原1995）で言うＣ（直線状で、円筒状、臼玉直径未満の厚さ）とＥ（直線状で、円筒状。臼玉直径三分の一以下の厚さ）が主体である。また、側面の研磨方向は縦方向と斜方向の両者が認められた。H－25号住居址の全点、63、65～69、71～73は成品で、断面形状は大きさ、厚さ共に均一である。H－45、47号住居址の全点、64、70は未成品で、穿孔途中で分割（欠損）したものが多い。側面は粗く切削され、表裏面を中心に穿孔が認められる。111～113、189、190、195、196は穿孔前の研磨された素材である。101～105は欠損品の接合資料である。

臼玉素材（197・198）

扁平の板状剥片を穿孔によって分割し、方形の臼玉素材を作出したと思われる剥片が２点出土した。素材は穿孔により側縁が多角形となり、臼玉素材にしたものと考えられる。他の石製品の可能性もあるが注目すべき遺物である。

Ｃ類

紡錘車（199～212）

紡錘車は14点出土した。大きさは径４～５㎝の範囲にまとまりをもち、断面台形で規格性が認められる。整形は縦方向、放射状に切削し、研磨されている。研磨によって稜が残るものと無いものが認められる。Ⅱ期の紡錘車は、荒い研磨で仕上げられており、表面の光沢は少ない。未成品である可能性が高い。

紡錘車未成品（213・214）

形割段階のものである。整形は金属器によると思われる。215は本体と剥片の接合資料である。

Ｄ類

その他の石製品（215～218、312～315）

石製品・石製模造品とは石材が異なる石製品とした。加工品と無加工品のものに分けられる。215は槍状の石製品で、石材は風化が著しい青灰色片岩系である。216はH－14号住居址の床面（貼床）から出土した石製品で、形態から判断して弥生時代の磨製石包丁で、古墳時代に二次転用された可能性が高い。研磨により扁平に仕上げ、１カ所の穿孔がある。縁辺は断面レンズ状に研磨されている。石材は黒灰色片岩系である。217は研磨により片刃に仕上げられた石製品である。石材は乳青白色のチャートである。218は良質なメノウの原石である。312～315は研磨により平面円形、楕円形に整形された石製品である。こうした石製品は類例が少ないため用途は不明である。石材は牛伏砂岩、頁岩である。

石製品・石製模造品製作工程品

原石・石核（219～226）

滑石及び蛇紋岩両石材とも認められた。H－16号住居址では４点出土したが、積極的な石器製作は

認められない。これらの石核には直接打撃による素材剥離が認められるが、一部金属器による剥離（切削）痕も認められる。遺構はⅢ期であることから、石核のみの搬入と思われる。Ｈ－46も単独出土である。分割された石核で稜線上には金属器による剥離痕が観察される。これらの石核の特徴は、節理（石の目）に沿って縁辺部を打面として薄い剥片を剥離している点である。金属器による痕跡では削り取るような手法で剥片剥離が認められる。ＵＳ－１出土の石核（225）には石材硬度確認による穿孔が２カ所認められる。

工房址出土の石製品・石製模造品製作工程品（227～286）

石製品・石製模造品を含む「玉作」の基本工程は、寺村光晴氏が示した「１原石採取－２荒割－３形割－４微調整（側面打裂）－５研磨－６穿孔－７仕上げ（修正）－８完成」といった工程が一般的である。（寺村1960・1980・2004）。本報告ではこの工程に準拠し、遺物の分類、製作技術について検討を行った。

石製品・石製模造品の製作工程を示す良好な遺物が出土した工房址は、Ｈ－42、45、47、49、50号住居址である。

Ｈ－42号住居址出土の製作工程品（227～242）

本住居址では、滑石と蛇紋岩を利用して、石材の区別無く勾玉、臼玉、剣形、有孔円板等の多様な石製品・石製模造品が製作されている。剣形製作を主体とし、その製作途中で他器種を製作している。製作は３形割工程から開始しているが、３及び４工程で作出される調整剥片は少なく、形割が完了した素材及び未成品を多く搬入し、研磨－穿孔－仕上げが行われていると推定される。

荒割による幅広剥片素材（227）及び長方形（タブレット状）に整形した研磨された素材（228）、素材剥片の周縁を調整した剥片（229、234）、素材剥片を形割した剥片（230～233）、研磨段階の剥片（235～241）が認められる。235は玉（臼玉あるいは平玉）素材、239、240は剣形素材、241は有孔円板素材と推定される。本住居址では未成品及び成品が多く、製作による調整剥片が少ないのが特徴である。

Ｈ－45号住居址出土の製作工程品（242～248）

本住居址では、滑石と蛇紋岩を利用して臼玉を中心にした製作が行われている。臼玉製作段階で作出される剥片を素材とした有孔方板が製作されている。蛇紋岩の石核が１点組成するが、２及び３工程は遺物としては確認されず、主体は４微調整工程からである。荒割した石材を完全に消費している。

242、243は荒割（分割）段階の板状素材である。242は分割するために横方向の擦り切りが認められる。244は長方形に整形した後、表面に研磨が施されている。244～248は研磨された板状の素材剥片である。本住居址では臼玉製作が主体であるため、これらは臼玉素材であると思われる。

Ｈ－50号住居址出土の製作工程品（249～286）

工房址の中で最も集中的に石製品・石製模造品の製作が行われている。石製模造品の製作は１工程から開始しており、素材の生産と石製品・石製模造品の製作の両者が認められた。一つの原石から必要な素材を効率よく剥離し、製作しているため、製作に伴う調整剥片は少ない。249～282は全て滑石の同一母岩でる。249～251は原石及びその分割による石核である。石の目に沿って直接打撃で縦方向に分割されている。252～256は荒割段階で剥離された板状の縦長素材剥片である。256～260は縦長剥片をさらに横方向に分割した素材である。259、260には研磨が施されている。261～282は縦長及び矩形の素材剥片である。261～266は矩形、円形の石製品素材である。267～280は端部が尖ることから剣形の素材と思われる。281、282は平面長方形であることから方板と思われる。266、270、271、

273以外は調整後に研磨が施されている。283は表裏面、側面が研磨された板状の素材（石核）である。この素材は単独母岩であり搬入品である。284～286は蛇紋岩の同一母岩である。284は３点の接合資料である。板状の大形横長素材剥片を剥離した後、金属工具による加工痕が認められる。この石材の石製品・石製模造品は無いため、製作された器種は不明である。同一母岩の紡錘車があるが、この接合資料とは製作工程が別である。

Ｈ－47号住居址出土の製作工程品

臼玉製作を主体とした工程品が認められた。全て未成品からの製作で、臼玉素材を搬入し、穿孔、仕上げが行われていたものと推定される。

製作工程品について

主にＢ類を中心とした製作工程について、集約すると第115図のとおりとなる。基本的には原石を分割し、素材を獲得し、搬入して製作に移るが、この素材をさらに分割、剥離することによって目的とする器種の素材剥片が作出される。この素材剥片を用いて各器種の製作が開始される。本遺跡では、素材となる原石・石核は多数あるが、分割に伴う素材剥片及び調整剥片は組成全体から非常に少ない。特に調整剥片は極端に少ないことから、本来存在するはずである調整剥片も素材剥片として利用するといった素材を無駄にせず、完全に消費し尽くす石材利用方法が存在したものと思われる。したがって、本遺跡では製作工程の内容により、母岩となる原石・石核を集落内で共有したものを各工房址で消費し、石製模造品の製作が行われたものと考えられる。

Ｅ類

砥石（287～300）

砥石は12軒の住居址で17点出土した。出土状況は台石と同様な傾向が認められた。必ずしも工房址から出土しないことから、石製品・石製模造品の研磨以外の用途も考えられる。研ぎ面を観察するとＶ字状の細い筋があることから、金属器（刀子等）の研磨にも使用されたものと推定される（287、292、296、298、299）。石材は牛伏砂岩を主体に、頁岩、流紋岩、安山岩である。大きさは600ｇ以下と１㎏以上に分けられる。形態は定形、不定形なものが存在する。平面棒状あるいは四角形に近い形態で、４側面に研ぎ面があり、断面が四角形となるもの（287～293、295）と楕円形（294）、研磨により表面が窪むもの（292、296、300）、断面が扁平（291、297～299）になるもの、不定形なものが認められた。298と299は住居間接合で、それぞれ分割した後、再び研磨に使用されている。

磨石（301～305）

磨石は10軒で12点出土した。石材は安山岩で形態は円形と楕円形が主体である。礫面に磨った痕跡が観察できたものを磨石と認識した。後述する編物石にも一部に磨面が観察でできることから、二次転用のものも含めると組成数は更に増加すると思われる。石材は全て安山岩である。

敲石（306～308）

敲石４軒で６点出土した。工房址以外でも出土していることから、石製品・石製模造品製作の工具以外に使用された可能性が考えられる。石材は全て安山岩である。

台石（309～311）

台石は30軒の住居址から72点出土した。出土状況には床面に置かれた状態と覆土へ廃棄された状態がみられ、比較的台石を組成する住居址が多い特徴が認められた。石製品・石製模造品の工房址出土の台石は製作工具の使用された可能性が高い。それ以外では、台石を必要とする何らかの作業が行われた

可能性が考えられる。台石の属性は、石材は安山岩が主体である。完形品は大きさの平均値は平均約31.6㎝、幅約19.2㎝、厚さ約10.6㎝、重量約9,875ｇである。最大ではＨ－42号住居址で57.5㎏の台石が出土したが、22㎏までの間に重量が集中する。

Ｆ類

編物石

編物石は37軒で146点が出土した。編物石は「錘」の機能をもつ石器であり単独で機能する石器ではないため、多数組成する傾向が認められる。少数組成するものは、磨石の可能性も考えられる。住居址の床面で置かれた状態、覆土に廃棄された状態で出土している。大きさの平均（全体）は、長さ13.0㎝、幅6.1㎝、厚さ4.4㎝、重量548.6ｇで、大きさに大小差があるにせよ概ね長幅比が２：１の楕円形であることが分かる。さらに大きさには長さ７～10㎝、幅４～６㎝、重量300ｇ以下の小形のグループと長さ12～17㎝、幅５～８㎝、重量500～900ｇまでの間の大形のグループに分けられる。大きさと重量は比例関係にあることから、大きさの異なる２つの編物石が存在していた可能性がある。Ｈ－14、30、43号住居址のものは大小２規格が認められ、Ｈ－32では小規格のもの、Ｈ－42、48、50号住居址では大規格のものが認められた。石材は全て安山岩である。安山岩以外の石材はない。

編物石の一部には、磨面や敲打痕が認められるものもあった。編物石の形状が「磨る」、「敲く（叩く）」行為に適していることから、単に「錘」の用途としてだけでなく、異なる用途にも兼用されたものと考えられる。

（井上慎也）

３．鉄製品（第130図）

鉄製品は古墳出土を除き10点出土した。317～323は住居址出土の鉄製品である。317は直状、両刃の刀子で茎断面は円形である。318は鉄板を折り返して扁平にした鉄製品であるが、器種は不明である。319は鍛治滓である。320は刀子の一部と考えられる。321と322は刃部がやや湾曲した両刃の刀子である。323は先端部が鍵の手状をした鉄製品で、その部分に歯車状の鉄がはめ込まれている。石製模造品の製作工具の可能性がある。324は溜池から出土した鉄製品である。刀子あるいは鑿と思われる。これらの鉄製品の時期は、共伴する土器の帰属時期に対応するものと考えられことから、中期後半から後期前半の所産と判断される。

鉄製品の出土量は、遺構数からみて非常に少ないことから、生産及び消費が活発ではなかった可能性が考えられる。また、石製模造品製作工房址内でも工具としての割合は非常に低いことから、本遺跡での鉄製品は貴重な存在であって、遺跡内では廃棄されず、工具は遺跡外へ持ち出されたものと推定される。

古墳の石室からは鉄製品８点が出土した。盗掘及び撹乱のため、出土数は少なく内訳は鉄鏃１点、鉄釘３点、棒状２点、球状１点、平面円形１点である。325は鉄鏃である。基部と茎は断面四角形で、先端部は片刃、断面扁平である。326と327は断面四角形の釘である。

古墳出土の鉄製品は形態的特徴により古墳時代終末期から飛鳥時代（律令期）にかけてのものであることから、古墳の年代と一致する。

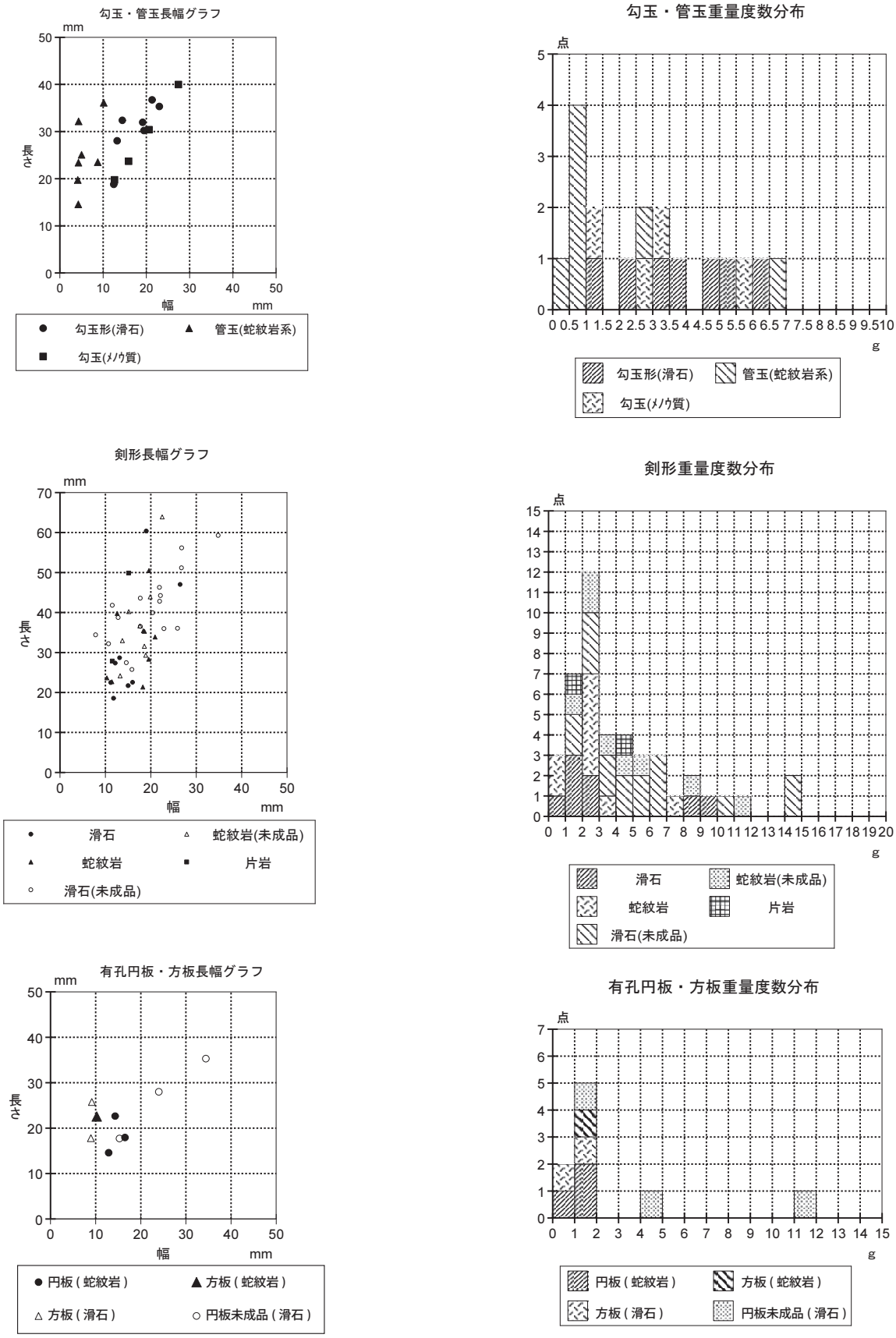
（井上慎也）

	勾玉	管玉	管玉未成品	勾玉形	剣形	剣形未成品	有孔円板・方板	臼玉	臼玉未成品	平玉	石製品	原石	石核	未成品	剥片	剥片(結晶凸岩)	細片	紡錘車	紡錘車未成品	点数	編み物石	台石	砥石	敲石	磨石	凹石	その他の石製品	点数
H－1号住																				0								0
H－2号住				1											1					2								0
H－3号住																				0								0
H－4号住																				0								0
H－5号住															1					1	6	2			1			9
H－6号住																				0								0
H－7号住																				0	1							1
H－8号住													1		14					15	1	1						2
H－9号住																				0	1							1
H－10号住					1			1												2	2	1						3
H－11号住															2					2	4							4
H－12号住		1		1	1										1			1		5	5	2						7
H－13号住																		1		1	2	1	1					4
H－14号住												1			1			1		3	27	2	4					33
H－15号住									1											1	4				2			6
H－16号住						2		1				1	3		7					14	6	1						7
H－17号住													1		3					4	8	1						9
H－18号住																				0	2	2						4
H－19号住															1					1	3							3
H－20号住															1					1	1	1						2
H－21号住																		1		1	6	2						8
H－22号住						1		1					1	1	1					5	6	3			1			10
H－23号住	1	1																		2								0
H－24号住						1		1										2		4	2	1			1			4
H－25号住								27						1						28			1					1
H－26号住																				0								0
H－27号住																				0	1							1
H－28号住					2			2						1	2					7	2	4	1		1		1	9
H－29号住																				0	3	3					1	7
H－30号住		3		1																4	20	8	1	1	2			32
H－31号住																				0								0
H－32号住														1						1	14	1						15
H－33号住																				0	9	4			1			14
H－34号住				1																1		4						4
H－35号住																				0	2						1	3
H－36号住					1													1		2	1	1		2			1	5
H－37号住																				0	3							3
H－38号住																				0	3							3
H－39号住															1			1		2	2		1					3
H－40号住						2														2			2					2
H－41号住																				0	2	6						8
H－42号住		1		1	6	4		2	1	1			4	3	43					66	19	6	1	2	1		1	30
H－43号住															6			1		7	47	2			1			50
H－44号住																				0								0
H－45号住							4	67					1	2	304		1585			1963		1	2	1	1			5
H－46号住								1					1		12					14	1	2	1				1	5
H－47号住						1		10	4			1		2	199		171			388		1						1
H－48号住						1		1					2		2		2			8	15	2	1					18
H－49号住			1	1	4	1	2	5	2					1	69		43	1	1	131	4	1						5
H－50号住						2						1	8	7	135	1	42	4	1	201	10	3	1					14
H－51号住					3										9					12	1	3						4
小　計	1	6	1	6	18	15	6	119	8	1	2	2	22	19	815	1	1843	14	2	2901	246	72	17	6	12	0	6	359
T－1竪穴															1					1	4							4
T－2竪穴																				0		1						1
D－12																				0		1						1
D－19				1																1		1						1
P－1	1																			1								0
US－1	1				1									1	2					5	1						1	2
EM－1																				0	1							1
EM－2							1													1								0
EM－3																				0								0
グリット				1									1							2	2	1					1	4
TP-2.P-1								1												1								0
トレンチ															1					1								0
J－4								1												1								0
小　計	2	0	0	2	1	0	1	2	0	0	0	0	1	1	4	0	0	0	0	14	8	4	0	0	0	0	2	14
合　計	3	6	1	8	19	15	7	121	8	1	2	2	23	20	819	1	1843	14	2	2915	254	76	17	6	12	0	8	373

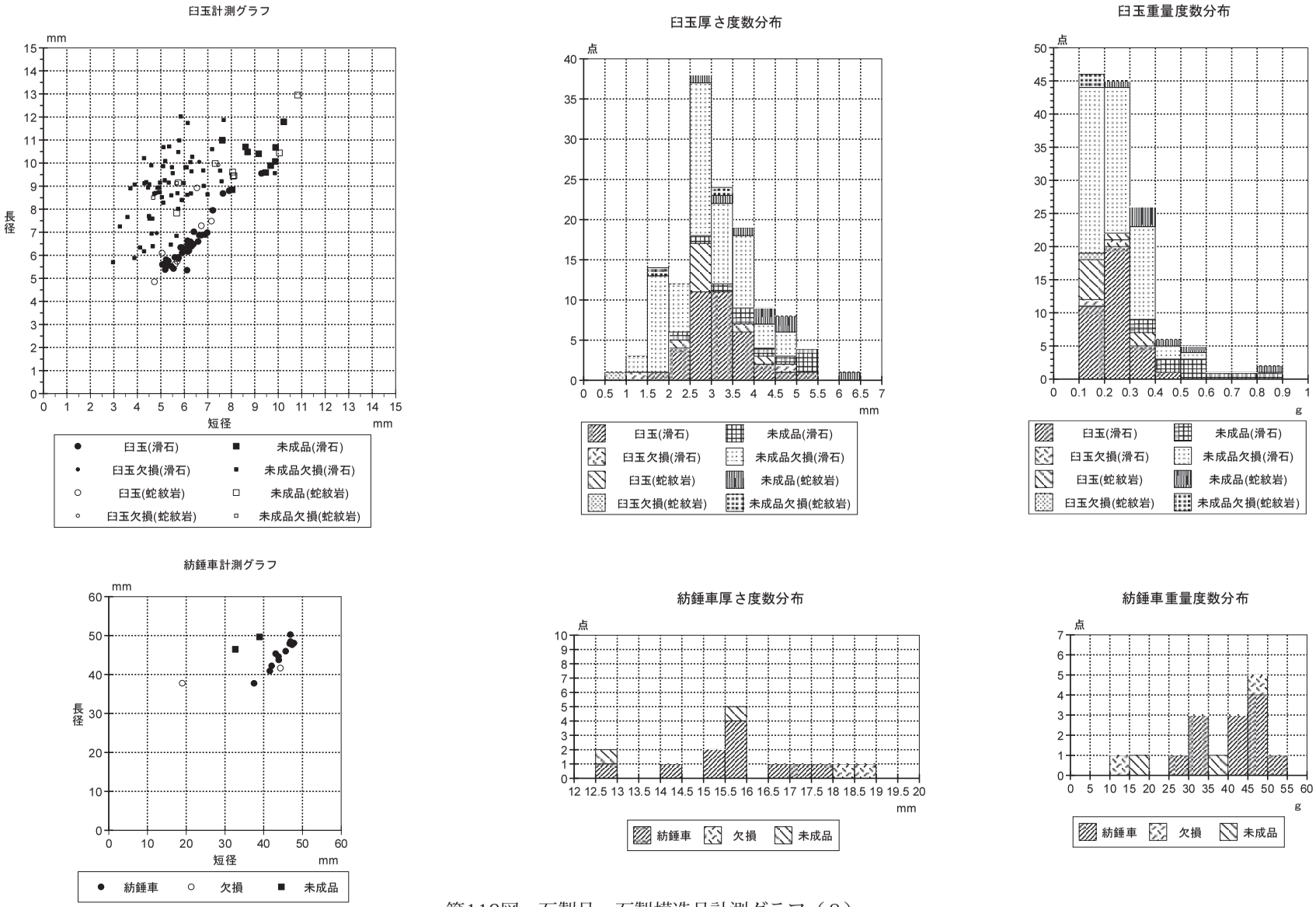
第３表　石器・鉄製品遺構別組成表

	滑　石		蛇　紋　岩		そ　の　他		合　計		その他の石材
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	
H－1号住							0	0	
H－2号住	1	3.3	1	3.5			2	6.8	
H－3号住							0	0	
H－4号住							0	0	
H－5号住			1	0.5			1	0.5	
H－6号住							0	0	
H－7号住							0	0	
H－8号住	12	55.4	3	35.4			15	90.8	
H－9号住							0	0	
H－10号住	2	2.5					2	2.5	
H－11号住	1	13.6	1	2.2			2	15.8	
H－12号住	2	10.9	3	61.6			5	72.5	
H－13号住			1	43			1	43	
H－14号住			2	53.9	1	13	3	66.9	片岩
H－15号住			1	0.8			1	0.8	
H－16号住	10	950.8	4	174			14	1124.8	
H－17号住			4	26.8			4	26.8	
H－18号住							0	0	
H－19号住			1	21.6			1	21.6	
H－20号住	1	21.1					1	21.1	
H－21号住			1	47.2			1	47.2	
H－22号住	3	141.1	2	4.1			5	145.2	
H－23号住			2	2.3			2	2.3	
H－24号住	1	0.1	3	94.6			4	94.7	
H－25号住	27	8.4	1	0.1			28	8.5	
H－26号住							0	0	
H－27号住							0	0	
H－28号住	5	12.7	2	6	1	56.2	8	74.9	SS
H－29号住					1	19.9	1	19.9	Sh
H－30号住	1	6.2	2	0.9	1	6.7	4	13.8	碧玉
H－31号住							0	0	
H－32号住	1	16.6					1	16.6	
H－33号住							0	0	
H－34号住	1	5.3					1	5.3	
H－35号住					1	32.8	1	32.8	SS
H－36号住			2	38	1	10	3	48	不明
H－37号住							0	0	
H－38号住							0	0	
H－39号住	1	2.1	1	46.5			2	48.6	
H－40号住			2	11.4			2	11.4	
H－41号住							0	0	
H－42号住	35	178.1	30	226.9	1	9.4	66	414.4	片岩
H－42号住					1	13.2	1	13.2	SS
H－43号住	1	8.6	6	24.3			7	32.9	
H－44号住							0	0	
H－45号住	1920	440	43	122.7			1963	562.7	
H－46号住	11	25	3	491.3	1	163.8	15	680.1	SS
H－47号住	378	212.8	10	5.3			388	218.1	
H－48号住	3	102.8	5	6.5			8	109.3	
H－49号住	12	26.1	119	187.2			131	213.3	
H－50号住	174	1640.3	25	569.4	1	78.4	200	2288.1	片岩
H－50号住					1	1.4	1	1.4	結晶片岩
H－51号住			10	12.2	2	5.3	12	17.5	片岩
小　計	2603	3883.8	291	2320.2	13	410.1	2907	6614.1	
グリット	1	4.9	1	70.3	1	4.9	3	80.1	Ch
D19			1	5.7			1	5.7	
P-1	1	2.7					1	2.7	
EM-2			1	1.7			1	1.7	
J4	1	0.1					1	0.1	
T1.P-2			1	14.3			1	14.3	
TP-2.P-1			1	0.1			1	0.1	
トレンチ			1	10.3			1	10.3	
US-1	3	54.7	2	7.8	1	31.4	6	93.9	メノウ
小　計	6	62.4	8	110.2	2	36.3	16	208.9	
合　計	2609	3946.2	299	2430.4	15	446.4	2923	6823	

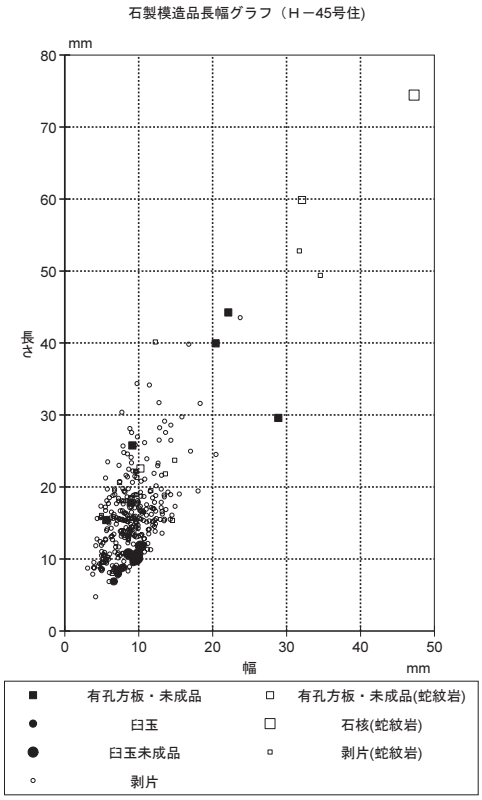
第４表　石製品・石製模造品石材組成表

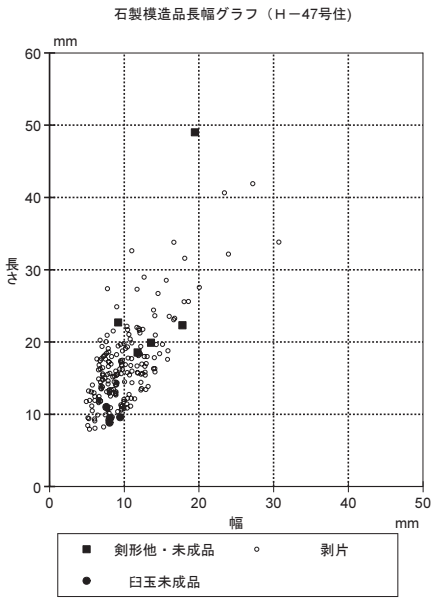


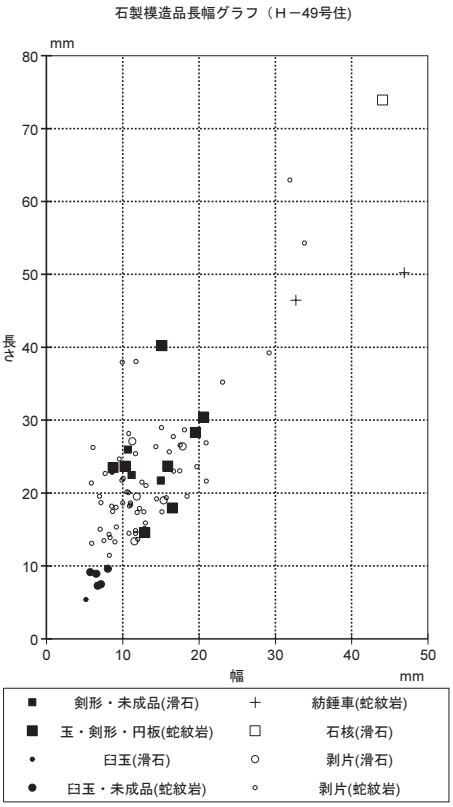
第112図　石製品・石製模造品計測グラフ（1）

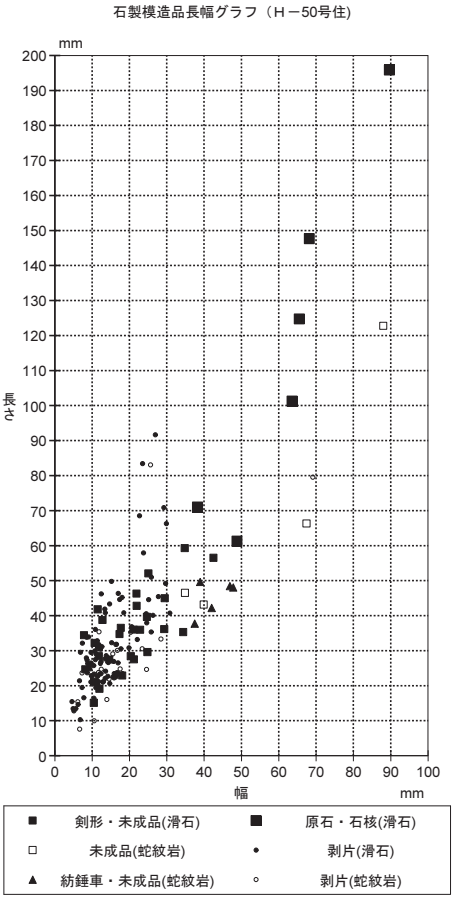


第113図　石製品・石製模造品計測グラフ（2）

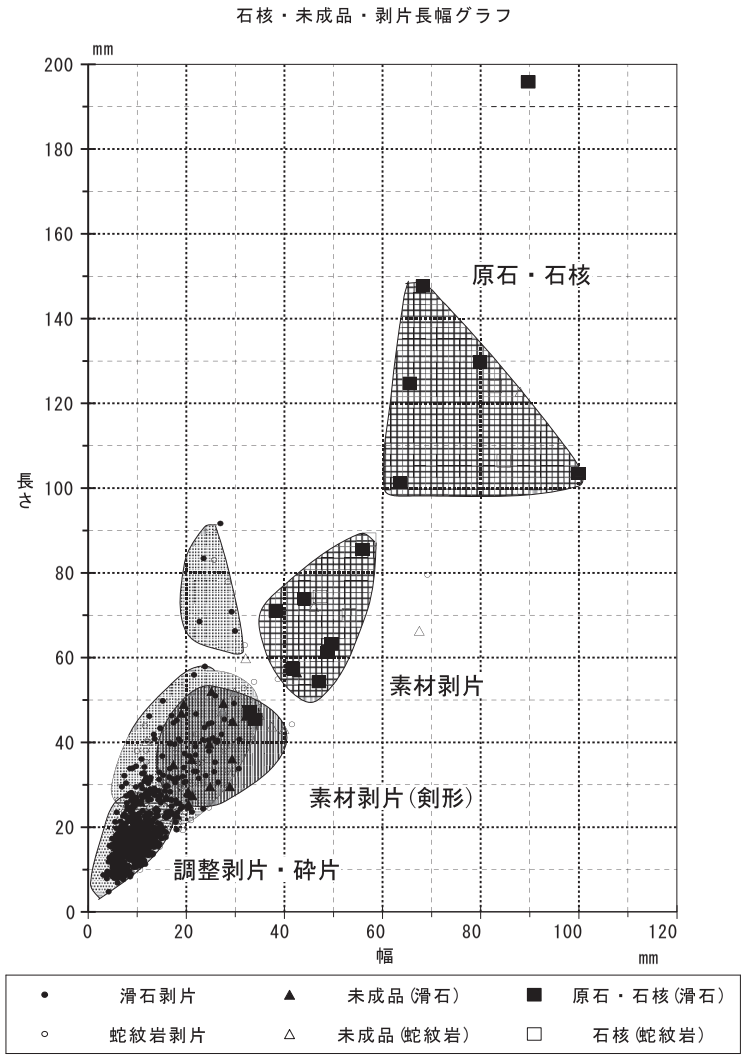


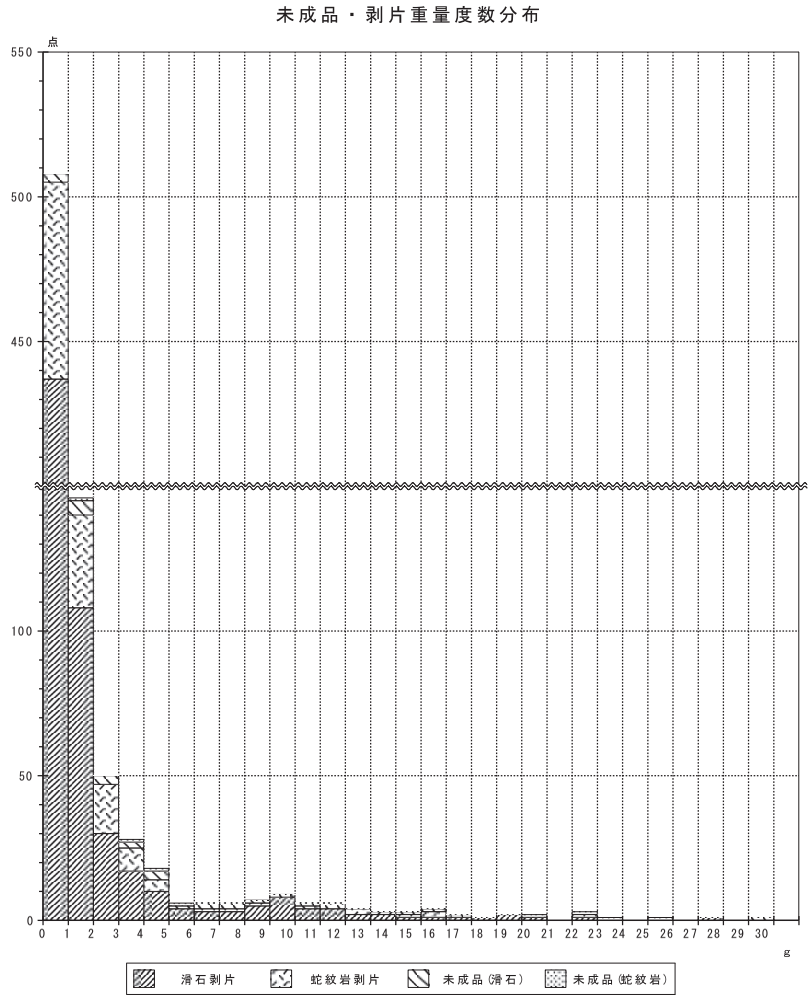




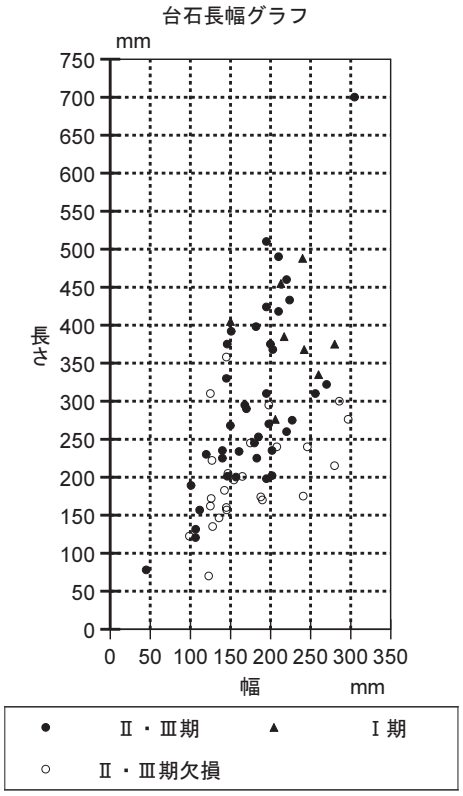


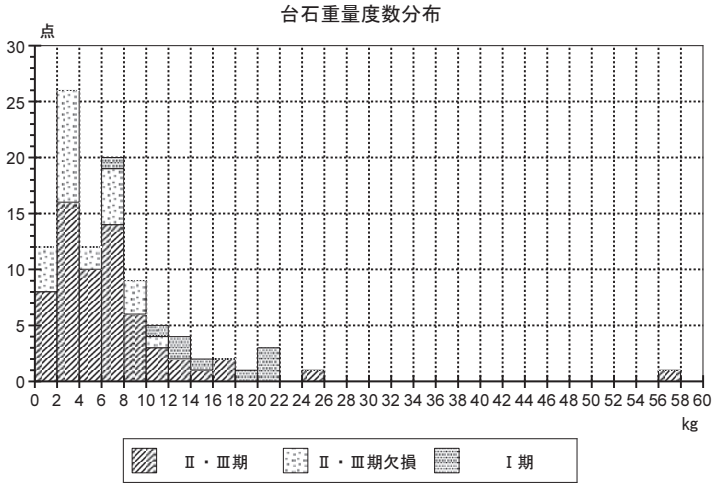
第114図　石製品・石製模造品計測グラフ（３）

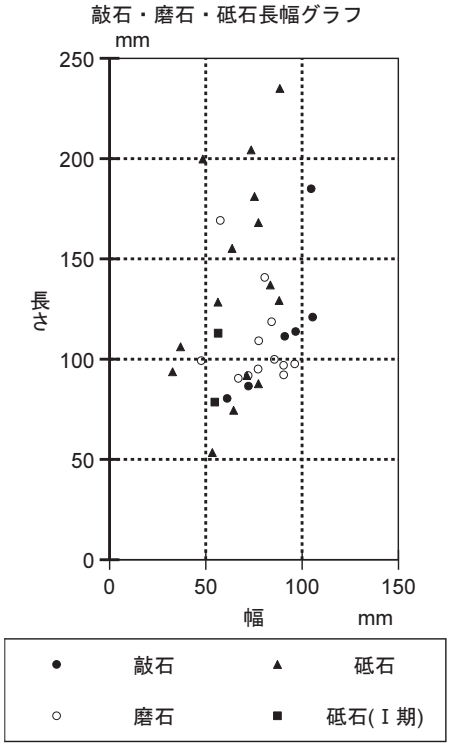


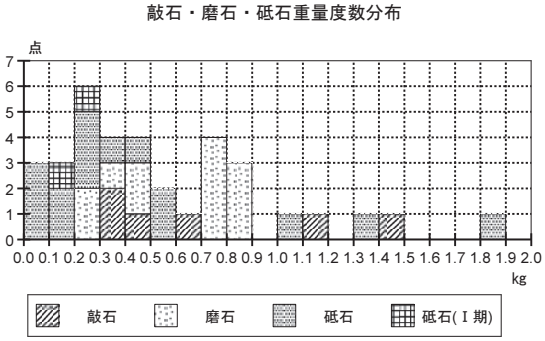


第115図　石製品・石製模造品計測グラフ（4）

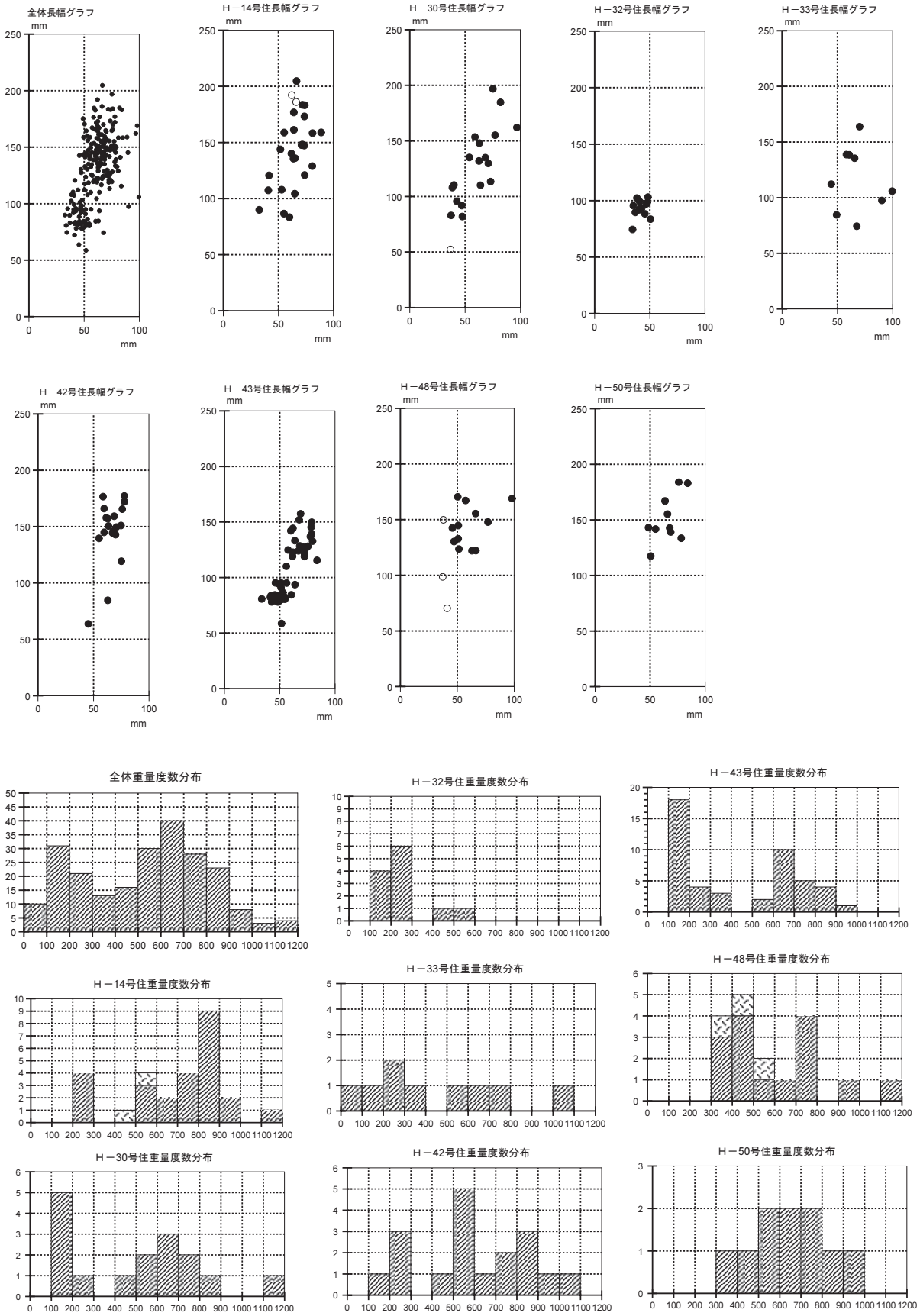




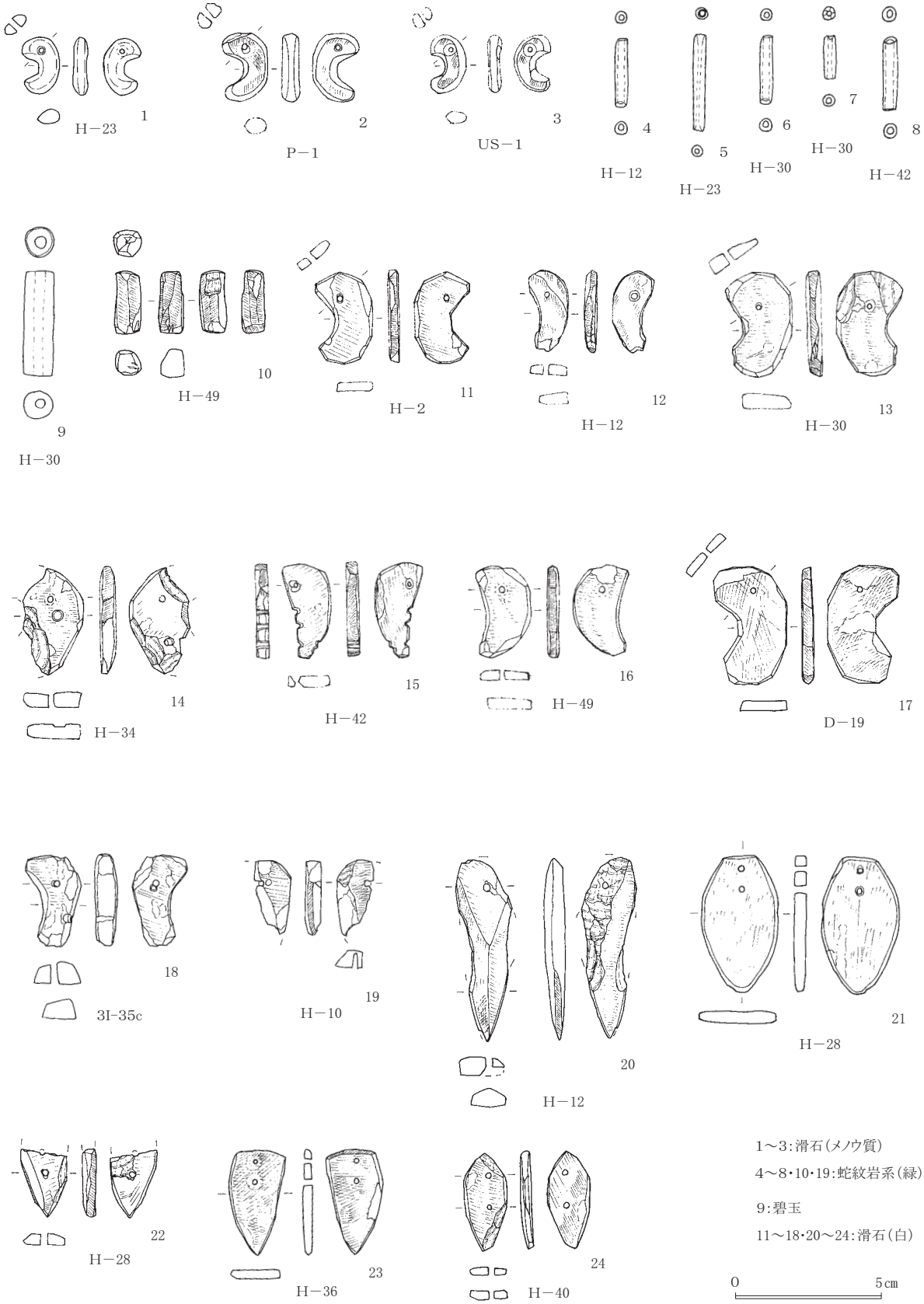




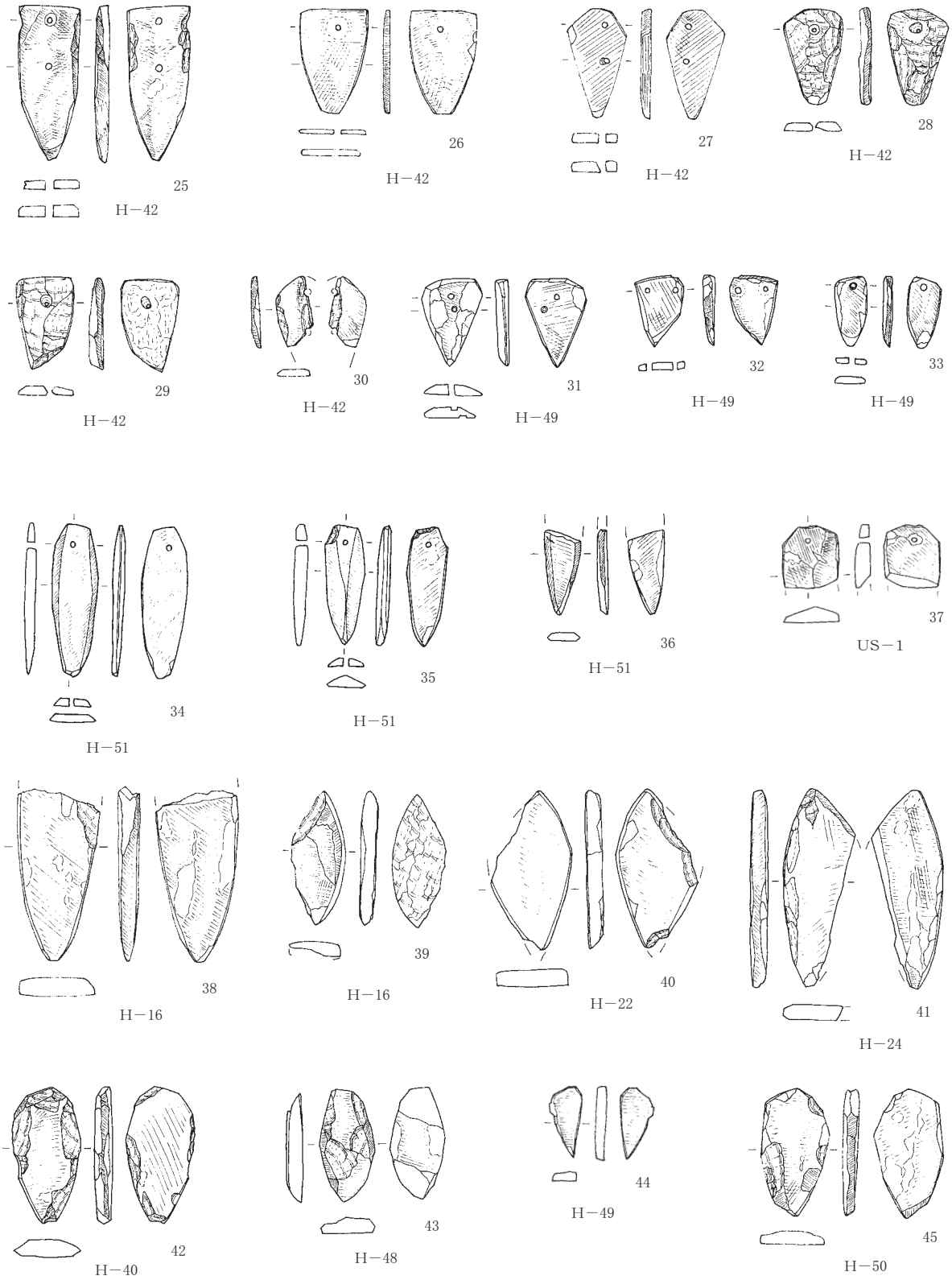
第116図　石器計測グラフ（1）



第117図　石器計測グラフ（2）



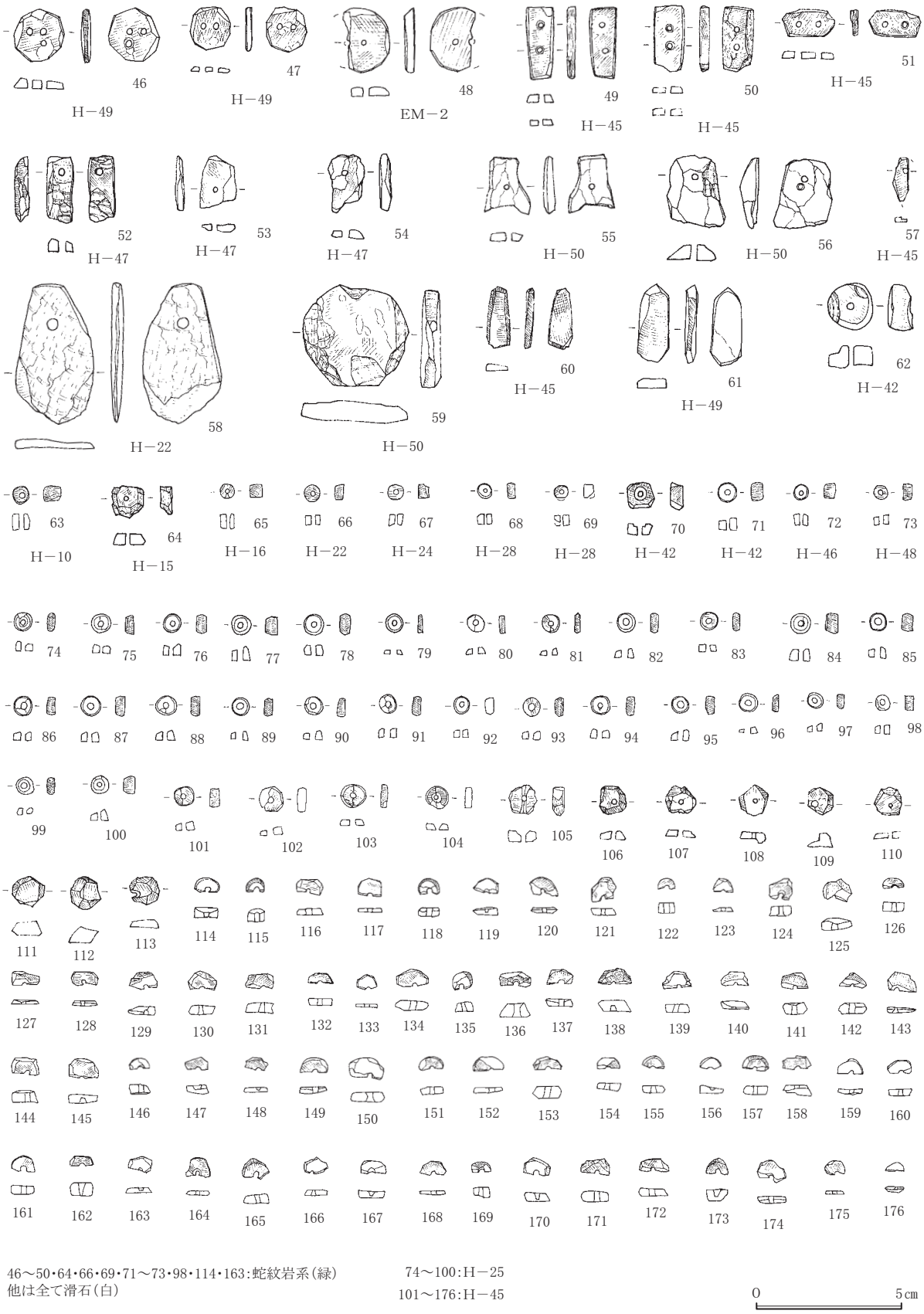
第118図　石製品・石製模造品実測図（1）



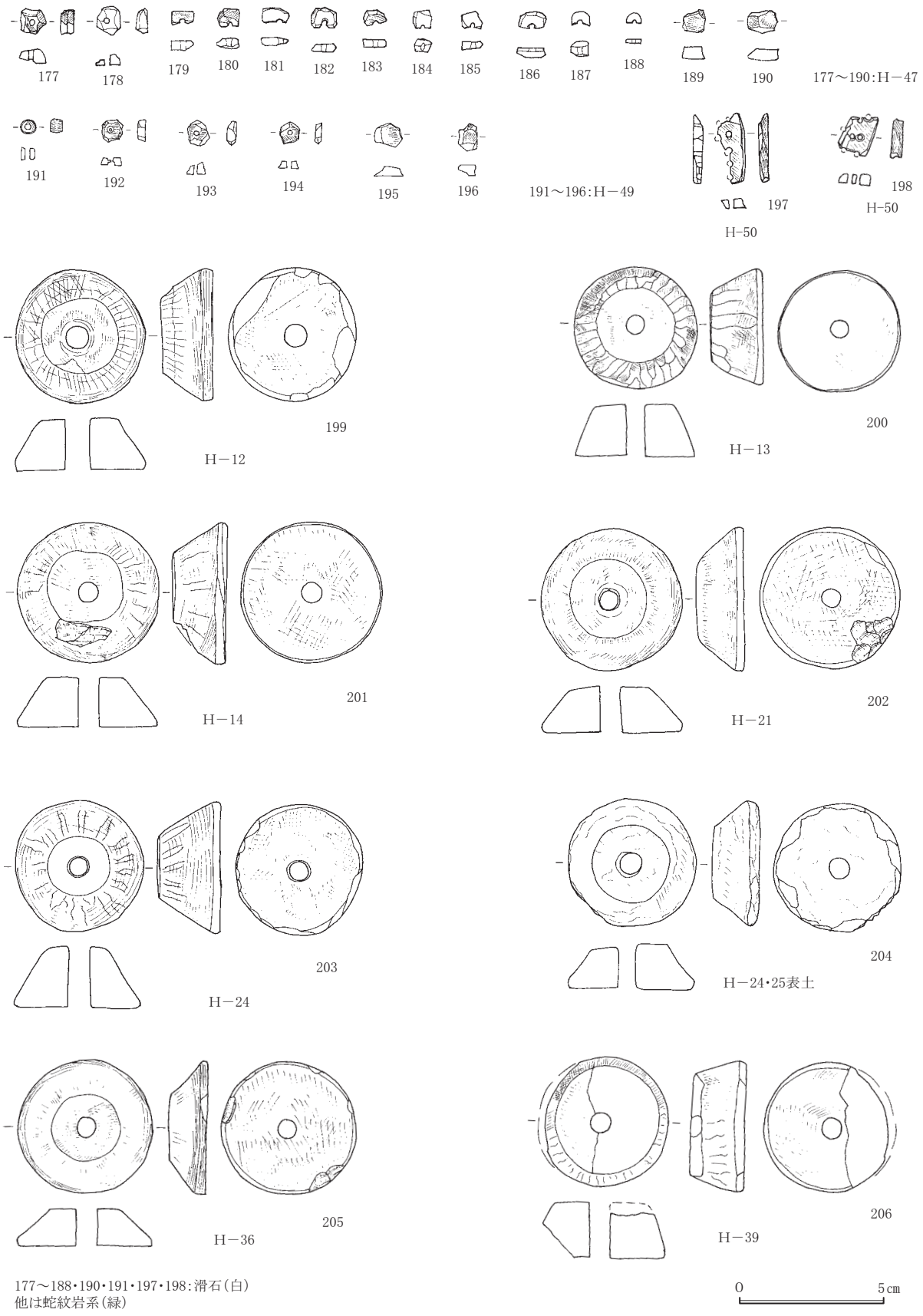
25～31・33・37・41・43：蛇紋岩系（緑）
32・35・38～42・44・45：滑石（白）
34・36：片岩系

0　5㎝

第119図　石製品・石製模造品実測図（２）

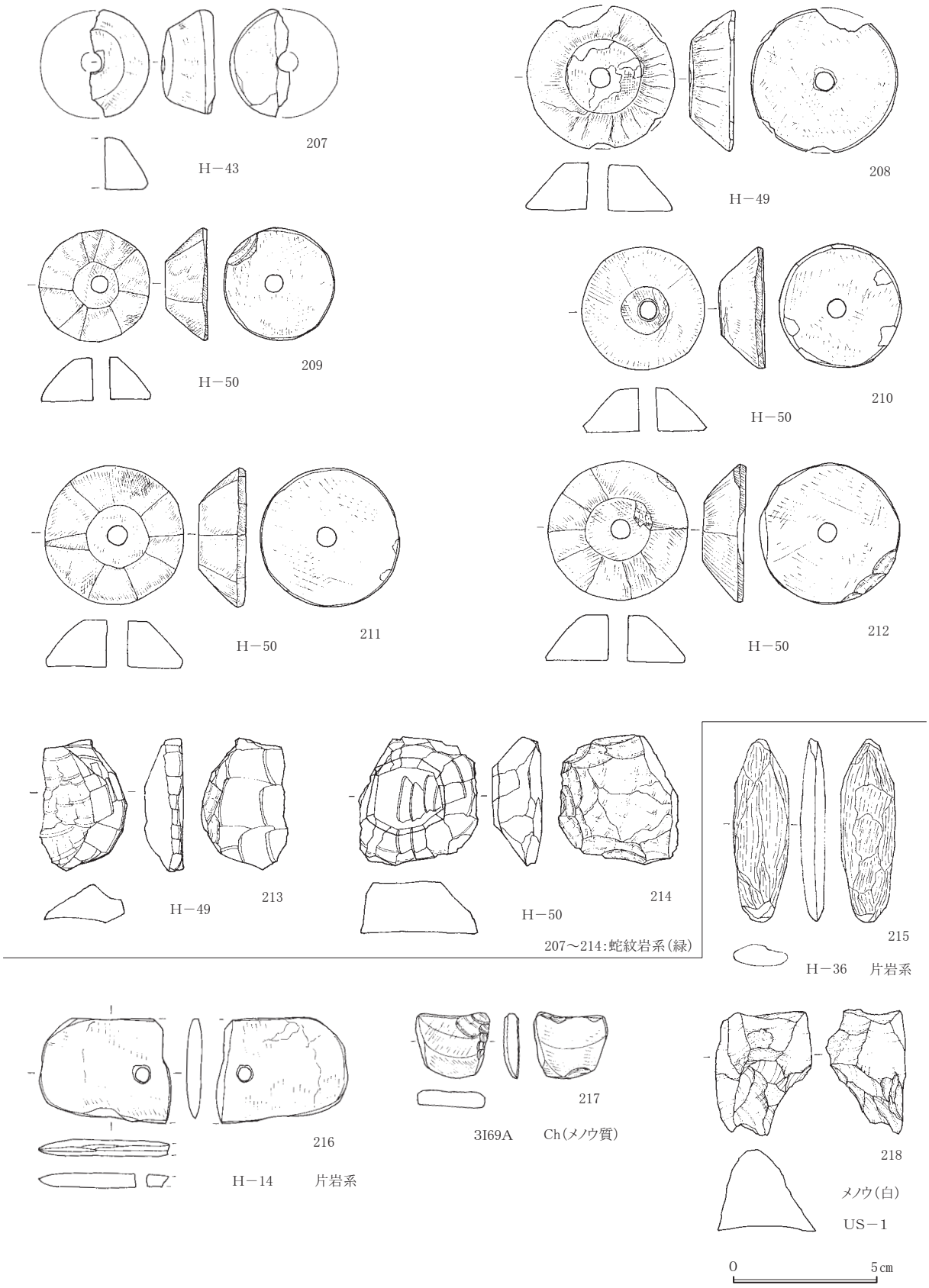


第120図　石製品・石製模造品実測図（3）

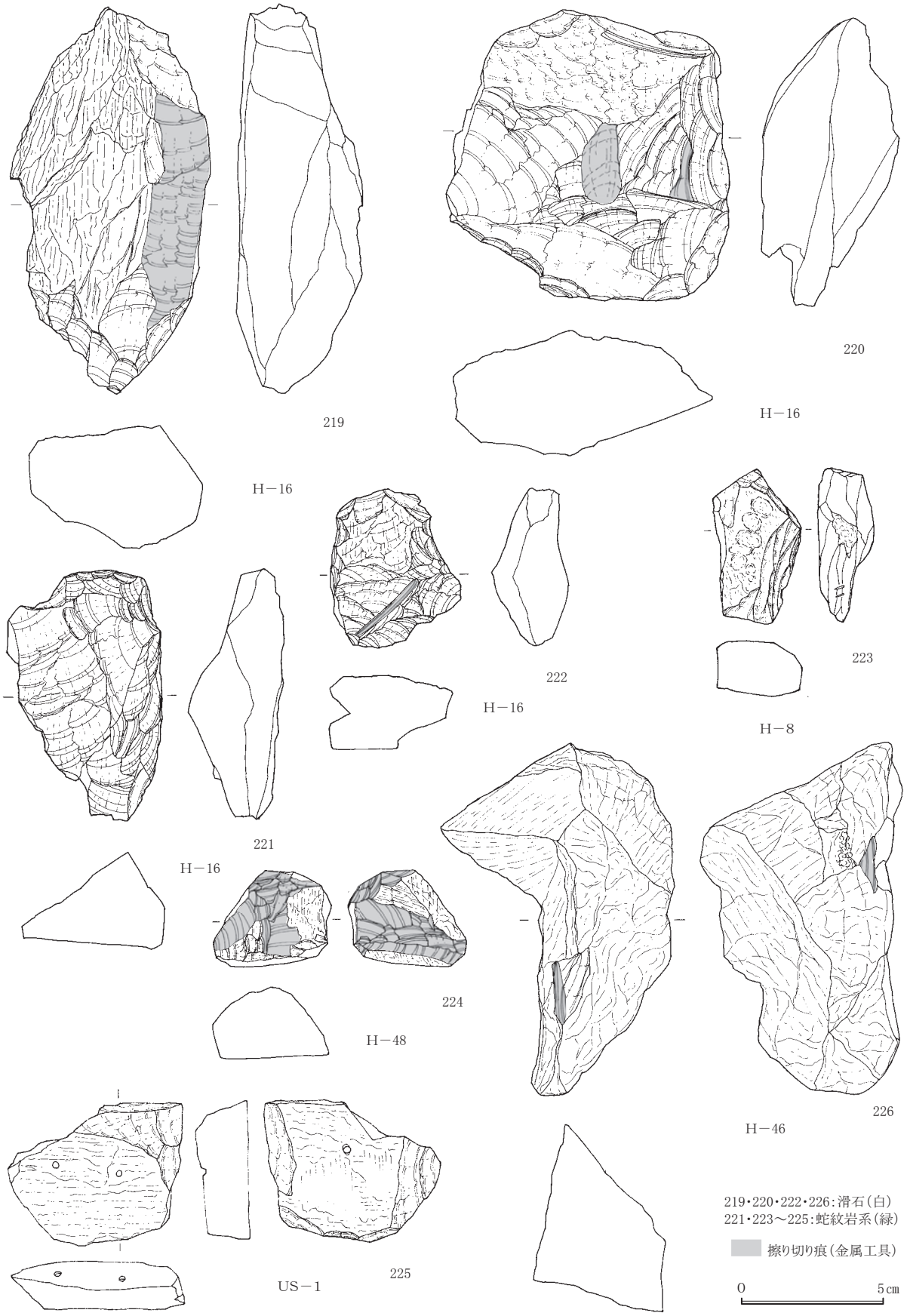


177～188・190・191・197・198:滑石(白)
他は蛇紋岩系(緑)

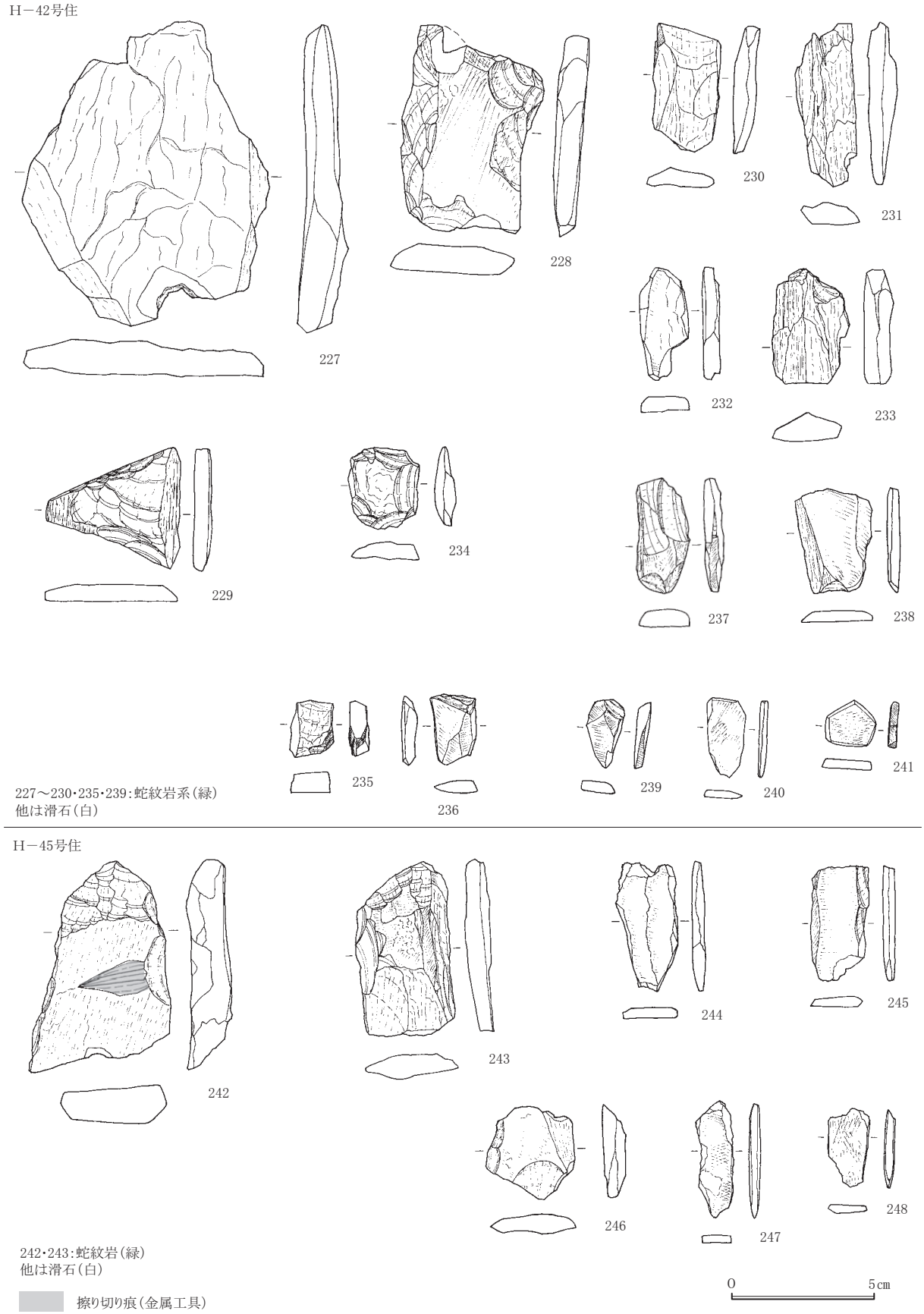
第121図　石製品・石製模造品実測図（4）



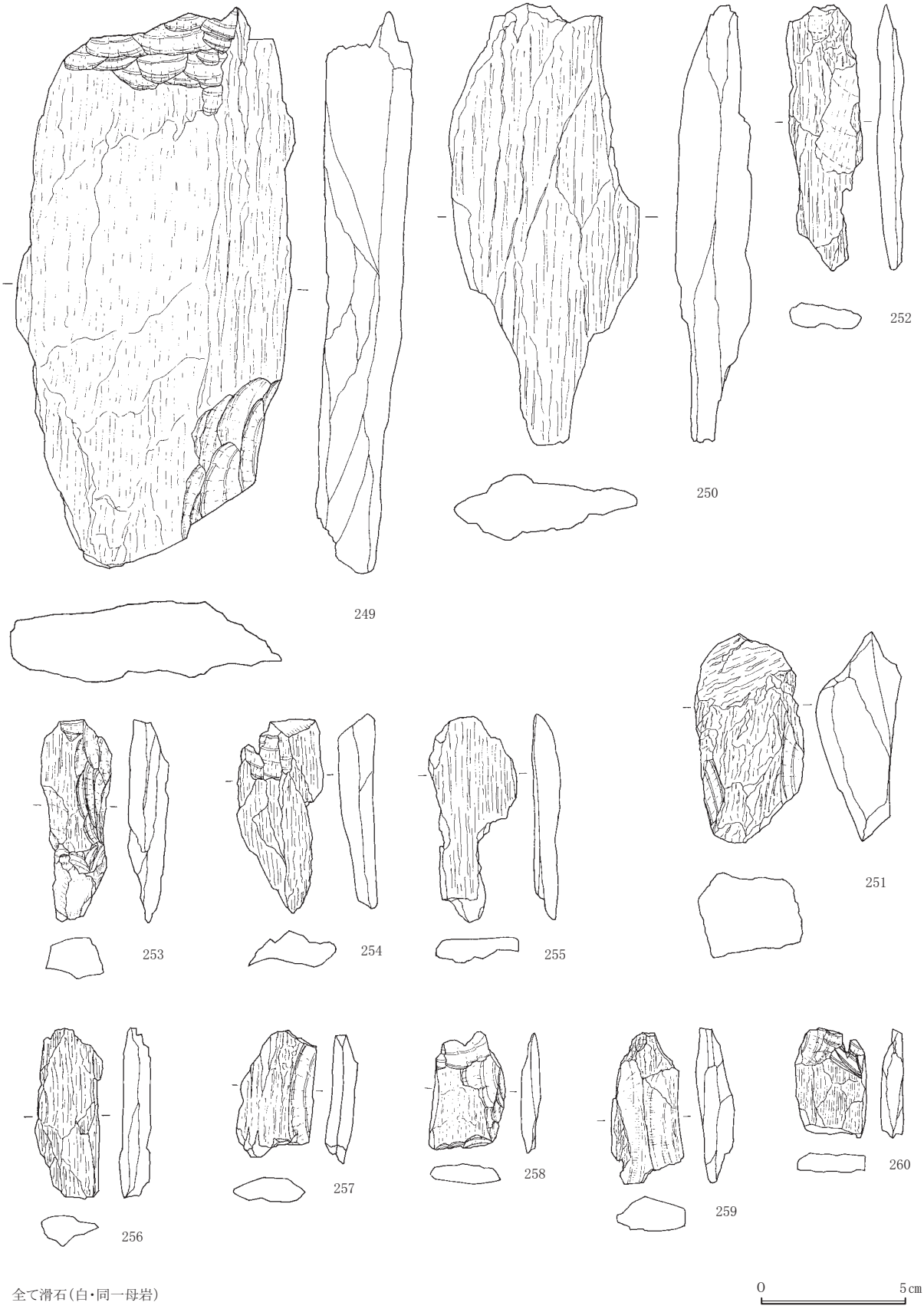
第122図　石製品・石製模造品実測図（5）



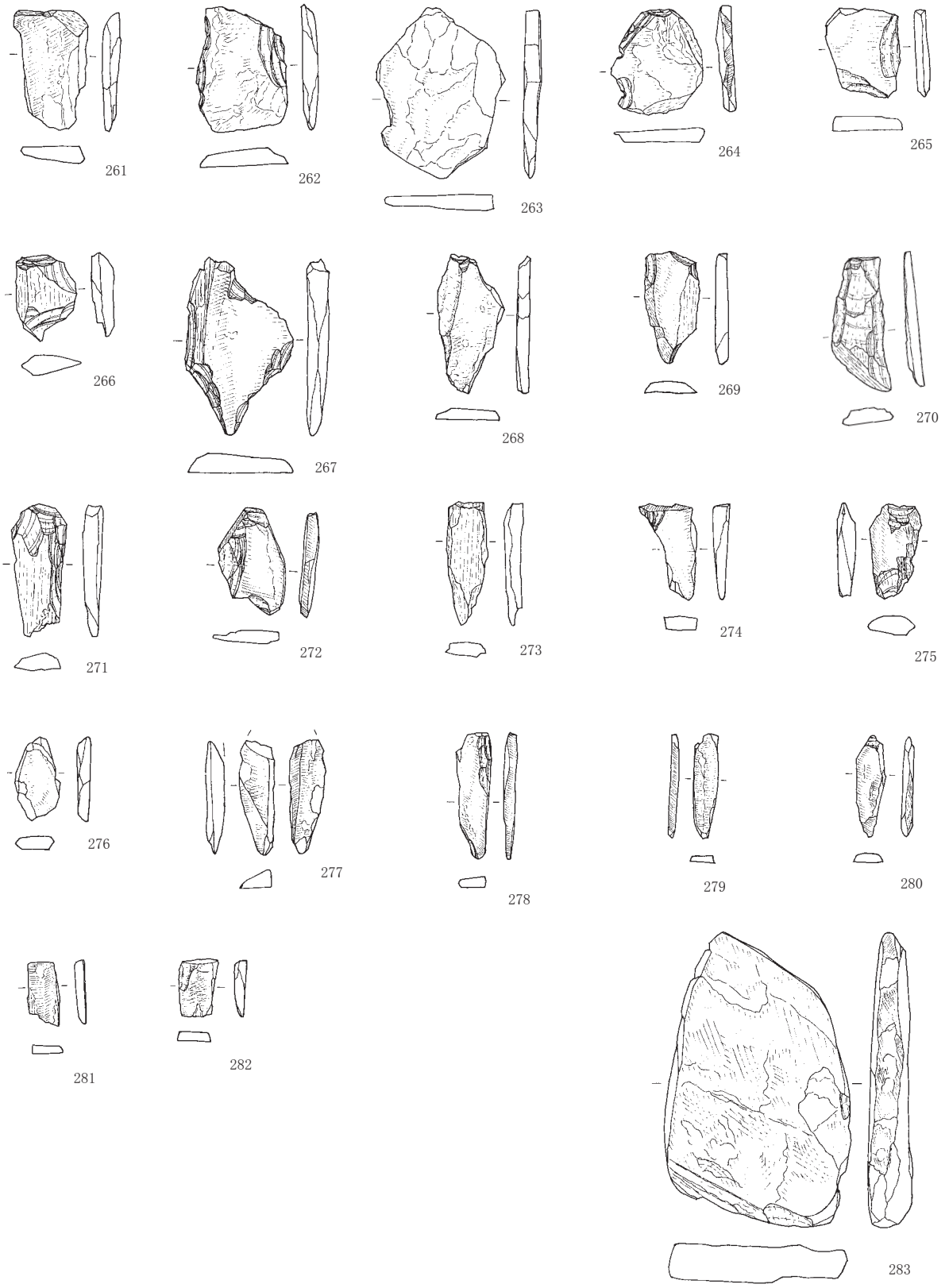
第123図　石製品・石製模造品実測図（6）



第124図　H－42号・H－45号住居址製作関連遺物実測図



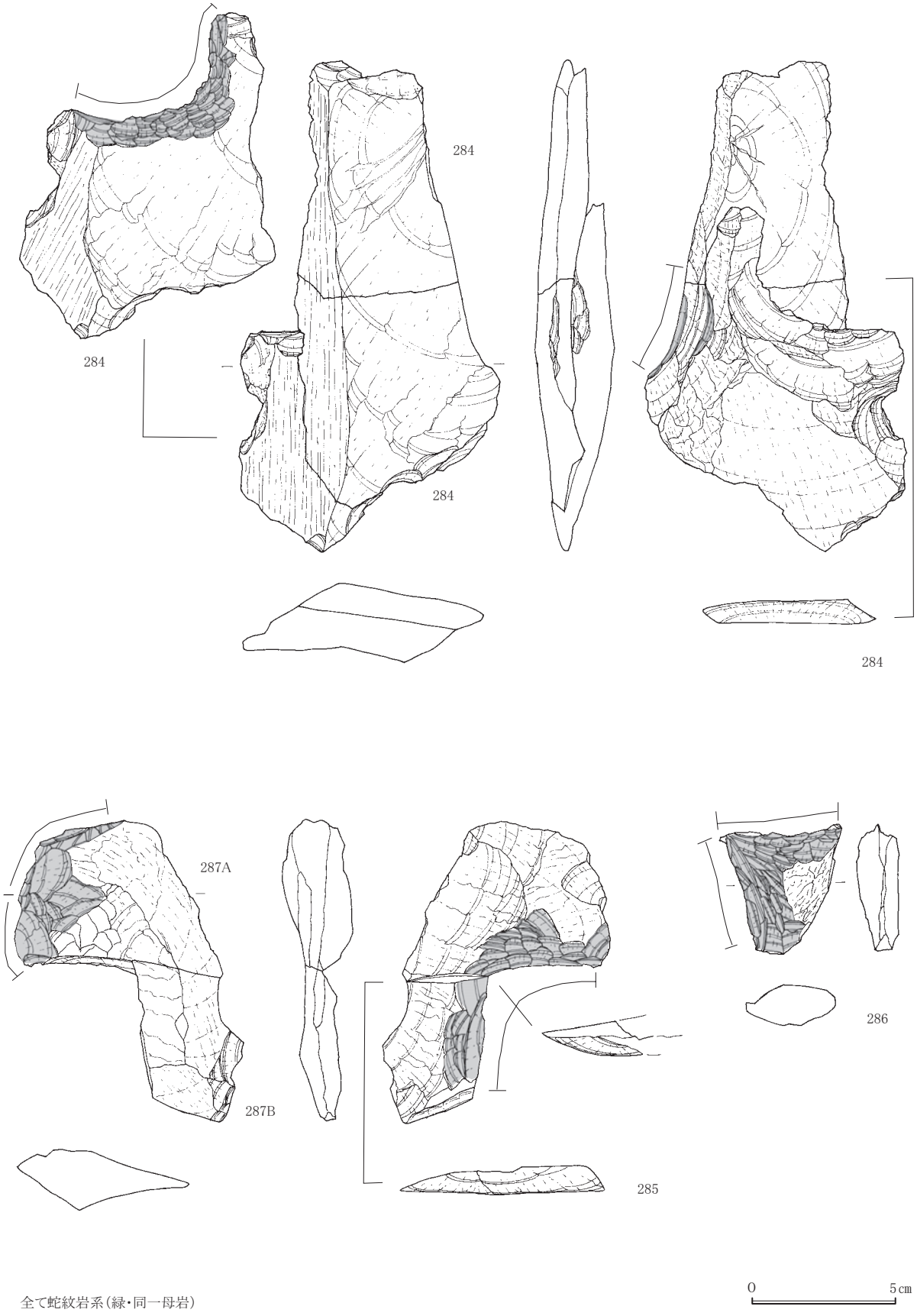
第125図　H－50号住居址製作関連遺物実測図（1）



全て滑石(白・同一母岩)

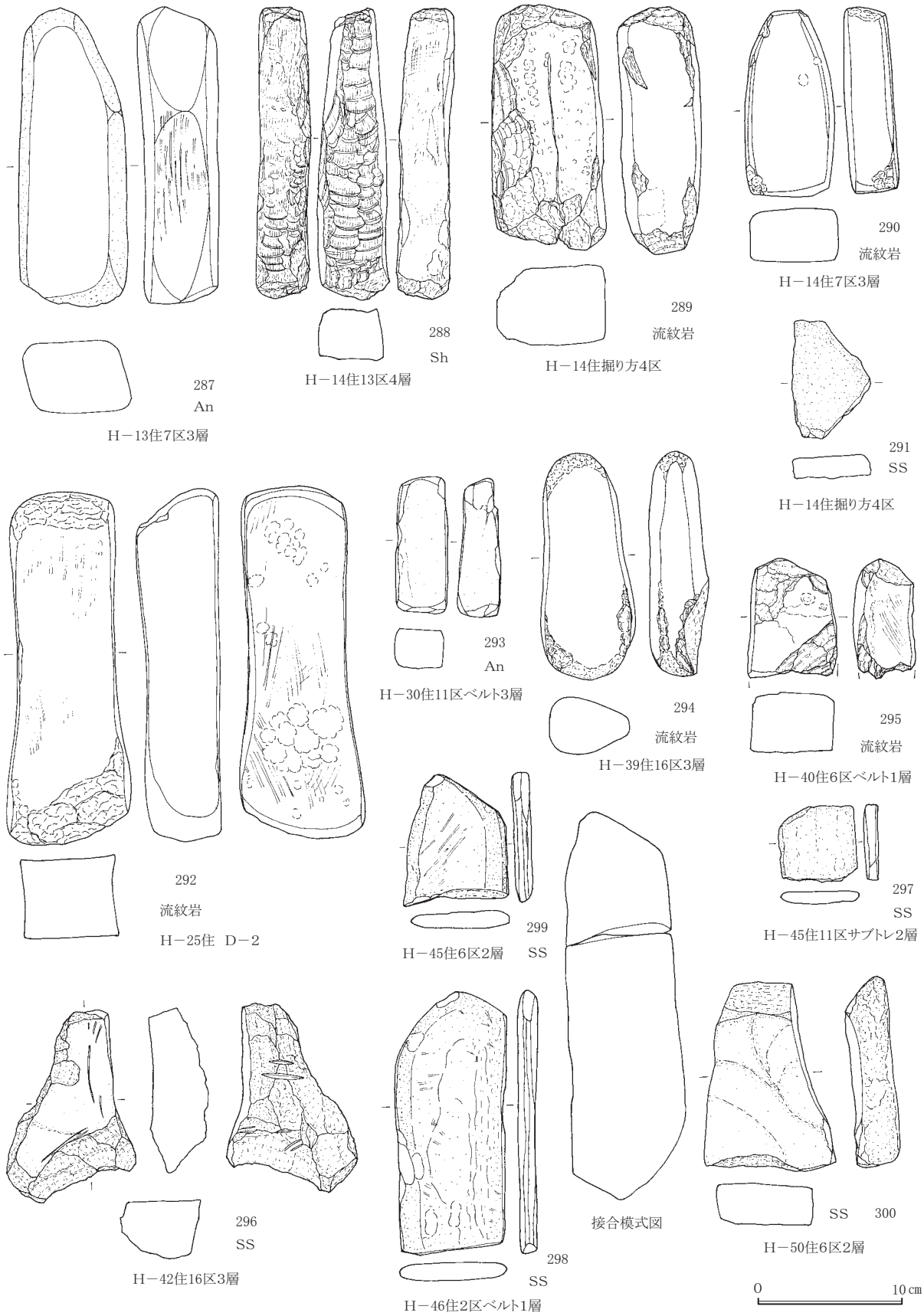
0　5cm

第126図　H－50号住居址製作関連遺物実測図（2）

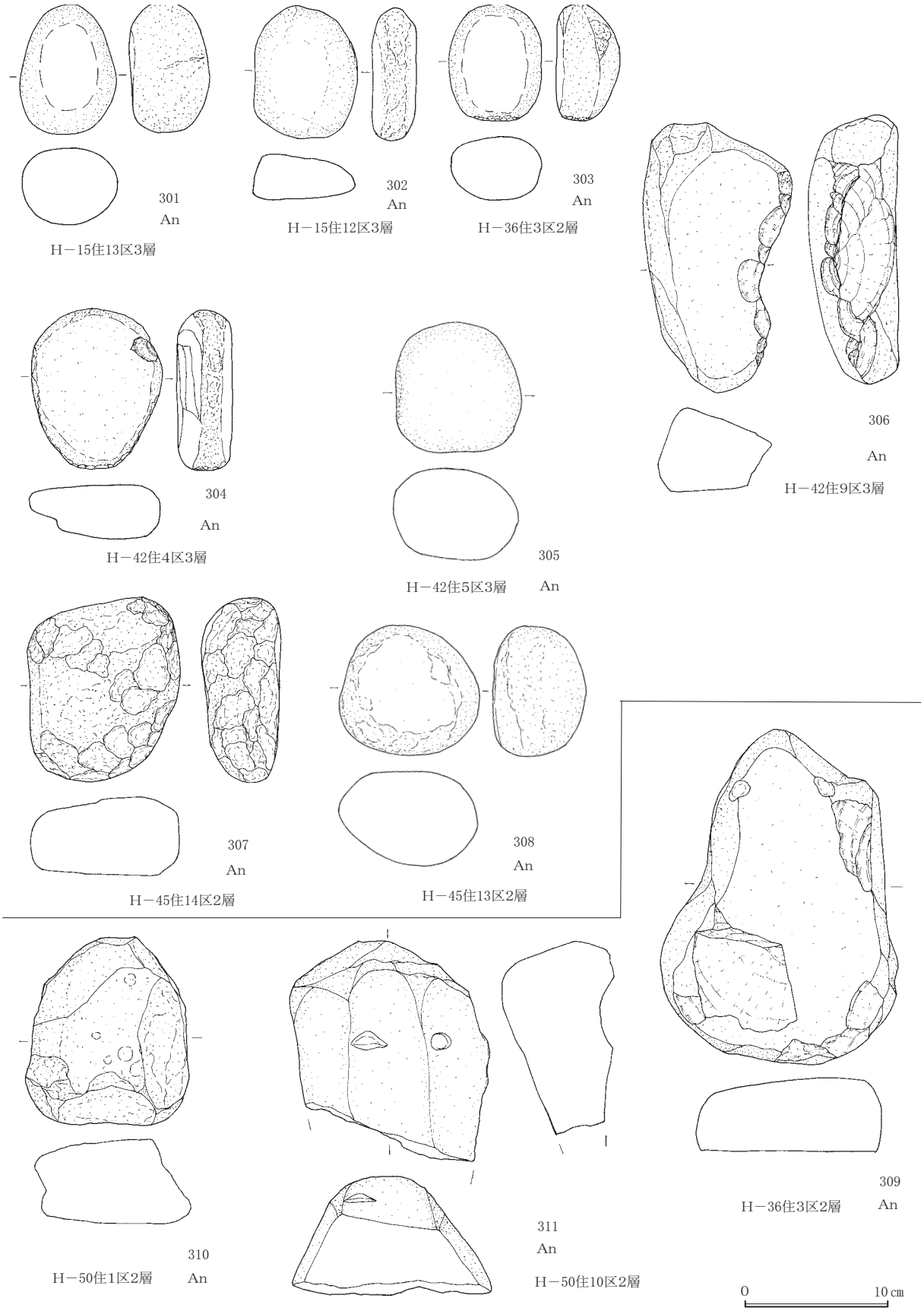


全て蛇紋岩系（緑・同一母岩）

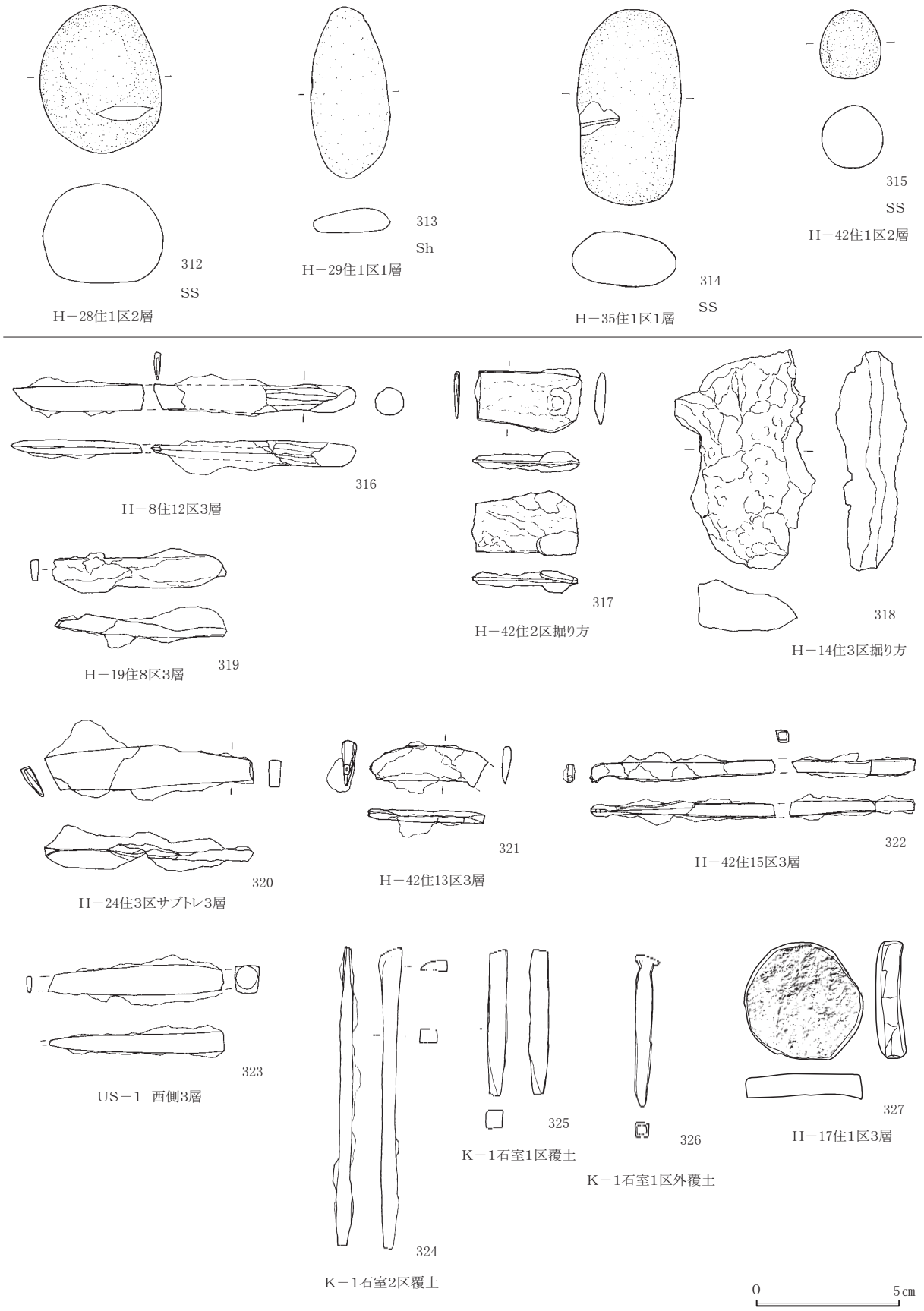
第127図　H－50号住居址製作関連遺物実測図（3）



第128図　石器実測図（1）



第129図　石器実測図（2）



第130図　石器・鉄製品・土製品実測図

４．土製品（第91図・第94図・第130図）

Ｈ－19号住居址から、スプーン状土製品（14）が出土した。この土製品の周辺では小形の鉢（13）が出土しており、この器種とのセット関係が想定できる。Ｈ－17号住居址から、土製円盤（327）が出土した。土師器の甕破片の周縁部を研磨して、円形に整形している。Ｈ－24号住居址から、球状をした土製品の破片（７）が出土した。内面調整は荒いが、外面調整は丁寧に撫でられている。穿孔があるが用途は不明である。

（井上慎也）

５　古代以降の遺構

縄文時代及び古墳時代の遺構群と重複して、溝２条、土坑３基、炭焼窯１基が検出された。調査面積に比べ遺構数は少なく、特定の機能を果たした遺構群とは言い難い。また、遺構の性格も覆土に浅間Ａ軽石及びＢ軽石混入するものも認められるが、時期は判然としない。随所で地面を深く掘り浅間Ａ軽石を埋め戻した場所も認められた。

溝（第131図）

Ｍ－１号溝

Ｈ－36号住居址を壊して東西方向に延びる溝を検出した。覆土に浅間Ａ軽石を含むことから18世紀後半以降と推定できる。現地形で２～３ｍの高い段差と平坦部との境で検出されたが、段差の下へ潜り込んでいることと推定でき、現地形はこの溝以降に形成されたもの思われる。底面の状況から水を流した痕跡は無いことから、土地の区画溝と考えられる。出土遺物無し。

Ｍ－２号溝

この溝は調査区中央部で検出された。遺構に並行してゴボウのトレンチャーがあるため、範囲は明確ではなかったが、傾斜に沿って延びていることが確認できた。幅は一定であり断面皿状（掘り込み面は確認面より上位と推定）で覆土に浅間Ｂ軽石を含まないといった形態的特徴と確認された溝周辺では全く遺構が検出されなかったことから、１カ所のみの確認のため断定はできないが、耕作溝の一部であった可能性が考えられる。、遺物が無いため不明であるが、遺跡の性格から判断して古墳時代の畠跡であったとも考えられる。

土坑（第130図）

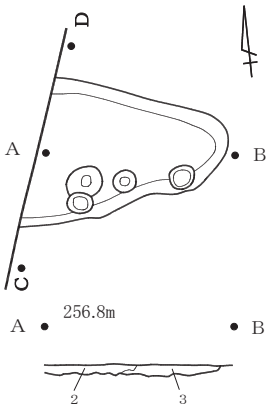
覆土に浅間Ｂ軽石を含む平面円形の土坑が３基検出された。掘り込みはしっかりしている。この種の土坑は、上北原遺跡等の周辺地域で、度々検出されているが単独で、分散しての検出のため、性格は不明である。出土遺物無し。

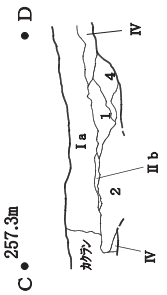
ＫＭ－１号炭焼窯

Ｂ区調査区西端で検出された。覆土の断面状態から判断して、遺構は浅間Ｂ軽石に覆われていることから、12世紀前半以前の所産と思われる。形態は不整円形で断面皿状である。底面には炭化材の小破片が検出された。出土遺物は無し。

（井上慎也）

KM－1
（炭焼き窯）

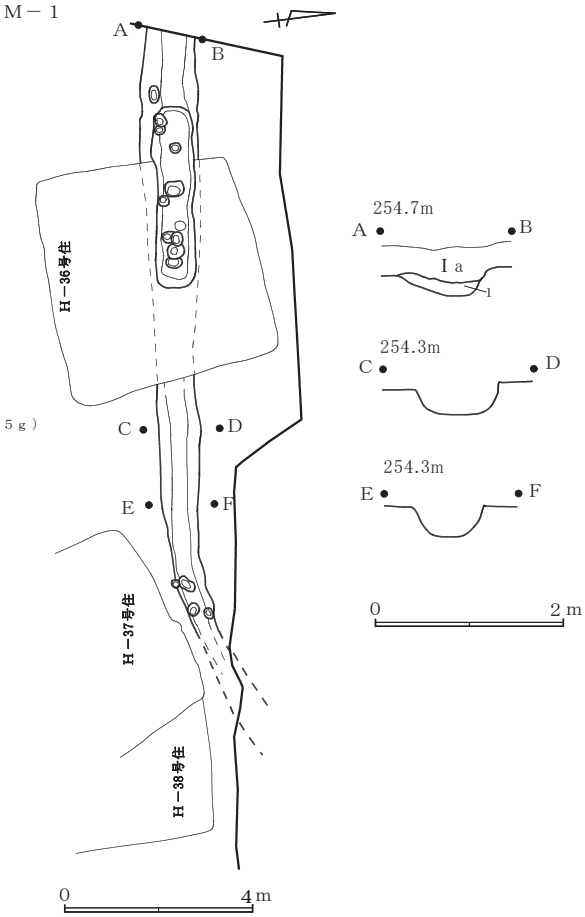




KM－1 ● （土師器 甕 5ｇ）

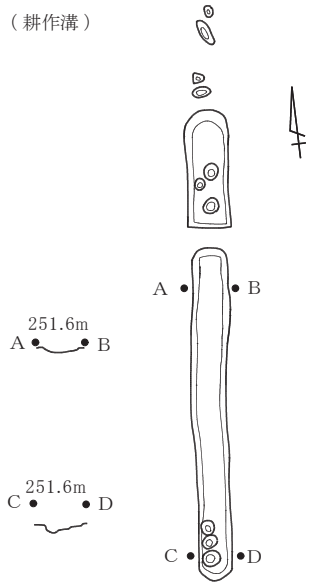
遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土
KM－1	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×	×	×
	2	黒褐色土層10YR	2＜1	○	○	×	×	×	△	×
	3	暗褐色土層10YR	2＜3	○	○	※	×	×	△	×
	4	暗褐色土層10YR	3＜4	○	○	※	×	×	※	×

M－1

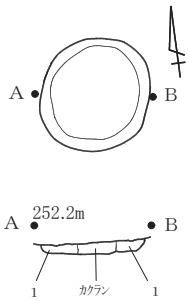


遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
M－1	1	黒褐色土層10YR		△	△	×	×	×	△		ASA △

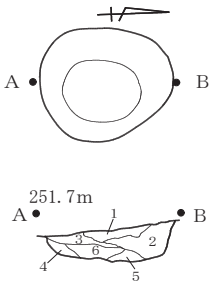
M－2
（耕作溝）



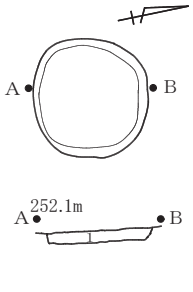
D－17



D－24



D－25



遺構名	層番	層名	色調	しまり	粘性	混入物 RP	RB	YP	炭	焼土	備考
D－17	1	黒褐色土層10YR		○	○	×	×	×			
D－24	1	褐色土層10YR		△	○	△	※	※			
	2	褐色土層10YR	2＜1	○	○	△	※	※			
	3	暗褐色土層10YR	1＜3	○	○	※	×	×			
	4	暗褐色土層10YR	3＜4	○	○	×	×	×			
	5	暗褐色土層10YR	5＜2	○	○	×	×	※			
	6	黒褐色土層10YR	6＜5	○	○	×	×	×			
D－25	1	黒褐色土層10YR		△	△	×	×	×			AS-B ○

0 4 m

第131図　溝・炭焼窯・土坑実測図

Ⅴ　成果と問題点

１　古墳時代の土器編年

１　はじめに

加賀塚遺跡の調査では、古墳時代に属する竪穴住居が51軒検出された。その大半が５世紀代と推定し得るものである。炉を伴う住居も存在し、炉から竈の導入へと変化する時期の連続する住居群を確認できた。重複する住居が少なく、また重複住居に土器が少ないことから土器様相の新旧を確認できる層位による検証資料には乏しいが、全体的に土器の出土量が多く、竈及びその周辺、貯蔵穴からの出土など極めて一括性の高い土器群を抽出している。

さらに、加賀塚遺跡周辺の中野谷遺跡群においても、近接する時期の竪穴住居が多く確認されており、それらの土器も含めて検討し、この地域の集落の変遷を知るための基礎的な作業の一助としておきたい。

２　土器の分類

出土土器としては、土師器の坏・甕類を中心とし、坩・高坏・小形甕・甑などが見られる。その他、僅かではあるが壺や鍋などの土器が出土している。しかし、５世紀後半に古墳に盛んに副葬され、集落遺跡でも出土するようになる須恵器は、加賀塚遺跡では５世紀代に属する48軒のうち４軒に過ぎない。６世紀になっても同様に極めて少ない傾向にある。

まず、分類に際しては、整形技法や胎土などを含め形態の特徴を捉えた。次いで最も出土量の多い土師器坏・甕類を基軸としてその変化により各期を設定し、各住居に伴出する土器を含め各期の様相を記述することとする。

坏

土師器坏は、いわゆる内湾口縁坏Ａと内斜口縁坏Ｂ、及び須恵器模倣坏Ｃに分けられる。

Ａ１：丸底及びやや平底気味のものとがある。体部は丸みを持ち内湾する口縁部に至る。大きさや口径と器高のバランスは個体差があり、全体的にやや歪みのあるものが多く、口唇部の厚さなどは不均質である。内面に放射状箆磨きを持つものは、中心部から口縁部に向かって施す傾向にある。色調も鈍い黄褐色や赤褐色など多様である。

Ａ２：丸底、球形の体部から内湾する口縁部に至る。上面から見ると正円形で整った形のものが多い。色調は赤褐色を呈す。放射状の箆磨きは底部の中心からよりも、2/3程の深さの所から斜めに口縁部に向かって施し、磨きの始点が横に線上に揃うものが多い。

Ｂ１：平底の底部から体部は丸みを持ち、口縁部が外傾する。全体的にやや歪みのあるものが多く、口唇部の厚さなどは不均質である。外面は箆削りか箆撫で、内面は箆撫で、色調は鈍い黄褐色や赤褐色など多様である。

Ｂ２：丸底ないしは平底気味の底部から体部は緩やかな丸みを持ち、口縁部が外傾する。全体的にやや歪みのあるものが多く、口唇部の厚さなどは不均質である。内面の放射状箆磨きは中心部から口縁部に向かって施すものが多い。これも色調は鈍い黄褐色や赤褐色など多様である。

Ｂ３：口径12.4～14.4㎝、器高5.1～5.6㎝とやや幅があるが、形態・胎土に非常に統一性が見られる。

形態は底部から体部が弧状に緩やかな丸みを持ち、口縁部が外傾、稜線は明瞭で、口唇部を薄く上に摘みあげる。正円形で形が整い、器厚が薄手で均一である。色調はほぼ一様に赤褐色を呈す。放射状の篦磨きは底部の中心からよりも、２/３程の深さの所から斜めに口縁部に向かって施し、磨きの始点が横に線上に揃うものが多い。

Ｂ４：Ｂ３と同様に正円形で形の整った一群であるが、大形で器高が深く体部上位の膨らみが強い。口縁部が外傾、稜線は明瞭で、口唇部を上に摘み上げる。

Ｃ１：丸底、体部と口縁部の境に稜を持つ。口縁部中位に弱い稜を持ち、上位は内湾気味となる。体部は篦削り、内面に放射状篦磨きを施す。胎土はきめ細かく丁寧な造りである。

Ｃ２：丸底、体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は直立する。

Ｃ３：丸底、体部と口縁部の境に稜を持ち、口縁部は外反する。

坩

土師器坩は、小形と大形に分けられる。

Ａ１：小形の坩で底部が丸底のもの、上げ底で周辺が平底気味のものとがある。胴部は球形、口縁部が外反、外傾、内湾気味になるものなど個体差が見られる。調整は口縁部は横撫で、胴部は篦撫で。

Ｂ１：丸底で胴部は球形を呈し、口縁部は逆ハの字状に開く。胴部は篦撫で後篦磨きを施し、口縁部は横撫で後縦位の篦磨きを施す。

Ｂ２：丸底、球形の胴部、口縁部はやや外傾するもの、直立気味のものと見られる。調整は胴部が篦削りないし篦撫で、口縁部と胴部上位に縦位の磨きを施すことが多い。

高坏

土師器高坏には、前代からの系譜にある高坏と、新たに出現する短脚の高坏が見られる。

Ａ：体部と口縁部の境に明瞭な稜を持ち、口縁部は外反気味に開く。脚部は僅かに膨らみを持ち、裾部が開く。

Ｂ：体部と口縁部の境に段を持ち、口縁部中位にも弱い段を持つ。脚部は細く膨らみを持ち、裾部は開き中位に段を持つ。

Ｃ：短脚の高坏であり、坏部は球形の体部から内湾する口縁部に至る。

Ｄ：短脚の高坏であり、坏部は体部が弧状に緩やかな丸みを持ち、口縁部が外傾する。

甑

土師器甑は、前代からの系譜にある小形の甑Ａと須恵器の影響により出現したと考えられる大形甑の系統になるＢがある。

Ａ１：底部には単孔を穿つ。底部から口縁部に向かって開き、胴部はやや膨らみを持つ器形である。

Ｂ１：胴部は上半部に膨らみを持ち、頸部がしまり内面の稜は明瞭である。口縁部は外形する。底部は筒抜け状であるが稀に１本の粘土紐が貼付される。調整は外面が篦削り、内面は斜横位の篦撫でが多く、下位は篦削りを施す。

Ｂ２：胴部は全体的に僅かにふくらみを持ち、頸部はしまらず、口縁部に向かって緩やかに外反する。口唇部はやや受け口状になるものが多い。調整は外面が篦削り、内面は斜横位の篦撫で後、縦位に篦磨きを施すものも見られる。

Ｂ３：胴部はほぼ直線的に立ち上がり、中位にやや膨らみを持ち、頸部はしまらず口縁部は緩やかに外反する。調整は外面が篦削り、内面は斜横位の篦撫で後、縦位に篦磨きを施すものも見られる。

甕

Ａ：底部は平底、胴部は膨らみを持ち口縁部は外反する。胎土がきめ細かく器厚はやや薄手である。調整は外面が篦撫でだが刷毛目が残るものもある。内面は横位か斜横位の篦撫でである。

Ｂ：底部が作られているが、胴部との境があいまいで丸みを持って立ち上がる。全体的に丸みがあり最大幅が中位にある。調整は外面が縦位の篦撫でか篦削り、内面は斜横位か横位の篦撫でを施す。

Ｃ：底部の形状はＢ類に似るが、最大幅が胴部中位よりやや下にある。調整は外面が縦位の篦撫でか篦削り、雑に縦位の篦磨きを施す場合もある。内面は斜横位か横位の篦撫でである。

Ｄ：平底の底部からほぼ直線的に立ち上がり、胴部は中位から上位にかけて膨らみを持ち、口縁部はくの字状に外反ないし外傾する。調整は外面が斜縦位の篦削り、内面は斜横位か横位の篦撫で。

Ｅ：底部は平底でやや突出気味、胴部は長胴でやや膨らみを持つ。口縁部は緩やかに外反する。調整は外面が縦位の篦削り、内面は横位の篦撫で、胎土は礫を多く含み粗い。

３　各期の様相

Ⅰ期（Ｈ－１・19・23・40・41・51住）

この期には、炉が設置された住居が該当する。前代に盛行する坩Ａが少量ながら見られ、坩Ｂ１の存在や甕に刷毛目を残すなどに古い要素が認められる。また、胴部に穿孔のある須恵器瓮模倣のものが存在する。坏はＡ１・Ｂ１・Ｂ２が見られ、Ⅱ期とは明瞭に区別し難いが平底のものが多い傾向にある。高坏はＡが見られ、調整に篦磨きを施し、Ⅱ期の高坏よりも脚部の膨らみが強く、裾部への屈曲部が明瞭である。甕では、調整に刷毛目を残す甕Ｂと胴部外面が斜縦位に削られる甕Ｄの他、台付甕が見られる。

Ⅱ期（Ｈ－９・11・21・22・34・42・50住、４・７・10・20・36・38・45住は可能性が高い）

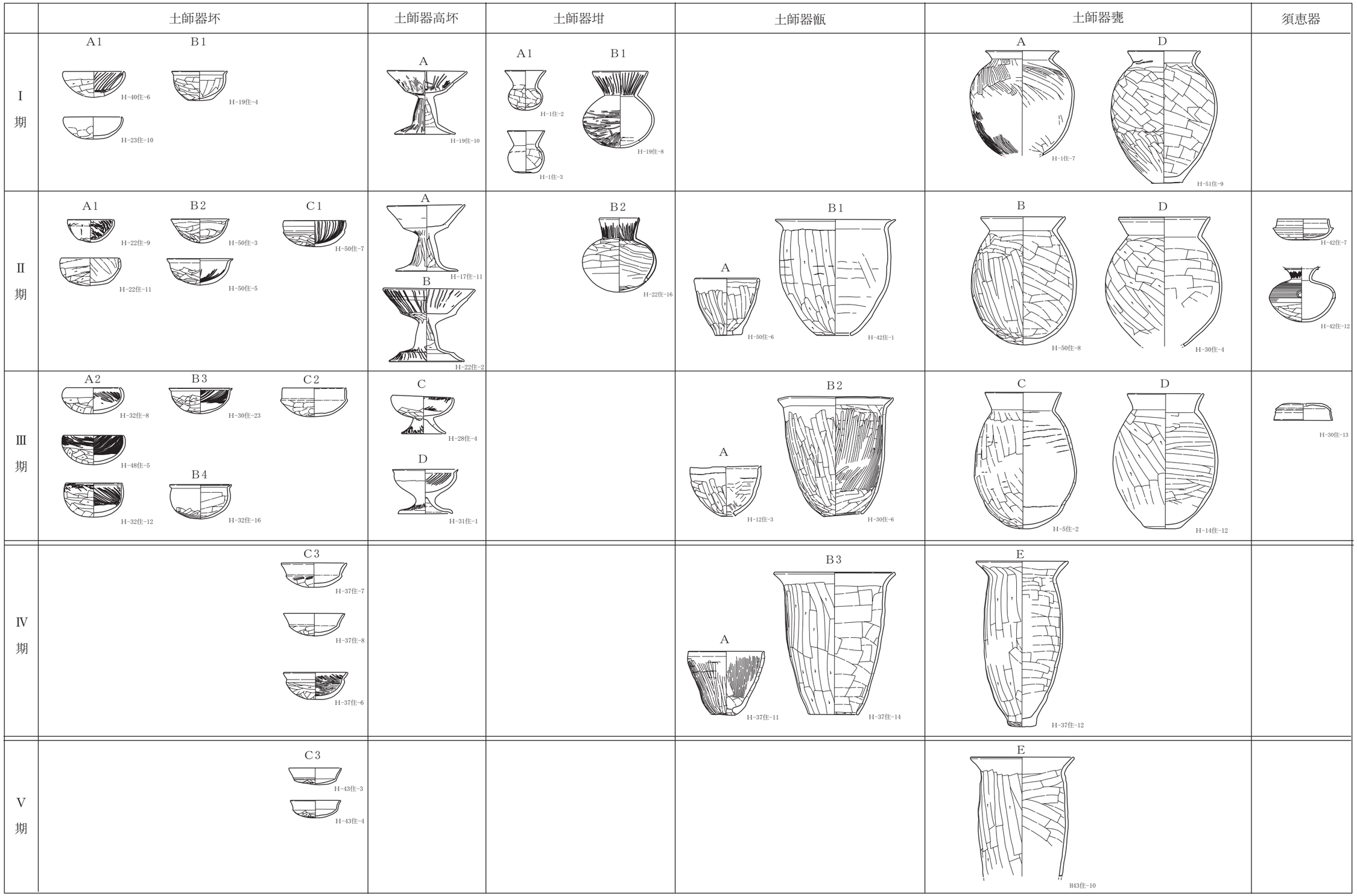
この期以降には、竈が設置された住居が該当する。坏はＡ１・Ｂ２が存在する。坏ＡはⅠ期の資料が少なく不明瞭だが、坏Ｂは平底から丸底に変化する傾向にある。Ⅰ・Ⅱ期ともこれらの坏は大きさや形、胎土・色調など個体差が見られる。坩はＢ２が出土している。Ｂ類の坩は胴部の形状や頸部接合部の太さなどと言った要素にあまり変化は見られないが、口縁部が短くなり、大きく開くものから直立気味になる傾向が窺える。高坏はＡ及び有段高坏Ｂがある。甑は小形のＡ１、大形の甑Ｂ１が存在する。Ｂ１は底部から大きく開いて胴部は膨らみを持ち、口縁部が短く外反する。甕は調整の篦削り・篦撫でを縦位のものＣと斜位に施すＥが存在し、Ⅰ期に比較して胴部の膨らみが少なくなる傾向にある。

Ⅲ期（Ｈ－５・６・８・14・15・16・17・28・29・30・32・48住、12・18・25・31・35・39住は可能性が高い）

坏はＡ２・Ｂ３・Ｂ４が存在する。歪みが無く整った形態であり、胎土・色調も統一的な様相である。坏ＡとＢのⅡ期からⅢ期への個体差が少なくなり、均一的に整った形になるという変化は連動している。高坏は短脚のものであり、坏部は坏Ａ２、Ｂ３の形状である。甑は小形のＡ１、大形のＢ２が存在する。Ｂ２は胴部の膨らみがＢ１よりも少なくなる傾向にある。甕は前代同様に、調整の篦削り・篦撫でを縦位のものＣと斜位に施すＤが存在し、Ⅱ期に比較して胴部の膨らみが少なくなる傾向にある。

Ⅳ期（Ｈ－24・37住）

坏は須恵器模倣坏を主とした段階で、体部は浅く口縁部は外反する。甑はＢ３であり、胴部の膨らみはほとんど無く、器高が高くなっている。甕Ｅは胴部にやや膨らみを持つ長胴の甕で、口縁部はくの字



スケール1：8

第132図　加賀塚遺跡出土の古墳時代土器編年図

状に外反する。縦位に箆削りを施す。

Ⅴ期（Ｈ－43住）

本遺跡において、この時期に属する住居は１軒のみである。口径11㎝前後と小形化した土師器坏Ｃ、甕は胴部の膨らみが無く直線的な長胴甕Ｅが伴出している。その他、小形甕・短頸壺などが見られる。

５　実年代について

以上、土師器の各器種の分類とその変遷を追ったが、実年代に関しては直接年代を示す資料が無いため、土師器と共伴する須恵器の年代観から実年代を導き出した坂口編[1]年に準拠し、加賀塚遺跡の各期の年代観を示しておきたい。

Ⅰ期は坩Ａ・Ｂ１が見られることからⅡ期よりも古相だが、Ⅱ期と類似する坏類のあり方からすればそれ程時期差はないものと思われる。坂口編年（古墳時代中期土器）のⅡ段階に相当すると考えられるが、よりⅢ段階に近い年代が与えられよう。Ⅱ段階は５世紀第２四半期に比定されている。Ⅱ期は坂口編年Ⅲ段階に相当する。ＴＫ－23型式の須恵器𤭯･坏を伴出しており、５世紀第３四半期に比定される。Ⅲ期は坂口編年Ⅳ段階に相当する。しかし、一般的にこの頃から出土量が多くなる傾向にある須恵器模倣坏が、加賀塚遺跡ではほとんど出土していないことや、内湾口縁坏や内斜口縁坏は端正であり、崩れが見られないことなどからⅣ段階でも古相であると思われる。Ⅳ期は須恵器模倣坏が主体であり、体部の浅くなった坏や長胴化した甕、胴部に膨らみがなく直線的な甑などの存在から、坂口編年（古墳時代後期土器）のⅣ段階に相当すると考えられ、６世紀の第２四半期に比定される。Ⅴ期は小型化した須恵器模倣坏などからⅧ段階に相当し、７世紀第２四半期に比定されている。

４　周辺遺跡の５世紀代の住居

加賀塚遺跡の立地する中野谷台地では、５世紀代に属すると思われる竪穴住居の調査例が増えてきている。中野谷原遺[2]跡、上北原遺[3]跡、砂押原遺[4]跡、中島Ⅰ・Ⅱ遺[5]跡、天神原遺[6]跡などで確認されており、それらの資料もここで検討しておきたい。

中野谷原遺跡では、古墳時代に属する16軒の住居が調査されている。５世紀代では坏類が少なくあまり良好な資料はないが、やや膨らみのある土師器甕の形状などからＨ－３・４・７住が５世紀後半に属すと思われる。その他の住居には模倣坏が多く、僅かに出土する内斜口縁坏にも崩れが見られ、甕の胴部がやや長胴化している傾向にある。中野谷原遺跡は加賀塚遺跡よりもやや新しく、５世紀末から６世紀前半に集落の主体があると考えられる。

上北原遺跡では２軒の住居が検出されており、Ｈ－１住はやや崩れた形状の内斜口縁坏と内湾口縁坏が出土している。Ｈ－２住は特異な形態のものが多く比較し難いがＨ－１住よりも古相であると思われる。

砂押原遺跡のＨ－１住はやや崩れた形状であるが内斜口縁坏・内湾口縁坏を主としており、坩の形状からも加賀塚遺跡のⅢ期に近いものと思われる。

中島Ⅰ・Ⅱ遺跡では、内斜口縁坏や胴部に膨らみのある甑の存在からＨ－２住が５世紀に遡るものと考えられる。またＨ－７住はＳ字口縁台付甕や高坏の形態から４世紀後半に属するものと思われる。他は模倣坏や脚部の短い高坏、やや胴部の直線的な甑などの存在から６世紀代と考えられる。

天神原遺跡では、炉を持つ住居が１軒確認されている。出土遺物は小形坩や高坏を中心とし、台付甕と平底の甕が見られる。加賀塚遺跡のⅠ期と比較して、坏類が無く小形坩の形状や台付甕が多いなど、やや古い様相が見られる。

5　おわりに

以上のことから、加賀塚遺跡の土器群は概ね５世紀中頃から第４四半期にかかる頃までを中心としていると言える。周辺の遺跡は、天神原遺跡、中島Ⅰ・Ⅱ遺跡の一部を除いては、いずれも加賀塚遺跡よりもやや新しい段階から始まる集落であり、５世紀段階においては加賀塚遺跡がこの地域の中心的集落であった可能性が高い。

註

（1）坂口一1986「古墳時代後期の土器の編年」「群馬文化」208号

1987「群馬県における古墳時代中期の土器の編年」「研究紀要４」群馬県埋蔵文化財調査事業団

（2）（3）（4）（5）井上慎也2004「中野谷地区遺跡群２」安中市教育委員会

（6）大工原豊ほか1994「中野谷地区遺跡群」安中市教育委員会

（三浦京子）

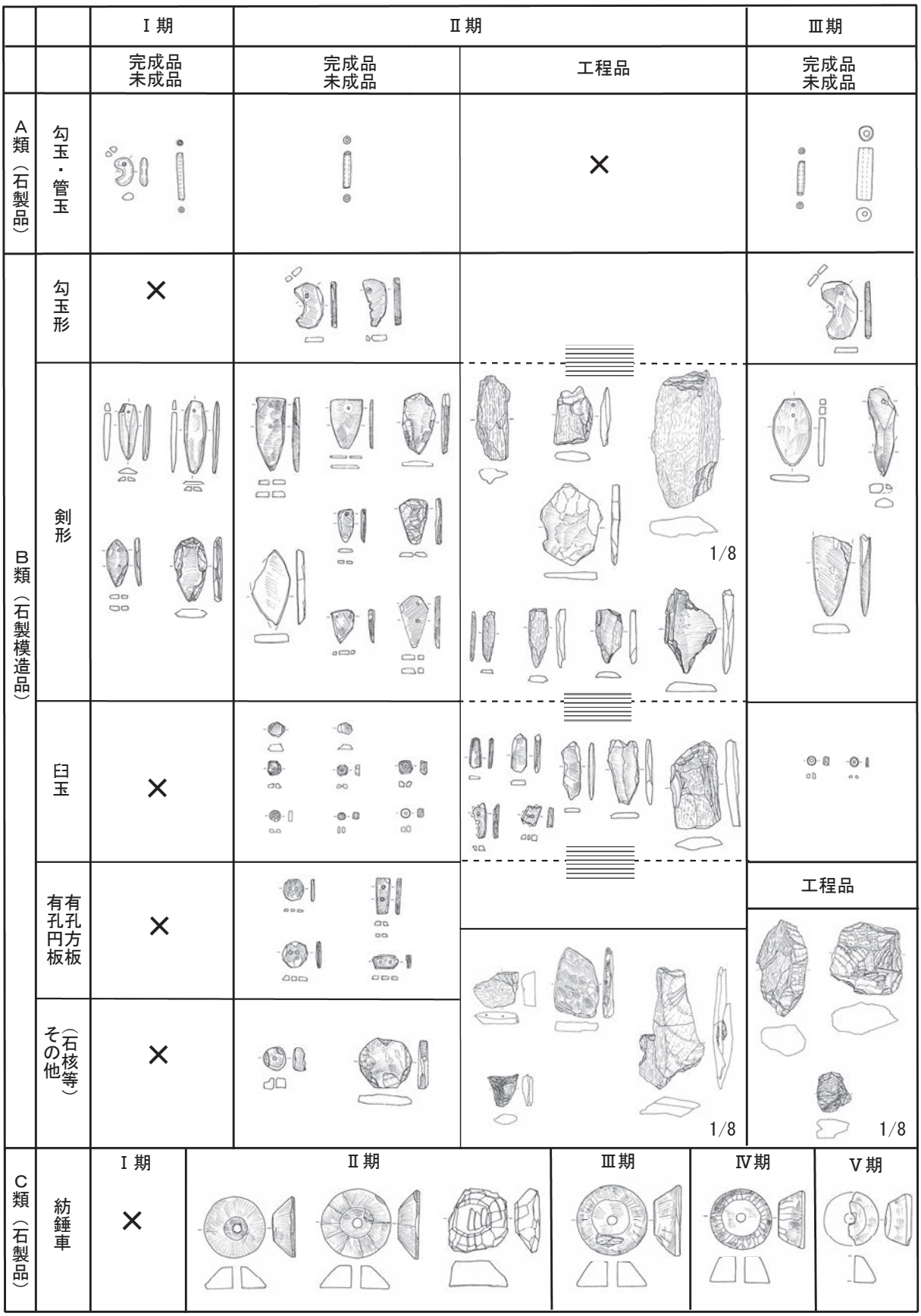
2　石製品・石製模造品について

加賀塚遺跡では、ⅠとⅡ期からⅢ期にかけての石製品・石製模造品の工房址と成品を含む製作関連遺物が確認された。市内では、集落から蔵畑遺跡、古墳からは経塚古墳、磯部２・３号墳（詳細は不明）、簗瀬二子塚古墳から出土している。蔵畑遺跡では、中期前半の住居址と豪族居館の堀跡から剣形（槍状）の石製模造品と石核が出土している。経塚古墳と磯部２・３号墳はいずれも中期古墳と推定され、主体部付近から農具、武器等の石製品が出土している。簗瀬二子塚古墳は後期初頭の前方後円墳で、横穴式石室内から滑石製の剣形、臼玉、勾玉、有孔円板、他石製品が出土している。中期後半から後期前半にかけての集落では、中野谷地区において石製品・石製模造品を組成する住居址が認められるが、他の地域では製作及び組成が少ない傾向である。

加賀塚遺跡における時期別器種組成及び工程品について整理したものを第133図に示した。これにより、Ⅰ期では全て搬入品で勾玉、管玉のみが組成する。Ⅱ期では製作及び使用（祭祀）が認められ、勾玉形、剣形、臼玉、その他等多様な器種組成で数も多く、石製品として紡錘車の製作も認められる。製作は剣形と、臼玉が主体であり、工房址によって石材の消費の仕方と製作する器種が異なっており、分業が認められる。Ⅲ期では搬入品が主体であるが、一部でⅡ期のものが伝世しているが数は減少する。器種は臼玉が主体で剣形も認められる。Ⅳ期以降は石製品・石製模造品共に組成しなくなり、紡錘車のみ組成する。Ⅱ期における製作工程は、一連の作業の中で素材剥片から製作目的である剣形及び臼玉に共通する剥片を作出して、素材の加工を行っている。極めて効率よく、整形し、研磨を用いて製作されていることが判明した。

加賀塚遺跡では、Ⅱ期において石製模造品を中心とした製作が認められた。Ⅱ期に続くⅢ期では、工房址は認められず、すべて搬入品である。現段階では加賀塚遺跡で製作された石製模造品が、どこに供給されたかは不明である。しかし、器種形態や石材の特徴からⅡ期のものがⅢ期まで使用された可能性が高いものもあることが判明した。石製模造品の製作は、他地域との共通性を示す一般的な製作工程に沿った形で行われている点で、広域に展開する生産流通システムの存在が考えられる。

（井上慎也）



第133図　加賀塚遺跡出土の時期別石製品・石製模造品集成図（一部を除き1/4）

３　古墳時代の集落について

今回の調査によって、中野谷地区に中期～後期にかけての大規模集落が加賀塚遺跡を中心に存在していたことが明らかとなった。本遺跡の集落は出土土器の編年を目安にして５時期に分けられる。時期が判明している遺構の配置について、時期毎に分布を示した（第134図・第135図）。時期が判明しない遺構については、遺構の構造と切り合い関係によって判別した。同時期でも切り合い関係がある住居址もあることから、遺構による時期差が存在している。なお、本遺跡の集落は調査区外へと延びることが予想されるため､集落の全体像及び遺構の時期については今後の調査によって明らかになると思われる。したがって、ここでは現段階における時期毎の様相についてまとめとしたい。なお、住居址以外の遺構についてはⅡ期とⅢ期の区別が確定できないため、遺構の配置状況から時期を決定している。

Ⅰ期は当該期の遺構と思われる遺構を含め住居址９軒が検出された。住居址は直列に並び、住居間には距離がある。遺物量は少ないが、日常生活に用いられた遺棄された遺物は多い。住居址が広範囲に点在する小規模集落と思われる。

Ⅱ期は当該期の遺構と思われる遺構を含め住居址21軒が検出された。円形周溝状遺構、竪穴状遺構、土坑、溜池もこの頃に機能したものと思われるが、一部Ⅲ期まで継続した可能性もある。遺構の配置は溜池を挟んで東西に分かれ、さらに西側は２カ所に細分できる。東側集落には工房址が集中し、円形周溝状遺構、土坑等の関連遺構も分布している。集落の規模が拡大する時期である。この時期に竈が出現する。工房址では石製品・石製模造品の製作が行われ、多くの遺物が搬出されているが、一部で集落内でも使用されている。集落の東では磯部２号墳、３号墳が存在し、主体部付近から多数の石製模造品が出土している。古墳との関連性の高い集落として位置づけられる。

Ⅲ期は当該期と思われる遺構を含め住居址18軒が検出された。Ⅱ期から継続する集落である。この時期には工房址は無くなり、少数の住居址で石製品・石製模造品の製作が行われている。恐らく、溜池も継続して利用されたものと思われる。集落は西側に形成され、東側には少数の住居址が点在するのみで、居住地の移動が認められる。

Ⅳ期は２軒検出された。Ⅲ期との間に中断期間があり、集落が一次断絶する。Ⅳ期では急激に集落は衰退する。Ⅳ期の集落は、本遺跡の西にある原遺跡が存在することから、Ⅲ期以降に居住を移したものと推定される。

Ⅴ期は１軒検出された。Ⅳ期との間に中断期間がある。

古墳はⅤ期以降の所産で、Ⅴ期から一時断絶した後に構築されている。牧が経営された時期と重なると考えられる。中野谷原遺跡では､同時期の住居址が確認されていることから､関連性がうかがえられる。

加賀塚遺跡における集落の時期は、中期後半から後期初頭にかけてが中心であることが判明した。市内における同時期の集落は、同じ横野台地で大竹地区に存在する諏訪ノ木遺跡、九十九川流域に存在する高橋遺跡と杉名薬師遺跡で確認されているが、当該期の実態については遺跡数が少なく土器群及び集落について不明な点が多い。各地域の集落の様相は碓氷川を挟んで、当時の勢力範囲（北側は榛名山南麓地域、南側は鏑川流域）が異なると推定されている（外山2001）。今回の調査では、土器群の上では地域差は認められなかったが、多数の石製模造品を製作･搬出するとともに、一部で祭祀的使用により、鏑川流域における勢力の影響も想定可能である。特に加賀塚遺跡に近い富岡市丹生川、高田川流域に製作遺跡及び組成する遺跡が多数分布することから､これらの遺跡との関連性の強さも指摘できる。今後、

加賀塚遺跡の調査を進めることによって、簗瀬二子塚古墳が成立する以前（中期後半から後期初頭）における碓氷川流域の様相について具体化されるものと思われる。

（井上慎也）

〈参考文献〉

寺村光晴　1966 『古代玉作の研究』吉川弘文館

寺村光晴　1980 『古代玉作形成史の研究』吉川弘文館

田口一郎　1987 『生原地区遺跡群』箕郷町教育委員会（現高崎市）

女屋和志雄　1988 「群馬県における古墳時代の玉作」『群馬の考古学』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

大賀　健他　1989 「高鳥井遺跡」『妙義東部遺跡群（Ⅱ）』妙義町教育委員会（現富岡市）

田口　修他　1990 『松井田工業団地遺跡』 松井田町教育委員会（現安中市）

清水　豊　1990 『西国分Ⅱ遺跡』群馬町教育委員会（現高崎市）

大工原　豊　1991 『新寺地区遺跡群』 安中市教育委員会

大工原　豊他　1994 『中野谷地区遺跡群』 安中市教育委員会

篠原祐一　1995 「臼玉研究私論」『研究紀要』第３号（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

篠原祐一　1996 「剣形模造品の製作技法」『研究紀要』第４号（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

大工原　豊・外山政子他　2001 『安中市史』第４巻　原始古代中世資料編

大工原　豊・右島和夫他　2002 『安中市史』第２巻　通史編

大工原　豊・井上慎也・志村　哲・荒木勇次他　2003 『簗瀬二子塚古墳・簗瀬首塚古墳』安中市教育委員会

井上慎也　2004 『中野谷地区遺跡群２』 安中市教育委員会

井上慎也　2004 『天神林遺跡・砂押Ⅲ遺跡・大道南Ⅱ遺跡・向原Ⅱ遺跡』安中市教育委員会

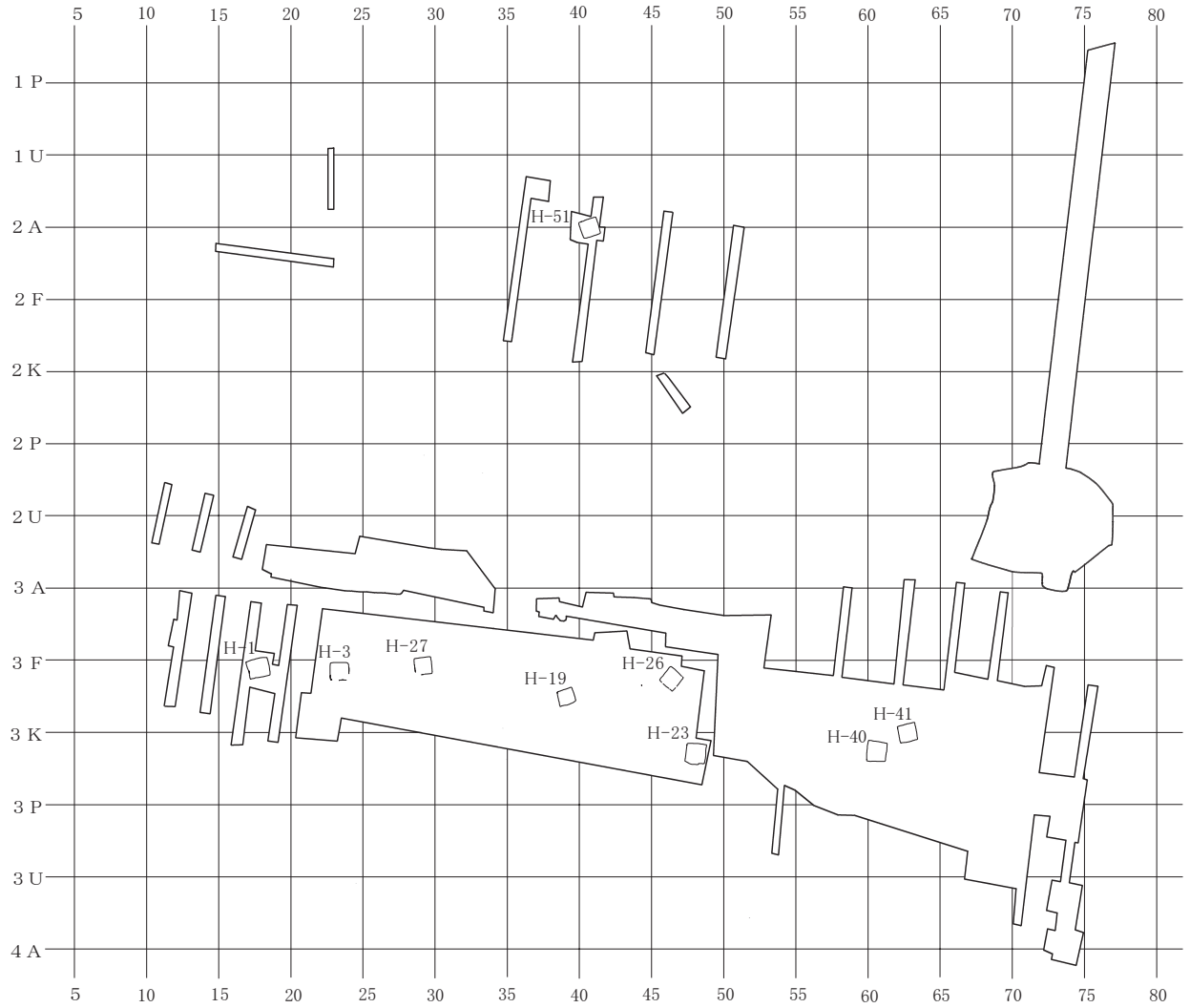
千田茂雄　2004 『古屋地区遺跡群』 安中市教育委員会

寺村光晴編　2004 『日本玉作大観』吉川弘文館

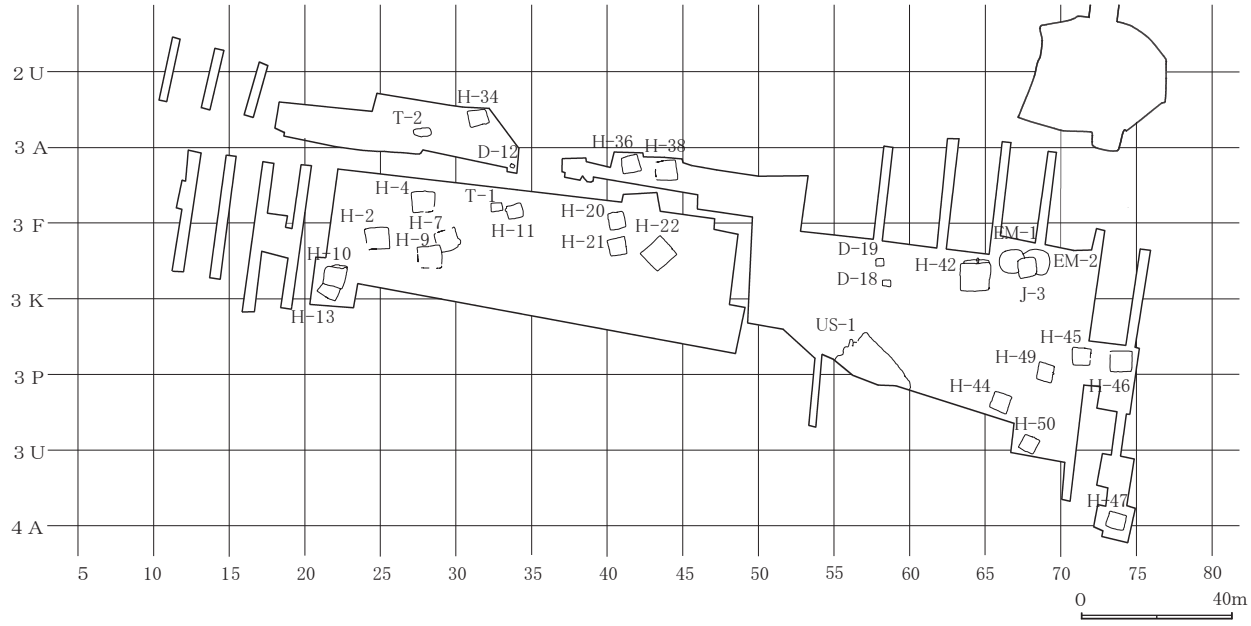
埋蔵文化財研究会編　2005 『古墳時代の滑石製品－その生産と消費－　発表要旨・資料集』

井上慎也・外山政子他　2005 『蔵畑遺跡』安中市埋蔵文化財発掘調査団

Ⅰ期

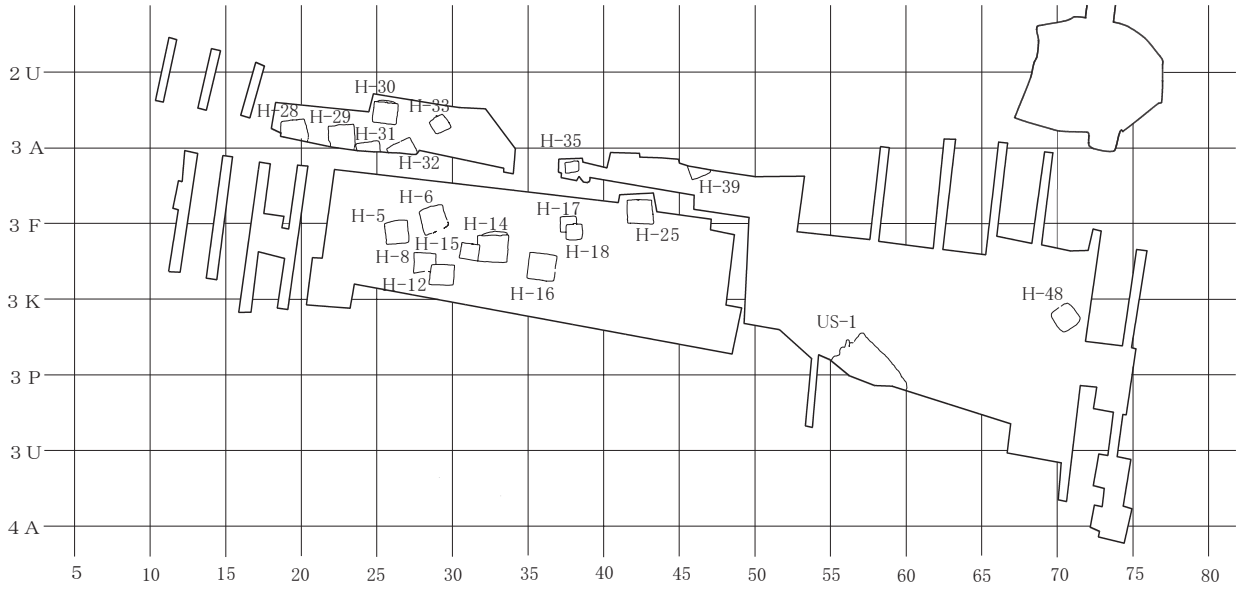


Ⅱ期

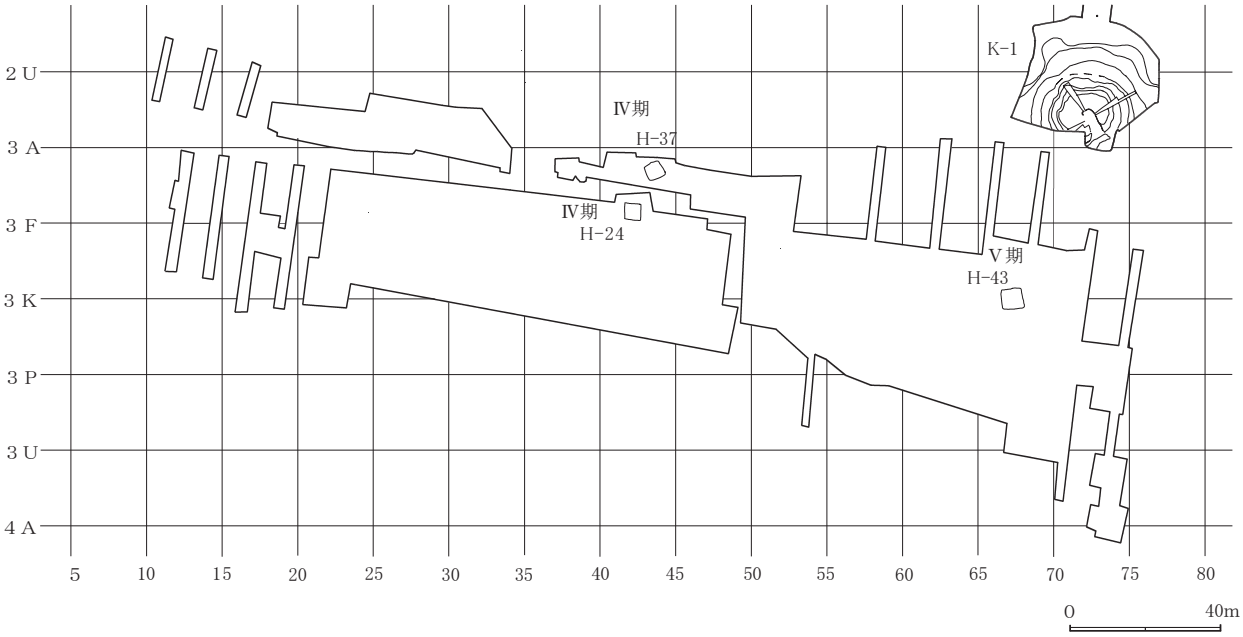


第134図　加賀塚遺跡時期別遺構分布図（1）

Ⅲ期



Ⅳ・Ⅴ期



第135図　加賀塚遺跡時期別遺構分布図（２）

Ⅵ　自然科学分析

株式会社古環境研究所

1　土層とテフラ

1．はじめに

群馬県域西部とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、浅間、八ヶ岳、御岳など北関東地方や中部地方の火山、さらには中国地方や九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された加賀塚遺跡においても、地質調査を行ってテフラを含めた土層層序を記載するとともに、微化石分析に供する試料の採取を行った。調査分析の対象となった地点は、US－１覆土断面である。

2．土層の層序

US－１覆土断面では、下位より黒泥層（層厚10cm以上）、成層したテフラ層（層厚10.9cm）、灰褐色軽石や砂を含む黒色土（層厚61cm，軽石の最大径18mm）、灰褐色軽石や砂を含む黒灰色土（層厚21cm，軽石の最大径８mm）、白色軽石混じり黒灰色土（層厚12cm，軽石の最大径13mm）が認められる（図１）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より軽石質黄灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、褐色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、褐色粗粒軽石層（層厚３cm，軽石の最大径48mm，石質岩片の最大径14mm）、黄色軽石混じり黄色粗粒火山灰層（層厚３cm，軽石の最大径３mm）、褐色軽石層（層厚４cm，軽石の最大径４mm，石質岩片の最大径２mm）からなる。この成層したテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As－B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される。本地点で認められるAs－Bは、その下部に相当する。したがって、SU－１の層位はAs－Bよりも下位にある。

また最上位の土層中に認められた比較的粗粒の白色軽石は、その岩相から1783（天明３）年に浅間火山から噴出した浅間Ａ軽石（As－A，荒牧，1968，新井，1979）に由来すると考えられる。

3．小結

加賀塚遺跡において地質調査を行った。その結果、US－１覆土中に浅間Ｂテフラ（As－B，1108年）の下部の堆積を認めることができた。またその上位には、浅間Ａ軽石（As－A，1783年）起源の軽石粒子も認められた。

文献

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル157，p.41－52.

荒牧重雄（1968）浅間火山の地質．地団研専報，no.45,65p.

２　植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

２．試料

分析試料は、US－１覆土断面のAs－B下層からから採取された２点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４．分析結果

（１）分類群

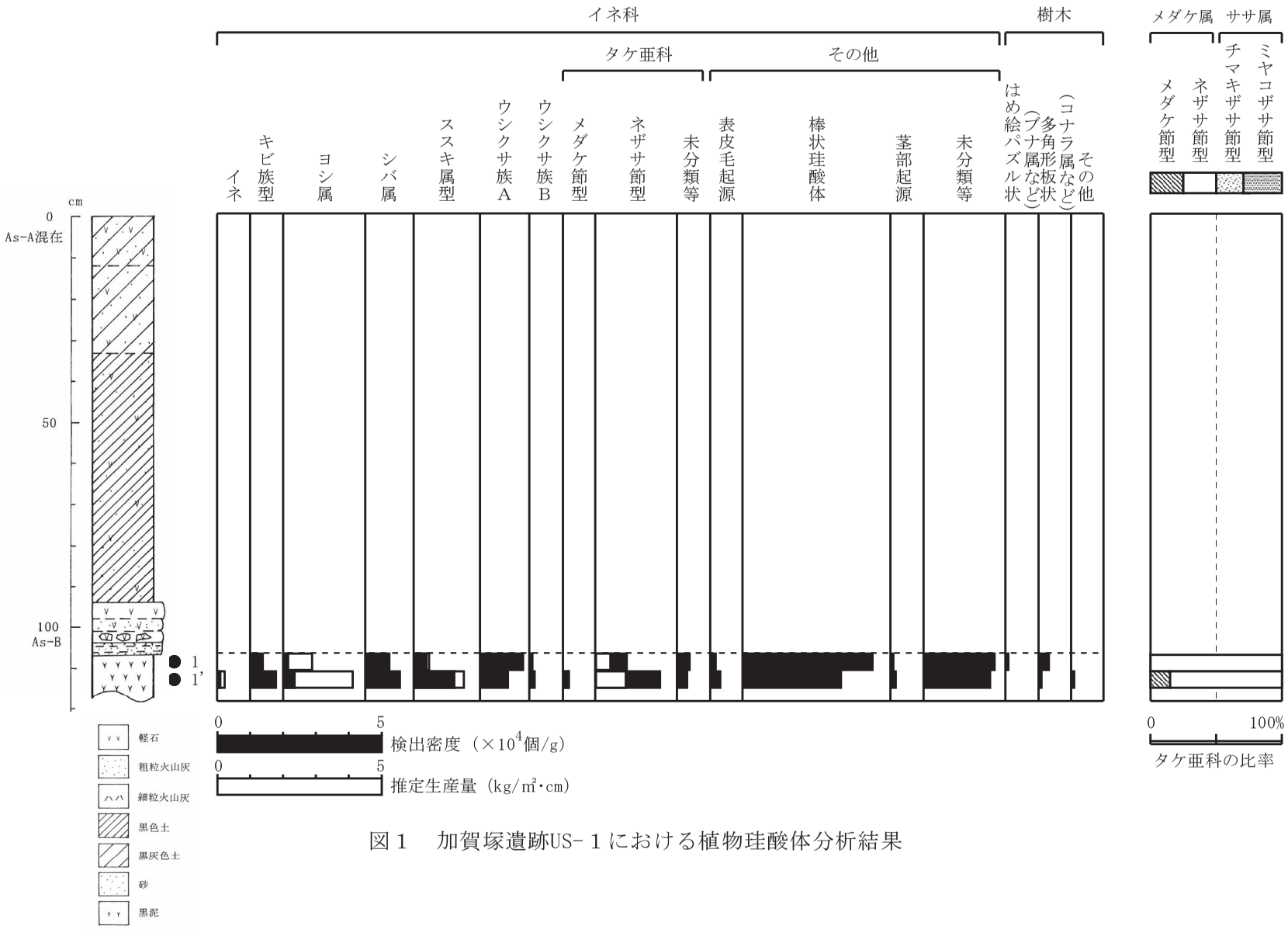


図１　加賀塚遺跡US-１における植物珪酸体分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

（２）植物珪酸体の検出状況

As－Bの下層（試料１、試料１'）について分析を行った。その結果、試料１'では、シバ属、ススキ属型、ネザサ節型が多く検出され、イネ、キビ族型、ヨシ属、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、および樹木のブナ科コナラ属なども検出された。イネの密度は700個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある（杉山，1999）。試料１では、ほとんどの分類群が減少しており、イネは検出されなかった。おもな分類群の推定生産量によると、試料１'ではヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型が優勢となっている。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

浅間Ｂテフラ（As－B，1108年）の下層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと推定される。また、周辺にはススキ属やチガヤ属、シバ属、メダケ属（おもにネザサ節）などが生育する日当たりの良い比較的乾燥したところも分布しており、遺跡周辺にはナラ類などの樹木が生育していたと考えられる。

文献

近藤錬三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体，その特性と応用．第四紀研究，25，p.31－63.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，31，p.70－83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－．考古学と自然科学，20，p.81－92.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189－213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15－29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（５）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73－85.

３　花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

分析試料は、US－１覆土断面のAs－B下層から採取された３点である。

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎する。

２）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

５）再び氷酢酸を加えて水洗処理

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉２、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉６、シダ植物胞子１形態の計10である。分析結果を表１に示す。なお、花粉密度が比較低いことから、花粉ダイアグラムは作成しなかった。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、カラマツソウ属、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子

表１　加賀塚遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料 US-1 1	1'
イネ科	Gramineae (Grasses)		
イネ	*Oryza sativa*		7
キビ族型	Paniceae type	36	76
ヨシ属	*Phragmites*	14	34
シバ属	*Zoysia*	71	103
ススキ属型	*Miscanthus* type	36	124
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	129	83
ウシクサ族B	Andropogoneae B type	7	14
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		14
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	93	193
未分類等	Others	36	28
その他のイネ科	Others		
表皮毛起源	Husk hair origin	14	28
棒状珪酸体	Rod-shaped	393	297
茎部起源	Stem origin	7	14
未分類等	Others	214	200
樹木起源	Arboreal		
はめ絵パズル状(ブナ属など)	Jigsaw puzzle shaped (*Fagus* etc.)	7	
多角形板状(コナラ属など)	Polygonal plate shaped (*Quercus* etc.)	29	7
その他	Others		7
植物珪酸体総数	Total	1087	1228

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*		0.20
ヨシ属	*Phragmites*	0.90	2.18
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.44	1.54
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		0.16
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.45	0.93

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus		15
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	100	85

表１　加賀塚遺跡における花粉分析結果

分類群 学名	和名	US-1 1	1'	2
Arboreal pollen	樹木花粉			
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	2	1	
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	2	1	
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	6	5	20
Thalictrum	カラマツソウ属	3	1	3
Cruciferae	アブラナ科	1		
Lactucoideae	タンポポ亜科	3	2	1
Asteroideae	キク亜科	1	3	
Artemisia	ヨモギ属	29	25	76
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子		1	1
Arboreal pollen	樹木花粉	3	1	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	2	1	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	43	36	100
Total pollen	花粉総数	48	38	100
Unknown pollen	未同定花粉	2	1	2
Fern spore	シダ植物胞子	0	1	1
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)

（２）花粉群集の特徴

As－Bの下層（試料１、試料１’、試料２）では、草本花粉の占める割合が樹木花粉よりも高いが、花粉密度は低い。草本花粉ではヨモギ属の占める割合が高く、イネ科、カラマツソウ属、タンポポ亜科などが伴われる。樹木花粉では部分的にコナラ属コナラ亜属などが出現するが、いずれも少量である。

５．花粉分析から推定される植生と環境

浅間Ｂテフラ（As－B，1108年）の下層では、花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、ヨモギ属、イネ科、タンポポ亜科などが生育する日当たりの良い比較的乾燥した環境が想定され、遺跡周辺にはナラ類などの樹木が生育していたと考えられる。花粉があまり検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたことなどが考えられる。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248－262.
島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.
中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82－110.
中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

４　樹種同定

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、６世紀とされる焼失家屋から採取された炭化材５点である。

３．方法

試料を割折して新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目）、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

結果を表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属クヌギ節　*Quercussect.Aegilops*　ブナ科　図版１

横断面：年輪のはじめに大型の道管が１～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管

が単独でおよそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靭で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercussubgen.Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版２

横断面：中型から大型の道管が１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

サクラ属　*Prunus*　バラ科　図版３

横断面：小型で丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

ヤブツバキ　*Camelliajaponica Linn.*　ツバキ科　図版４

横断面：小型でやや角張った道管が単独ないし２～３個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は８～30本ぐらいである。放射組織は平伏細胞と直立細胞からなる異性で、直立細胞には大きく膨れているものが存在する。接線断面：放射組織は異性放射組織型で、１～３細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の形質よりヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ５～10m、径20～30cmである。材は強靭で、耐朽性強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

エゴノキ属　*Styrax*　エゴノキ科　図版５

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管がおもに２～４個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が晩材部において接線状に配列する。放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異

性である。接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～３細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

５．所見

６世紀とされる焼失家屋から採取された炭化材は、コナラ属クヌギ節、コナラ属アカガシ亜属、サクラ属、ヤブツバキ、エゴノキ属と同定された。いずれも高木ないし中木で、比較的大きな材が採取可能な樹種であり、特にコナラ属クヌギ節とコナラ属アカガシ亜属は大きな材が採取できる。

コナラ属アカガシ亜属とヤブツバキは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林を形成する主要高木である。その他は落葉広葉樹であるが冷温帯落葉広葉樹の主要構成要素ではない。コナラ属クヌギ節（クヌギないしアベマキ）は温帯域に広く分布し、乾燥した台地や丘陵地に生育する。サクラ属はやや乾燥した斜面等に、エゴノキ属は河川や谷沿いの湿地に生育する。いずれの樹種も、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20－48.
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49－100.
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

表１　加賀塚遺跡における樹種同定結果

試料			結果（学名／和名）	
G-46	H-12 住	炭化物№３	サクラ属	*Prunus*
G-46	H-14 住	炭化物№３	コナラ属クヌギ節	*Quercus sect. Aegilops*
G46B	H-28 住	炭№１	エゴノキ属	*Styrax*
G46B	H-28 住	炭№４	ヤブツバキ	*Camellia japonica Linn.*
G46B	H-45 住	炭№１	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*

縄文時代住居址観察表

（単位：m）

住居名	平面形態	規模			壁溝	主軸方向	主柱穴	遺物	炉址		時期	所見
		長軸	短軸	深さ					位置	構造		
J－1	正方形	5.4	5.2	0.2	×	N-9° -E	不明	縄文※/石器※	不明		前期	竪穴状の浅い掘り込み。
J－2	楕円形	4.3	5.2	0.3	×	N-46° -E	7	縄文※/石器※	中央	地床炉	中期後半	柱配列不規則。
J－3	隅丸方形	5.2	4.8	0.5	3	N-2° -W	4+2	縄文◎/石器◎	中央西寄	地床炉２	前期中葉	２回拡張。
J－4	楕円形	5.8	4.7	0.3	×	N-60° -E	不明	縄文※	不明		前期	

凡例　土器　※：0～1000g　◎：10000g以上　石器　※：1～10点　◎：31点以上

古墳時代住居址観察表

（単位：m）

住居名	平面形態	規模			壁溝	主軸方向	土坑		主柱穴	遺物	貼床	覆土	竈・炉址		時期	所見
		長軸	短軸	深さ			貯蔵	床下					位置	構造		
H－1	中形長方形	5.8	5.2	0.2	×	N-90° -E	南西		4	土師○・須恵＊		A1	中央東	Ⅲ状	Ⅰ	
H－2	大形長方形	5.6	6.2	0.5	×	N-1° -E	竈右	×	4	土師※石製※	○	A1	北中央	B	５後	H－３住と重複。西側確認トレンチで破壊。幅広構造
H－3	中形	<3.7>	5.1	0.2	×	不明			×	土師※		A	焼土２カ所		不明	H－２住と重複。南側は斜面のため削平。焼土痕が２カ所残る。遺物も少なく、構造上住居址ではない可能性が高い。
H－4	中形長方形	5.4	6.0	0.6	×	N-4° -E	竈両脇２	2	4	土師※		A1	北中央	B	(Ⅱ)	H－６住と重複。D－２から遺物出土。
H－5	大形正方形	6.1	6.1	0.8	全周	N-0° -E	南東隅		4	土師◎石製※石器※	×	A1	北中央	B	Ⅲ	柱穴間に仕切溝。D-1底面から大形礫。
H－6	大形正方形	6.9	6.6	0.8	南西隅	N-11° -W	南東隅		4	土師○須恵※		A1	北東寄	B	Ⅲ	
H－7	中形長方形	5.8	5.3	0.4		不明			不明	土師△		A1	東壁に炉?（別遺構か）、北に焼土２カ所		(Ⅱ)	住居状遺構。この住居址の下にH－27住。
H－8	中形長方形	4.8	5.8	0.7		N-187° -E	×		4(1～4)	土師○石製※		A1	南中央東寄	B	Ⅲ	竈内土器を支脚
H－9	大形長方形	6.4	(6.2)	0.5		N-10° -W	竈両脇２		4(5～8)	土師△		A1	北中央	B	Ⅱ	南側の柱穴は深い。
H－10	中形長方形	5.2+0.9	5.8+4.8	1.0	3/4	N-17° -E	南東隅	3	4×2回	土師◎須恵※石製※石器※		A1	北中央	B+土器	(Ⅱ)	H－13住より新。柱の差し替え。北側に張り出したテラス状遺構。覆土中に多数の大形礫廃棄
H－11	中形長方形	3.6	4.2	0.2	×	N-10° -W	北東隅にピット２		×	土師△石製※石器※		B1	北中央に跡	不明	Ⅱ	焼失住居。床面に焼土跡４カ所。
H－12	大形長方形	5.4	6.3	0.6	全周	N-10° E	竈右、南東隅	2	4・北2本差替	土師◎石製※石器※	○	C2	北東寄	B	(Ⅲ)	H－8・9住より新。焼失住居。住居廃絶後焼失、その後遺物廃棄。炭化物№3はサクラ属
H－13	中形	<3.8>	5.2	0.7	×	N-37° -E	南東隅		4	土師△石製※石器※		A2			不明	焼失住居。H－10住に壊される。
H－14	大形長方形	7.2+1.0	8.0+6.8	1.2	×	N-9° -E	竈右、南東隅２	7	4×2回旧1～4新5～8	土師◎石製※石器○	○	A2	北東寄	B	Ⅲ	H－15住と重複。焼失住居。北側に張り出したテラス状遺構。炭化した構築材多数検出(炭化物№3はコナラ属)。放射状に支えた垂木。主柱抜き取り。D－２上面に白色粘土

第５表　遺構観察表（１）

住居名	平面形態	規模			壁溝	主軸方向	土坑		主柱穴	遺物	貼床	覆土	竈・炉址		時期	所見
		長軸	短軸	深さ			貯蔵	床下					位置	構造		
H－15	中形長方形	4.2	4.9	0.9	×	N-13° -E	竈左２、南東隅		4	土師◎石製※石器※	△	B2	北中央	B	Ⅲ	H－14住が旧。床面及び貯蔵穴に完形品出土。竈の遺存状態は良好。甕（１）は竈の土で固定。棒状礫を支脚とし、隙間を土器片で調整。D－１には白色粘土塊（滑石か）が出土。
H－16	大形正方形	7.2	7.0	1.0	×	N-103° -E	竈右３、北西隅１		4	土師○須恵※石製△石器※		B2	東中央南寄	B	Ⅲ	焼失住居。屋根構築材(垂木)遺存状態良好。主柱は抜き取り。竈は痕跡。
H－17	中形正方形	4.2	4.1	0.7	1/2	N-94° -E	不明		4	土師◎須恵※石製※石器※		A1	東中央	不明	Ⅲ	H－18住が新。
H－18	中形正方形	4.2	4.4	0.7	全周	N-9° -E	南西隅		4	土師◎須恵※石器※		B1	北中央	B	(Ⅲ)	H－17住と重複。竈遺存良好。甕３個体竈の土で固定。竈袖に長胴甕埋め込み。
H－19	中形正方形	4.3	4.5	0.7	×	N-13° -W	南東２、南西１		4	土師◎須恵※石製※石器※		A2	北中央	Ⅲ状	Ⅰ	焼失住居。炉周辺で手捏ね土器と小形鉢出土。
H－20	中形正方形	4.5	4.3	0.5	×	N-6° -W	南東１		4	土師◎石製※石器※		A1	北中央東寄	A	(Ⅱ)	
H－21	中形正方形	4.6	4.5	0.7	夏	N-82° -E	竈右		4	土師◎石製※石器※		B2	東中央南寄	B	Ⅱ	焼失住居。
H－22	大形長方形	7.2	6.6	1.0	×	N-57° -E	竈右	2	4	土師◎須恵※石製※石器※		B1	北東中央東寄	B	Ⅱ	他の住居址と主軸が異なる。
H－23	中形正方形	5.8	5.5	0.2	×	N-16° -E	不明		4	土師△石製※	○	B1	中央	Ⅲ状	Ⅰ	
H－24	中形正方形	4.2	4.6	0.9	×	N-11° -E	竈右	2	4	土師◎須恵※石製※	○	B1	北中央	B	Ⅳ	H－25住が旧。
H－25	大形正方形	6.5	6.4	0.6	北半分	N-94° -E	竈右	4	不明	土師○須恵※石製△石器※		B1	東中央南寄	B	(Ⅲ)	H－24住と重複。３区周溝内で臼玉集中。
H－26	中形正方形	(4.8)	(4.8)	0.1	×	不明				土師※須恵※		不明	北隅に焼土	Ⅲ状	５後	北隅1/4のみ検出。構造不明。
H－27	中形正方形	4.6	4.7	0.3	西のみ	N-1° -E	南東隅		4	土師※石器※	△	不明	不明		不明	H－6・7住の下。D－７は床下土坑の可能性。
H－28	大形長方形	5.2	6.9	0.8	×	N-5° -W	南東隅		4	土師◎石製※石器※		A2	北中央東寄	B	Ⅲ	焼失住居。南半分は先行工事で削平。住居縁が外反する。炭化した構築材(垂木・柱)が床面で検出(炭化材№1はエゴノキ属、№４はヤブツバキ)。北西壁際に台石群。竈は甕１が竈の土で固定。その下に支脚
H－29	大形長方形	<6.4>	6.8	1.0	×	N-4° -E	南東隅１、竈右、北西隅		4	土師◎須恵※石製※石器※		A1	北中央	B	Ⅲ	住居縁が外反。覆土中層は屋根盛土か？
H－30	大形長方形	5.6+0.5	6.4+5.0	1.1	×	N-11° -E	南東隅		4	土師◎須恵※石製※石器○		A1	北中央	B	Ⅲ	住居北に張り出したテラス状遺構。竈遺存良好。甕２点竈の土で固定。隙間を土器片で調節。覆土中に礫・台石大量廃棄

第６表　遺構観察表（２）

住居名	平面形態	規模			壁溝	主軸方向	土坑		主柱穴	遺物	貼床	覆土	竈・炉址		時期	所見
		長軸	短軸	深さ			貯蔵	床下					位置	構造		
H－31	大形	<3.0>	6.3	1.2	×	N-2° -w	不明		(4)	土師○		A1	北中央東寄	B	(Ⅲ)	南半分先行工事で削平。住居縁が外反する。
H－32	大形	<4.8>	6.9	0.6	全周	N-18° -W	不明	1	(4)	土師◎石製※		C	北中央東寄	B	Ⅲ	南半分先行工事で削平。
H－33	中形正方形	4.2	4.6	0.8	×	N-24° -W	南東隅		4	土師△石製※石器※		A1	北中央東寄	A	不明	１層中に大形礫等が多数廃棄。下層は屋根上の盛土か？
H－34	中形長方形	4.1	5.1	0.5	×	N-173° -E	竈右		4	土師○石製※石器※		A1	南東隅	A	Ⅱ	北西のピットは別遺構。床面に台石４点。
H－35	小形長方形	2.8	3.6	0.2	×	N-1° -E	南東隅		×	土師○石製※石器※		B1	北中央	B	(Ⅲ)	
H－36	中形正方形	4.6	4.5	0.4	×	N-82° -E	竈右		4	土師○石製※石器※		A1	東中央	A	(Ⅱ)	M－１に壊される。床面に台石・磨石。
H－37	中形正方形	4.1	4.4	0.4	×	N-21° -W	竈左		2	土師○石器※		A1	北中央東寄	A+天井石	Ⅳ	H－38住が旧
H－38	中形長方形	5.6	5.2	0.2	×	N-90° -E	竈右		4(1～4)	土師△石器※		A1	東中央南	片袖のみ残り完全に破壊されている。	(Ⅱ)	H－37住と重複。
H－39	中形	5.4	<3.8>	0.6	×	北あるいは東	南東隅		(4)	土師△石製※石器※		A1	不明		(Ⅲ)	北半部は調査区外(未調査)。D－１には蓋付。
H－40	中形正方形	5.6	5.4	0.2	×	N-15° -E	×		4	土師△石製※石器※		B2	南東P1に隣接	Ⅲ状	Ⅰ	焼失住居。
H－41	中形正方形	4.9	5.0	0.4	×	N-4° -W	南東隅		4	土師○石器※		B2	中央南寄	Ⅲ状	Ⅰ	焼失住居。南東D－１付近で台石集中出土。
H－42	大形正方形	8.1+6.6	7.4+1.0	1.1	×	N-90° -E	竈右	7	4×２回	土師◎須恵△石製○石器○	全面	A1	旧北中央東寄・煙道、東中央南寄。	B	Ⅱ	住居北に張り出したテラス状遺構。そこに竈煙道。掘り方は全面掘り返した後、ローム混じりの土で平にならす。白色粘土は滑石滓の可能性。D－２は炉(被熱有)。
H－43	中形正方形	5.6	5.4	0.9	×	N-2° -W	竈右	中央1	4	土師○須恵※石製※石器◎	全面	A1	北中央	B	Ⅴ	南東隅に編物石集中。底面付近まで自然堆積(As-B)。
H－44	中形正方形	4.8	4.7	0.1	×	N-117° -E	竈右(井戸状)		4	土師△須恵※		B1	東中央南寄	不明(焼土痕)	５後	D－１底面付近から湧水。大礫廃棄。
H－45	中形正方形	4.8	4.5	0.4	全周	N-98° -E	竈右、北西隅		4	土師○石製◎石器※		B2	東中央南寄	B	(Ⅱ)	石製模造品工房址。床面に凝灰岩製の台石。工作ピット(D－１)。焼失住居。
H－46	中形正方形	5.8	5.6	0.4	全周	N-99° -E	竈右		4	土師○石製△石器※		B2	東中央南寄	不明(焼土痕)	５後	南壁際に白色粘土(滑石滓)。焼失住居。壁面に小ピット。
H－47	中形長方形	4.2	4.8	0.1	×	N-21° -E	南東隅		4	土師△石製◎石器※		B1	北中央東寄	B	５後	石製模造品工房址
H－48	大形隅丸方形	6.3	6.2	0.3	×	N-27° -W	竈左		4	土師○石製※石器△	中央	C	北中央東寄	D	Ⅲ	床中央硬化面。床全体を浅く掘り込んだ後、薄く土を貼る。
H－49	中形正方形	4.2	4.6	0.4	×	N-20° -E	竈右、北東隅		4	土師○石製◎石器※		B1	東中央	B	５後	石製模造品工房址、D－１（工作ピット）縁に高まりを持つ。D－２は床面より一段高い面にある。

第７表　遺構観察表（３）

住居名	平面形態	規模			壁溝	主軸方向	土坑		主柱穴	遺物	貼床	覆土	竈・炉址		時期	所見
		長軸	短軸	深さ			貯蔵	床下					位置	構造		
H－50	中形正方形	4.2	4.2	0.5	×	N-34°-E	南東隅、浅い掘り込み(蓋跡)。		4	土師◎石製◎石器△		A1	北中央東寄	B	Ⅱ	石製模造品工房址、竈遺存良好。竈は甕２個体を土で竈に固定。左の甕下には高坏を転用した支脚。
H－51	中形正方形	4.9	5.2	0.3	全周	N-19°-W	南東隅、浅い掘り込み。		4	土師○石製△石器※		B2	中央北寄・東寄	皿状、枕石(An)	Ⅰ	床面に台石として大形扁平礫。完形土器多数出土。焼失住居

凡例　規模　(　)は推定値。〈　〉は残存値。
平面形態　小形：４m以下　中形：４～６m　大形：６m以上
竈形態　A：ローム＋黒色土　B：ローム＋黒色土＋袖芯河床礫　D：地山削りだし＋ローム＋袖芯河床礫
B：ローム＋黒色土＋袖芯河床礫
遺物出土量　土器類　※：0～1000g　△：1000～5000g　○：5000～10000g　◎：10000g以上
石器類　※：1～10点　△：11～20点　○：21～30点　◎：31点以上

第８表　遺構観察表（４）

竪穴状遺構観察表　（単位：m）

遺構名	平面形態	規模			時期	遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
Ｔ－１	長方形	2.2	3.0	0.7	５後	土師○石製※石器※	主軸N-8°-W。掘り込み深く、大形壺２個体が出土。外側に柱穴か。人為的埋め戻し。
Ｔ－２	隅丸長方形	2.2	4.6	0.3	５後	土師※	斜面に対してＬ字状に掘削。

円形周溝状遺構観察表　（単位：m）

遺構名	平面形態	規模			時期	遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
ＥＭ－１	楕円形	6.8	6.2	0.2	５後	土師△石器※	ＥＭ－２が旧。溝から土器片出土。内側遺構なし。建物跡か。遺物は溝内から土器破片出土。
ＥＭ－２	楕円形	7.4	6.4	0.3	５後	土師※	ＥＭ－１と重複。内側に浅い小ピット。遺物は溝内から土器破片が出土。
ＥＭ－３	円形	6.2	6.0	0.3	５後	土師※	内側に浅い小ピットと溝。溝内に小ピット。遺物は溝内から土器破片が少量出土。

溜池観察表　（単位：m）

遺構名	平面形態	規模			時期	遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
ＵＳ－１	隅丸長方形と推定	(19.8)	<12.2>	1.0以上	５後～６前	土師◎須恵※石製※縄文※石器※	北西隅に湧水点。斜めに降りる通路状遺構。全体を掘削した後、ローム土で埋め戻し張り出し状のテラスを構築。自然堆積(レンズ状堆積)

炭焼窯観察表　（単位：m）

遺構名	平面形態	規模			時期	遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
ＫＭ－１	細長楕円形	<2.0>	1.6	0.15	古墳以降	土師※	炭化材の小破片が分布。Ｂ軽石の混入無し。底面に２ピット。

溝観察表　（単位：m）

遺構名	平面形態	規模			時期	遺物	備考
		長軸	短軸	深さ			
Ｍ－１	箱状	<7.0>	0.9	0.3	近世以降	なし	Ｈ－36住より新。底面は２段。覆土にＡ軽石混入。
Ｍ－２	皿状	<4.8>	0.4	0.1	古墳以降	土師※	畠の畝あるいは耕作溝の可能性有り。斜面に沿う。撹乱が著しいが、平行して溝が存在していた可能性が考えられる。

凡例　(　)は推定値。＜　＞は残存値。
遺物出土量　土器※：0～1000g　△：1000～5000g　◎：10000g以上
石器類：※1～10点

第９表　遺構観察表（５）

土坑観察表　　（単位：㎝）

遺構名	規模（上）		規模（下）		深さ	平面形態	断面	遺物	時期	所見
	長軸	短軸	長軸	短軸						
D－1	211	145	194	128	31	楕円形	皿状		古墳以降	
D－2	121	107	97	84	21	楕円形	皿状		古墳以降	
D－3	113	91	66	48	64	円形	皿状		縄文	H－6住より旧。陥穴状
D－4	184	176	153	152	52	円形	皿状		古墳以降	H－15住より新。人為的埋め戻し。
D－5	212	96	175	63	56	双円形	椀状		古墳以降	H－13住より新
D－6	111+31	118	68+43	78	109+132	円形	L字状		古墳以降	H－27住の床下土坑。
D－7	98	90	76	74	85	円形	袋状		古墳中期後半	H－7住より新。北に「L」字状。
D－8	226	160	191	131	20	楕円形	皿状		古墳以降	底面に5基のピット検出。
D－9	77	71	－	－	22/26	円形	柱状		古墳不明	柱穴2基重複
D－10	90	88	－	－	46/72	円形	柱状		古墳不明	柱穴2基重複
D－11	123	84	64	48	36	楕円形	皿状	土師※	古墳以降	T－2より新。
D－12	115	96	93	87	55	隅丸方形	椀状	土師◎/石器※/礫	古墳中期後半	D－13より新。貯蔵穴か？。土器2個体
D－13	(81)	76	(70)	66	55	円形	椀状	縄文○/石器※/土師△	縄文中期	土坑墓
D－14	195	128	98	39	109	楕円形	椀状		縄文	D－16より新。陥穴
D－15	164	138	131	102	28	楕円形	皿状	土師△/礫	縄文	古墳へ
D－16	182	134	102	58	62	楕円形	椀状	土師※	縄文	陥穴
D－17	115	114	98	95	16	円形	皿状		古代～中世	覆土B軽石混じり
D－18	217	160	194	146	30	台形	箱状	土師※/石製※	古墳中期後半	N-7°-E。竪穴状貯蔵穴。覆土から弥生石鏃
D－19	202	212	168	183	71	正方形	箱状	土師◎/石製※	古墳中期後半	N-7°-E。竪穴状貯蔵穴
D－20	320	258	294	226	17	楕円形	皿状		縄文	竪穴状。底面に4ピット。
D－21	276	249	228	196	20	円形	皿状	縄文※/石器※	縄文前期	底面に2ピット。
D－22	149	122	88	48	71	楕円形	箱状		縄文	陥穴。逆茂木あり。
D－23	117	114	86	79	102	円形	袋状	縄文○/石器※	縄文中期初頭	底面に深鉢（1/3)。土坑墓
D－24	124	116	79	64	42	円形	椀状	土師※	古代～中世	H－24住より新。
D－25	120	124	113	114	16	円形	皿状		古代～中世	覆土B軽石混じり。
D－26	<126>	158	<46>	72	57	楕円形	椀状	縄文○/石器※/土師△	縄文前期	H－42住より旧。
D－27	218	<160>	174	<130>	76	楕円形	椀状	縄文※	古墳	風倒木痕。H－45住より旧。

凡例　（　）は推定値。＜　＞は残存値。
土器重量　※：0～50ｇ　△：51～100ｇ　○：101～500ｇ　◎：501ｇ以上
石器　※：1～10点

第10表　遺構観察表（6）

発掘調査報告書　抄録

ふりがな	かがづかいせき
書名	加賀塚遺跡１
副書名	横野平工業団地分譲事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	1
シリーズ番号	
編著者名	井上慎也・松澤浩一・三浦京子・㈱古環境研究所
編集機関	安中市教育委員会
編集機関所在地	379―0292　群馬県安中市松井田町新堀245　　TEL　027－382－1111
発行年	西暦2007年（平成19年）３月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
加賀塚遺跡（かがづか）	安中市中野谷字加賀塚・北原（あんなかしなかのや／かがづか／きたはら）	102113	G－46	36°17′20″	138°51′03″	20050401～20060322	13,000㎡	工業団地分譲

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
加賀塚遺跡	集落 古墳	縄文前・中期 弥生中期 古墳中～後期 古墳終末期 古代以降	住居址４ 土坑 集石 なし 住居址51 円形周溝３ 竪穴状２ 土坑 溝 古墳１ 炭焼窯１ 溝２ 土坑３	深鉢、石器（石鏃他） 石器（石鏃、石鍬） 土師器・須恵器 石製品・石製模造品（勾玉、管玉、剣形、臼玉等、紡錘車） 石器(砥石)、鉄製品、土製品(匙) 須恵器（長頸壺等）・土師器	古墳時代中期後半～後期初頭にかけての集落址。 石製模造品製作址。 円形周溝状遺構を検出 古墳は片袖型の横穴式石室。

加賀塚遺跡１

横野平工業団地分譲事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第１集

発行日　平成19年３月30日

編集・発行　安中市教育委員会
群馬県安中市松井田町新堀245

印刷　朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67